本邦に於ける動物崇拜 南方熊楠

附 藪野直史注

でないものは一部を除いて、ルビ化は避けた。また、強調するためにルビ化しなかった箇~同年十二月二十八日)の一括縦書再校訂決定版(読みルビ化。但し、引用部で元がルビ 所もある)である。 [やぶちゃん注:本篇はブログで行った同論考の分割電子化注(二〇二〇年十一月二十九日

京人類學會」であった)二十五巻二百九十一号である。「j-stage」にある原雑誌画像抜粋 加)」という添え書きがあることが判る)で初出全文を視認することも出来る。 で「人類學會雜誌」と記しているが、こちらが正式な誌名で、そもそも組織名自体が「東 $(PDF^{\circ}$ 本論考の初出は明治四四(一九一一)年七月発行の『東京人類學會雜誌』(熊楠は本文 当該論考「○本邦に於ける動物崇拜(追加)」(元には、 かく、 山中論文への「(追

することが出来なかった。されば、不本意乍ら、孰れも「"」に代えた。 の間は贅沢に改ページを施した。また、意想外の事態が一つあって、欧文中の「"」 い)。動物名を調べやすくするために、本文の最初に出る動物名を太字囲み文字にした。 で読み込み、使用した。欧文書誌の一部は平凡社「選集」で補正した(脱落箇所が甚だ多 ルコレクションの原本画像を視認して行った(現在、 「,」で、これらは縦書では上記のようになって、私の貧しい知識では遂に半角横組みに 底本は「南方隨筆」(大正一五(一九二六)年五月岡書院刊)を国立国会図書館デジタ 注が膨大になってしまったので、この縦書版では、読み易さを考えて、各動物記載など 加工データとして、平凡社「南方熊楠選集3」の「南方随筆」(新字新仮名)を OCR 本書全体の電子化注を進行中)。但

による改稿次第を書き入れた注箇所は、経緯部分は省略して最終決定注のみを示した(但 は削除してあり(ルビ化に甚だ神経を使い、やや疲れたからである)、 に留めた。また、ブログで老婆心で附した読みの一部(私がなくてもよいと考えた箇所) し、注をしている過程で行き詰まり、教え子の協力を得た一箇所は残してある)。また、 なお、ブログでは、一部の注で参考図画像を示したが、ここではそれへのリンクを示す 公開後に情報提供

【二〇二〇年十二月三十一日記す 御助勢頂いた T 氏と教え子 S 君に、 藪野直史】 改めて心より御礼申し上げるもの

本邦に於ける動物崇拜

就て聚錄せる材料中より、追加すること次の如し。 り。讀んで頗る感興を催し、往年在英中「アストン」「ジキンス」諸氏の爲めに、此事に 人類學會雜誌二八八號二―六二二九頁に、山中笑君「本邦に於ける動物崇拜」の一篇有

多少、其曾て崇拜されたる痕跡を留存するらしいと思はるゝ者を爰に擧ぐべし、動物名の 今舊を破り故を忘るゝの急なるに當り、此邊僻の地(紀伊田邊)に在て[やぶちゃん注: 接動物を神とし拜するは希にて、多くは神佛、法術等に緣で「やぶちゃん注:「ちなん 伴信友の驗の杉に述られたり、されど後世に迨ては [やぶちゃん注:「およびては」。]、 上に○を印せるは、山中君の論文已に列記せる者にて、山何頁と書せるは、 ること、洵に[やぶちゃん注:「まことに」。]山中氏が述べられたる如く、それすら、目 で」と訓じておく。]、多少の宗教的畏敬を加えらる、[やぶちゃん注:ママ。]に過ぎざ めに此説ありと云ふ意なり。 が今も行はれ居るかを判斷するは、望む可らざる事たるを以て、暫く管見の儘、 ノオホシ)に勸められて、橘樹等に生ずる常世の蟲を神とし、祭て富と壽を求めたる事、 「あつて」。」、孰れが果して已に過去の夢と成り畢り[やぶちゃん注:「をはり」。」、孰れ 本邦上古蛇狼虎等を神とし、甚きは皇極天皇の御時、東國民が、大生部多(オホイクベ 同論文の何頁 現時なほ

動機となったものであるため、『山中笑「本邦に於ける動物崇拜」(南方熊楠の にも精通した(以上は日外アソシエーツ「 古器古物などを収集、民俗学者の柳田國男とも書簡を交わしてその学問に大きな影響を与 長に就任した。その傍ら、 れた。 子として生まれる。御家人として江戸城に出仕し、十五歳で皇女和宮の広敷添番に任ぜら る動物崇拜」の執筆動機となった論文)』としてブログで電子化してあるので、 えるなど、日本の考古学・民俗学の草分け的存在として知られる。江戸時代の文学や風俗 のマクドナルドの代理を務めた。明治一四(一九八一)年には東洋英和学校神学科を卒 ジスト教職試補となって伝道活動を始めて静岡に講義所(後に静岡教会)を設立、帰国中 四)年に宣教師マクドナルドの洗礼を受けてメソジスト派に入信、同十一年には日本メソ を先に読まれるのが筋である。 における動物崇拜」も「j-stage」のこちら(PDF)で初出原文が視認出来る。**本篇の執筆** が遠因で牧師を辞した。その後、大正八(一九一九)年から青山学院の図書館に勤務、館 (嘉永三 (一八五○) 年~昭和三 (一九二八) 年)。牧師で民俗学者・考古学者。幕臣の [やぶちゃん注:「山中笑」名は「えむ」と読む (改名後の本名)。ペンネームは 以後、浜松・東京(下谷)・山梨・静岡の各教会の牧師を歴任したが、教派内の軋轢 維新後は徳川家に従って静岡に移り、静岡藩英学校教授となるが、 独自に考古学・民俗学の研究を進め、各地の習俗や民俗資料・ 20 世紀日本人名事典」に拠った)。 明治七(一九七 「本邦に於け 彼の「本邦 山中共古

った模様である。 一一年)はイギリスの外交官で日本学者・朝鮮語学者。 -ル・チェンバレンと並んで、初期日本研究の著名な一人。熊楠は直接会ったことはなか ン」ウィリアム・ジョ ージ・アストン(William George Aston 一八四 アーネスト・サトウやバジル 一年~ · ホ 九

中の経済的支援を受けており、深い交流があった(ここはウィキの「フレデリック・ヴィ 訳とされる「百人一首」を始めとして、 年~一九一五年)はイギリスの日本文学研究者・翻訳家。イギリス海軍軍医・領事館弁護 クター・ディキンズ」に拠った)。 サトウとも交流があり、南方熊楠も、熊楠が翻訳の手助けをする代わりに、イギリス留学 士として来日し、帰国後はロンドン大学の事務局長(副学長)を務めたが、 「ジキンス」フレデリック・ヴィクター・ディキンズ(Frederick Victor Dickins 日本文学の海外への紹介に先駆的な役割を果たした人物として知られ、 「竹取物語」・「忠臣蔵」・「方丈記」などを英訳 初の本格的英 アーネスト・

惚となり富が訪れるのを待った』。『やがてこの騒動は都のみならず周辺の地方にも波及 称し、それを祀れば貧しい者は富み、老いた人は若返ると吹聴した。そのため、 pryeri:翅を開張すると十四~十六センチメートルになる大きな蛾で、 を中心とした内浦重寺から西浦江梨までの一帯。この付近。グーグル・マップ・データ)木簡によると』、『その殆どが伊豆国田方郡吉妾郷』(比定地は現在の沼津市大字西浦木負 内の壬生部』(みぶべ)『(諸皇子の養育に携わる人々とその封民)の一つであり、 るものとする意見がある』とある。 はこの騒動を懸念して鎮圧にあたり、騒乱を起こし民衆を惑わす者として大生部多を討伐 を台座に安置し、舞い踊り』、『家財を喜捨して崇め、往来で馳走を振る舞い、歌い踊り恍 し、全ての翅に一つずつ特徴的な三日月形の白紋を有する)『の幼虫)を常世神であると にはシンジュサン』(鱗翅目ヤママユガ科シンジュサン属シンジュサン Samia cynthia 『を拠点としている』という。『多は駿河国の不尽河(富士川)辺の人』で、皇極天皇三 し、『飛鳥時代の人物。 「大生部多」ウィキの (六四四)年に『タチバナやイヌザンショウにつくカイコに似た虫 (アゲハチョウ、 (生死不明) した』。『常世の虫に関しては、道教の「庚申待」と「三尸」説の影響を感じ 私財を投じて財産を失う者が続出して社会問題となる。渡来系の豪族であった秦河勝 シャーマン。姓は』なかったとする。『大生部は職業部』(べ)『の 「大生部多」では、「おおうべのおお」と読んで、生没年不詳 翅の色は褐色を呈 人々は虫

を植え、久しく枯れなければ、祈願の 験 があったとされたものに因む。 図書館デジタルコレクションで同書をざっと見たが、 しのすぎ)は天保六(一八三五)年に成った稲荷神社(伏見稲荷大社)についての考証 「伴信友」(安永二(一七七三)年~弘化三(一八四六)年)は国学者で「驗の杉」(しる 古くから伏見稲荷大社にある神木の杉で、参詣者が折り帰った杉の枝 見当たらなかった。] しかし、

猿の土偶を夥しく祭れる小祠有り、婦人產月近づく每に之に詣で、禮拜して其の像を)猿は産の安きものとて、今は知らず、二十年計り前迄、和 安産し畢れば、同様の猿像一を添へ禮賽して件の祠へ返納せり。 歌山より大阪 へ往く街道側

を神として齋ぎて[やぶちゃん注:「いつぎて」。]、美作の國人美女を牲[やぶちゃん注: 「いけにへ」。」とし、毎年之を祭れるを、 古え 「やぶちゃん注:ママ。彼の書き癖で、 東國の獵夫來て此弊風を止めし事、 以降も他出するので、注さない。〕猿と蛇 宇治拾遺に

猿をもう』一『体買いそろえて、自分と生まれた子どもの』二『体にして奉納するそうで 間信仰とみられます』。『日吉山王神社宮司の岩橋利茂さんによると、鎌倉時代の』建久九 猿の像が、ここと、ここで見られる。「朝日新聞」の と話しました』とある。 も親しみがあり、当時の人が猿にどのような思いや信仰を抱き、この形に作り、瓦猿を通 幅』十二センチメートルや、身長五センチメートル『ほどの大小様々な瓦猿が』二十『体 紀州の人々の暮らしの中にも瓦猿があったことを示す証拠があります。町屋だった鷺ノ森 内に瓦の窯を造らせ、安産祈願として瓦猿を作らせたという言い伝えがあるそうです』。 叡山に生息するサルが信仰の対象となって、本社では神猿(まさる)として、厄よけ(魔 る常念寺の東にあったもの』が、 の制作や信仰が確実に江戸時代にまでさかのぼるのが分かったことは重要だと思います」 沢ある現在の瓦猿の型に移ったとも考えられるそうです。前田さんは発掘によって「瓦猿 じてやりとりしたのだろうと興味を抱きました』。『江戸時代の中で写実的なものから、光 真を見せていただくと、大半の猿が何も持っておらず、物を持つ猿で確認できたのは鶏 ほど出土しました。発掘に携わった和歌山市教委文化振興課の前田敬彦さんに出土品 加護を願う信仰が長い年月継がれてきたことの重みを感じました。「奉納した人が赤ちゃ が去る)や必勝(勝る)祈願がなされるそうです。瓦猿を通じての安産祈願は紀州での民 ……」これは和歌山県和歌山市有本にある若宮八幡神社である。そのサイド・パネル んを抱いて神社に来られた時はうれしい」と、岩橋さんは目を細めました』。『江戸時代の 人は、この縁起の良い瓦猿を』一『体、お守りとして持ち帰り、無事出産したら新しい瓦 『拝殿には奉納された瓦猿が、何十体も厳かに並べられていました。子授けや安産を願う (一一九八)年に『後鳥羽上皇が熊野詣の帰りに神社に立ち寄った際に、お供に命じて境 (大津市) の神の使いは猿です。本社禰宜 (ねぎ) の矢頭英征さんによると、神が宿る比 (和歌山市有本) に子授けや安産祈願として奉納されています。山王総本宮の日吉大社 [やぶちゃん注:「和歌山より大阪へ往く街道側に、猿の土偶を夥しく祭れる小祠有 現在も毎年』二十から三十『件の奉納があるそうで、一体一体が尊い命を象徴し、ご (和歌山市西鍛冶屋町)の発掘調査』(一九九一年)『で、江戸時代の地層から、頭の 若宮八幡宮界隈」によると、『日吉神社は江戸時代には八幡宮から少し小字南島にあ 扇子や桃のようなものが各』一『体。姿形がバリエーション豊かで、 また、ブログ「ユーミーマ 『明治維新の神仏分離令の頃、 ン奮闘記」の「和歌 「わかやま動物ウオッチング」の記 寺の横にあった神社は若 でも

宮八幡宮境内へと移され』たとし、『有本村に住む古老の方によると、社殿の引越しは夜 町の瓦屋で瓦猿を購入し』、二『本にして神社に返す習慣があったようで、現在でも瓦猿 神社に安産祈願に訪れる人が神社から瓦猿を』一『本仮り受け、無事出産すると』、『田中 を奉納する人がある』とある。] 願のために奉納した瓦で焼いた猿の人形が出土したと』いうとあって、さらに、『江戸時 で運んだと伝わってい』るとあり、『もとの日吉神社があったとされる場所からは安産祈 代には田中町にある瓦職人が内職として安産祈願用の瓦猿を焼いていた』といい、『日吉 『解体せずに』、『村の人たちが建物ごと担ぎあげ』、『静かに八幡宮境内ま

第二十六」に「美作國神依獵師謀止生贄語第七」(美作の國の神、獵師の「謀」に依りて生贄 きな一篇である。] を止めし語第七)があり、それを私は「柴田宵曲 妖異博物館 あるが、先行する「今昔物語集」に同文的同話(両書のソースは同一と考えられる)が「巻 しているので、そちらを参照されたい。「今昔物語集」の中でもサスペンスに満ちた私の好 [やぶちゃん注:「宇治拾遺に見えたり」**「宇治拾遺物語」の「東人、生贄を止むる事」で** 人身御供」の注で全電子化

クローフヲード、王の白象厩に二猿を蓄へる[やぶちゃん注:「かへる」。「飼へる」。]をし、一八二一年、暹羅[やぶちゃん注:「シヤム」。シャム。タイの旧名。]に使節たりし温、蓋戲詞也と見え、古くより猿舞し行はれしを、後に斯る支那說より故事附けたるべ **編集ミスである。原拠が「不」であるので、特異的に訂した。**]、西遊記謂天帝封孫行者弼馬 Embassy to the Courts of Siam and Cochinchina, 1828, p. 97)° 説あり、五雜俎卷九に、置狙於馬厩、令馬不疫 **[やぶちゃん注:「不」は底本では「下」と** なっているが、漢文として「下」ではおかしいから、熊楠が誤ったのではなく、植字ミスか であるが、意味が通らないので、平凡社「南方熊楠選集」版のそれを採った。]に在りと云 吾國猿舞ひの基因は、馬の爲に病を禳ひし[やぶちゃん注:「はらひし」。底本は「穰」 厩人に問ふて其象の病難豫防の爲るを知りし由自記せり(J.Crawford,'Journal on an

巻九の「物部一」にある以下の一節。前の部分も引いておく。 を掛けた。主たる部分は筆者の読書の心得であるが、国事や歴史の考証も多く含む。一六 解を記していたため、清代になって中国では閲覧が禁じられてしまい、中華民国になって い楽府題で、それに「各種の 彩 を以って布を織る」という自在な対象と考証の比喩の章随筆。全十六巻(天部二巻・地部二巻・人部四巻・物部四巻・事部四巻)。書名は元は古 一六年に刻本されたが、本文で、遼東の女真が、後日、 [やぶちゃん注:「五雜俎」「五雜組」とも表記する。 っと復刻されて一般に読まれるようになるという数奇な経緯を持つ。ここに出るのは、 を以って布を織る」という自在な対象と考証の比喩の意 明の謝肇淛が撰した歴史考証を含む 明の災いになるであろうという見

*

首碎而僕。觀者甚異之。餘又見一馬疾走、 人有置狙於馬廐者、狙乘間輒跳上馬背、揪鬣搦項、嬲之不已、 一蹄而斃。靈蟲之智固不下於人矣。 載狙而行、狙意猶洋洋自得也。行過屋桁下、 犬隨而吠之不置、常隔十步許。 馬忽奮身躍起、 馬無如之何。 馬故緩行 旦

置狙於馬廐、 令馬不疫。 「西游記」 謂天帝封孫行者爲弼馬溫、 蓋戲詞也。

熊楠の引用した部分だけを訓読しておくと、

法に杜撰が多い。目に見えておかしなものについては、平凡社「選集」版を用いて補正した 医師・植民地管理官・外交官にして作家であったジョン・クロフォード(John Crawford「クローフヲード」一八二一年にイギリス政府の命令でシャムとコーチシナに派遣された 言わずもがな、「孫行者」は孫悟空。「弼馬温」は天帝の御廐の番人。 記録」。なお、最初に断っておくと、底本に挿入されている欧文の参照書誌注記には、表記一七八三年~一八六八年)が報告した「シャムとコーチシナの裁判所に提出せる大使館宛 あまりに多いので、その断りも入れなかった箇所も多い。悪しからず。]

無し」と云ひ、想山著聞奇集卷四に、熊を殺す者、その報ひにて常に貧乏する由記せる まあれ」。〕といふ、此故に山村の農夫は需て「やぶちゃん注:「もとめて」。〕熊を捕る事 考へ合すべし、北越雪譜初編卷上に、「山家の人の話に、 と」。]、紀南にて長[やぶちゃん注:「たけ」。]一丈餘にて金光を放てる熊を見、また靈夢 藏「熊野緣起」に、 たる熊一疋を殺すも、其山必ず荒るゝことなり、山家の人此を熊荒[やぶちゃん注:「く を感じ、寶劒を得たりとある由、熊野の名之に始まると云ふ今も紀州に予の如く熊を名と ○熊 古事記に、 する者多きは、 古え熊を崇めし痕跡なるべし。 古え熊をトテムとせる民族ありしやらん、蝦夷人が熊を崇めて神とすると 神武天皇熊野村にて大熊に遇玉ひし事を載せ、伴嵩蹊の説に、 同帝三十一年辛卯、髙倉下尊[やぶちゃん注:「たかくらじのみこ 熊を殺すこと二三疋或ひは年歴 栂尾山所

の [やぶちゃん注:「古事記に、 一節に、 神武天皇……」「古事記」 の 「中つ卷」 の冒頭の神武天皇記

伏地而。 理那理。 古命。 爲切仆。爾其惑伏御軍。悉寤起之。故天神御子。問獲其橫刀之所由。高倉下答曰。 如夢敎而。 爾答曰。僕雖不降。專有平其國之橫刀。可降是刀。 入。「故建御雷神教日。穿汝之倉頂。 故神倭伊波禮毘古命。 天照大神。高木神。二柱神之命以。召建御雷神而詔。葦原中國者。 鯈忽爲遠延。 我之御子等。不平坐良志。其葦原中國者。 獻之時。天神御子卽寤起。詔長寢乎。 旦見己倉者。信有橫刀。 及御軍皆遠延而伏。此時。 從其地廻幸。到熊野村之時。大熊。髣髴出入卽失。 故以是橫刀而獻耳。 以此刀墮入。」故阿佐米餘玖汝取持。 熊野之高倉下。齎一橫刀。 故受取其橫刀之時。其熊野山之荒神。自皆 專汝所言向之國故。汝建御雷神可降。 降此刀狀者。穿高倉下之倉頂。 伊多玖佐夜藝帝阿 獻天神御子。故 到於天神御子之 己夢

称。]、其地より廻り、熊野の村に幸到しし時に、大きなる熊、髮[やぶちゃん注:叢。]故[やぶちゃん注:そして。]、神倭伊波禮毘古命[やぶちゃん注:神武天皇の国風の呼かれ

皆、遠延て伏しき。「爾は神倭伊波禮毘古命、倏忽に遠延し[やぶちゃん注:病み疲れなさり。]、「爾は神倭伊波禮毘古命、倏忽に遠延し[やぶちゃん注:病み疲れなさり。]、より出で入りて、卽ち、失せぬ。

「長く寢るや」
「長く寢るや」
「長く寢るや」
「長く寢るや」
「やぶちゃん注:人名。朝廷の倉を管理する者か。」、ちて、天つ神の御子の伏せる 地 に到りて之れを獻る時、天つ神の御子、卽ち、ちて、天つ神の御子の伏せる 地 に到りて之れを獻る時、天つ神の御子、卽ち、むれの時、熊野の高倉下[やぶちゃん注:人名。朝廷の倉を管理する者か。]、 卽ち、 寤め起ち、

皆、切り仆さえき。爾に、其の惑え伏せる御軍、悉く、寤め起ちき。と詔りたまひき。故、其の横刀を受け取りたまふ時に、其の熊野の山と詔りたまひき。故、其の横刀を受け取りたまふ時に、其の熊野の山 其の熊野の山の荒ぶる神、 5

りたまはく、 「己が夢に云さく、天照大神・高木の神二柱の神の命を以ちて、まる」とのまた。 なまてらずおほなかな たかき ふたはしら かしと ない 天つ神の御子、其の横刀を獲りつる由を問ひたまひしかば、 高倉下、 建御雷神を召びて詔高倉下、答へ曰さく、

『葦原の中つ 國は伊多く佐夜ぎて阿り なり 「やぶちゃ ん注:ひどく騒がしい

る。]。其の葦原の中つ國は、専ら汝が言向けつる國故、汝、建御雷神、降らさね。』る。]。我が御子等、不平み坐すらし[やぶちゃん注:病んで、悩んでおられるようであ

と、のりたまひき。

爾に答へ日さく、

「朝目宜く」で、「朝、起きて見れば、うまくそこに」の意か。」、汝、「朝目宜く」で、「朝、起きて見れば、うまくそこに」の意か。」、汝は、高倉下の倉の頂を穿ちて、其こより墮し入れむ。故、阿佐米余は、『僕 降ずとも、専ら其の國を 平 けし横刀、有り。是の刀を降さむ。またりにある。 此の刀を降さむ狀 取り持ち、 [やぶちゃん注: 天つ油

き。 の御子に獻れ。』 故、是の横刀を以ちて獻らくのみ。」 旦に己のが倉を見しかば、 に、 有り

、まをしき。

*

土着神の示現であったことを理解するためである。 **六版)に拠った。後半部を採ったのは、この熊が相応の呪力(身体を疲弊させる)を持つ** 訓読や意味は、概ね、角川文庫「古事記」(武田祐吉訳注他・昭和五六(一九八一)年第

筆」「閑田次筆」。その「關田次筆」の巻之三に、 隠居・剃髪、その後は著述に専念した。代表作は知られた「近世畸人傳」や随筆「閑田耕 門資之の養子となり、十八歳で家督を継ぎ、家業に専念したが、三十六歳で家督を譲って 名資芳。近江八幡出身の京都の商家に生まれたが、八歳で本家の近江八幡の豪商伴庄右衛 「伴嵩蹊」(享保一八(一七三三)年~文化三(一八〇六)年)商人で歌人・文筆家。

*

栂尾山の古文書の「熊野緣記」の所に、「古事記」の文、二行を引し中に、「大熊髣髴出 し」と、竹苞樓主、 ○古事記神武天皇條に、「大熊髮出入卽失」といふ文面、 入」と見ゆ。是にて明白也。「此古文書は三百年斗以前のもの也。夫より後に寫誤る成べ 語れり。 諸先達、皆、 解得ず。 然るに、

*

はないか?」という強い疑いを感じてきているのだが、これを見るに、その疑惑を強くし 記憶力を持っていることは事実である)、必ずしも原本に当たって確認をしていないので れは今まで、「南方熊楠は、和書の場合は自分の記憶に頼っていて(それほどに驚異的な とあったものの、「金光を放てる熊」も「熊野の名之に始まると云ふ」も出てこない。こ

姻・禁忌などに関連して特殊な関係を持つ動植物・鉱物などの自然物を指す。 語はアメリ められることは周知の通りである。 ヌがイオマンテの祭儀によって熊を神に送り返す儀式の中に熊をトーテムとした信仰が認 ものである」の意)に由来する。熊楠も述べているように、 カ先住民(インディアン)の一つであるオジブワ族の言葉「ototeman」(「彼は私の一族の 「熊をトテムとせる民族」「トテム」はトーテム(totem)。特定の社会集団に於いて、 本邦では先住民族であるアイ

「北越雪譜初編卷上に……」「北越雪譜」 現在の新潟県南魚沼市塩沢で縮仲買商と質屋を

上」の「白熊」の条の附記。早稲田大学図書館「古典総合データベース」の原本タ・デ・ソルの海岸で読み耽ったほどの私の愛読書である。以上は同書の「初編 七)年に初編が江戸で出版されるや、ベスト・セラーとなった。真夏のスペインのコス 雪国の生活を活写した名作。 営んだ随筆家鈴木牧之(明和七(一七七○)年~天保一三(一八四二)年)が越後魚沼の≝を危い 初編卷之上)を視認して示す(「20」コマ目)。読みは一部に留め、 初編三巻・二編四巻で計二編七巻からなる。 句読点を打った。 天保八(一八三 · (PDF°

【 】は原本の二行割注。

*

○白熊

鳩、源家の旗、すべて白きは「皇国の祥象なれば、天機、白熊をいだししも「昇平萬歳の也。こゝかしこに持あるきしが、その終をしらず。白亀の改元、白鳥の神瑞、八幡の 禮、すべて人の群る所へいてょ、看物にせしが、ある所にて余も見つるに、大さ、狗のごしに、香具師【江戶にいふ見世もの師の古風なるもの。】、これを買もとめ、市場又は祭 ○天保三年[やぶちゃん注:一八三二年。]辰の春、我が住、魚沼郡の内、浦佐宿の在、熊の黑きは、雪の白がごとく天然の常なれども、天公、機を轉じて、白熊を出せり。(1) の吉瑞成べし。 大倉村の樵夫八海山に入りし時、 いかにしてか白き児熊を 虜り、世に珍しとて、飼ひおき しらとりしんずる、はなはだ愛すべきも、

[やぶちゃん注:以下、原本では全体が二字下げ。]

て熊を捕る事なし、と、いへり。熊に쿶ありし事、古書にも見えたり。ならず、荒る事あり。山家の人、これを「熊荒」といふ。このゆゑに、山村の農山家の人の話に、熊を殺すこと、二、三疋、或ひは年歷たる熊一疋を殺も、 山村の農夫は需め

*

龜」に改元されたことを指す。 日)に際し、肥後国より相次いで白い亀が献上されたことから、それを吉祥として「寶 カメの献上があったことから、それを瑞祥として「神龜」(しんき/じんき)と改元さ 「白亀の改元」養老八年二月四日(七二四年三月三日)に紀朝臣家から、手に入れた白 また、神護景雲四年十月一日(七七〇年十月二十三日)光仁天皇即位(同年同月同

年に焼死したとする)は、生まれてから成人するまで言葉を発さなかったが、ある日、 うになったと伝える。 の鵠を捕まえることを命じ、鵠を遊び相手にさせると、誉津別命は普通に会話が出来るよ (白鳥)が空高く渡る様子を見て、「是、何物ぞ。」と初めて言葉を発し、天皇は喜び、

た大師流書家で随筆家としても知られた三好 想 山(?~嘉永三(一八五〇)年)の代表「想山著聞奇集卷四に……」「想山著聞奇集」は江戸後期の尾張名古屋藩士で右筆を勤め 年の嘉永三(一八五〇)年に板行されている。 動植物奇談・神仏霊異・天変地異など、五十七話の奇談を蒐集したもの。全五巻。没 私は全篇の電子化注を本ブログ・カテゴリ

の最後に現われる。 「怪奇談集」で終わっている。熊楠の示すものは、「美濃の國にて熊を捕事」の追記部分 追記部を総て示す。

*

も安穏に養ふべき基ともなるはづなるに、矢張、困窮して、漸 飢渇に及ばざる迄の事な組合、一時に三十金・五十金をも獲る事有ば、是が爲に身代をもよくし、生涯、父母妻子をによりては、一疋の膽が三十兩位と成分をも獲る事有て、纔の窮民共の、五、七人の膽は、惡しき分にても五、六兩にはなり、好品なる分は、十五兩にも廿兩にもなり、時の膽は、惡しき分にても五、六兩にはなり、好品なる分は、十五兩にも廿兩にもなり、時 斯の如く熊を捕事は、珍敷事にあらざれども、さして荒る事を覺ずと云。 尤 、雪中の熊事なしといへり。熊に靈有事、古書にも見えたり』云々。然共、此美濃の郡上邊にては、其山、必、荒る事有。山家の人、是を「熊荒」と云。此故に、山村の農夫は、需て熊を捕其山、地、鷺。に、山家の人の話に、『熊を殺事、二、三疋、或は年歷たる熊一疋を殺も、「北越雪譜」に、当れた。 し、 剰 ものゝ命をとりて己の口腹を養ふと云も、過去の宿緣とも申べき乎。厭はず、足には堅凍積雪を踏分、 頭 には星霜雨露を戴きて、實に 命 を的となして 危 をなるは、熊を殺せし罰なるべしと、銘々云ながらも、大金を得る事故、止兼て、深山幽谷をもるは、熊を殺せし罰なるべしと、銘々云ながらも、大金を得る事故、止兼て、深山幽谷をも

太字で示した部分が熊楠の縮約の元である。 但し、 正しい梗概とは言えない。〕

きて程なく、後白河法皇、 Feilbery, 'Ghostly Lights.'Folk-Lore, vol. vi. p.288 Seqq. 1896.)源平盛衰記卷十三に、 爲妖也と [やぶちゃん注:句点なしはママ。] 斯る迷信今も存ずるや否を知らず、稍や之 るも、古來邦人の迷信上、鼬はなかなか一癖ある獸と知られたり。 の法を修して、成就の徴しに鼬現はるゝ話ありしと記憶すれば、別に崇拜されしと聞かざ は、その家火災に罹る兆なりと傳ふることなれども、鼬の所爲たりと言はず(H. F. に似たるは、丁抹[やぶちゃん注:「デンマーク」。]國等に建築中材木より火出で飛ぶ ○鼬、倭漢三才圖會卷三九に、鼬群鳴すれば、不祥と爲すとは、 「しか」。]信ずる人有り、 鳥羽殿より還御のことあり、又義經記か曾我物語に、 或夜中有焰氣高昇如立柱、呼爲火柱、其消倒處必有火災蓋羣鼬 · 今も然 [やぶちゃん注 泰山府君 鼬躍り鳴

の類書「三才圖會」(明の一六〇九年に刊行された王圻とその次男王思義によって編纂さ類書(百科事典)「和漢三才圖會」(「和」は「倭」とも表記する)。全三百巻から成り、明年~一七三六年)の頃に没したとされる)の主著である正徳二(一七一二)年に刊行した 鱗 魚 ・ 蟹類 但し、本草部は、概ね、明の李時珍の「本草綱目」を基礎記載を用いている。本文は漢文 れた。 体であるが、丁寧に訓点が打たれてある。私は本書を偏愛しており、サイトで「和漢三才 の影響を受けた著書を多く刊行した。その最晩年の事蹟は不明であるが、享保(一七一六 に従い、鼠類に分類し、その最後に配している)の記載は「和漢三才圖會卷第三十九 リジナル電子化訓読注をし終えている。 む)の部全七巻、卷第四十五 圖會」の水族(海藻・海草・淡水藻の他に菌類・菌蕈類・蘚苔類・地衣類・シダ類等を含 この業績が評価され、大坂城入りの医師となり、法橋に叙せられた。この間、明代の医学 (一六五四) 年~?:生まれは出羽能代 (一説に大坂高津とも) 生まれの商人の子とされ [やぶちゃん注:「倭漢三才圖會卷三九に、……」江戸前・中期の医師寺島良安(承応三 後に大坂に移って、伊藤良立・和気仲安の門人となり、医学・本草学を学んだ。後に 鼬(いたち) ·卷第四十七 介貝部·卷第四十八 魚類 全百六巻)の分類・構成を参考にして執筆された本邦初の絵入り百科事典である。 卷第五十 藻類 獸類・巻第三十九 苔類を、以下、一部を除いてブログで動物部の、卷第三十七 畜類・卷第 魚類 禽部・卷第五十二から巻第五十四 (イタチ)」にある。その内の訓読文を示す。 河湖無鱗魚・卷第五十一 鼠類・卷第四十 龍蛇部 龍類 その「巻第三十九 鼠類」(良安は「本草綱目」 蛇類・卷第四十六 河湖有鱗魚・卷第四十九 魚類 寓類 魚類 **恠類(これはサイト版)・卷第四** 蟲部を、実に十二年半かけてオ 江海無鱗魚及び、卷第九十七 太字は私が附した。 介甲部 龜類 鼈類 江海有

鳥・鼠を捕へて、惟だ、血を吮ひて、全く、之れを食らはず。其の聲、木を輾る音のご♪柔かく撓かなり。小さき隙・竹の筒と雖も、反轉して出でざるといふこと無し。能く、有り。】は臭し。此の物、能く、鼠及び禽・畜を捕ふ。亦、能く、蛇・虺を制す。臭し。其の毫[やぶちゃん注:細い毛。]尾と與に筆に作るべし。其の肉【甘、温。小毒臭し。其の意 狀、鼠に似て、身、長く、尾、大なり。黄色に赤を帶ぶ。其の氣、 之れを食らはず。其の聲、木を輾る音のごと

[やぶちゃん注:ママ。]倒るゝ處、必ず、火災、有りといふは、蓋し、群鼬、妖を作すな 熖氣、有りて、高く升り、柱を立つるがごとし。呼んで、「火柱」と稱す。群鳴すれば、則ち、以つて不祥 [やぶちゃん注:不吉の前兆。] と爲す。或 熖氣、有りて、 其の消へ

 $\searrow,$ 又、瓢簞を畏る。故に魚を養ふ池邊に瓢簞を安く。」、水に入りて、魚を捕る。性、蟾蜍を畏る。如し、 本と、此の一種なり。常に屋壁の穴に棲みて、瀦池を覘い[やぶちゃん注:マ\$ 。 *如 し、 相ひ見るときは、則ち、 困迷

k

若かざる獣魔神としてのトーテムの属性を有していたと考えてよい。謂わば、 化かす妖怪として認識されていた。されば、古いその根元に於いては、 学名及び本邦産種群(四種七亜種ほど)はリンク先の私の注を見られたいが、江戸時代ま での民俗社会では、上記の下線太字部で判る通り、狐狸同様に人間に化ける或いは人間を 敬して遠ざくるに 零落したの

白い。熊楠もニンマリだろう。 伝わる怪火の一種である「天火」(てんか/てんび/てんぴ)のウィキを英訳した英語版 ぽい)の中に頻繁にこの「H. F. Feilbery」という人物の名が見える。民間の伝承研究家 も訳しておく)は見当たらないが、欧文書誌資料(但し、英語ではなく、デンマーク語っ タイトル「Tenka (atmospheric ghost light)」(空中の怪光現象)が一番に掛かってくるのは面 「H. F. Feilbery, 'Ghostly Lights.'」この資料(「鬼火」或いは「妖火」「怪しき火光群」とで 因みに、この作者と標題のフル・フレーズで検索すると、あろうことか、日本各地に

部表記を別本で変えた。 皇鳥羽殿より還御」の冒頭近くである。カタカナをひらがなに直し、漢字を正字化し、 文表記部は訓読し、 所持する(平成六(一九九四)年三弥井書店版刊)「源平盛衰記(三)」で確認した。「法 「源平盛衰記卷十三に、鼬躍り鳴きて程なく、 「Seqq.」は普通は「seqq.」で、ラテン語「sequentes」の略。「下記(以下)の」の意。 句読点・記号・改行も増やして示す。踊り字「く」は正字化した。 後白河法皇、鳥羽殿より還御のことあり」

*

素のは まかば こく 三返走り廻り、 なるべきやらん」と御心ぼそく思召て、御轉讀の御經も、彌、心肝に銘じて思し遷さんずるやらん」と思召けるに、城南離宮にして春もすぎ夏にも成ぬれば、 を両目の上に翳すこと。鼬は人を見ると、 る。五月十二日の午刻に、 一院は年をへて、月を重ぬるに付ても、「新大納言成親父子が如く、 て、躍上、躍上、目影「やぶちゃん注:後脚肢で立ち上がって、 大に淺間しく思召て、 赤く大なる鼬の何より來り參たり共御覽ぜざりけるに、 大に、きょめきて[やぶちゃん注:鳴き叫びて。]、法皇に向ひ この行動をとるとされた。] 心肝に銘じて思し召されけ 前肢を挙げ、 遠國遙 なんどして失にけ の島にも放

『禽獸鳥類の怪をなす事、 飽足らず思て、 入道が、 朕を死罪などに べき 計 などの有にや。』

十羅刹女、 助させ給へ。

と御祈念有けるぞ、

源藏人仲兼と申者あり、 後には近江守とぞ申ける。 法皇の鳥羽殿に遷され御座て參り寄

『如何なる咎に合とても、いかゞは人もなき事を歎けるが、思に堪ず、

いかゞはせん。』

思て、 忍つい参たり。

法皇、御覽じて、

哀、 あれはいかにして參たるぞ。」

とて、 やがて、御淚を、 のごはせ給ふ。

聞召たく思召に[やぶちゃん注:自敬表現。]、折節、 「さても、只今、 然々「やぶちゃん注:「しかしか」。 參りあへる事、 鼬のそれを指す。〕怪異あり、 神妙神妙。」

とて、 御占形[やぶちゃん注:「おんうらかた」。占うべき対象を記した下し文であろ

う。]を賜て、

「泰親がもとへ。」[やぶちゃん注:陰陽寮陰 陽 頭 安倍泰親。]

と勅定[やぶちゃん注:「ちよくぢやう」。]あり。

のぶ。 仲兼、急ぎ京へ馳上り、 院陽頭泰親が樋口京極の宿所に行向て、 御占形を以つて勅定を

泰親、相傳の文書、よくよく披て見て、

「今月今日午時の御さとし、 今三日が中の還御の御悅、 後、 大なる御歎也。」

と勘申たり。

仲兼、先嬉くて、 件の勘文を以て鳥羽 の御所に歸參して、 此由を奏す。

法皇は、

「いさいさ、 何故にか、左程の御悅は。」

前後に打圍てぞ候ける。 けるによりて、入道、さまざまの惡事、 と、思し召されける程に、法皇の御事、 へ還入進す[やぶちゃん注:「かんじゆ、 思直て、同十四日、 大將 [やぶちゃん注:平宗盛。]、 强 歎き申され しんす」。還御すること。」。是にも軍兵、 に鳥羽殿より、八條烏丸御所 御車の

ける事、つゆ違はず。 十二日の先表 [やぶちゃん注:前兆。]、 同十四日の還御、 三箇日の中の御悅と占申たり

『「後の大なる御歎」とは、 又 いかなる事の有べきやらん。

御心苦く思召ける。

倉宮の御謀叛の御企ありとて、京中の貴賤、靜ならず。去四月九日、 潛 に令旨をば下されありしかば、 幽 なりし御住居引替て、御心廣く思召ける程に、還御の日しも、第二御子高 にして洩にけるやらん、淺ましとも云計なし。 りしかば、幽なりし御住居引替て、御心廣く思召ける程に、還御の日しも、第二御子高法皇は、去年の十一月より、御意ならず鳥羽殿に籠らせ給ひて、今年五月十四日に御出 源三位入道父子・十郎藏人の外には知人もなし、 藏人は關東へ下向しぬ、 第二御子高 いか

うシー ク エ ンスである。 清盛によるクーデタで、 後白河院政は完全に停止され、 治承

が、最後のシーンである。 治承四年五月十四日に後白河院が武士三百騎の警護により、 三(一一七九)年十一月二十日に、洛南の鳥羽殿に連行されて幽閉の身となっていたが、 八条坊門烏丸邸に遷った折

遣の誤りの内、穴山氏が訂正注を施しておられる部分は、そちらをとった。 刊)を底本とした。記号を追加し、段落を成形したが、読みは一部に限った(カタカナは ちの怪異の事 之物語」の王堂本の巻第二の頭にある「大見・八幡をうつ事」(プレ・ストーリー) 東九郎祐清が父祐親入道の命に従い、八幡三郎の首を獲った話の直後に配された、「いた東九郎祐清が父祐親入道の命に従い、八幡三郎の首を獲った話の直後に配された、「いた を修して、成就の徴しに鼬現はるゝ話」とはなっておらず(むしろある種の注意喚起を示す 原本のものなので総てとった)。踊り字「く」「ぐ」は正字化した。底本本文の歴史的仮名 **警戒的兆しと言うべきものである)、熊楠の記憶の錯誤**である。少し長いが、以下に であろう。但し、それは引用元が不確かであった如く、熊楠の謂うような、「泰山府君の法 「義經記か曾我物語に」掟破りの引用原拠不確定表示で手古摺ったが、これは恐らく前者 付 泰山府君の事」を示す。岩波文庫本穴山孝道校訂の上巻(一九三九年 で伊 「曾我

さても、八幡の三郎が母は、くずみの入道寂心が乳母子なり。すでに八旬にあまりける

稀代のふしぎなりとて、やがて勘へさすせたまひければ、サーピー つおち入つ ー 、ひざのうへにとびおりぬとみえしが、いづくともなくうせにけり。 並みすゑて、酒宴なかばのをりふし、もち給ひつるさかづきの中へ、空より大きなるいた ずりをそむき給しによつて也。しかるにじやくしん、世にましましし時、きんだちあまた 「御主の爲に、命を捨つる事は、本望なれども、此の亂のおこりをたづぬれば、おやのゆが、のこりのあまりにくどきけるは、

と申したりしを、さしたる祈禱もなくてすぎ給ひぬ。さていくほどなくして、じやくしん 大きなるいたちまゐりて、なき騷ぎけり。博士に御たづねありければ、 『おほきなるへうじ[やぶちゃん注:表示。予兆。]なり、つぃしみ給へ。』 かくれ給ひけり。さればにや、後しら河の法皇も、鳥羽の離宮にわたらせ給ひし時、

『三日のうちに御よろこび、又は御なげき。』

ゑ、ひとへに淨土の莊嚴にことならず。 人民こぞりて圍繞す。 玉瓔珞をさげ、壁には、 たかさ廿よ丈の高樓をたてらる。はしらはあかがね、けた・うつばりは金銀也。軒には珠 王おはしけり。樓閣を好き給ひて、あけくれ宮殿をつくり給ふ。中にも上かう殿と號して ひに奈良路に討たれさせ給けるなり。かやうのためしをもつてむかしを思ふに、大國に大やの御むほん[やぶちゃん注:以仁王の挙兵を指す。]あらはれて、都を出ましましてつ と申しけるにあはせて、つぎの日法皇をとば殿より出したてまつりて、八條烏丸の御所 らうのはしらにいたち二つ來つて、 入たれまつる。これ御よろこび也。又御なげきと申けるは、そのまたの日、たかくらのみ しかじとぞみえし。 山を築きては亭を構へ、池をほりては舟をうかぶ。水にあそべる鴛鴦のこには、珊瑚琥珀をしきみちて、ふく風ふる雨のたよりに、蘭麝のにほひに 然れば、大王玉樓金殿に座してつねに遊覽をなし給ふ。あるときかう 青蓮の華鬘をつけ、内には瑠璃の天蓋をさょげ、四方に、 なき騒ぐ事七日なり。 大王あやしみ給て、 佛菩薩の影向も、 博士を召し

を割りてだんをやぶらせ給へ。そうじて御えきの與黨七百人候なり。』 はち調伏の壇をかまへ、幣帛をたて、供具をそなへ、大わうを咒詛したてまつる也。これ 『此柱の中に、七尺の人 形に大王の御容 をことごとくつくりうつして、封じこめ、て、 ト はせらる。すなはちかんがへ奏して申さく、

りて、 ければ、はく狀する者七百人に及べり。これらをみな 縛 めて、すなはち首をきられしほど すこしもたがはず、すさまじくおそろしきありさまなり。すなはちだんをやぶらせられて に、すでに三百人の首をきりて、のこり四百人をきらんとする時、天下俄にくらやみとな 大わう大きにおどきてのたまはく、 のち、諸人をことごとくめしあつめ、其中にあやしき者どもをめしとつて拷問せされられ 大わうおほきにおどろきたまひ、いそぎかの柱をわりてみ給ふに、はかせの申せしに 夜晝のさかひもなし。人民道路にたふれふし、泣きかなしむ事なのめならず。其時

ざける下剋上のものを誅罰して、いましめを後世につたへんとおもふゆゑなり。 にわたくしあらば、天我を罰すむべし。』 『我つゆほどもわたくしの心をもつてかれらがくびをきるにはあらず。下としてかみをあ もし又我

のぼりて御あしのゆびをつまだてたまふ。 とちかひて、三七日のあいだ[やぶちゃん注:ママ。]飲食をとゞめ、 たかき床のうへに

はまた。 とて貴きひじりを請じて、仁王經をからせられ、祈誓をなし給ふ。三七日に滿ずる時とて貴きひじりを請じて、仁王經をからせられ、祈誓をなし給ふ。三七日に滿ずる時 らせられけり。 かりをかょやかし給ふ。さればこそまつりごとによこしまなしとて、のこる四百人をもき 七星[やぶちゃん注:北斗七星。]眼前にあまくだり現じ給ふ。 『あやまりあらば一めいこゝにきえぬべし。あやまりなくば諸天あはれみ給へ。』 こゝにまた博士參内してそうしけるは、 やゝあつて又日月 星 宿ひ

たからをつみ、一時にこれを焚きすててさいなんをはらひ給ふべし。』 の功遺りておそろしければ、しよせん、あまくだり給へる七星をまつり、 『大てきほろび侍りぬれば御くらゐ長久なるべき事餘儀なし。されども、 調伏の大行、其 しやうかう殿に

『左右に及ばず。』

ば、ついしみて水をそそぎまじなふ事、この時よりぞおこりける。 とて、 まつりごとをし給ひて、御くらゐ長生殿に榮へて春秋をわすれ、不老門に日月のかげしづ んにたからをつみあげ焚きすてられにけり。さてこそ、今の世までも、 3ものなり。今の泰山府君といふまつりはすなはちこれなり。大王、七星眼前にあまくだつて光をかじやかし給ふ事、七難卽滅、七福卽 たちまちに上[やぶちゃん注:「あげ」。]件の曜宿を請じをたてまつり、か 吹風枝をならさず、 降る雨つちくれをやぶらず、 永久にさかへ給ふぞめでた 七福即生の明文にかなされば七百人のてきほ いたち鳴きさはげ 彼の殿をやき、

邦より傳來せると二種ありて、之を判ずること頗る容易ならざるあるも(早稻田文學四十 薄雲其爲に猫塚を築けりとなり、續搜神記(淵鑑類函卷四三六に引り)に、會稽の張然、 近世江都著聞集に有り、吉原の遊女薄雲、厠に入らんとするに、日頃愛せし猫共に入らん 正年中、領主宇津左門五郎忠茂、一時獵入山家、有白犬從走、 犬を祀れる話有り、云く、 sept.1903,)アラビヤ及び歐州に行はれし、犬が僧正に遺産を進ぜしてふ譚に付ては Axon, 此犬、食を運びて之を助けしと云ふ(Notes and Oheries, 9th Ser. xii. pp. 189, 236, 貞和四年(五百五十二年前)の記也、之に似たる事、アゾールスに犬の記念に建てし寺あ 像北山へ飛移る、其所を崇て法樂寺と號す云々、本寺の跡に一堂一宇今に有り」と、是れ 提を訪ふ(?)堂塔僧房繁昌し佛法を行ふ、炎上の時、尊像十一面觀音秀府二疋の犬の影 畢る、犬二疋死後、 却して、道心を發し出家入道す、臨終に及ぶ時、男女子のなき間、 場え[やぶちゃん注:ママ。]誘出して、山中にて弓を引き矢を放たんとす、 塗れたるを見、誤て、其子を害せる者とし、之を殺せし誕[やぶちゃん注:「たん」或い 卷四十五に、僧祗律を引て、那俱羅蟲、梵士の子を救て毒蛇を殺せしに梵士其蟲の口血に 年久しく家に歸らぬ内、その妻奴[やぶちゃん注:「ど」。下僕。]と私通し、 康公聞之甚感嘆焉、且以有往々靈驗賜采地云々、之を作り替へたりと覺しき譚、馬文耕の 'The Dog who made Will,'N. & Q., Dec. 24, 1904, p. 501. を見よ、倭漢三才圖會卷六九にも忠 り、天主教の尊者「ロシユ」、黑死病者を救ふこと數萬にして、自ら之に罹り困みし時、 張る、秀府刀を拔き飛懸りて仔細を尋る處に、有の儘に承伏す、郎從を殺害し、 せること多きより攷れば、犬寺及び犬頭禮の傳記は今昔物語卷廿九、陸奧國狗山狗咋殺大 日しに、狗忽ち奴の頭に咋付く處を然奴を斬り、婦を官に付して殺せる條有り、法苑珪林 に與へしに食はず、惟注睛砥唇視奴、奴食催轉急なりしかば、 待ち殺さんとて毒を飯肉に加へて供せしを、然[やぶちゃん注:「しかして」]其飯肉を狗 とするを亭主其首を斬りしに、忽ち厠の下隅に落て、薄雲を見込みし蛇を咬殺せしより、 一年六月の卷に掲げたる、 `<u>○</u> 犬 Clouston, 'Popular Tales and Fictions,'1987. に擧たり、古話には、本來其土に特生せると他 「はなし」。]有り、動物が主人に忠を盡し、却つて害を爲す者と誤られ、殺さる、話多 嚙著大蛇頸、主見之驚、切裂蛇而還家、感犬忠情、埋頭尾於兩和田村、立祠祭之、 [やぶちゃん注:「(ナクラ)」はルビではなく、本文。]、 犬在傍咬衣裾引稍寤復寢、犬頻吠于枕頭、忠茂怒妨熟睡、 秀府が秘藏の犬大黑小黑とて二疋あり、 犬を祀りし例は峯相記に、又粟賀犬寺者、當所本主秀府と云者有り、高名獵師 秀府の妻女を犯し、剩へ秀府を殺して夫婦に成んと云密契有り、郎從秀府を狩 明らかに支那印度の譚より出たるを知るべし、附言、那倶羅(ナク 領家の計ひとして、彼田畠を以て一院を建立し秀府並に二疋の犬の菩 予の「大日本時代史に載れる古話三則」參照)、話の始末符合 犬頭社在參河國上和田森崎、社頭四十石、 かの郎從に飛かいり、 實は獸、「イクニュウモン」 然大に狗の名を呼び烏龍と 拔腰刀斬犬頭、頭飛于樹 行倒一樹下、忠茂俄爾催睡 所帶を二疋の犬に與へ 左右の手を喰へて引 犬尾社在下和田、天 夫の歸るを 既に害に及 妻妾を厭

又山二二四頁に、 「この迷信尤も伊豫に猖んに 四國に今も存する犬神の迷信を記し落とされたり、備前の人に聞く [やぶちゃん注:「さかんに」。] 行はれ、 諸部落に犬神筋

祀の爲、同島天滿宮に合併され了りしも、犬形の神石は、依然島側の一嶼に在り、此犬島 解くといふ、 ふ、依て天滿宮と犬石宮を建たり云々」。 在る犬島の犬石宮に祈るに甚驗し有りとて、參詣多し、もとは特立の一社なりしが例の合 [やぶちゃん注:「より」。]、發熱して犬の擧動を爲しむ、仍て財物を寄附して漸く其害を 菅公流罪の時風波を避て船を寄せしに、犬別れを惜みて鳴き、 づつ有り、其家主家族に惡感を懷かしむる事あらば、必ず犬神加害者に憑り 此病に罹る者備前邑久郡[やぶちゃん注:「おくぐん」。] 化して石と成れりとい 朝日村、一里沖に

残っている。以下は「国文学研究資料館」の電子データの、ここから(右頁二行目末から 述は有名である。兵庫県太子町の斑鳩寺に永正八(一五一一)年に写された最古の写本が 会を知る上で貴重な史料とされる。中でも柿色の帷子を着て、笠を被り、面を覆い、 討ちに遇って廃寺となった)に参詣した旅僧が同寺の僧から聞書したという形式で記述さ 左頁六行目まで)読める(写本と思われるが、訓点と本文平字が混在するものだが、 などの独特の武器を使用して奔放な活動をしたと描かれてある播磨国の悪党についての記 れている。中世(鎌倉末期から南北朝にかけて)の播磨国地誌となっており、同時期の社 詳であるが、正平三/貞和四(一三四八)年に播磨国の峯相山鶏足寺 に読み易い)。熊楠の起こしたものとは伝本が違うか、やや異同があるので、 市内にあったが、天正六(一五七八)年、中国攻めの羽柴秀吉に抵抗したため、全山焼き うそうき」「ぶしょうき」とも読むらしい)は鎌倉末から南北朝期の播磨国地誌。作者不 [やぶちゃん注:「峯相記に、……」「みねあひき(みねあひき)」(但し、音読みして「ほ 漢字は全て正字とした(リンク先のそれは略字が多い)のままに電子化した。 (現在の兵庫県姫路 以下に示

*

處有マ、ニ承伏ス則郎從ヲ害シ妻妾ヲ厭却メ發道心出家入道ス臨終ニ及時男女ノ子無之故 府ゥ秘藏犬大黑小黑トテ有□二疋□彼郎從□飛懸□左右∪手ョ喰テ秀府刀ヲ拔キ飛懸テ仔細ヲ尋 婦ト成ント云有二密契「郎從秀府ッ狩塲ヘ誘出山中ニテ弓ヲ引キ矢ヲ放ントス既ニ害'及時秀 '所帶ヲ二疋´犬'與畢ヌ犬二疋死後頷家ノ計トメ以」彼田畠タ」建」立一院タ「秀府幷'ニ]疋ノ 又粟賀犬寺者當所,本主秀府ト云者有,高名,獵師也彼僕秀府カ妻女ヲ犯シ、剩秀府,殺メ夫 所ヲ崇テ法樂寺と號すངང 犬ノ菩提ッ弔僧房繁昌メ行ニι佛法 | 炎上ノ時尊像十一面觀音秀府二疋ノ犬ノ影像北山、飛移ル其

*

あるので読まれたい。なお、以下の引用例の多くは(全てではない)、 ル・マップ・データ。 ここに出る粟賀犬寺は現存する。兵庫県神崎郡神河町にある真言宗金楽山法楽寺(グーグ 「播州犬寺」或いは単に「犬寺」と呼ぶ。同寺公式サイト内の 『太陽』に連載)分割ででも取り上げている。 〈十二支考〉の一つである「犬に關する民俗と傳說」(初出は大正一一(一九二二) 以下同じ)で、本尊も十一面千手観音であり、別名を「粟賀犬寺」 「縁起」に伝承が記されて 南方熊楠の、

あるから、「五百六十三年前」の誤りである。 「是れ貞和四年(五百五十二年前)の記也」本主篇は明治四四 (一九一一) 年七月発表で

ルス」大西洋の中央部マカロネシアにある、 ポ ル ガ ル領のアゾレス諸島

: The Azores)のことであろう。 島名の発音はポルトガル語ではアソーレス(Açores)

描かれている。 and O'ueries」の南方熊楠が指示する集成本が閲覧視認が出来、その る。「Notes and Oweries」でも「Roch」の綴りが用いられている。 エに到着したが、フランスは戦争で分裂状態であったため』、『彼の身元が判明しなかっ が患者の頭上に十字架の印をすると、患者はたちまち癒えたという』。 とあり、彼は、一二九五年に『フランスのモンペリエで総督の子息として生まれ』、二十 自ら之に罹り困みし時、此犬、食を運びて之を助けしと云ふ』「Internet Archive」で「Notes ンツァでロクス自身もペストにかかった。回復後、ロクスは祖国に戻り』、『故郷モンペリ の旅に出た。ローマでは』、『当時』、『流行していたペスト患者の看護にあたった。 てきた。絵画や肖像では、裂傷を負った脚を見せて立ち、傍らにはパンをくわえたイヌが 九五年生まれで、一三二七年八月十六日没の『カトリック教会の聖人』であり、『ペスト びポルトガル語:Roque』(熊楠の「ロシユ」は生まれのフランス語表記の音写)で、一二 ロクス』は『ラテン語:Rochus、イタリア語:Rocco、フランス語:Roch、スペイン語及 の右手で後半部が書かれている。 の記事にまず、「アゾールスに犬の記念に建てし寺あり」の部分があり、さらに、 『歳のとき』、『両親をなくしたのを機に』、『全財産を貧者のために投げうってローマ巡礼 (黒死病) に対する守護聖人とされたことから、古くからヨーロッパで崇敬の対象となっ 『犬の記念に建てし寺あり、天主教の尊者「ロシユ」、黑死病者を救ふこと數萬にし ロクスはスパイだと勘違いされ』て『刑務所に投獄され』、『獄中で死去した』とあ 犬が食べ物を運び、 また、「ロシユ」についてはウィキの「ロクス」に、『聖 ロクスの傷を舐めて治してくれたという伝説がある』 「189」 *ペー* しかし、『ピアチェ ジの右手 「236」 ロクス

者投稿のみによって』構成されていた。『種々雑多な内容に富み、『ネイチャー』』 載る)でも、正しくそうなっている。サイト「南方熊楠のキャラメル箱」(本篇の分割現 出原本(「j-stage」にある原雑誌画像抜粋(PDF。当該論考「○本邦に於ける動物崇拜(追 代語訳が載る)の「ノーツ・アンド・クエリーズ 加)」(元には、かく山中論文への「(追加)」という添え書きがあることが判る)の全文が ツ(報告)」「クエリーズ(質問)」「リプライズ(答文)」の』三『部から構成される、 九年(天保十二年相当)に『イギリスで創刊された学術雑誌』で、『その副題に「文学 「Notes and Oueries, 9th Ser. xii. pp. 189, 236, sept.1903,」「9th」及び「189」は底本では 「qth」と「18q」であるが、おかしいので、平凡社選集で特異的に訂した。南方熊楠の初 芸術家、 古物研究家、 系譜学者その他の間の相互交通のための媒体」とあり、「ノー (Notes and Queries)」によれば、 一八四

とあり、帰国前年の一八九九年六月に『初掲載されて以降、 は何でもありな感じで、南方熊楠』『も生き生きと筆を振るうことができたのだと思』う 雑誌の一つである)『が自然科学雑誌であったのに対し、『ノーツ・アンド・クエリーズ』 て創刊された自然科学雑誌。創刊当時から現在に至るまで世界で最も権威のある自然科学 セフ・ノーマン・ロッキャー (Nature: 一八六九年(明治二年相当) にイギリスで、太陽観測で知られる天文学者ジョ 』から『ノー ツ・アンド・クエリー (Joseph Norman Lockyer 一八三六年~一九二〇年)によっ ズ』に移し』たとある。 熊楠は次第に発表先を『ネイ この『初掲載から晩

論文は』三百二十三篇で、 年』の昭和八(一九三三)年までの『間に『ノーツ・アンド・クエリーズ』に掲載された から東洋学の権威として一目置かれ』たとある。 『南方熊楠は『ノーツ・アンド・クエリーズ』の読者や編集者

「アラビヤ及び歐州に行はれし、犬が僧正に遺産を進ぜしてふ譚」「Internet Archive」

「Notes and Oueries」のこちらの右ページ左から始まる「THE DOG WHO MADE A

WILL. 」にある。

閣名所」にある「犬頭社」。既に「和漢三才圖會卷第三十七 畜類 狗(ゑぬ い「倭漢三才圖會卷六九にも忠犬を祀れる話有り、……」同巻の「參河」の「當國 (イヌ)」で、所持する原本で原文と訓読文を示してあるので参照されたいが、 他に「諸國 いぬ)

犬頭神社(かすめけんとうじんじゃ)として現存する。 里人談卷之一 の社は、当時の位置から少し移動しており、愛知県岡崎市宮地町馬場に合祀されて 犬頭社」でも調べて詳細に注してあるので、そちらも併せて見られたい。こ 糟目

なっており、 ているので参照されたい。この遊女薄雲と忠猫の話はかなり知られた話で、浮世絵にも集』の「三浦遊女薄雲」で、私は既に『柴田宵曲 妖異博物館 蟒と犬』の注で電子化し 著で知られる(以上は「朝日日本歴史人物事典」に拠った)。当該話は「近世江都著聞 点が多いが、 雫」を公刊したため、捕縛され、幕政を批判した科で打首獄門となった。閲歴には不詳なの収賄事件を「珍説もりの雫」と題して、話のなかに取り込み、さらに小冊「平かな森の く、宝暦八(一七五八)年九月、当時、御家騒動で有名だった美濃郡上八幡城主金森頼錦に入れられぬ不満から、講釈中にも第九代将軍徳川家重の治世や世事を誹謗すること多 き、貸し本屋に売って暮らしを立てていた。性、闊達で、豊かな学識を持っていたが、世 方で、第八代将軍徳川吉宗を賛美するエピソードや、時事問題を題材とした実録小説を書 耕と号し、初めは易術で生計を立てていたという。諸家に出入りして、座敷講釈をする一 江都著聞集」に同じ。宝暦六(一七五七)年刊)の他、「当世武野俗談」「大和怪談」などの のお話」で浮世絵の画像とその翻刻をされておられるので、是非、見られたい。 は江戸中期の講釈師で。本姓は中井。伊予出身で、 「馬文耕の近世江都著聞集」馬場文耕(享保三(一七一八)年~宝暦八(一七五九)年) 吉宗に仕えた下級の幕臣であったとも言われる。「近世江戸著聞集」(「近世 太田記念美術館主席学芸員の日野原健司氏が「猫が大好き過ぎる花魁 江戸に出て、名を文右衛門と改め、

「睛」は底本「晴」であるが、意味が通らず、原拠を確認し、かく特異的に本文を訂した。 「續搜神記(淵鑑類函卷四三六に引り)に、……」「惟注睛砥唇視奴、奴食催轉急」は

たところ、かくあったので、 「烏龍」も底本は「烏龍」は「鳥籠」であるが、 特異的に訂した。 如何にもおかしいので原拠を確認し

「續搜神記」は志怪小説集「搜神後記」の別名。東晋の政治家で文人の干宝(?~三三六 に倣って、後の六朝時代の陶淵明撰とされるが、 偽作と考えてよい。同書の第九巻

會稽句章民張然、 然在都、 養一狗、 滯役在都、 甚快、 經年不得歸。 名曰「烏龍」、 家有少婦、 常以自隨。 無子、 後假歸、 惟與一奴守舍、 婦與奴謀、 欲得殺然。 婦遂與奴私

救我否。」。狗得食不啖、惟注睛舐唇視奴。然亦覺之。奴催食轉急。然決計、拍膝大呼曰、 當戶、須然食畢。然涕泣不食、乃以盤中肉及飯擲狗、 及婦作飯食、共坐下食。婦語然、「與君當大別離、君可强啖。」。然未得啖、奴已張弓拔矢 「烏龍、與手。」。 狗應聲傷奴。奴失刀仗倒地、 狗咋其陰。然因取刀殺奴。以婦付縣、 祝日、「養汝數年、 吾當將死、

と謀り、然を殺得んと欲す。然、婦、飯食を作るに及び、共に坐下に食ふ。婦、然に語りに、甚だ快く、「烏龍」と名づけ、常に以つて自らに隨はせり。後、假に歸るに、婦、奴無く、惟だ一の奴と、舍を守るも、婦、遂に奴と私通せり。然、都に在りて、一狗を養を 無く、惟だ一の奴と、舍を守るも、会稽句章の民、張然、滯役して都 ,滯役して都に在り、年を經て歸り得ず。家に、少婦、有り。子、 後、假に歸るに、婦、奴然、都に在りて、一狗を養ふ

「君と、當に大きに別離しつべし、 君、强ひて啖ふべし。」

೬

未だ啖ふを得ず。

然、涕泣して、 、 角生して、食はず。 乃ち、盤中已に、弓を張り、箭を拔き、當に未だ呀るを私。 盤中の肉及び飯を以つて、 戸とぼそにた プ及び飯を以つて、狗に、與へ、祝ひて日はつべし。 須 らく、然、食ひ畢らんとする

「汝を養ふこと、數年、 吾、 將に死せんとすべきに、 汝、 能く我を救ふや否や。」

食ひ得るに、啖はず。 惟だ、 睛を注ぎ、唇を舐り、 奴を、

亦、之れを覺る。

食を催すに、転、急なり。

「烏龍、手を與よ。」然、計を決し、膝を拍ち、大いに呼びて曰はく、

聲に應じ、奴を傷つく。

刀杖を失し、 伏して地に倒れ、 狗、遂に其の陰[やぶちゃん注:身体。]を咋ふ。

因りて、刀を取りて奴を殺し、婦を以つて縣に付し、之れを殺す。

天竺行記」なども引用しており、 た、現在は散逸してしまった「仏本行経」・「菩薩本行経」・「観仏三昧経」・「西域誌」・「中 引用する典籍は、仏教のみならず、儒家・道教・讖緯・雜著など、実に四百種を超え、ま 陀羅と法顕の共訳になる、 んじゅりん)は唐の道世が著した仏教典籍の類書(百科事典)。全百巻。六六八年成立。 モン教徒を指す)は底本では「梵土」。誤植と断じ、 (以上はウィキの「法苑珠林」に拠った)。「僧祗律」は「摩訶僧祇律」で、東晋の仏陀跋大竺行記」なども引用しており、インドの歴史地理研究上でも重要な史料となっている 「法苑珪林卷四十五に、……」二番目の「梵士」(ぼんじ:梵天を崇める者のことで、バラ 「犬に關する民俗と傳說」の「一」の末尾で 小乗仏教の大衆部に伝わる律。全四十巻。「那俱羅蟲」は、 (引用は平凡社 特異的に訂した。「法苑珠林」(ほうお 「南方熊楠選集2」(一九

*

ゃん注:捻じ曲がった認識の及ぼす悪い結果。]は信に傷苦し」と。那倶羅は、先年ハブしく審諦に観察すべし、にわかなる威怒を行なうなかれ。善友の恩愛離れ、枉害[やぶちずに』。]殺したと悔恨無涯で地に倒れた。時に空中に天あり、偈を説いていわく、「よろつに裂かれおる。この那倶羅子わが児を救いしを、われよく観ずに[やぶちゃん注:「み 速に働いて逃がさずこれを殺す。その行動獣類よりも至ってトカゲに類す(ウッド『博物 蛇退治のため琉球へ輸入された、英語でモングースというイタチ様の獣で、蛇を見れば神 羅子の唇に血着いたのを見、さてはこの物われらの不在にわが児を噉い殺したと合点し、 ちゃん注:「おしえ」。]置いたに何ゆえ子を伴れて出ぬぞと恚る。門に入らんとして那倶 倶羅の子もまた父のごとく彼を慕う。 と訳しおる。 図譜』一)。したがって音訳に虫の字を副えて那倶羅虫としたのだ。『善信経』には黒頭虫 やにわに杖で打ち殺し、門を入ればその児庭に坐し、指を味わうて 戯 れおり、 母に示し喜ばさんと待ちおった。婆羅門帰ってその妻家外にあるを見、かねて訓え[やぶ ぶちゃん注:「おもい」。」、毒蛇を断って七つに分かち、その血を口に塗り、門に立って父 ****家へ春つきに往くとて、子を伴れ行くを忘れた。子の口が酥酪 [やぶちゃん注:ここは 生んだはわが子生まるる前兆だった、と。 「乳」の意。〕で香う[やぶちゃん注:「にほう」。〕を齅ぎつけて、毒蛇来たり殺しにかか 那倶羅の子、わが父母不在なるに蛇わが弟を殺さんとするは忍ぶべからずと惟い[や 子を産まず、家に那倶羅虫あって一子を生む。婆羅門これを自分の子のごとく愛し那芸門僧祇律』三にいわく、過去世に婆羅門あり。銭財なきゆえ、乞食して渡世す。その 少時して妻一子を生む。夫いわく、 一日、夫乞食に出るとて妻に向かい、汝外出す 側に毒蛇七

*

suricatta はマングース科であることはあまりよく知られているとは思われないので一言付 auropunctatus がネズミ・ハブ駆除にのために人為的に持ち込まれ、鹿児島や南西諸島各地 者渡瀬庄三郎の慫慂によって、エジプトマングース属フイリマングース Herpestes け加えておく。 の一つとなってしまっている。同種はアフリカ大陸から東南アジアにかけてを原産地とす グース類で、沖縄本島が最初の導入で、明治四三(一九一○)年に、今や悪名高き動物学 と記している。「モングース」は、言わずもがな、 にも一九○○年代に人為移入が試みられたが、今や、特に沖繩の生態系破壊の悪質外来種 因みに、可愛いとしてブレイクしたスリカータ属ミーアキャット (Meerkat) Suricata 食肉目マングース科 Herpestidae のマン

狗、大蛇を咋ひ殺せる語第三十二」は、私の「柴田宵曲 では当該話を「卷卅九」とするが、誤りなので、特異的に訂した。同「陸奥國の狗山の『犬寺及び犬頭禮の傳記は今昔物語卷廿九、陸奧國狗山狗咋殺大蛇語などを通じて』底本 子化してあるので、 参照されたい。 妖異博物館 蟒と犬」で既に電

「イクニュウモン」この名称はマングー ス科エジプトマングース属エジプト

りの種がいる。 Herpestes ichneumon の種小名である。 但し、 エジプトマングース属 Herpestes は、 かな

「山二二四頁」私が電子化した『山中笑「本邦に於ける動物崇拝」(南方熊楠の

於ける動物崇拝」の執筆動機となった論文)』の 「犬及狼」 の条には、

*

犬及狼 火防盜人を除き、及、小兒を保護す。

上州椿埜山の神犬。

武州御嶽の大口眞神。

備後木野山の御犬。

相甲境王瀨龍の御犬。

秩父三蜂の犬。

南都法華寺の犬守。

犬張子。

上總海岸に流行神とせられし死犬の靈

*

とあり、熊楠の指す、「二二四」ページでも、

*

を守るよう、 犬と狼 にあらず。此の如き誤りより、狼の畵、守を信ず者あるに到れり。 にあらず。 もあらぬに、 にあらず。嚼にて、眞に甚敷[やぶちゃん注:「はなはだしき」。]を云ふにて、神のこと「大口の眞神の原に」と云へるあれど、狼の口、大きなるをいふにて、まがみは眞神の意 御嶽三峯、 盜賊、 武藏御嶽より出す札守には、狼を畵き、其上に大口眞神と記せり。 火災を知らず、 金峯椿埜、其他、 と信じたるより起りしなれど、狼は門を守る如き獸に 諸國に犬を書きたる戶守を出す神社あり。 萬葉集に 犬の門戶

若狡三方郡向陽寺より出す狼の守は、住職が狼の咽喉にたちし骨をぬきやりし恩返しに與 へし守札と云へり。

り。 越前今立郡上池田日野宮神社の神使は狼なりと信ずるより、 之前に云へる犬の門を守るより、移り來りし誤りなり。 此狼、 盗人除をなす、 と信ぜ

とて、 濁音化した。]を迷信せしより起りしなり。 犬張子等、犬の子育、丈夫なるより來れる俗信なり。犬の死靈、 上總より安房の海岸に流行神となりしことあり。 偶然の出來ごと 魚漁の幸を與へし [やぶちゃ

*

とあるばかりで、 確かに、最も知られている四国の 犬神伝承が欠落して 61

「備前邑久郡朝日村」岡山県岡山市東区宝伝附近。

「犬島」ここ。

議」の「5月3日は犬石宮の例大祭で犬ノ島に上陸可能」 「犬石宮」この 「犬ノ島」に現存するようである。 人ブログ に拠った。

「同島天滿宮」ここであろう。]

Roy. As. Soc., xi, pp. 49—50, Shanghai, 1877.) されば日本の山犬は正しき豺に非ず、 禦ぐとするも、其基因無きに非じ、予は動物學に暗けれども每度山民に質すに、本邦の狼 薰習 されば玉置山に犬吠の杉あるも、實は狼吼の杉の意にて、 年予往英の時、故「ハクスレー」氏の講話に、人間將來多望の由を述るとて、牧畜の大阻 り、熊野で獵犬として珍重さるゝ太地犬といふ種は、元と狼を畜つて出來しと言傳ふ、りし者のとせり、家犬の祖先が狼また「ジヤツカル」より出たるは、學者間旣に定論あ 信友驗の杉)大和の玉置山の神、狼を使とする事、委しく昨年五月の本誌に予之を述た 貴神云々と言し由見えたれば、「おほかみ」に大神の義有るなるべし、古え歐州にも、狼 汚れたるを見、下馬して口手を洗漱 [やぶちゃん注:「せんそう」。] し、祈請して汝是れ 害者たる狼を畜ふて、之に大利益ある牧羊犬を化成せる、人間の忍耐を稱讃せるを聽り、 り、山二二四頁に、 ぶちゃん注:「あうがい」。「殃」は災害・不幸の意。災害。〕に遭はず、盜難無しと云(伴 を祈れば、 を神使となせし事 Gubernatis, 'Zoological Mythology,'1872, vol. ii. p. 145. に出づ、 て日本で狐も野干と心得るに及びし也。 所謂小紅狼とて、「ジヤツカル」の一種の Canis ruitlus Pallas.(を指せしも、今は狼をも、 **亜種はいない。**] 有るもの、如し、日本犬は之よりや分れつらむ、昔通に之に豺 [やぶちゃ の流れからは、それが正しいように思われる。但し、無論、「ヤマイヌ」という生物学上の に、本種の外に山犬と稱する惡種**[やぶちゃん注:平凡社「選集」は「亞種」とする。文脈** ○狼、日本紀卷十九に、秦大津父[やぶちゃん注:「はたのおほつち」。]、二狼相鬪ひ血に に狼多し、 「ジヤツカル」は、波斯[やぶちゃん注:「ペルシア」。]語「シヤガール」、梵語「スルガ 「ジヤツカル」をも、支那人豺狼と通稱すと云り、(Journal of the North China Branch of the - ラ」に出づ、支那で野干と音譯せる、 [:音「サイ」、訓「やまいぬ」。] の字を充つ。「モレンドルフ」の説に、 「[やぶちゃん注:「くんじふ」。]を存する名なるべく、御嶽の札守に狼を畫て盜火を 大川大明神は狼を使者とす、或は狼大明神とも呼り、其近邊の山々に、狼多きも人 其神に祈れば、 諸國に猪鹿出て田穀を害する時、彼神に申し、日數を限りて狼を假し玉はん事 狼速かに其鄕の山に來り居て、猪鹿を追ひ治むとぞ、武州秩父三峯神社、其山 武州御嶽より出す札守に、狼を畫き盜火の難を禦ぐとせるは、犬を誤 狼來りて、猪鹿を治め又其護符を賜り持つ人は、其身殃害[や 其獸の性甚狡智有る樣、佛經に見ゆるより推量も 太古犬狼未だ分立せざりし時の 學者間旣に定論あ 豺は素と清俗

[やぶちゃん注:「日本紀卷十九に、……」「日本書紀」巻第十九の巻頭部分の、 の即位前の部分に、

*

背國紀伊郡深草里。 天皇幼時夢。有人云。天皇寵愛秦大津父者。及壯大。必有天下。 必此報也。 但臣向伊勢。商価來還。 儻逢獵士。 姓字果如所夢。 見禽尤速。 於是忻喜遍身。歎夫曾夢。乃告之曰。 山逢二狼相鬪汚血。乃下馬洗漱口手。 乃抑止相鬪。拭洗血毛。遂遣放之。 大致饒富。 及至践祚。 祈請日。 汝有何事。答 得自山 天皇

析喜遍身して、夫れ、曾ての夢を歎き[やぶちゃん注:夢との合致を見て感嘆し。]、乃山背國紀伊郡深草の里より得たり。 姓 の 字 、果して夢みしがごとし。是に於いて、山背國紀伊郡深草の里より得たり。 姓 の 字 、果して夢みしがごとし。是に於いて、と。寤驚めて、使をして普く求めしむ。 と。寤驚めて、使をして普く求めしむ。 と。寤愛せる秦大津父は、壯大壮年に及べば、必ず、天下むる有り。」 天皇 幼き時の夢に、人、有りて云はく、

何事か有る。」

೬ೢ

答へて云はく

『汝ら、是れ、貴神なるも、麁行[やぶちゃん注:行動の荒々しいこと。]なるを樂して血に汚れたるに逢ふ。乃ち、下馬し、口と手を洗ひ漱ぎて、祈請してはく、「無きなり。但し、臣、伊勢へ向ひ、商価ひして還へり來たるとき、山に二狼の相ひ鬪ひ

儻し、獵士に逢はば、尤も速かに禽らるべし。』

全うせしむ。」 と。乃ち、相ひ鬪ふを抑へ止め、 血る毛を拭ひ洗へば、遂に之れを放ち遣れり。 俱に命いのち

天皇、日はく、

に及び、大蔵省を拜す。と。乃ち、近侍せしめ、優に寵されんこと、日に新らし。「必ずや、此の報ひあるなり。」 大きに饒富に致る。

の読みではない)。 とある(読みはネット上の複数の訓読を参考にオリジナルに訓読したもので、正規の学者

者コォウト・アンジェロ・デ・グベルナティス(Count Angelo De Gubernatis 一八四〇年 する神話学」は「Internet archive」のこちらで当該原本が見られ、 ~一九一三年)で、著作の中には神話上の動植物の研究などが含まれる。この「動物に関 「Gubernatis, 'Zoological Mythology', 1872, vol. ii. p. 145.」「Gubernatis」はイタリアの文献学 そこの右ページ中央に、

the wolf has a benignant aspect in legends. In La Fontaine, the shadow of the wolf makes the sheep flee in the evening. As a hero transformed

もとにしていることが判る。 ジャン・ド・ラ・フォンテーヌ(Jean de la Fontaine とあって、脚注も附されてある。それによって、これは、さらに十七世紀フランスの詩人 一六二一年~一六九五年)の詩篇を

皇元年』三月に『五穀と桑蚕の種を持って金色の鮭に乗った神が垂迹し』、『大川 ル・マップ・データ。以下同じ)。Kiichi Saito 氏のサイト 「丹後國加佐郡、大川大明神は狼を使者とす」京都府舞鶴市大川にある大 「大川神社」に、『現在の祭神は保食神』(うけもちいのかみ)他とあり、 「丹後の地名 地理・歴史資料 八川神社 の地に値

當社の神異奇瑞多しとなり』とあることを以って、熊楠の叙述が間違いないことが判る。 郷に来りて妖怪を防ぐといふ、往々其言を試るに誣』(し)『ふべからざることあるに似た 近国にて田地へ猪鹿の属出て害を爲す時』、『其村より當社に祈誓をかくれば』、『必ず』、 り』、『其氏子の地に於て』、『狼の害することなし、又其御駒をかりる時は必』、『狼』、 二匁或は廿四匁、各其次第あり)極て霊験あり、土人の説に、大川大明神は猿の神な らず、凡疫癘痘瘡などの流行或は狐狸の類祟をなす時、處々に御駒をかりる(御初穂銀十 るならん。社内に御駒といふものあり一尺余りもある石の駒犬なり、其数幾何ある事をし ことがあり、 は田辺領に属して加佐郡の大社也、国俗云當社の神使は狼なり』、とあってさらに、『當国 に詣でて帰らぬほどに既に其村へ狼来りゐるゆゑ猪鹿出ずかくて其定めて借たる日限をす 原大明神トイフ若狭国人猪鹿の田を傷ふを愁ひて此神に祈て狼を借るといふ事あり其祈願 冶屋ではなかったかと思われる』と述べておられる。次いで「舞鶴市内神社資料集」の り』とあるのが目を惹き、 の方に、『愚按ずるに、 ぐれば一つも居らずと云ふこの事慥なる事なり』と引き、また「宮津府志」から、 「武州秩父三峯神社」埼玉県秩父市三峰にある三峯神社。 「神名帳考証三十八」伴信友全集」と書誌する引用にも、『在二大川村水辺」信友云今大河 『神使の狼』、『其地に至て田地を護す』。『猪鹿の属遠く逃げ去て害をなさずとなり、此外 したという託宣が由良の漁師野々四郎にあり、同年』九月に 狼を描いた護符も今も居間に飾ってある。 もとは山上に鎮座していたらしいこと、食鮭の禁忌が村人にあったことなど 後の方に「丹哥府志」の同神社の引用がなされてあるが、その終わり 由良の冠島』(かんむりじま)『より遷座したという「丹後旧事記」 是歳神階天一位に叙せらるといふは審ならず、 さらに、サイト主は、この大川神社の『本来の主祭神は狼=鍛 。神道嫌いの私には珍しく参った 『社殿を造営したことには 恐らくは年暦を誤 『當社

第二巻」(明治四○(一九○七)年国書刊行会刊)のこちらで当該部が読める。 この冒頭全体は、どれも、この「 驗 の杉」に依拠したものであることが判る。 は別段、オリジナルな引用のように誤魔化すつもりはなかったことは認めるが、 の上段四行目からは先に引いた「日本書紀」の話が載り、十四行目からは、 「大川大明神」が出て、下段二行目から、この「秩父三峯神社」が記載されており、熊楠 「伴信友驗の杉」冒頭で既出既注。国立国会図書館デジタルコレクションの やはり先の 「伴信友全集 実際には、 左ページ

クで標高千七十六メートル。熊楠のフィールド・ワーク圏内。 「大和の玉置山」奈良県吉野郡十津川村にある玉置山。 大峰山系の最南端に位置するピ

學會雜誌』の「雜錄」所収の『出口君の「小兒と魔除」を讀む』を指す。 「委しく昨年五月の本誌に予之を述たり」明治四二(一九〇九)年五月発行 で初出原文全文が視認出来る。 く。以下に電子化しておく。 当該部は三一〇ページ下段中央からの一節で三 「j-stage」 の 『東京人類 のこち

*

は狐に附れ 道頗る險にして水無く、 吉野郡十津川 しもの、 の玉置山は海拔三千二百尺と云、予も昨秋末詣しが、紀州桐 かに難症なりとも此神に祈り蟇目を行ふに退治せずと云事な 甚き難所也、頂上近く大なる社あり、 其神狼を使ひ物とし、 畑より上る

氏子胡瓜を食はず、 以て名とせる者多く、 白王子社畔に、楠神と號しいと古き楠の木に、注連結びたるが立りき、 狼を以て小兒をすかすは、魔除と何の關係なきと同時に、吾邦從來狼を魔除に用る風有し 自宅出るに臨み、「熊野なる玉置の山の弓神樂」と歌の上半を唱ふれば、 玉置一族の「トテム」たりしに非るか[やぶちゃん注:一部句点のないのはママ。] を受く、楠、 は、疑を容れずと断言し置く(序に一言するは、今日は知ず、二十年ばかり前迄、紀伊藤 やらかす也と、 のまゝ渡しくれる、 く、又狐人を魅し、 しろ」。]を食はざる等の特別食忌と併せ攷ふるを要す、上文玉置山の狼も亦、其地に多き 「トテミズム」行はれし遺趾の殘存せるに非るか、三島の神池に鰻を捕るを禁じ、 一切近かず、 田畑に挿み惡獸を避しと云、守禦の功犬に等しといふ意か、事體斯の如くなれば、虎 就中予が氏とする南方苗字の民など、子産る、毎に之に詣で祈り、祠官より名の一字 中井芳楠、森下岩楠抔皆此風俗に因て名られたるものと察せられ、今も海草郡に楠を 藤、熊など是也、此名を受し者、病ある都度件の楠神に平癒を禱る、 扨志す方え[やぶちゃん注:ママ。]着したる時、 其人家に達する前、家領の諸獸悉く逃畢るといふ、又傳ふるは、夜行する者 前述送る狼の譚は、之れを言へる歟、 金毘羅に詣る者蟹を食はず、富士に登る人鰶[やぶちゃん注:「この 正體のまりの場合には、使の者の歸路、 猪鹿田圃を損ずるとき此社に就て神使を借るに、或は封の儘或は正 熊楠などは幾百人あるか知れぬ程なり、 社畔に犬吠の杉あり、 之に先ち神使狼の足跡を印し 予思ふに、こは本邦上世 「弦音きけば惡魔退く」と 當國、殊に海草 途上恐ろしき物 其皮を削り來 祇園の 知名の

*

崇拝」の執筆動機となった論文)』の「此等の動物崇拜さる - 原因 の中の「犬と狼」 し者のとせり」私の『山中笑「本邦に於ける動物崇拝」(南方熊楠の「本邦に於ける動物 「山二二四頁に、武州御嶽より出す札守に、狼を畫き盜火の難を禦ぐとせるは、 の条で、 其一 各自に就て」 犬を誤り

*

犬と狼 もあらぬに、 を守るよう、 にあらず。 にあらず。 「大口の眞神の原に」と云へるあれど、 御嶽三峯、 此の如き誤りより、 嚼にて、眞に甚敷 [やぶちゃん注:「はなはだしき」。] を云ふにて、 盜賊、 武藏御嶽より出す札守には、狼を畵き、 火災を知らず、と信じたるより起りしなれど、狼は門を守る如き獸に 金峯椿埜、其他、 狼の畵、守を信ず者あるに到れり。 諸國に犬を書きたる戶守を出す神社あり。 狼の口、大きなるをいふにて、まがみは眞神の意 其上に大口眞神と記せり。 神のこと 犬の門戶 萬葉集に

*

後半郭を指す。

「家犬の祖先が狼また「ジヤツカル」より出たるは、 學者間既に定論あり」ここで整理し

イヌ科イヌ亜科イヌ族イヌ属タイリクオオカミ亜種イエイヌ Canis lupus familiaris 哺乳綱獣亜綱真獣下綱ローラシア獣上目 Laurasiatheria 食肉 (ネコ) 目イヌ亜目イヌ下目

であり、一狼」は、

哺乳綱食肉目イヌ亜目イ ヌ科イヌ亜科イヌ属タイリクオオカミ亜種ヨー 口 ッパオオカミ

道と樺太を除く日本列島に棲息していた)と、 Canis lupus lupus 及び、本邦に限るならば、本邦に棲息していたが、 が絶滅させてしまった**タイリクオオカミ亜種ニホンオオカミ Canis lupus hodophilax**(北海 太と北海道に棲息していた) 同亜種エゾオオカミ Canis lupus hattai(樺 孰れも我々が日本人

であり、「ジヤツカル」は、

イヌ属キンイロジャッカル Canis aureus

ヨコスジジャッカル Canis adustus

セグロジャッカル Canis mesomelas

アビシニアジャッカル Canis simensis

混同され、それがそのまま伝来してしまった本邦でも「野干(やかん)」=狐として読ま 典で「野干」・「射干」と漢音写されたものの、ジャッカルの棲息しない中国では「狐」と ツネ属アカギツネ亜種ホンドギツネ Vulpes vulpes japonica)ではなく、 れ、意味もそれで定着してしまった。本来の「野干」はキツネ(本邦の代表種はイヌ科キ **あることがほぼ確定している。**なお、熊楠も最後に述べている通り、ジャッカルは漢訳仏 である。但し、現在は DNA 解析によって、 犬の祖先はジャッカルではなく、 ジャッカルであった オオカミ類で

ばれていた。現在は紀州犬に統一されている。勇猛・精悍でスピードに富み、イノシシ猟 に分けられるという。 ことは記憶しておいてよい。 を得意とするイノシシ犬と。軽快でシカ・カモシカ猟を得意とするシカ犬の二つのタイプ で、嘗ては地域により「大内山犬」・「熊野犬」・「太地犬」・「那智犬」・「日高犬」などと呼 「太地犬」紀州犬の旧地域名の一つ。原産地を三重県・和歌山県・奈良県とする獣猟犬

遊を終えた。満三十四歳であった)であるから、ハックスリーの最晩年の講演を聴いてい 年~一八九五年)。ダーウィンの たことになる。 年九月から一九○○年(明治三十三年)十月まで(同月十五日に帰国、十四年に亙った外 ックスレーとヘッケル」を参照されたい。熊楠のイギリス滞在は一八九二(明治二十五) 反進化論者を論難したことから、「ダーウィンのブルドッグ」と呼ばれた人物である。詳 しくは私の「進化論講話 丘淺次郎 「ハクスレー」生物学者トマス・ヘンリー・ハクスリー(Thomas Henry Huxley 「進化論」を支持し、その普及者たらんとして積極的に 第十五章 ダーウィン以後の進化論 (3) 三

先祖の行為が心に習慣となって永く残ること」を指す。 「薫習」は仏教用語で、「香りが物にそれを移して、何時までも残るように、 自ら或い

「山犬」現行でも「ヤマイヌ」「ノイヌ」という呼称が動物学者の間でも普通に使われ これは無論、生物学上の亜種ではなく、家畜であるイヌの野生化したものを指す。

「和漢三才圖會卷第三十七 参考のために「やまいぬ」の読みを当てている次の「和漢三才圖會卷第三十八 ル (アカオオカミ))」も参考にされるとよい。 畜類 狗(ゑぬ (イヌ)」の私の注を参照された

「モレンドルフ」ドイツの言語学者で外交官であったパウル・ゲオルク・フォン (Paul Georg von Möllendorff 一八四七年~一九〇一年) のことであろう。 ・メレン

た中国海関(税関)の仕事に復し、南の条約港寧波の関税局長官となり、そこで没した。 字表記を考案したことでも知られる。朝鮮政府での任を去った後、嘗ての上海で就いてい 後半に朝鮮の国王高宗の顧問を務め、また、中国学への貢献でも知られ、 ル Cuon alpinus のシノニム。先の「和漢三才圖會卷第三十八「獸類」豺(やまいぬ)「小紅狼とて、「ジヤツカル」の一種の Canis ruitlus Pallas を指せし』イヌ科ドール属ドー 満州語のローマ

(ドール (アカオオカミ))」を見られたい。

東部・アフリカに分布し、既に述べた通り、中国には棲息しない。] り、ジャッカルは「胡狼」「狐狼」「豺狼」である。ジャッカルはアジア南部ヨーロッパ南 カミ(ヨーロッパオオカミ)が「欧亞狼」「普通狼」「中国狼」「欧洲狼」「草原狼」であ 『今は狼をも「ジヤツカル」をも、支那人豺狼と通稱すと云り』現在では、中文名はオオ

踰しも崇[やぶちゃん注:「祟」の誤植。]無かりしと云ふ、予十九歳の時、其牛を見ん ○||生|、紀州日高郡矢田村大山に、大山祇命を祭れる古社あり、此山の精夜分大なる牛とな 夜間獨り此山を越しも見る所無りし。 道に横る由にて、昔し孝子有り、孝の徳にて、親を省せん爲め道を急ぎて件の牛を飛

牛の腹より出る毛玉を帶れば、博奕賴母子抔に利有りと聞く、「マルコポロ」の記行 鮓答[やぶちゃん注:「さとう」。](韃靼語ヤダー、タシユの音譯)を以て雨を禱る

Madrid. 1676, p. 323)° 思はれたるに起れるならんか(Navarette, 'Tratados historicos de la Monarchia de China,' Exploration in the Japanese Alps, 1896, p. 112)是其曾て毒鏃等の毒を吸去るに、 諸難を避け、 273)、本邦古來牛黃を靈物とし(倭漢三才圖會卷卅七)、日本紀卷六に、狢の腹より出た る玉を神寶とせし由見えたれば、古え多少尊崇の念を禽獸腹中の頑石に寄せたる事知る可 し、知人「ウエストン」氏は、信州大河原で「カモシカ」の鮓答を見たる記に、此物往時 [やぶちゃん注:「いのる」。]ことを載せ(Vule, 'The Book of Sir Marco Polo,'1871, vol. i. p 鐵砲をさへ防ぐと信ぜられたりと云へり(W. Weston. 'Mountaineering and

せて判るので示す。 [やぶちゃん注:平凡社選集では、第一段部分の初出の脱落が補われてあり、 読み方も併

k

九歳の時、その牛を見んと、夜間独りこの山を越えしも見るところなかりし。 て件の牛を飛び踰えしも[やぶちゃん注:「こえしも」。]祟りなかりしと言い伝う。予十 ス。 親を省せん[やぶちゃん注:「しょうせん」。見舞いに行こうとする。]ため道を急ぎ この山の精、夜分大なる牛となり、道に横たわる山にて、むかし孝子あり、 紀州日高郡矢田村大山は、形の似たるより小富士と言い、大山祇命を祭れる古社あ 孝の徳に

*

合祀されてしまったことが判る。 た。その土生八幡神社のサイド・ 式サイトの「神社合祀反対運動」の最後に、写真とともに、大正二(一九一三)年に『合祀 ことは、彼には非常に悔やんでも悔やみ切れないものがあったろう。「南方熊楠顕彰館」公 の憂き目にあった』とあり、グーグル・マップ・データの「大山神社跡」のサイド・パネル の説明版を見ると、土生八幡神社(旧大山神社の北西二キロメートルのここ)に合祀され の神社はまさに熊楠の父祖の産土神であったのだが、残念なことに、現存しない。しかも、 「紀州日高郡矢田村大山」現在の和歌山県日高郡日高川町入野にあった大山神社であり、このだかがわります。 熊楠が強烈な決意を以って反対運動に参加した神社合祀の結果であった パネルの説明版を見ると、驚くべき多数の産土神がここに

体の各部分に、「八神の山津見」が生まれたと記すことからも判るように、「山津見」= と記す。但し、伊弉諾尊によって伊弉冉尊を死に至らしめたとして斬り殺された火の神の として語られる神。「古事記」で「大山津見神」、「伊予国風土記」逸文では「大山積神」 「大山祇命」記紀神話に於いては、伊弉諾尊・伊弉冉尊の子で、磐長姫・木花開耶姫の父」。 「大山祇神」とは、 本来はは、 それらの神話と無関係で、それぞれの地の産土神

神」として一般に信仰されてきた神であった。

の「鮓答」(さとう)の注を見られたい。 は胆管中に生じた結石を採取して乾燥したものに限定する語である)のことである。以下 ムが形成した体内異物等を古くから称する「牛の玉」「牛黄」(特に漢方では牛の胆嚢或い(毛玉も含まれはするが)、牛の胎内に生じた結石或いは悪性・良性の腫瘍や免疫システ 「牛の腹より出る毛玉」熊楠は毛玉と正体を限定しているが、 これは乱暴な仕儀であって

「博奕」「ばくち」。次の最後も参照。

像の首が有意に切断されているのは、廃仏毀釈以前の仕儀で、実はその名残なのである。 囲に及び、鼠小僧次郎吉の墓の欠片がよく知られるが、地蔵の首を欠いてドンブリに忍ば 主文を「ブリタニカ国際大百科事典」に拠った)。所謂、賭け事に於ける古くからのジン 献にも既にあるが、江戸時代になって特に発達した。近代に入ってからは銀行の出現によ なかの一人が交代で所定の金額を受取るシステムとなっており、全員に渡し終えた時点 或いは「世界の記述」(Devisement du monde)。 後半のおピサ出身のイタリア人小説家ルスティケロ・ダ・ピサ(Rustichello da Pisa) 四年~一三二四年)がヨーロッパへ中央アジアや中国を紹介した口述紀行記録(十三世紀 クスで、特定のあるものを懐にしてその場に臨めば、勝てるというもので、対象物は広範 合い、その作業を手伝うという「頼母子講」も存在した。頼母子という名は鎌倉時代の文 与する方法などもあった。また、 で、講は短期的には解散する。出し合った金で、家畜や家財道具などを買入れ、交代に分 る採録編纂)「東方見聞録」(原題不明。写本名は「イル・ミリオーネ」(Il Milione:百万) せたという例もある。鎌倉の「百八やぐら」などにある、江戸期に追善で建てられた地蔵 り数は減少したものの、親睦を兼ねて、今も活発に行われている地域が存在する(以上は の金融組合集団の一種。講員が掛金を定期間に出し合い、 『「マルコポロ」の紀行』ヴェネツィア共和国の商人マルコ・ポーロ(Marco Polo 「賴母子」「たのもし」。 「賴母子講」のこと。「無盡(講)」とも称し、 以前は屋根の葺き替えの際には講員が材料の萱を提供し 入札又は籤引きで、毎回、その 講組織による民間

意)を語源とする、という記載も見られる。牛馬類から出る赤黒色を呈した塊状の結石 おり、ペルシア語で「pādzahr」、「pad (=expelling)+zahr (=poison) 」(「毒を駆逐する」 発音では「ベッゾア」)の転であるとされる。古くから、一種の解毒剤として用いられて モンゴル系部族の一つで、 知れず、他にモンゴル語説も示されてある(熊楠の謂う「韃靼語」の「韃靼」は、狭義には る意味も熟語も示されてはいない。**現代中国音では「鮓荅」は「zhǎ dā」(ヂァー・ダァ** たま」と呼び、「鮓答」とも書いた。また、「鮓答」で「へいさらばさら」とも読んだ。但 ティヴの発音をカタカナ音写すると「ペェードラ」)+「bezoar」(「結石」ブラジルの方の 「鮓答」「さとう」と読む。日本語ではなく、ポルトガル語の「pedra」(「石」の意。ネイ 古くは解毒剤として用いた。中国や本邦では、 やや「ペェードラ」に近い発音のように思われるから、それを漢音写したものかも 大修館書店「廣漢和辭典」の「鮓」(音「サ」)を引いても、 宋ではモンゴルを「黒韃靼」、 八世紀頃から東モンゴリアに現われ、 ルコ系部族オングートを「白韃靼」と称し、 別名を当該の獣類の名に繋げて「~の 後にモンゴル帝国に併合さ この物質に関わ

明では滅亡後に北方に逃れた元の遺民を「韃靼」と称した。それらを含め、広義に「タター れは、贋物と私は睨んでいる)。 (いぬのたま)」で「本草綱目」を引いている通り、『牛の黄・狗の寶・馬の墨・鹿の玉・犀(いぬのたま)」で「本草綱目」を引いている通り、『牛の黄・狗の寶・馬の墨・鹿の玉・犀ル」の通称でも知られる)。熊楠も指摘しているが、寺島良安が「和漢三才図会」の「狗寶ル」の通称でも知られる)。 また、私の「耳嚢 では現在でも高価な薬用とされているらしい。詳しくは私の「和漢三才圖會卷第三十七 結石或いは悪性・良性の腫瘍や免疫システムが形成した異物等を称するものと思われ、 の通天、獸の鮓荅、皆、物の病ひにして、人、以つて寳と爲す』であって、各種獣類の胎内 鮓荅(へいさらばさら・へいたらばさら) 卷之四 牛の玉の事」も参考になろう(但し、 (獣類の体内の結石)」を参照されたい。 私はこの「耳嚢」のそ 漢方

七年(機械換算で西暦五十八年)二月辛卯の条に、 「日本紀卷六に、狢の腹より出たる玉を神寶とせし由」「日本書紀」巻六の垂仁天皇八十

獸腹有八尺瓊勾玉。 丹波國桑田村有人。名曰甕襲。 敷命曰。神庫雖高。我能爲神庫造梯。豈煩登庫乎。故諺曰、神之神庫隨樹梯之。此其緣 必汝主焉。大中姬命辞曰。吾手弱女人也。何能登天神庫耶【神庫。此云保玖羅。】。五十瓊 八十七年春二月丁亥朔辛卯。五十瓊敷命謂妹大中姬曰。我老也。不能掌神寶。自今以後。 然遂大中姬命授物部十千根大連而令治。故物部連等至于今治石上神寶。是其緣也。 因以獻之。是玉今有石上神宮。 則甕襲家有犬。名曰足徃。是犬咋山獸名牟士那而殺之。

؞ؖ 「吾は手弱女人なり。何ぞ能く天神庫に登らむや。」【「神庫」と。大中姫命、辭びて曰さく、《まの思く》、今より以後は、必ざ「我、老いたり。神寶を掌ること能はず。今より以後は、必ざ 我、老いたり。神寶を掌ること能はず。今より以後は、必ず、汝、 主 れ。」八十七年の春二月の丁亥の 朔 辛卯に、五十瓊敷命、妹、大中姬に謂ひて曰はく、八十七年の春二月の丁亥の 朔 辛卯に、五十瓊敷命、妹、大中姬に謂ひて曰はく、 は此れ、

「神庫、高しと雖も、我、 五十瓊敷命、日はく、 能く神庫の爲に梯を造てむ。 豊に庫に登るに煩はむや。

つ。則ち、 つ。則ち、獸の腹に、「八尺瓊の勾玉」有り。因りて 獻 る。是の玉は、今、石上 神宮に八、有り。名を「足往」と曰ふ。是の犬、山の獸、名を「牟士那」といふを咋ひて殺し昔、丹波國の桑田村に、人、有り、名づけて、「甕襲」と曰ふ。則ち、甕襲が家に、

とあるのを指す。 61 訓読は個 人サ 「岩倉紙芝居館 古典館」 の こちらを参考にさせて戴

の意であろう。 「頑石」「ぐわんせき(がんせき)」。但し、これは 「堅い石」の意ではなく、「ただの石」

記す通り)などを著し、他にも当時の日本の風習を世界中に紹介した。彼が熊楠と知り合 Weston 一八六一年~一九四〇年)。日本には三度、長期滞在した。日本各地の山に登り、 認出来た。ここである。 だが、書庫の底に埋まってしまい、見当たらない。 いであったことは、あまり知られているとは思われない。同書は岩波文庫で持っているの 「日本アルプスの登山と探検」(原題及び刊行年(一八九六年は明治二十九年)は熊楠の 「ウエストン」イギリス人宣教師で登山家とも知られるウォルター・ウェスト しかし、「Internet archive」で原本を確 ン (Walter

*

expelled it from the pharmacopœia." to cure all evils, and to be a protection even against musket shots. A sceptical analyst has, I fear, often found in their (i.e. the chamois) stomachs. This is called 'Bezoar, and it was anciently supposed dark-coloured ball, from the size of a walnut to that of an egg, of a bitter taste, but pleasant odour, is "Owing, probably, to the resin contained in so much of their food, and its fibrous character, a lard proved to be a "bezoar stone," such as Dr. Bonney speaks of in his "Alpine Regions," p. 180 some time before in the stomach of an iwashika (mountain antelope), the chamois of Japan. excepting on one side, where a piece appeared to have been chipped off. He said it was discovered messenger to a village some distance off to bring in a curious "stone" he was anxious I should At Ōkawara I spent a delightful Sunday on my return journey. My landlord there sent a special It was about the size and shape of a turkeys egg, of a buff colour, and quite smooth,

*

開発され、 そ二十センチメートルの角を雌雄ともに持つ。岩登りやジャンプが巧みで、夏季には標高 ぶ。体長は一メートル内外、体高八十センチメートルほどで、頭の後方に鉤状に曲った凡 芻亜目シカ科 Cervidae)ではないので注意)。また、「chamois」とは偶蹄目反芻亜目ウシ科 や獣類の消化器などに生ずる「結石」を指す。「musket shots」はマスケット銃のこと。 この「iwashika」は「岩鹿」で以下のニホンカモシカのこと(彼らはウシの仲間で鹿(反 で操作されることが多く、 トルほど飛ばすことが出来たが、命中精度は低かった。初期のものは重量と反動から二人 行した。長さ一・七メートル、重さ約九キログラムで、約六十グラムの弾丸を百六十メー し、二十頭ほどの小集団で生活している。「bezoar stone」「ベゾアール石」とは広義のヒト ジビエとして食用も好まれる。ピレネー・アルプス・アペニン各山脈の森林地帯に分布 四千メートル近くの高山にまで行動圏を広げる。皮は鞣してレンズ拭きなどに用いられ、 ヤギ亜科シャモア属シャモア Rupicapra rupicapra のことで「アルプスカモシカ」とも呼 初めは火縄式であったが、十七世紀に火打石式になり、十九世紀初期には雷管式に移 十九世紀半ばには後込め式施条銃のライフル銃にとって代わられた。点火方式 肩に当てて構えて発射する銃で、十六世紀にスペインで火縄銃の大型版として 百メート 移動式の支柱から発射されたが、 ル近く離れた人間大の的に命中させることが可能となった。 後期には小さく軽くなり、

径は一・七五から一・九センチメートルを超えるものまであった(ここは概ね「ブリタニ じられた」。 カ国際大百科事典」に拠った)。「supposed to cure all evils」「あらゆる災難を取り除くと信

Capricornis crispus° 分布するヤギ亜科カモシカ(シーロー(英名:serow))属カモシカ亜属ニホンカモシカ 「カモシカ」日本固有種で京都府以東の本州・四国・九州(大分県・熊本県・宮崎県)に

「毒鏃」「どくや」。毒矢。

機関)『の研究で、ある種のベゾアールがヒ素の毒(ヒ酸塩、三酸化二ヒ素)を無毒化す たところ』、『苦しんで死んだことから、なんにでも効くものではないと判明した』とある リフォルニアのラホヤに設置された、世界最大規模にして最古の、地球科学と海洋の研究 ることが判明した』ともある。] 一方で、『スクリップス海洋研究所』(Scripps Institution of Oceanography:一九〇三年にカ に浸せば何でも解毒すると考えられていたが』、一五七五年に『フランスで罪人に飲ませ 「毒を吸去るに、神效有りと思はれたる」ウィキの「ベアゾール」によれば、古くは『毒

を移し放ちしと聞く、Diary of Richard Cocks, ed. Thompson, 1883, vol.ii, p. 87 に、コツクス 好で食ふ、殊に蝮[やぶちゃん注:底本「蛇」。同じく初出で訂した。]を好む由也と、熊 るには、伊右衞門伊右衞門と唱へて入れば毒蛇に食れずと云ふ、守りも出す、蛇多き所時 伊右衞門とて、毒蛇に喰れし時に咒ひをする百姓あり、土人の言るには、蛇多き草中に入 姬にありと傳へん」こは北澤村の北見伊右衞門が傳への歌なるべし、其歌は、 りて女神ヴヰヌス所嬖[やぶちゃん注:「しよへいの」。寵愛するところの。]の少年アド まだらの蟲有ば、山立姫に告て取せん」四神地名錄、 ニスを殺せし事、沙翁の戲作に由て名高し、印度にもヸシユニユ神」野猪の形を現する誕 り口に、大なる野猪を圈[やぶちゃん注:「をり」。]に飼えり[やぶちゃん注:ママ。]と 楠在米の頃、 ゃん注:底本「山なし蛇」。初出で訂した。]は山立姬なるべし、野猪を云ふとなん、蛇を し、「アクマダヂ」は赤斑[やぶちゃん注:「あかまだら」。]なるべく、山なし姫[やぶち には三里も五里も守りを受に來との事也、奇と謂可べしと、 ○**野猪**、嬉遊笑覽附錄に云く、 帝釋生れて直ちに野猪形を現ぜりと云ふ、Gubernatis, op. cit. vol. ii P7 Seqq.)。 勝軍地藏も、 江戸愛宕權現と、愛宕八幡像を拜せしに、何れも野猪に騎せり、愛宕權現社の登 ペンシルバニヤ州え[やぶちゃん注:ママ。]蛇を除んが爲に、 摩利支天と同く、此獸を使者とし、マルス嫉妬の餘り、自ら野猪と成 蛇の怖る、歌「あくまだち、我たつ道に横へば、山な 多摩郡喜多見村條下に、此村に蛇除 扨彼の歌は、 其守りなるべ 歐州の野猪

箇所の部分から最後までを示す。底本と異なる箇所を太字で示した(欧文の細部(斜体表記 た最後に丸括弧閉じるがあるものの、それに対応する開始の丸括弧がなかったりするのはマ マである。どうも本文の流れも微妙におかしいので、以下に初出に従った本文のコックスの [やぶちゃん注:こ**の終わりの方の『ヸシユニユ神」』とあって鍵括弧の開始部がなく、ま**

*

と、愛宕八幡像を拜せしに、何れも野猪に騎せり、愛宕權現社の登り口に大なる野猪を圏 る誕有り、 アドニスを殺せし事、沙翁の戯作に由て名高し。印度にも井゛シユニユ神、野猪の形を現す **野猪をマルスの使者とし、**マルス嫉妬の餘り、自ら野猪と成りて女神ヴヰヌス所嬖の少年 に飼えりと有り、勝軍地藏も、摩利支天と同く、此獸を使者とするにや、(古え歐州にも、 'Diary of Richard Cocks,' ed. Thompson, 1883, vol.ii, p. 87 🙂 帝釋生れて直ちに野猪形を現ぜりと云ふ、Gubernatis, op. cit. vol. ii p.7 seqq.)。 コツクス元和中、江戶愛宕權現

*

総て丸括弧で附録みたようにするのは、南方熊楠らしくない。 の方が、本文が痩せずに済むのでい 平凡社「選集」版では、丸括弧の開始位置を「Gubernatis,」の前に配しており、そ いとは思うし、前例に徴して見ても、 奥州のケースを

二十八項目に分類叙述した十二巻付録一巻からなる随筆で、 年)の代表作。諸書から江戸の風俗習慣や歌舞音曲などを中心に社会全般の記事を集めて 「嬉遊笑覽」国学者喜多村信節(のぶよ 当該部を所持する岩波文庫版第五巻(長谷川強他校注・二〇〇九年刊・ 天明三 (一七八三) 年~安政三 (一八五六) 文政一三 (一八三〇) 年の成

た方、 年刊の同書の下巻(正字)の当該部で校訂し、読点・記号等を変更・追加した。 孰れにも疑義のある表記個所があったが、取り敢えず、よりよく意味が通ずると考え ダブりを厭わず有意な情報のある方を採り、 タとし、国立国会図書館デジタルコレクションの成光館出版部昭和 一部に記号を添えた。 則ち、 七(一九三 以下はそ 但

の二種の合成版であり、 以上の二書の孰れでもないことをお断りしておく。

*

だら」の 誤、「山なし姬」は「山立姬」なるべし。野猪をしかいふとなん。これ蛇を好娘に告てとらせむ」といふ歌也。いづれよきとにはあらねども、「あくまだち」は「赤ま 奇といふべし。」と云へり。予が聞けると、件の歌は異也。「此路に錦まだらの蟲あらば山立 喰はれずと云ふ。守りも出す。虵多き所は三里も五里も、 磨郡喜多見村條下に蛇除伊右衞門とて、 めにありとつたへん」といふことを載たり。こは北澤村の北見伊右衞門が傳への歌なるべ て喰ふとぞ。 し。其歌は「此路に錦まだらの蟲あらば山立姫に告てとらせん」。『四神地名錄』に、「多 ○『萩原隨筆』に、 人のいへるには、虵多き草中に入るには、『伊右衞門々々々々』と唱へて入れば、毒虵に 殊にまむしを好むよしなり。 蛇の怖る、歌とて、「あくまたち我たつみちによこたへばやまなしひ 毒蛇に喰れし時に呪ひをする百姓あり。 野猪をしかいふとなん。これ蛇を好み 守りを受に來るとのことなり。 此邊、土

*

クションの同書の当該画像)、 この「山立姬」(やまたちひめ)はイノシシの異名と辞書に載るが、宮武外骨編 人名辞書」(大正一〇(一九二一)年半狂堂刊)によれば(国立国会図書館デジタル 「日本擬 コレ

*

山立姫

「毒虫に刺されたる時、 蒼耳葉の汁をしぼりて胡椒の粉をときて傷所に塗るとき唱ふる

「此路に錦まだらの蟲(蛇)あらば

山立姬に告げてとらせん」

立姬」と呼ぶは美名に過ぎたるが如しといへども、「やまたち」とは山賊をも云ふなり、 山立姫とは野猪を云ふなり、野猪は蛇を好みて食す」と『嬉遊笑覽』にあり、 「姬」とは女性的動物としての名なるべし

*

最初の担任の時、 属オナモミ Xanthium strumarium のことである。 とあった。「蒼耳葉」は「をもなみ(おもなみ)」と読み、キク目キク科キク亜科オナモミ 草取りの最中、 僕の背中に君らがびっしりつけた「ひっつき虫」の本体 知らない? いやいや! 知ってるよ!

キロメートル弱離れた世田谷区砧(域内の一部の旧村名は喜多見である)(或いはこの二 はないないようである つを含む広域)が候補地と考えてよかろう。 「北澤村」以下で「多摩郡喜多見村」とあるから、 (以上のリンクはグーグル・マップ・データで以下同じ)。 されば、「北見」は地名に基づく呼称で姓で これは東京都世田谷区北沢と南西に五

写本)の右頁の六行目下方から左頁の二行目までに記されてある。 を命ぜられ、役人とともに江戸郊外を廻って完成させた江戸及びその周辺の地誌。その巻 藩庁を置いた)の町人の出)が寛政六(一七九四)年、老中戸田氏教より武蔵国地誌編纂 六)年~文化四(一八○七)年:本名は正辰。岡田藩(現在の岡山県倉敷市真備町岡田に 「四神地名錄」は江戸後期の旅行家で地理学者であった古川古松軒(享保一一(一七二 八の多摩郡の「莊多見村」の条のこちら(国立国会図書館デジタルコレクションの画像。

かろうか。 に落ちる。 シ属ニホンマムシ Gloydius blomhoffii は、背面に楕円形の暗色班が並び、「赤まだら」は腑 『「アクマダヂ」は赤斑』(あかまだら)『なるべく』有鱗目クサリヘビ科マムシ亜科マム 但し、単純な音変化とは思われない。「あかまだらぢ」(赤斑地)がもとではな

性で、 載っている、とQ&Aサイトの回答にあった。 「ペンシルバニヤ州え蛇を除んが爲に、歐州の野猪を移し放ちしと聞く」イノシシは雑食 ヘビも食べる。「シートン動物記」の中にはガラガラヘビを食べるイノシシの話が

平戸にあったイギリス商館長(カピタン)を務めたリチャード・コックス(Richard Cocks 西暦で記すので、 一六二二年)の一節。「Internet archive」のこちらで原本の当該部分を確認出来る(右ペー 一五六六年~一六二四年)が、在任中に記した詳細な公務日記「イギリス商館長日記」 「Diary of Richard Cocks, ed. Thompson, 1883, vol.ii, p. 87」イギリスの貿易商人で江戸初期に (Diary kept by the Head of the English Factory in Japan: Diary of Richard Cocks: 一六一五年~ 一六一八年(元和四年)の記事である。十月二十四日であるが、当時の商館長らは 旧暦に直すと、九月六日のことと思われる。

*

mumbling out serten prayers. This I marked of dyvers. was many people went to vizet that place, and their use is to goe 3 tymes rownd about the pagod breadth, leading directly up to the pagod; but an easier way is to goe compas about the hill. There saw at my entrance. And there goeth an upright peare of [s]ton staie[r]s of 69 stepps, of a lardg that entent there is a greate wild boare alive kept in a cage (or frank) at the foote of the hill, which I forms, but allwais monted upon a wild boare, which the people say was his blason or armes. And for hooked nose and feete lyke a griffon, and riding upon a wild boare. He was painted after severall which overlooketh all Edo, and the idoll (or picture) of Otongo is made in forme lyke a devil, with a hould to be the god of darknes (or hell), as the antientes called Pluto. It standes on the topp of a hill of the ould Emperours mortuary, we went and vizeted the pagod of Otongo, which these people October 24. — Not having busynes to doe by meanes the Councell were abcent about seremones

*

宕山』(標高二十五・七メートル)『山頂にあ』り、『天然の山としては』二十三『区内で 「江戶愛宕權現」現在の東京都港区愛宕一丁目にある愛宕神社(ここ)の前身。ウィキ英語の綴りがやや古くて読み難いが、「pagod of Otongo」が旧「愛宕山権現社」である。 一番の高さ』とあり、 「愛宕神社(東京都港区)」によれば、『山手線内では珍しい自然に形成された山である愛 コックスの江戸の町を見晴らす感じが腑に落ちる。

たものか? 愛宕権現はしばしば天狗信仰と集合し、烏天狗は猪を乗り物とするから、 常は馬に跨っており、猪ではない。或いはコックスはデフォルメされた馬を猪と誤認した 三四年に銅製で復元されものが祀られているという。但し、愛宕権現も将軍地蔵菩薩も通 像は近くの真福寺に移された』ものの、『関東大震災で焼失』してしまった。 寺の円福寺に祀った』が、『明治の廃仏毀釈により円福寺が廃寺になると、勝軍地蔵菩薩 港区)」によれば、慶長八(一六〇三)年に、『徳川家康の命により』『家康が信仰した勝 はそうした像を見間違えたものか? この辺り、よく判らない。 か、或いは本当にこの愛宕権現社や、その別当寺である円福寺の将軍地蔵像は猪に跨ってい 軍地蔵菩薩を勧請し、愛宕神社を創建』して勝軍地蔵菩薩を『同神社の本地仏として別当 「愛宕八幡像」これは嘗てあった勝軍地蔵菩薩像のことであろうか(騎馬のそれ である八幡大菩薩と混同されやすい感じはする)。同じくウィキの「愛宕神社 現在は一九 (東京都 は同じ軍

を免れるとされる。 左手に如意宝珠を持し、 って作ったことから起こったともされる、地蔵菩薩の一種。 「勝軍地藏」「蓮華三昧経」に基づくとも、 軍馬に跨っている。これを拝むと、 一説に坂上田村麻呂が東征した際に戦勝を祈 戦いに勝ち、宿業・飢饉など 鎧・兜を着け、 右手に錫杖、

ある臨済宗開善寺公式サイト内の飯田市美術博物館学芸員織田顕行氏の「イノシシに乗っ 三眼で一面は猪の顔をしている)八臂で金剛杵と弓箭などを持ち、猪に乗る姿で示される ことなく、欺くことなく、縛することなく、罰することがない、とされる。日本では武士 古くは一群の風神マルトの主といい、また、創造主プラジャーパティの一人ともする。 た女神」(全三回)が摩利支天と猪の関係を読み解いておられ、素晴らしい。 が(**猪の背に乗る護法神はこの摩利支天のみ**)、時に天女像の場合もある。長野県飯田市に らは陰 形で、姿を見せないが、この神を念ずると、他人はその人を見ず、知らず、害する し標題は太字に代えた)、 の守護神とされ、護身・陰身・遠行・保財・勝利を齎すとされた。形像は通常、三面(各 「陽炎」「威光」と訳す。昔、帝釈天が阿修羅と戦った際に日と月を守ったとされる。 「陽炎」「日の光」を意味する言葉で、そうした自然の神格化でもあり、漢訳経典でも 「摩利支天」仏教の守護神である天部の一柱。サンスクリット語「マリーチ」の漢音写。 猪にシンボライズされたものは(一部の誤った表字を訂させて戴いた。 必見。 それ

《引用開始》

里支菩薩経』)などと説明されることもあるが基本的にあまりイノシシのことは詳しく記さ らわすものと説明される。しかし経軌の中には「猪車に乗りて立つこと舞踏の如し(『大摩 摩利支天の素早く疾駆するさまをイノシシに喩えたというのが一見まっとうな理由のよう に思える。 現に各寺院でもイノシシは摩利支天の眷属であり、 摩利支天が日本にもたらされた後にこのように理解されていったのかもしれ 智慧の迅速さや勇敢さをあ

着くことはできないのではないか。 的なものであるとも限らない。 おそらく両者のつきあいは経典の成立よりもはるかに時代を遡らなければその源泉に辿り そこでもう少しこの問題を掘り下げてみよう。 それに多くの日本人が抱くイノシシのイメー ジが普遍

支天が光明を司ることから西アジアの光明神との関わりが深く、またヴァラー けることで暗にその出自の正統性を強調しようとしていたのかもしれない。あるい えて光明神ミスラを先導したといわれる。 ヌのへそに芽生えた蓮から生まれた創造神ブラフマー の ないかとの指摘もある。このように摩利支天とイ に関わる神を指すことなどから摩利支天とイ 海に沈んでいた大地を救いあげたという。マー 化身のひとつでもあった。さまざまな姿に変化したヴィシュヌはイノシシに姿を変 モチーフにも登場する。古代インド たようで、森に住むイノ やイラン神話にまで遡っていくのである。 支天のふるさとイ の英雄神ウルスラグナ(バフラーム)もまたヴィシュヌのようにイノシシに姿を変 ンドや西アジアでも シシは古くから狩猟 では、イノシシ(ヴァラーハ)は根本神ヴィ こうした偉大な神の化身と摩利支天とを結びつ イノシシ ノシシとは水と光明を通じて結ばれたの の獲物とされ、 リーチー(摩利支天)は、このヴィシ (野猪) は ノシシとのつきあいは古く、 (梵天) の子だといわれる。 イラ 古くからなじみ しばしば神話 ハという語 は摩利 61 シ

摩利支天のかたちに込められた意味

支天もいる。 将という異形のすがたであらわさたり、我々と同じように二本の腕と一つの顔を持 ようで、その姿は多様である。七頭のイノシシの背に坐る場合もあればただ一頭 摩利支天の像を造るにあたっては、経軌にもとづくかたちの制約はそれ シにまたがったり三日月の上に立つこともある。三面六臂(さんめんろっぴ)ある さらに女神でなく男神のすがたであらわされることも少なくな ほど受けなか € √ Ó 1 つ摩 € √ は ノシ つ 利八

割などが注意深く細部に到るまで反映されている。それを読み解く方法論をイコノグラフ 宗教に関わるイメー を縫い込めるための道具であると説かれており、そこには懲罰者としてのイメージが投 けだが、それ以外にも摩利支天のかたちにはさまざまな意味が込められている。 摩利支天のアトリビュート(持物)である針と糸は、『大摩里支菩薩経』に悪口や讒 (図像学)とよぶ。こうした手法によって摩利支天とイノシシとの関わりを考えてみ ジ(偶像)にはそれぞれのかたちに意味があり、イ メージの 出自 例え [や役

弓矢は暗黒を引き裂い 、ージ形成の源泉にはこのスーリヤの存在があったことは複数の研究者の指摘するところ アトリビュートとして知られており、七頭のイノシシに乗ることも含め、摩利支天のイ て光明をもたらす象徴とも解釈されている。古くは太陽神スー リヤ

究者たちは太陽神スーリヤや大日如来といった太陽に関わイノシシの七頭という数についてもゆえなき数字ではない 乗ることに着目している。 と指摘されていることは先にも述べた。また我が国の大日 例 がある。 の代 わ りに馬に乗る作例 七という数字は秩序や完全性や全体性を象徴するも ス や大日如来といった太陽に関わる神仏がいずついてもゆえなき数字ではない。これについ リヤは七頭の馬に乗り、 いがある。 マーリー ・チー イ とス ンド [如来像 の一部 -リヤとは の中にも七 の のとされ マ も七 密接な繋が 頭 頭 チ Ó て 7 動物に の獅子 61 りが る研 る。 像に

の象徴たる太陽とゆかりあるこれらの神々にとってはきわめてふさわ じい、 聖なる数

東山の南禅寺の塔頭寺院聴松院に関わる一部。] [やぶちゃん注:中略。 以下は 「清拙正澄 ゆかりの 摩利支天をたずねて -京都編-」の京都

座に坐している。 樹、弓矢、針と糸を執る。 臂で正面の顔は三眼で右面を猪面とし、頭上には宝塔を載き、 聴松院の山門と摩利支天堂の門とは別々になっていて、堂の前には狛犬の代わりに阿 イノシシが構えている。 由緒によってそのすがたが伺える。 ここの摩利支天像は秘仏でありその姿を拝することは叶わない 輪宝をあしらう火焔光背を背にし、 少し細かくなるが主だった特徴を記すと、三面六 手にはそれぞれ宝剣、 七頭のイノシシを配した台 無憂

建長寺の向かいにある。鎌倉史を研究して四十数年になるが、 が、私はこの寺に実は行ったことがないような気がする。] [やぶちゃん注:中略。以下は、「鎌倉の摩利支天を訪ねて -禅居院-」の一節。 有り得ないことと思った 禅居院

華歴に坐している。 銘があるが、清拙自刻の摩利支天像とはこのようなものであったかと思わせるような素朴 興味深いのは、台座の内部にもう一体、 10 センチにも満たない小さな摩利支天像が納め はそれぞれ剣、天扇、金剛鈴、金剛杵、弓矢を執る。そして三頭の金猪を配した。二重蓮 ここの摩利支天像は、 な小像である。 られていたことである。 はないが、 も大きく、 ノシシの数が三頭という点は他像との図像的な大きな違いであり、実見した像の中では最 ており一頭のイノシシの上に半跏している。なお厨子の底には元禄五年(1692)の朱書 ふくよかな女神像の雰囲気を醸し出している。制作年代は中世まで遡るもの 後述する元禄五年という年号からそれほど遠からぬものであろうか。 比較的経軌に忠実なすがたであるが、左面を猪面とする点、台座のイ 三面六臂で正面および右面は菩薩相で三眼、左面を金猪とし、 いまは厨子に納められており、三面六臂だが顔はすべて正面を向 で

《引用終了》

は「Mars」で読みは「マーズ」。しかし、マァルスの使者は一般には 狼 である。不審。「マルス」ローマ神話に於ける戦いと農耕の神であるマァルス(ラテン語:Mārs)。英語 みの「ヴィ 「ヴヰヌス」ローマ神話に愛と美の女神ウェヌス(ラテン語:Venus)。日本語では英語読 ナス」の方が知られる。

ラースの家系は代々、アプロディーテーを信仰していた。しかし、王女ミュラーはとても を打ち明けた』。『彼女を哀れんだ乳母は、祭りの夜に二人を引き合わせた。顔を隠した女 美しく、一族の誰かが「ミュラーは女神アプロディーテーよりも美しい」と言ってしまっ するように仕向けた。父親を愛してしまい、思い悩んだミュラーは、自分の乳母に気持ち 女ミュラーの息子。ウィキの「アドーニス」によれば(下線太字は私が附した)、『キニュ 「アドニス」(ラテン語:Adōnis)はギリシア神話に登場する、美と愛の女神アプロディテ (ヴィーナス相当) に愛された美少年。フェニキアの王キニュラースと、 これを聞いたアプロディーテーは激怒し、ミュラーが実の父であるキニュラースに恋 まさか自分の娘だとは知らないキニュラー スは、 彼女と一夜を共にした。 その娘である王 しかし、

神アレース』(マァルス相当)『に、「あなたの恋人は、あなたを差し置いて、 を、大変に悲しんだ。やがてアドーニスの流した血から、アネモネの花が咲いたという』 テーを選んだことが気に入らなかったペルセポネーは、アプロディーテーの恋人である軍 日狩りに熱中していた。アプロディーテーは狩りは危険だから止めるようにといつも言っ ネーは、アドーニスのこの態度に、大いに不満だった』。『アドーニスは狩りが好きで、毎 ニスは自分の自由になる期間も、アプロディーテーと共に過ごすことを望んだ。ペルセポ に審判(ゼウスあるいはカリオペー)を委ねることにした。その結果』、一年の三分の一 ニスが少年に成長し、アプロディーテーが迎えにやって来た。しかし、ペルセポネーはア こうしてアドーニスは』、『しばらく』、『ペルセポネーが養育することになった』。『アドー 預けた。彼女はペルセポネーに、けっして箱の中を見るなと注意しておいた。しかし、ペ ニスを箱の中に入れると、 のアドーニスにアプロディーテーが恋をした。 している最中、猪に化けて彼を殺してしまった』。『アプロディーテーはアドーニスの死 に夢中になっている」と告げ口をした。これに腹を立てたアレースは、アドーニスが狩りを ていたが、アドーニスはこれを聞き入れなかった。アドーニスが自分よりもアプロディー りの』三分の一は『アドーニス自身の自由にさせるということとなった。しかし、アドー は『アドーニスはアプロディーテーと過ごし』、三分の一は『ペルセポネーと過ごし、 のアドーニスが入れられていて、彼を見たペルセポネーもアドーニスに恋してしまった。 ルセポネーは好奇心に負け、 アまで逃げていった』。『彼女を哀れに思った神々は、 ーニスを渡したくなくなっていた』。二『人の女神は争いになり、ついに天界の裁判所 やがて、 かりの下で彼女の顔を見たキニュラー その木に猪がぶつかり、 冥府の王ハーデースの妻で、冥府の女王のペルセポネーの所に ミュラーを殺そうとした。 箱を開けてしまった。すると、その中には美しい男の赤ん坊 木は裂け、その中からアドーニスが生まれた。 やがてアプロデ ・スは、 ミュラーをミルラ(没薬)の木に変 しかし、彼女は逃げのび、 それが自分の娘のミュ イーテー は赤ん坊のアドー アラビ

年刊行)。素材は帝政ローマ最初期の詩人プーブリウス・オウィディウス・ナーソ の長編叙事詩の一つである「ヴィーナスとアドーニス」(Vemus and Adonis:初版一五九三 一つに数えられる「変身物語」(Metamorphoses:メタモルポーセース)の第十巻に依 「沙翁の戲作」「戲作」(戯曲)とするが、詩の誤り。ウィリアム・シェイクスピアの三つ (Publius Ovidius Naso 紀元前四三年〜紀元後一七年或いは一八年)のローマ神話原典の

第に神としての地位を高め、 宗教的信仰の中心として崇拝される。古くは太陽の活動を象徴する自然神であったが、 た)及びシヴァとともに「トリムルティ」の一柱を成す重要な神で、特にヴィシュヌ派の 存の根源とされた「ブラフマン」を神格化したもの。ヒンドゥー教では創造神ブラフマー はヴィシュヌ(維持する神)・シヴァ(破壊する神)とともに三大神の一人に数えられ を救済するため 「ヸシユニユ神」ヒンドゥー教の神ヴィシュヌ。ブラフマー(古代インドにおいて万物 魚・亀・猪・ナラシンハ 三界を支配する諸神の最高神となった。宇宙を維持し、 (人とライオンが合体した獣人)・

彫刻され、その姿は武器などを手にした幾本もの腕を四方に伸ばしているのを特徴とする 種に姿を変えて現われ、慈悲を以って人々を導くとされる(これらを「ビシュヌ・アバタ と)・パラシュラーマ(斧を持った男の仙人)・ラーマチャンドラ(「ラーマーヤナ」の主 人公の男の王)・クリシュナ(怪力の牧童)・仏陀・カルキ(白い駿馬に跨った英雄)の十 (以上の主文は「ブリタニカ国際大百科事典」に拠った)。 -ラ」(ビシュヌの化身)という。 ヒンドゥー教美術の主題として石窟寺院などで盛んに

「誕」「たん」或いは「はなし」。

釈天の眷族であるから、猪との親和性はあるように思われる。 釈」とも呼ぶ。本邦の図像では白い象に乗っていることが多い。但し、先の摩利支天が帝 教・ゾロアスター教の武神(天帝)で、 「brahman」の漢音写)と一対の像として表わされることが多く、両者を合わせて「梵 「帝釋」仏教の守護神である天部の一神である帝釈天のこと。バラモン教・ヒンドゥー (舎脂)。梵天 (天部の一柱。古代インドの神ブラフマーが仏教に取り込まれたもの。 インドラと同一神。妻は阿修羅の娘であるシャチ

Mythology, 1872, vol. ii」を指している。「Internet archive」のこちらで当該原本が見られ、 これは「狼」に出たイタリアの文献学者コォウト・アンジェロ・デ・グベルナティス citato」の省略形で、「提示した作品」或いは「提示した作品より」の意で、脚注や尾注や そこの右ページ中央に、 引用や参考文献に於いて既出の文献と同じ著者の出典から参照する際に使用する。則ち、 (Count Angelo De Gubernatis 一八四〇年~一九一三年)の著「Gubernatis, 'Zoological 「Gubernatis, op. cit. vol. ii p.7 seqq.」「op. cit.」はラテン語の「opus citatum」或いは「opere

*

said to have tongues of fire, and eyes like the sun iron teeth and golden wheels; Marutas are invoked when the thunderbolts are seen in the form of wild boars running out from the the father of the Marutas, the winds, is invoked as a red, hirsute, horrid, celestial wild boar, and the called vishnus, or the penetrator. Hence, pro bably, by the same analogy, in another hymn, Eudras, vishnus means he who penetrates; on account of its sharp tusks, in a Vedic hymn, the wild boar is were invested with this form was in a great degree due to equivocation in language. The word As to the wild boar, its character is generally demoniacal; but the reason why the Hindoo gods that is, carried by the chariot of the Marutas, the winds, who also are

*

とあるのがそれである。]

掲)、結果、この方が躓かない。] を見て、其の敗を豫告せる事あれども別に海豚を崇拜せ 458—9, Saigon, 1880.)我邦には、 但し鬮拈りて[やぶちゃん注:「くじ、とりて」。]その靈の諾否を伺ふを要す (A. Landes, テミズム」大に行はれ、斯等[やぶちゃん注:「これら」。]諸動物、各々之を名とせる 同名者多しと言えるを考るに、古え邦人の名とせし諸動物の名と共に、本邦にも古え「ト 帚 と名づけて、之を忌む、然し玄同放言三に、入鹿は海豚に基ける名とし蘇我氏の外にも し記文を見ず、此邊[やぶちゃん注:熊楠の本拠地田辺。]には魚群を追ひ散らせば迚、 ぶちゃん注:私は「あべのせいえん」と読んでおく。]、海豚群を成して平家の船を過て、 村中の船競ひ出でゝ其尸を求め、 で難船を救ひ、能く人をも船をも、 Notes Sur les Mœurs et Superstitions Populaires des Annamites, Cochinchine Française, vol. i. pp. 人々より、特別の尊敬を受けたるに非ざるか、其遺風と覺しく、予の家代々幼名に楠を稱 一村旣に海豚の墓多き時は其の火葬の際他村より禮を厚くして、之を求め得て歸り葬る、 一も過さぬ 「檀の浦」。 ○|海豚(イルカ)|、は人の友たり、人溺れんとする時之を救ふとて、之を殺すを忌む歐州 藤白王子社内の楠神を尊敬せる事、予曾て人類學會雜誌に述たり。 海濱に風雨數日續けば、海豚死せる徴[やぶちゃん注:「しるし」。]なりとして、 海豚の尸[やぶちゃん注:「しかばね」。]を得れば鄭重に之を葬り、 (Ramusio, 'Navigation et Viaggi,' Venetia, 1606, tom. iii. fol. 348.)。安南人亦海豚好ん [やぶちゃん注:平凡社「選集」では「返さぬ」とあり、原拠を見ても(後 初出で訂した。]の戰ひに前ち[やぶちゃん注:「さきだち」。]、安倍晴延[や 尸を見出だせし船の持主、海豚の子となりて之を葬る、 源平盛衰記卷四三に、壇の浦[やぶちゃん注:底本は 背に乘せて陸に致すと信じ、官之に南海大魚仙の號を 其墓に漁利を

Odontoceti のインドカワイルカ科 Platanistidae・ヨウスコウカワイルカ科 Lipotidae(近 Tursiops truncates である。但し、 するそれは、圧倒的に鯨偶蹄目ハクジラ亜目マイルカ科ハンドウイルカ属ハンドウイルカ おかねばならない。 カ科 Pontoporiidae・マイルカ科 Delphinidae・ネズミイルカ科 Phocoenidae 全てを示して [やぶちゃん注:「海豚 (イルカ)」本邦産種については、「大和本草卷之十三 魚之下 絶滅したものと推定されている)・アマゾンカワイルカ科 Iniidae・ラプラタカワイル (いるか)」の私の注を参照されたいが、日本人の殆んどが「イルカ」と聴いて想起 ここには外国の事例も挙げているので、 ハクジラ亜目

海時代に関する基本文献とされる「航海と旅行」(Delle navigationi et viaggi:全三巻。 主義者で歴史家・地理学者のジョヴァンバティスタ・ラムージオ(Giovanni Battista Ramusio 五〇年~一五五九年刊)のこと。 「Ramusio,Navigation et Viaggi」ベネチア共和国の官吏(元老院書記官など)を務めた人文 一四八五年~一五五七年)が、先達や同時代の探検旅行記を集大成した、

「tom.」は「tome」でフランス語。「巻」。 英語の「vol.」に同じ。

「fol.」は 一枚の意。 「folio」の略。ラテン語の「葉」の意で、 稿本などで表面にのみ番号付きである

「安南人」ヴェトナム人。

「南海大魚仙」現在でも東シナ海沿岸の中国語圏内ではこの語と信仰が生きているらし

立国会図書館デジタルコレクションの寛永年間の版本の画像の当該部を視認して、訓読し 事」(知盛、舩掃除。附けたり海鹿を占ふ。并びに、宗盛、取り替へ子の事)の中の一節。国がこの場合は正しいと私は判断する。同書の巻四十三の「知盛舩掃除附占海鹿并宗盛取替子 様な表現に内容が今一つ意味を押さえられないからである)、結果、確実なのは「通(と 添えた。歴史的仮名遣の誤りはママ。 箇所には〔 〕で読みを補い、濁点を打った部分もある。段落を成形し、 ほ)すを見て」(海水をかき分けて真っ直ぐに進んで躍り上がってターンしないのを見て) て示す(右頁後ろから四行目より)。読みは一部に留めた一方で、一部の難読と思われる では「過さぬ」は「返さぬ」とあり、原拠を見るに(後掲)、悩ましいものの(以下の通 ぬを見て、其の敗を豫告せる事あれども別に海豚を崇拜せし記文を見ず」平凡社「選集」 が一八八二年に刊行した「アンナンに於ける民俗と一般的迷信についての記録」。 「源平盛衰記卷四三に、壇の浦の戰ひに前ち、海豚群をなして平家の船を過て、 トナムの管理官であったアントニ・ランデス(Antony Landes 「A. Landes, 'Notes Sur les Mœurs et Superstitions Populaires des Annamites,'」フランス人でべ ここで「食らふ」「食ひ返る」「食ひ返る」「食らはずして、返る」「食ぶつて過ぐ」と多 一八五〇年~一八九三年) 句読点・記号も 一も過さ

と云ふ、小博士を召して、此に海鹿と云ふ大魚、二、 三百もやあるやらん、鹽ふき立てて食つて來たる。

「いかなるべきぞ。」

と尋ね給ふ。 睛延、 占の文、 披ひて、

いくゞり、食て過ぎぬ。と申しけるに、此の魚、 と申しけるに、此の魚、一も食らはずして、「此の海鹿、食ひ返へれば、源氏に疑ひ有り、 小博士、 も食らはずして、返へる。平家の舩の下を、 食 通れば、御方に憑み無し。 ついくょり、 0

「今は。かう候。」

とて、淚をはらはらと流ければ、人々、聲を立ててぞ、をめき給ふ。

て憂目などをや見んずらん、注:平重盛。〕が心にも似ず、 注:平重盛。]が心にも似ず、「思」おくれたるぞとよ。「宗盛は入道大相國の子にも非ず、又、我子にもなし。 二位殿[やぶちゃん注:平時子。]は、今を限りにこそ、と聞き給ければ、 心憂くこそ覺ゆれ。」 海に入、 されば、 自害などもせで、 小松内府[やぶちゃん

とぞ宣ひける。

「帚と」現在の資料では確認出来ないが、****「この邊」紀州の海辺。 腑に落ちる異名ではある。

えたもの。 から同三(一八二〇)年刊。天然・人事・動植物について和漢の書から引用して考証を加 「玄同放言」曲亭馬琴の随筆で琴嶺(馬琴の長男)・渡辺崋山画。文政元(一八一八)年 「玄同」は「無差別」の意。「KuroNet くずし字認識ビュー ア のここの右頁二

行目以下を視認して訓読 し、電子化する。 は割注。 記号を添えた。

*

入鹿【イルカ】は、 「皇極記」に見えたり。 ※鮪【浮布の二音。 是の後、 和名「伊流可」。】なり。 同名の者多く有り。】 【蘇我の臣入鹿、 更の名

[やぶちゃん注:「※」=「角」+「孚」。所持する吉川弘文館随筆大成版では

*

を表明している』とある。 都府立大学学長であった門脇禎二らは、中大兄皇子(後の天智天皇)と中臣鎌足(後の藤 名前を付けることが多かったという風潮から、蘇我入鹿も、 原鎌足)が彼の本当の名前を資料とともに消して、卑しい名前を勝手に名付けたという説 ルカにあやかってこの名前を名乗ったという自説を表明している』。『しかしその一方で京 明治学院大学教授の武光誠は、当時の時代は精霊崇拝の思想に基づき、動物に因んだ ウィキの「蘇我入鹿」によれば、『蘇我入鹿という名前には、いくつかの議論があ 正直言うと、 私は長い間、 入鹿とイルカはただの偶然の同音だと 海の神の力を借りる為に、

ばかり思っていた。

た)『の名前に見える「藤」の文字も子どもが生まれると、この社から授けてもらい』、 楠は』、旧『藤白王寺の境内に』あった『この社から「熊」・「楠」の字を授けてもらっ たことは』「紀伊国名所図会」にも見える、 来する。藤白王子が周辺二十四か村の産土神であり、 『神の加護によって無事成長することを祈って命名した。これは楠の木に対する信仰に由 「藤白王子社」和歌山県海南市藤白にある藤白神社。 また、兄妹』(異母兄は藤吉、妹は藤枝。藤枝は熊楠渡米の翌年に十六歳で夭折し とある。 楠木神社から名を授かる風習のあっ ウィキの「藤白神社」に、 『南方熊

誌』二十四巻二百七十八号の「雜錄」に掲載された『出口君の「小兒と魔除」を讀む』。 「予曾て人類學會雜誌に述たり」『明治四二(一九○九)年五月発行の『東京人類學會雜 「j-stage」のこちら(PDF)で初出原文が視認出来る。その三一一ページの上段五行目以

k

是也、 苗字の民など、子産まる、毎に之に詣で祈り、祠官より名の一字を受く、 れし遺址の殘存せるに非ざるか。 しいと古き楠の木に、注連結びたるが立りき、當國、殊に海草郡、就中予が氏とする南方 ついでに一言するは、 熊楠などは幾百人あるか知れぬ程なり。予思ふに、こは本邦上世「トテミズム」行は 皆此風俗に因て名られたるものと察せられ、 此名を受けし者、病ある都度件の楠神に平癒を禱る、 今日は知らず、二十年ばかり前迄、紀伊藤白王子社畔に、 今も海草郡に楠を以て名とせる者多 知名の士、中井芳楠、

*

である。なお、これは本篇の次の論考である。]

Spencer, 'Principles of Sociology'について明らむべし。 やう」。]義疏注經)抔云へり、梟屬を或は神とし或は怪とする諸例及び理由は、Herbert 種の鳥を說くに三或有鳥、聲醜形亦醜、 必しもこの屬を忌ざりしにや、支那に古く之を忌し事賈誼の賦に著はれ、 ちゃん注:「アテネ」。]人梟飛ぶをもって吉兆とせり、(Gubernatis, l. c. p. 247)。 一、仁徳帝の生日、木菟産殿に入りしを、武内宿禰吉祥なりと奏せし事有れば、 ○梟、は夜能く視るを以て、希臘人之を智慧の女神「アテーネ」の使者とし雅典[やぶ 生於世間、多爲梟類云々、 貪物所致(首楞嚴經 [やぶちゃん注:「しゆりようごんき 謂土梟是也(增一阿含經)又物怪之鬼、物消報 竺土にも世尊四 書紀卷十 古え邦俗

世界中から集めたフクロウの置物が所狭しと陣取っている。 げているので、「和漢三才圖會卷第四十四 呼称である。但し、 突出した羽毛のこと。俗に哺乳類のそれのように「耳」と呼ばれているが、鳥類には耳介 かもそれらはフクロウ科の中で、特に近縁なのではなく、系統も成していない非分類学的 があるが、鳥類学的には単一の分類群ではなく、幾つかの属に分かれて含まれており、 於いては、 はない)を有する種の総称俗称で、古名は「ツク」で「ヅク(ズク)」とも呼ぶ。 は引用で「木菟」(フクロウ科 Strigidae の中で、羽角(所謂、通称で「耳」と読んでいる 圖會卷第四十四 ロウ属フクロウ Strix uralensis がいる。広義のそれについての博物誌は、私の 二十種が現生)、 本邦には棲息しない)及びフクロウ科 Strigidae(二十五属二百二種)の二科二十七属二百 「みみづく」類)」もリンクさせておく。因みに私の妻は大のフクロウ好きで、 [やぶちゃん注:「梟」フクロウ目 Strigiformes(メンフクロウ科 Tytonidae(二属十八種 フクロウ類に含める場合と、含めずに区別して独立した群のように用いる場合 山禽類 鴞(ふくろふ) 或いはそのフクロウ科 Strigidae に属する種群、或いは種としては、フク 古典的な外形上の形態学的差異による分類としては腑に落ちる)も挙 山禽類 (フクロウ類)」を参照にされたいが、 鴟鵂(みみづく) (フクロウ科の 「和漢三才 居間には 俗称に

数存在した城塞都市の守護女神であったと考えられている。ギリシアの地に固有の女神だ 翼の女神ニーケー』(「勝利」の意、 源的には、ギリシア民族がペロポネーソス半島を南下して勢力を伸張させる以前より、多 グラウコーピス・アテーネー』『と呼ぶが、この定型修飾称号の「グラウコーピス」は、 ン』『の神殿を持ち、梟』『を自己の聖なる動物として持っていた。ホメーロスは女神を、 に組み込んだのであ』ったとあり、『女神は、アテーナイのアクロポリスにパルテノー が、ヘレーネス(古代ギリシア人)たちは、この神をギリシアの征服と共に自分たちの神 中心はアテーナイ(アテネの古名)であったが、ウィキの「アテーナー」によれば、『起 ンポス十二神の一柱。「アルテミス」・「ヘスティアー」と同じく処女神で、女神の崇拝の 「輝く瞳を持った者」「灰色・青い瞳を持った者」というのが本来の意味と考えられる 「アテーネ」アテーナーはギリシア神話の女神で、知恵・芸術・工芸・戦略を司るオリュ ていた。女神はまた、 さらに『梟とオリーブが女神の聖なる象徴としてコインなどに刻まれるが、 梟(グラウクス)と関連付け、 知恵を表す蛇や、平和の印としてオリーブをその象徴としてい ローマ神話ではウィクトーリアと呼ばれる)『も、 「梟の貌を持った者」というような解釈も行

ヴァという発音になる。ラテン語:Minerva、英語読みはミナーヴァ。ミネルウァの聖鳥 示している』。『ローマ神話では、はるか古くから』、『知恵と工芸を司る女神ミネルウァが 梟のように大きな灰色の目を持つ凛々しい姿と言われ、みずからの聖鳥、 アテーナーに対応する女神として崇拝されていた。 の化身であるとして登場することがある。戦の女神としてのアテーナーは』、 やはり梟である』とある。 の上にあるのが普通で、都市守護者であった。ロマンス語ではミネルウァは、 ミネルウァの神殿もやはり都市の中心 梟との関連性を ミネル

「Gubernatis」「野猪」で既出既注。

天皇元年(機械換算三一三年)正月己卯の条に、 「書紀卷十一、仁徳帝の生日、 木菟産殿に入りしを、 ……」「日本書紀」巻十 の 德

瑞也。 平羣臣之始祖也。 葉之契也。則取鷦鷯名。以名太子。曰大鷦鷯皇子。 朕之子與大臣之子、 績之時者也。 垣・室屋弗堊色也。桶・梁・柱・楹弗藻飾也。茅茨之蓋弗割齊也。此不以私曲之故、 元年春正月丁丑朔己卯。大鷦鷯尊即天皇位。尊皇后曰皇太后。 大臣對言。吉祥也。 初天皇生日。 是年也。 同日共產。並有瑞。是天之表焉。 太歲癸酉。 復當昨日、臣妻產時。鷦鷯入于產屋。是亦異焉。 木蒐入于產殿。明旦、 譽田天皇喚大臣武内宿禰。 取木菟名號大臣之子。 以爲、取其鳥名。各相易名子。 都難波。 是謂高津宮。 日木菟宿禰。 語之日。 爰天皇日。 爲後 是何 留耕 即宮 今

楹 、藻き飾らず、茅・茨蓋くに、割り 齊 ず。此れ、私曲の故を以つて、#をばらる &が だった またで はらい おい 難 波 に是れ謂す、高津宮、卽ち、宮垣・室屋、聖色りせず、桷・ffai 元年春正月 丁丑 朔 己 卯、大鷦鷯尊、卽ち、天 皇の 位 す。尊き皇后、元年春正月 丁丑 朔 己 卯、大鷦鷯尊、卽ち、天 皇の 位 す。尊き皇后 の時を留どめじ、 となり。 せず、桷・梁・柱・の尊き皇后を皇太后と 耕し績うる

、語りて日はく、 を殿に入れり。 obt のたま 明智 旦た 譽田天皇 [やぶちゃ ん注

『吉き祥なり。復た、昨と。大臣、對へて言す、「是れ、何の瑞ぞや。」 異し。」 復た、昨日、 の妻の産の時に當り、 鷦鷯 産屋に 入じい れり。 是れ、 亦

と。爰に天皇、 日はく、

り。 じ。 今、 、以爲らく、今、朕の子、 其の鳥の名を取りて、 大臣の子と、同じ日、 各々、相ひ易へて子に名づけて、 共に産まる。 並びに、 瑞、 有り。 後[®]是 葉[®]れ、 の 契とせ な

定の年や、太歲 癸 酉。 大臣の子に號けて、「木菟宿禰」と曰へり。是れ、平群臣の 始 祖 なり。 大臣の子に號けて、「木菟宿禰」と曰へり。是れ、平群臣の 始 祖 なり。 りち、鷦鷯の名を取りて、太子に名けて、「大鷦鷯皇子」と曰へり。木菟の名を取り

是の年や、

はネ 上の複数のものを参考に自然流で読 んだもの で、 学術的 なもの で は な 13 の で

注意されたい。

鳥のイメージから見る古代の環境と心性」(PDF でダウン・ロード可能) がよい。 現代でも、梟のイメージは日本とは異なり、中国では一般には決してよくはない。この辺 者。「鵩鳥」は梟のこと。牧角悅子氏の論文「賈誼の賦をめぐって」(PDF・二〇一五年十 れるわけではないものの、その声が悪しき不気味な妖鳥として概ね認識されてきており、 全原文と訳文及び解説を読むことが出来る。なお、中国では「詩経」以来、 りの変遷は矢島明希子氏の博士論文(慶応義塾大学)「中国古代の動物観をめぐる研究: 月発行『日本中國學會報』第六十七集所収) の代表的辞賦作家であり、志を得ず投身した屈原を悼みつつ、 して死んだのをいたく嘆き、一年あまりの後、没した。その著に「新書」十巻があり、 に移され、長沙に左遷された。再び、文帝に召されて梁王の太傅となったが、梁王が落馬 「竺土」「ぢくど」。インド。 「弔屈原賦」、 「過秦論」・「治安策」などでは儒家の立場に立って時勢を論じている。韻文では前漢初期 「賈誼の賦」前漢の文帝時代の文学者賈誼 二十余歳で博士かた太中大夫に進んだが、讒言のために長沙王太傅(王の教師役)詛の賦」前漢の文帝時代の文学者賈誼(紀元前二〇〇年~紀元前一六八年)。洛陽出 やはり不遇の身を歎いた「鵬鳥賦」が知られ、ここで熊楠が指すのは後 の「二 「鵩鳥賦」-自らの運命に擬えて詠んだ -新しい賦形式」で、 凶鳥と断定さ

聲醜形亦醜、謂土梟是也(增一阿含經)」「增一阿含經」は「ざういつあごんきやう」と読 「世尊四種の鳥を說くに三或有鳥、聲醜形亦醜、謂土梟是也(增一阿含經)」「三或有鳥、 仏教の漢訳「阿含経」の一つである。 訓読すると、

書「法苑珠林」(六六八年成立)に同経からの引用があり、で、「土梟」は野生の獰猛なフクロウのことのようである。 太字は私が附した)。 或いは、鳥、 有り。 聲、醜く、形も亦、 醜し。 謂はく、「土梟」、是れなり。 初唐の僧道世が著した仏教類 この文字列が出現する (下線

聲醜形亦醜。 出入行來威儀不成。 或有鳥聲好形亦好。謂孔雀鳥是也。世間亦有四人當共觀知。云何爲四。一或有比丘顏貌端 拘翅羅鳥是也。二或有鳥形好而聲醜。 謂此人聲好形亦好也 正威儀成就。 又增一阿含經云。爾時世尊告諸比丘。當知有此四鳥。云何爲四。一或有鳥聲好而形醜。 好形亦好。謂比丘顏貌端正威儀具足。然復精進修行善法多聞不忘。 謂有人犯戒不精進。 然不能有所諷誦諸法初中後善。是謂此人形好聲不好。 而好廣說精進持戒初中後善義理深邃。是謂此人聲好而形醜。三或有人 復不多聞。 謂鷙鳥是也。三或有鳥聲醜形亦醜。 所聞便失。是謂此人聲醜形亦醜。 初中後善善能諷誦。是 二或有人聲好而形醜。 謂土梟是也。 四或有人聲

「0125_.02.0635a02」相当の内容を約縮しているもののように思われる。 「首楞嚴經義疏注經」「首楞嚴經」は恐らくは「大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞 思うに上記の「法苑珠林」の引用は概ねガイド・ナンバー 「増一阿含經」原本のそこも漸く 「大藏經データベース」 「T0125_.02.0634b27」 から で見出せた。

デジタルコレクショ 三三九年に著した、 厳経」の方の略称で、般刺密帝漢訳になる、禅法の要義を説いた仏典で、 その注釈書「首楞嚴義疏注經」(全十巻)のことか。国立国会図書館 ンの画像で全部見られるが、流石に探す気にはなれない。悪しから 宋の釋子璿が一

「又物怪之鬼、 物消報盡、 生於世間、 多爲梟類云々、 貪物所致」訓読すると

*

云々。 又、『物怪の鬼、物、 物を貪るの致る所なり。 消え、報い、 盡きて、 世間に生じて、多くは梟の類と爲る。

*

同じく 「大藏經デー タベー ス の 「大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經」

*

復次阿難鬼業旣盡。則情與想二倶成空。方於世間。 物怪之鬼物銷報盡。 生於世間多爲梟類。 與元負人怨對相值。 身爲畜生酬其宿

*

とあった(太字下線は私が附した)。

品(私はブログ・カテゴリ「小泉八雲」で来日後の全作品(諸家訳)を電子化している) 定四郎らの訳により「政法哲学」が出版されるほど、日本でスペンサーの考えは浸透して 憲法を持つなど急速な近代化は背伸びのしすぎであると考え、森有礼の』斡旋『で、一八 広く知られた。その社会進化論に裏打ちされたスペンサーの自由放任主義や社会有機体説 まれた。しかし、スペンサーからみると、封建制をようやく脱した程度の当時の日本は、 は、当時の日本における自由民権運動の思想的支柱としても迎えられ、数多くの訳書が読 た)、『一八八○~九○年代の明治期日本では、スペンサーの著作が数多く翻訳され、 翔動物であるコウモリと並置しながら、 んどを読むことが出来るが、梟の記載は同作第一巻に複数個所見出せ、熊楠の言っている の後期の重要な評論(特に遺作となった「日本」)では、 いた』とあり、かの小泉八雲もスペンサーの強力な支持者であって、彼の本邦で書いた作 八三年に板垣退助と会見した時も、彼の自由民権的な発言を空理空論ととらえ』、喧嘩 八の訳で一八八〇年に「斯氏教育論」と題して刊行され、「スペンサーの教育論」として ペンサーの時代」と呼ばれるほどであった。たとえば、一八六○年の「教育論」は、尺振 について明らむべし」イギリスの哲学者で社会学の創始者の一人としても知られるハーバ 一八九八年に全三巻が刊行した「Principles of Sociology」(「社会学原理」)。電子化原文は バート・スペンサー」によれば(アラビア数字を漢数字に代え、記号の一部も変更し 「梟屬を或は神とし或は怪とする諸例及び理由は、Herbert Spencer, 'Principles of Sociology 『別れをしたといわれる。このようなことがあったにもかかわらず、 [PART OF THE LIBERTY FUND NETWORK] © -ト・スペンサー この一巻のことと思われる。但しかなりの箇所は同じ夜行性の不吉なイメージの飛 (Herbert Spencer 一八二〇年~一九〇三年:参照したウィキの「ハー 対比的にポジティヴ(善的 「Herbert Spencer」 や、 その色彩が色濃く出ている)が ・天使的イメ 一八八六年には浜野 その主要著作の殆

which they called Hâma or Sada (a sort of owl), and did not cease flying round the tomb and からである)。敢えて「怪」の部分を示すとすれば、アッシリアの男の死の話を他者の記載尽くしているとはとても思えない(それは当然で、同書は民俗学としての学術書ではない crying pitifully.」という部分がそれらしくはある。] から引いて、「In their opinion the soul, when leaving the body, fled away in the form of a bird 民俗学的認識事例を記載していて、「梟屬を或は神とし或は怪とする諸例及び理由」を言い

にて、 を食せし話あり、熊野は伊弉册尊[やぶちゃん注:「いさなみのみこと」。]御陵のある地 of the Egyptians,1904, vol. ii p.372 參看)元享釋書に、某大后遺令して玉體を野に棄てしめ 然豫め人の死を知らすとか、烏鳴きが惡いとか云言[やぶちゃん注:「いふこと」。]も起 烏の許に往くと言へり、予思ふに、烏は好んで屍肉を食ふ者なれば、印度又は埃及の「ヷ 死すれば、 霧に行人の反影抔を幻映せるより生ぜしやならん(近松の傾城反魂香に出)今も近村の人 せし由を載せ、長明の發心集卷四に、死せしと思ひて、病人を野に棄てけるに、 ると同時に、 る事あれば、 迷ひ玉ひし時、天照大神八咫烏をして嚮導[やぶちゃん注:「きやうだう」。]せしめ玉へ の山路と云る所を步み、那智え[やぶちゃん注:ママ。]還りしが餘り心持宜しき事無か ルチユール」同然、人死に臨める上を飛廻り、又人尸を食はんとて從軍せしなるべく、自 の得分とし、烏その食を受る時、 し事あり、雍州府志に、京都紫野古阿彌谷に林葬行はれ、死人を石上に置去り、 「ラマヤナム」に神軍鬼軍と戰て敗走する時、閻魔烏に助けらる、 ○鳥、熊野の神の他に鳥を使者とする例、信濃諏訪の宮 (山王利生記卷一)等有り隱州視聽合記卷二、知夫郡燒火山有双鴉、 去れば鳥を熊野の神使とするは自ら譯有り、 固より死に縁有り、古傳に死者の靈必ず後向き又逆ま立ちして之に詣づと云しは濃 巢山樹、視客來則啼屋上、 妙法山に亡者登り、鐘自ら鳴る等言傳ふ、予每度植物採集に之き、夜獨り死出 熊野に烏は古くより所緣有りし也、希臘に「アポロ」神烏に化る事あり、 神使と看做されたる也、(Gubernatis, l. c., p.p. 198—9, 253—4; Budge, 'The Goo 古え女神「ジュノ」先づ鳥を、 死人の靈樂土に往き得と定む、希臘の古諺に、死ぬ事を 噪庭柯、於是社僧祠人豫知之、出神前待之云々、 次に孔雀を使者とせり、 唯此山に鳥多きのみに由來するにあら (諏訪大明神繪詞上) 江州日吉 その報酬に、 神武帝熊野の山道に 不見其外、 烏其兩眼 狐狸に食 葬饌を鳥

倉中期成立。作者不詳。 はなく「ひえ」と読んだ)は近江坂本に鎮座する山王権現を巡る霊験譚を集めたもの。 この神社の使者として知られるのは猿で、特に「神猿」と呼称している。の総本宮である山王総本宮日吉大社(グーグル・マップ・データ。以下同 「山王利生記」「日吉山王利生記」(ひえさんのうりしょうき:古くは社名は「ひよし」 [やぶちゃん注:「江州日吉山王」滋賀県大津市坂本にある全国の日吉・日枝・ 以下同じ)。 因みに、 山王神社

視認して訓読する(原文は訓点附き漢文)。熊楠の引用とは微妙に異なる箇所があり、 節である ではなく、 葉。但し、早稲田大学図書館「古典総合データベース」の写本を見るに、これは「卷之二」 終行から 68 コマ目にかけてに出現する。或いは写本によっては巻二にあるのかも知れぬ)。 かな続き部分も電子化した。 「隱州視聽合記」(いん(或いは「おん」)しゅうしちょうがっき:「記」は「紀」ともす は江戸中期の寛文七(一六六七)年に著された隠州(隠岐国)地誌。 (同データベース全巻(PDF)の 66 コマ目から始まり、当該箇所は 67 コマ目の最 「卷之四」に附帯する「知夫郡燒火山緣起」(「燒火」は「たくひ」と読む)の一 〔 〕は私が推定で附した読み。 全四巻地図一

て、神前に出て、目て之を待つ。兒を産するときは、則、反哺して玄、又、恒のごき、則、屋上に啼て、庭柯に噪ぐ。是に於て、社僧・祠人、豫め、之を知い、「とと」(そと)(そとと)(そとと)(そとと)(そとと) (こと)山中に雙鴉有り、其外を見ず。常に堂前に遊び、山樹に巢ふ。客、來んと欲すると

は、成長して後、親ガラスに食物を咥えて来て与え、養育の恩に報いると古くから信じら れたことを指す。無論、そんな習性は実際のカラスにはない。 「ジユノ」ローマ神話で女性の結婚生活を守護する(主に結婚・出産)女神ユーノー(ラ 「庭柯」は庭(ここは神苑)の木。「目て」「以て」に同じ。「反哺」とは、カラスの

鴉を聖鳥とするのはローマ神話の太陽神アポロ(ギリシア神話のアポローン)が知られ テン語:Juno)。主神ユーピテルの妻であり、ローマ最大の女神である。ギリシア神話のへ ラーに相当する。但し、シンボルの聖鳥は孔雀の方が知られ、後で熊楠が言うように、

「古事記」の「中つ卷」の冒頭の神武東征の下りの、先に熊パートで示した後に続いて、「神武帝熊野の山道に迷ひ玉ひし時、天照大神八咫烏をして嚮導せしめ玉へる事あれば」

ちゃん注:以下略。] 於是亦。高木大神之命以覺白之。天神御子。 八咫烏。故其八咫烏引道。從其立後應幸行。 自此於奧方莫使入幸。荒神甚多。今自天。遣 故隨其敎覺。從其八咫烏之後幸行者。 「やぶ

ね。 より、 より、八咫烏を遣はしむ。故、其の八咫烏、道引きなむ。其の立たむ後より幸行で應「天つ神の御子、此れより、奧つ方、莫入り、せいまない。荒ぶる神、甚、多にあり。今、天是に亦、高木の大神の命以ちて、覺し(白)はく、

注:以下略。] 故、其の教へ覺しに隨ひて、其の八咫烏の後より幸行でまししかば、[やぶちゃん

兄磯城に反抗の心がある旨を報告したと伝え、弟は正しく恭順したことになっているなど、 が、そこでは兄弟は兄宇迦斯・弟宇迦斯とし、兄は八咫烏を追い返すために射ている。そのき)・弟磯城(おとしき)の帰順勧告に派遣される』(「古事記」では上に続く箇所に出る たがらす」と読む)『という。 話に出てくる大鳥、あるいは頭の大きな大鳥。「日本書紀」では、頭八咫烏』(これで「や は、小学館「日本大百科全書」に(記号の一部を変え、読みは一部を除去した)、『記紀神 記紀両書には若干の相違がある。後に正字化するが、私の古い本書中の一篇「牛王の名義と は、弟はそのことを恐れ、神饌を八咫烏に献上し、そこで彼は神武天皇のもとへと帰って、 のもとに派遣され、熊野から大和に入る険阻な山中を導く。また紀では、兄磯城(えし 「高木の大神」は高木を神格化創造神である高御産巣日神のこと。「八咫烏」について 偽計を用いて服従せんと偽るも、結果、兄弟ともに討たれているが、「日本書紀」で 東征の際、高木神(記)、天照大神(紀)によって神武天皇

説であるが、大伴(おおとも)氏とする異説もある』とある。 本書紀」の記載が熊楠によって記されてあるので、 鳥の俗信」(大正五(一九一六)年十月『郷土研究』初出)を電子化しており、そこに「日 れにせよ』、『鳥が神秘な能力をもつことを示す。この話を神武伝承に結び付けた氏族につ のあがたぬし)の祖である鴨建角身命(かもたけつのみのみこと)が化したものともいい ののとのもりのあがたぬし)ともいわれる(紀)』。『烏のもつ意味については、日神の使 いては、主殿寮(とのもりづかさ)の殿部(とのべ)として葛野県の鴨県主とするのが通 (「新撰姓氏録(しんせんしょうじろく)」「古語拾遺」)、その子孫は葛野主殿県主(かど 熊野のみさき、 トーテム動物のほか戦陣で危急を救う鳥などと説かれているが、 そちらも参照されたい)『鴨県主(かも いず

得と定む』と再度、述べている。 説を編纂したものとされる。 マ)を助く。その報酬に葬饌を烏の得分とし、烏これを享くる時、 ンドには、『ラーマーヤナ』に、神軍、鬼軍と戦うて敗走する時、烏来たって閻魔(ヤ で、詩人ヴァールミーキが、 「ラマヤナム」古代インドの大長編叙事詩「ラーマーヤナ」。ヒンドゥー教の聖典の 「マハーバーラタ」と並ぶインド二大叙事詩の一つ。全七巻。成立は紀元三世紀頃 ヒンドゥー教の神話と古代英雄コーサラ国のラー 先に示した後の「牛王の名義と鳥の俗信」でも、熊楠は『イ 死人の霊、楽土に往き マ王子の伝 つ

現(存する最古の仏教の宗派)の経典で使用される言語)『では「ガルラ」』、『英語やイン なく、所持もしないのでよく判らないが、ウィキの「ラーマーヤナの登場人物 その食を受くる時、 同一視されてい の頭部・嘴・翼・爪を持つ、翼は赤く全身は黄金色に輝く巨大な鳥として描かれる』とあ 姿で描かれたり、 すると考えられている』。その一族はインド神話に於いて人々に恐れられるナーガ族 のヴァーハナ(神の乗り物)である。ガルダの名は』「ガル」、「飲み込む」の『意に由来 ドネシア語などでは「ガルーダ」という。カシュヤパとヴィナターの息子で、ヴィシュヌ で、『ガルダはサンスクリットやヒンディー語による名称で、パーリ語』(南伝上座部仏教 れる』と記す。インド神話に登場する炎のように『光り輝き、熱を発するとされる神鳥』 「迦楼羅天」で八部衆・二十八部衆の一員となった後、飛翔と形状からしばしば烏天狗と動きのでは、ののこれの、出ない。しかし、ガルダは仏教にとり入れられて、仏教の守護神り、カラスは形象として出ない。しかし、ガルダは仏教にとり入れられて、仏教の守護神 (蛇・竜の族類) と『敵対関係にあり、 「ガルダ」によれば、「鳥族」として鳥神「ガルダ」を挙げ、『ラーマ軍の危機を助けに現 「神軍鬼軍と戰て敗走する時、閻魔鳥に助けらる、その報酬に、葬饌を鳥の得分とし、鳥 インドにおいて猛禽類や孔雀は蛇を食べると解釈されていたことによる。単に鷲の 人間に翼が生えた姿で描かれたりもするが、 死人の靈樂土に往き得と定む」私は「ラーマヤナー」を読んだことも 腑には落ちる。 それらを退治する聖鳥として崇拝されている。 基本的には人間の胴体と鷲 一覧」及び

アフリカ産のハゲワシ類(タカ目タカ科ハゲワシ亜科 「ヷルチユール (タカ目コンドル亜目コンドル科 Cathartidae) を指す語でもあるので注意が必要) 後に熊楠が示す、 () 英語の 但し、この英単語は南米産のハゲワシとは縁のないコンド 「vulture」(ヴァルチュール)で、ここではヨーロッパ・アジ イタリアの文献学者コォウト・アンジェロ・デ・グベ Aegypiinae とヒゲワシ亜科 ルナテ のこと ル類

を見たところ、 Egyptians」第二巻を「Internet archive」で発見出来たので、当該部(左ページ中央の段落) (Count Angelo De Gubernatis 一八四〇年~一九一三年)の、「The God of the

*

to the south, or south-east wind, which fecundates them, and they bring forth young after three years all vultures are females, and no male vulture was ever known; to obtain young they turn their backs and that they follow men to battle as if knowing that they would be slain. describing the vultures (ii. 46), says that they hover about the dead and dying, and eat human flesh, and it is found engraved on monuments of the late predynastic and early archaic periods. Elian, in city of the Vulture (Nekhebet, or Eileithyiapolis), lord of the city of the Uraeus" (Uatchet, or Buto), probably from predynastic times, for one of the oldest titles of the Pharaohs of Egypt is "Lord of the were identified with Nekhebet; the cult of the vulture is extremely ancient in Egypt, and dates 2. The VULTUER was the symbol of the goddesses Nekhebet, Mut, Neith, and others who According to this writer,

*

名が似ているのは、 た、白鳥や馬と結び付けられることもあるとウィキの「ワルキューレ」にある)と属性と る女性及びその軍団、ワルキューレ(ドイツ語「Walküre」・古ノルド語「valkyrja」(ヴァ 皆、女性である、とある。これ、北欧神話でお馴染みの、戦場で生きる者と死ぬ者を定め らは、死者や死につつある人の上空をホバリングし、人間の肉を喰らい、しかも彼らは と同じ文献で同じページの場合に使用される。 の館ヴァルホルへ連れて行く役目を担うとされ、ワタリガラスを伴って描かれたり、ま とあって、冒頭でハゲワシは種々の世界神話の中の神のシンボルであり、 る」の意味を持つ。この語は、脚注や尾注や引用や参考文献に於いて、直前に示した文献 ルキュリャ)。「戦死者を選ぶもの」の意。戦場で死んだ者の半分をオージンの治める死者 「l.c.」は「loc. cit.」とも書き、 偶然とは思えない気がした。なお、グベルナティスの引用書誌に出る ラテン語の「loco citato」の省略形で、「示した場所にあ 神鳥としての彼

ている。 六)年)が鎌倉末期の元亨二(一三二二)年に完成させ、朝廷に上呈された。全三十巻。 余年に及び、 初の本格仏教通史で、臨済僧虎関師錬(弘安元(一二七八)年~興国七/貞和二(一三四 「元享釋書」**「元亨釋書」**(げんこうしゃくしょ)**の誤植**であろう。漢文体で記された日本 「釋書」の「釋氏」で「仏陀」の意。収録内容は仏教伝来以降、鎌倉後期までの実に七百 名僧の伝記や俯瞰的な仏教史を記す。南北朝時代には既に大蔵経に所収され

索してみたが、それらしいものに行き当たらなかった。悪しからず。 「某大后遺令して玉體を野に棄てしめし事あり」所持する「元亨釈書」の電子データで検

二)年に完成させ、貞享元(一六八四)年の林信篤・人見竹洞の序を附して、貞享三年に 物・古跡・陵墓に分けて記した地誌。十巻。儒医黒川道祐の撰になり、天和二(一六八 自費出版した。 「雍州府志」「雍州」は旧国名である山城国(京都府)の雅号。沿革・寺社・風俗・産

「京都紫野古阿彌谷に林葬行はれ、 死人を石上に置去り、 狐狸に食わせし由」「古阿彌

定で附したもの)。 谷」は判らぬが、「紫野」はこの大徳寺から船岡山周辺の広域地名である。かなり手こず ったが、「国文学研究資料館」の当該書のオープン・データ画像で、 愛宕の郡」の最初にあるのを見出せた。訓読して示す。(読みの内ひらがなは私が推 「雍州府志補遺

僧古阿彌、之に住するか。斯の地、今、大德寺の中、寸松菴に屬す。後山と爲る。無し。石も亦、今、亡し。其の松の存するのみ。古阿彌の號、其の謂を知らざるなり。以け、衣を覆 て去る。夜に入て、狐狸、之を食ふ。誠、不仁の「甚」なり。近世、斯の儀、

史的仮名遣の誤りはママである。差しはさんだ注は、新潮日本古典集成の三木紀人(すみ と)氏の校注本(昭和五一(一九七六)年刊)を参考に附した。 る。「日本古典ビューア」のこちら(これは「卷四」所収版)から視認した。読みは一部 阿闍梨の通称で、三井寺の唐房に住んだ。源国挙の長男で永承二(一〇四七)年没)であ アム京都」の「寸松庵・梅巌庵趾」によって、この中央附近であったことが判った。 この最後の叙述から、位置が推定出来る。調べたところ、サイト「フィ 「長明の發心集卷四に、……」鴨長明の「發心集」の「一善唐房法橋、發心の事」(行 円 熊楠の指すそれは、伝本によってズレがあり、「第五」巻頭に配されてあるものもあ 句読点を打ち、濁点を追加し、段落を成形した。踊り字「く」は正字化した。歴 ールド・ミュー

唐房の法橋、 發心の事

わりなくおぼゆるを、 にかたらひをきつつ、なくなく別れにけり。 のかみにて下りければ、えさらぬことにて、はるかにゆきけり。一日二日のたえまだに、 [やぶちゃん注:召使の女。] を思ひて、こゝろざし、ふかゝりける比、ちゝの、 中ごろ、 但馬守國擧が子に、所の雜色國輔といふ人、ありけり。 たちわかれては、たへぬべくもあらねど、いかゞはせん、さまざま ある宮ばらのはした物

に、ことのたよりに人のかたるをきけば、 ゃん注:女の方に障りがあって。]、返り事も見ず、 へ何かを送る便があるたびに。〕ごとに文をやれど、とょかず、 國にくだりても、これより外に、心にかくる事なし。京のたより[やぶちゃん注:京都 いぶせくてのみ、 さはりがちにて [やぶち とし月を送るあひだ

「京には、人、おほく病みて、世の中、 さはがしくなんある。」

といふにも、 おぼつかなき事、かぎりなし。

かくしつつ、からうじて、京へのぼり給ひつ。

しかありし
[やぶちゃん注:前にその女とよく逢いに行った、 の意か。」宮のうちをた

いならぬことありて、 出給ひにき。

ぼえず、立ちかへり[やぶちゃん注:折り返し。]、ゆくゑ、たづにやりたれど、しる人も て。]、すょろに[やぶちゃん注:当てもなく。]馬にうちのりて、うち出にけり。 なし。すべきからなくて、 むなしくかへりて、此よしをかたるに、ふと、むねふたがりて、何のあやめもお 心のあられぬままに[やぶちゃん注:激しいいとおしさに任せ

「西の京のかたにこそ、しる人、あるやうに聞きしが。」

とばかり、ほのかに思ひ出て、いづくともなくたづねありく程に、 此女の使ひしめのわらは、たてり。 あやしげなる家の前

いとうれしくて、

『物いはん。』

んな、うちそばみて[やぶちゃん注:顔を背けて。]、かみをけづりてなむ、ゐたりける。と思ふほどに、かくるゝやうにて、家の内へ逃入いを、馬よりおりて、入て見れば、此を 「あな、いみじくおはしけるは。」

とて、うしろをいだきて、日比のいぶせかりつる事なむ、念ごろにかたらへど、 せず、さめざめと、なくより外のことなし。 いらへも

「われを恨むるなりけり。」

Ł, あはれに、こゝろくるしうおぼえて、なみだををさへつゝ、さまざまになぐさめゐた

いぶせく。」 「さても、などかは後をのみむけたまへる。いつしか、見たてまつらんと思ふに、

とて、ひきむけんとするに、いとゞなきまさりて、さらにおもてをむかへず。

「あな、いみじ。心ふかくもおぼし入たるかな。」

すべてめもあてられず。 とて、しひて、ひきむくれば、ふたつのまなこ、 なし。 木のふしのぬけたるごとくにて、

ちゃん注:気を取り直して。]、 こぃろまどひ、とばかり[やぶちゃん注:暫くは。]、 物もいはれぬを、 ねんじて「やぶ

とと問ふ。主は、ねをのみ泣きて[やぶちゃん注:泣き声をたてるばかりで。]、ともか「さても、いかなりしことぞ。」 もいははねば、ありつるめのわらはなん、なくなく、ことのありしやうをかたりける。

置き申し上げても。]、かひなし』とて、此まへの墅にをきたてまつりし程に、日中(ひな 侍らざりしかば、これにてあつかひ[やぶちゃん注:看病し。]たてまつりしほどに、は さらに御をとづれもなくて、一年とせ、 給ひにし。 か)ばかり [やぶちゃん注:その日の正午頃に。] ありてなむ、 かしくらし給ひしあいだに、御やまひづきたまひて、 「御くだりの後、しばしは、『御文も、などかあるか』と、人しれずまちたまひしかど、 たよりあしき事[やぶちゃん注:不都合なこと。]どもありて、さるべきところも 息もうしなひにき。『今はをき奉りても「やぶちゃん注:最早、ここにおいて そのあひだに、 からすなどのしわざに、はやく、 ふたとせ、 過ぎにしかば、物をのみおぼして、 宮を出たまひき。したしき御あたり いひかひなきことになりて侍 思ひの外に、 おきかへり

ことはりなれば、『かくれたてまつらん』と、つかまつるなり。」 醜き姿となって生きていることを知られるぬようにせねば。〕と、ふかくおぼしたるも、 と、人にしられじ』[やぶちゃん注:かくなってしまった上は、何としても、このような れば、とかく申すばかりなし。わざとも[やぶちゃん注:私どもの方から。]たづね奉る べきにてこそ侍りしかど、此御ありさまのこゝろうさに、『今は、いかで世にあるもの

なみだをおさへつゝ、かたるをきくに、心うく、 かなしき事、 かぎりなし。

ぶちゃん注:弟子。] にて、眞言のひほうを傳ふ。唐坊の法橋行因といひしは此人なり。とて、やがて、これより、ひえの山へのぼり、甘露寺の教靜僧都の房に、慶祚の才子 [イ る。」にあひたてまつりて、かんじやうし奉りける人なり。 山王[やぶちゃん注:比叡山の地主神。坂本の日吉(旧称は「ひえ」)大社に祀られてあ 「なにのむくひにて、かゝるめをみるらん。今は、此世のかぎりにこそ、 慶祚の分子[や _{けいそ} ありけれ。」

なそうづ覺運といふ人、行あひて、いとあやしく、事のさまをみるに、 を、「水のみ」 [やぶちゃん注:西坂本から比叡山に登る途中の地。] といふ所にて、だん みちもしらず、しるべする人もなかりければ、人にとひつつ、たどるたどる、ゆきける この人、はじめて山へのぼりける時、我も[やぶちゃん注:彼自身も。]はかばかしう

へゆくぞ。みよ。」 「出家しにのぼる人にこそ。 いみじう、ちゑ、かしこきまなこ、もちたる人かな。

とて、人をつけやりてげり。

つかひ、かへりきて、

「しかじか、甘露寺僧都のもとへ、入りぬ。」

といひければ、

派の祖とされる。]の門人になさで、智證[やぶちゃん注:円珍。山門派と対立した比叡「さればこそ。あはれ、いみじかりつる智者を、慈覺[やぶちゃん注:円仁。叡山の山門 山寺門派の祖とされる。]のながれへやりつる、くちおしきことなり。」 のたまひける。

みん』とや思はれけん、 此人、眞言、習ひ初めける比、 師のおほ阿闍梨[やぶちゃん注:先の慶祚か。]の、

と言はれければ、またこともなく、 長寿や繁昌を予祝する大道芸の舞い。被差別民が生業とした芸である。]し給へ。見ん。」 な所作を成しては人を楽しませなされた。]』と聞きつるなり。千秋萬歲[やぶちゃん注:て、おかしきかたに、人にきうぜられけり[やぶちゃん注:「人に興ざれられけり」。滑稽 「『をとこにては[やぶちゃん注:俗人の男であった折には。]、物の真似をよくし給ひ

うけ給はりぬ。」

じやり、なみだをおとしては、 とて、經のつゝみ紙のありけるを、 かしらにうちかづきて、 めでたくまふたりければ、

し」とぞ、 「『さだめて、 いなびすらん』とこそ思ひつるに、まことの道心者なりけり。

が、ここは祭神であって、陵墓ではない。但し、次の次の注を参照。「熊野は伊弉册尊御陵のある地」和歌山県新宮市の熊野速玉大社を指しているのであろう

たい。 場」の手水鉢のシークエンスであろうか。ストーリーはウィキの「傾城反魂香」を見られ で初演された。私は何度も文楽で見ているが、ここで言っているのは「土佐将監閑居の 「近松の傾城反魂香」近松門左衛門作の人形浄瑠璃で宝永五(一七○八)年に大坂竹本座

言宗妙法山阿弥陀寺がある。] (伊耶那美命は死後にその暗黒神となった) への入り口とされ、「妙法山」紀州の南端に位置する海抜七百四十九メートルの山。 信仰を集め、山頂には真古くから「黄泉の国」

とぞ(倭姬命世記、 ○鶴、志摩國大歲の神は本體鶴にて、内宮の末社なり、故に、 弘安九年太神宮參詣記、兼邦百首歌抄參看)。 神宮の社司、 鶴を食はず

事問ぬ鳥すら田を作り、皇大神に奉るものを」と感激され、その稲を抜穂にして、皇大神 え、その稲を白い真名鶴がくわえながら鳴いていた』。『それを聞かれた倭姫命は「恐し。 遣わすと、嶋(志摩)の国の伊雑の上方の葦原に、本は一基で末は千穂に茂った稲が生 される地域に鎮座する、伊勢神宮皇大神宮内宮の別宮伊雑宮が所管する社で伊勢神宮百二「志摩國大歲」(おほどし)「の神」原座の三重県志摩市磯部町恵利原字穂落の川辺と通称の鶴については「和漢三才圖會第四十一 水禽類 鶴」の私の注を参照されたい。 ら)の起源である』(伊勢神宮の神嘗祭の際に、内宮・外宮の正宮や別宮の御垣に稲束が た倭姫命は、この稲を抜穂にして、皇大神の御前に懸け奉った。これが懸税(かけちか た。そこでは本は一基で末は八百穂に茂った稲を鶴がくわえて鳴いていた、それを聞かれ る』。『また』、『稲をくわえていた真名鶴を「大歳神」と称え、同じ場所におまつりされ 二十四日に『その神田で御田植祭が行われ、国の重要無形民族文化財に指定されてい の翌年、鳥の鳴く声が昼夜高く聞こえて泣き止まずやかましかったので、倭姫命が使いを としみや)」とも呼ばれてい』るとあり、「真名鶴伝承」その一として、『皇大神宮御鎮座 じ)。サイト「伊勢志摩きらり千選」の「佐美長神社」によれば、『佐美長神社は、 て大歳になった」とする説がある』とある。 歳(おおとし)に変わった」とする説と、「鶴が長寿を象徴することから、多き年が転じ たけききふえじんじゃ ―――明和町の行部と山大淀の間に位置し、式内社佐々夫江神社』(現在の社名は明和町の行部と山大淀の間に位置し、式内社佐々夫江神社』(現在の社名は 掛けられ、 やしく思い、使いを遣わすと、その鶴は佐々牟江宮』(ささむねのみや)『前の葦原に還っ 大神の摂宮を造られた』。『これが現在の「伊雑宮」(皇大神宮別宮)であり、毎年』六月 の御前に懸け奉った』。『倭姫命は稲の生えていた場所を「千田」と名付け、そこに天照皇 十五社の一つである佐美長神社(さみながじんじゃ:グーグル・マップ・データ。 やマナヅル Grus vipio であるが、これは渡りの分布から、 「白真名鶴(しろまなづる)」の霊をまつった神社として知られ、別名を「穂落宮(ほお 「真名鶴(まなづる)伝承」に登場する伝説にちなんだ神社で、伊雑宮誕生にまつわる 「鶴」をそれと限ることは誤りであることは言うまでもない。それを含めて博物誌として 『伊雑宮ご鎮座の翌年秋、皇大神宮に真名鶴が北から来て昼夜鳴いた。倭姫命はそれをあ Balearica・ツル属 Grus・アネハヅル属 Anthropoides・ホオカザリヅル属 Bugeranus に やぶちゃん注:「鶴」ツル目ツル科 Gruidae のツル類。 これが現在の「佐美長神社」』『である』とあり、次に「真名鶴伝説」その二として、 穀物の神とする説が』あるとし、『「大歳神」の名の由来は、「穂落(ほおとし)が大 『「大歳神」はスサノオの子であるとする説、伊佐波登美神またはその子とする これを「懸税」と呼ぶ。神領民からの年貢の名残)。『佐々牟江の地は、 我々が「鶴」と聴いて即座に想起するのはツル属タンチョウ Grus japonensis (おおとしのかみ)』で、『穂落伝承に登場する真名鶴が大歳神であるとされ ここ)『が鎮座する』とある。ウィキの「佐美長神社」によれば、『祭 「宇治山田市史」では『佐美長神社の祭神を 現行ではツル科はカンムリヅル 江戸以前の日本人の想像する かつて 以下同

神宮内宮の第一位の摂社。ここ)『の大歳神を強引に佐美長神社に結び付けたもの」とし 清直』(みかなぎきよなお 文化九(一八一二)年~明治二七(一八九四)年:江戸末期 名鶴を「大歳神」として祀ったのが佐美長神社である』と記す。但し、『この伝説を御巫 た田を「千田」(ちだ)と名付け、その傍らに神社を建立した。これが伊雑宮であり、真 伊佐波登美神に命じて抜穂(ぬいぼ)に抜かせ、天照大神に奉った。その稲の生育してい を落とした」とも)。倭姫命は「物言わぬ鳥すら田を作り、天照大神に奉る」と感激し、 実る田を発見、もう』一『羽の真名鶴は稲をくわえていた(「くわえて飛んできてその稲 らず」と言い、大幡主命と舎人紀麻良を派遣して様子を見に行かせた。すると稲が豊かに 27 コマ目に出現する)を原拠として、垂仁天皇二十七年九月、『倭姫命一行が志摩国を巡 世記」の書誌データに拠った。鶴を神霊の鳥とする記述はここにある同書(PDF)の 26~ 説が有力。以上は「愛知県図書館」公式サイト内の「デジタルライブラリー」の「大和姫命 実際には鎌倉中期の建治から弘安の頃(一二七五年~一二八七年)に書き上げられたとする 武朝(六七二年~六八六年)の大神主とされる御孫(御気)が書写し、神護景雲二(七六 きる』ともある。 定される)の祭神であり、 の」との説を提唱している』とある。 から明治の国学者にして伊勢外宮(豊受大神宮)の神職)『は「朝熊神社』(伊勢神宮皇大 命)が天照大神を奉じて各地を巡幸し、伊勢に鎮座するまでの伝承を記したもの。巻末に天 て批判している』。「磯部町史」では、『「地域を治めた磯部氏が稲作の神として創祀したも のみことせいき:「神道五部書」の一つで、記紀で垂仁天皇の皇女とされる大和姫命(倭姫 「神乎多乃御子神」とする』。『「神乎多乃御子神」は』、「延喜式神名帳」 ハ)年に禰宜五目麻呂(五月麻呂)が撰集したと記すものの、現在では後世の仮託とされ、 一『羽の真名鶴がしきりに鳴いているところに遭遇した。倭姫命は「ただごとな また、「穂落伝承」の項では、**熊楠の挙げる「倭姫命世記」(やまとひめ** (おなしきしまにますかむをたのみこの)神社(佐美長神社に比 粟島(=志摩)の神の子である水田の守護神と考えることがで に記載されてい

も前掲の「和漢三才圖會第四十一 水禽類 「鶴を食はず」意外に思われる方もいようが、鶴は近代までよく食された。例えば、良安 鶴」の中で(下線・太字は私が附した)、

謂ふ。以つて箭の羽に造ぐ。或いは、羽帚に爲る。之れを賞す。肉の味、矢羽として珍重される。]の端、共に黑くして、本は皆、白たり。之れを 保呂[やぶちゃん注:保呂羽。鳥の左右の翼の下に生え揃った羽。鄘[やぶちゃん注:保呂羽。鳥の左右の翼の下に生え揃った羽。鄘[やぶちゃん注:羽の椿元 亘しに 羽棹(マバンリェ(ペ・トュード) 温さ、四、五尺、長さ、三尺許り。項に、丹、無し。頰、赤く、全體、高さ、四、五尺、長さ、三尺許り。項に、丹、無し。頰、赤く、全體、 [やぶちゃん注:羽の根元、 或いは、羽根の茎(真中の管状部位)。] 白たり。之れを「鶴の本白」と 特に鷹のそれは 極めて美なり。

「眞鶴」と名づく。

黑鶴は高さ、三、四尺、 「薄墨」と名づく。 其の余は皆、 黑く、 肉の味、 長さ、二、三尺。白き頸、赤き頰、 亦、 佳なり。 種、 **黒鶴に同じくして、** 騮 [やぶちゃん注:斑。] 淡き者を

白鶴は赤き頰、玄き翎、 其の余は皆、 白し。 其その肉、 藥用に入るべし。

[やぶちゃん注:中略。]

さず。 鶴の肉・血 少しなり。[やぶちゃん注:以下略。] 本朝には以つて上撰と爲す。其の丹頂は、 【氣味】、甘、鹹。香臭有り【他の禽とは同じからず。】。中華の人、食品と爲 肉 硬く、味、美ならず。 故に之れを食ふ

*

僧形であるから)と同様、 録に残されている。鶴の肉は、江戸時代の頃の「三鳥二魚」と呼ばれる』五『大珍味の』 毛採取と肉食のために明治期に乱獲した結果であることも理解されていないであろう。 それまで普通に生きていた。まだ信じられない人は、私の『杉田久女句集 とウィキの「ツル」にもある通りである。鶴は、近代に於いても、第二次世界大戦以前ま 記載はここに認められる。 日本古典籍総合データベース」のこちらで全文が読める(但し、写本)。鶴を霊鳥とする たるペリカン目トキ科トキ亜科トキ属トキ Nipponia nippon を滅ぼした日本人は、トキを羽 は吉祥の形に調理されて舞御覧の間に御前として供進されたことに基づくものであろう)が 覧の前儀として、鶴を儀式的な作法で調理し天皇に饌せられた行事があり、この時、鶴の肉 の本膳料理や朝鮮通信使の饗応のために鶴の料理が振る舞われたことが献立資料などの記 で判る通り、 一『つであり、歴史的にも名高い高級食材』であった。因みに、『三鳥二魚とは、鳥=鶴 「弘安九年太神宮參詣記」弘安九(一二八六)に僧通海が記した伊勢神宮参詣紀行。「新 (ツル)、雲雀(ヒバリ)、鷭(バン)、魚=鯛(タイ)、鮟鱇(アンコウ)のことである』 (新年。「鶴の庖丁」と同じで、本来的には正月十七日或いは十九日に行われた宮中の舞御 鶴料理る 附 随筆「鶴料理る」」を読まれたい。因みに、そういう人は、美しき学名 高級で縁起物の食材として食されていたのである。例えば、「鶴料理る」という季語 『江戸時代には鶴の肉は白鳥とともに高級食材として珍重されていた。 なお、著者は僧であるから、西行や芭蕉(彼は僧ではないが、 伊勢神宮の境内には入れず、僧侶ら専用の遥拝所で遥拝してい 2 4 0 花衣

の社司[やぶちゃん注:左には「やしろつかさ」と振る。]靏をくはざる』と出る。]頭に出現する「大歳神」と前書する一首の後書の終わりの方に、熊楠の言う通り、『神宮六)年に刊行された。「新日本古典籍総合データベース」の原刊本のこちらの、下巻の冒六) 「兼邦百首歌抄」ト部兼邦の歌集で文明一八(一四八六)年頃の成立で、 [やぶちゃん注:左には「やしろつかさ」と振る。]靏をくはざる』と出る。] 明曆二(一六五

疱瘡を免れしめんと云ふ云々、惟ふに鷺の羽疱瘡を撫るに快きに思ひ寄せて生ぜる話なる 雲に在り、 太平記に氣比宮の神使と云り、山二二六頁所載鷺大明神は、懷橘談に據れば、 素盞嗚尊の娘美女なりしが、天瘡にて醜く成る、 神祇に誓ふて、 未世の人民に

[やぶちゃん注:初出では、「惟ふに」以下の部分が、

*

惟ふに鷺の羽輕く柔らかにして、疱瘡を撫るに快きより、 話なるべし。 鷺の宮の名に思い寄せて生ぜる

*

となっており、平凡社「選集」もこちらを採用している。

Ardeidae)の中で、ほぼ全身が白い(特定期間を含む)サギ類の総称通称であり、そちら 種は存在しない。白い羽毛を持つサギ類(新顎上目ペリカン目 Pelecaniformes サギ科 鷺」)」を参照されたい。因みに、そこで注している通り、「シラサギ」「シロサギ」という の私の注の冒頭で本邦産のそれらの種は総てを示してある。 「文永の役」の記載の終わりの敵国調伏に関わる一節、 「太平記に氣比宮の神使と云り」「太平記」巻第三十九の「太元より日本を攻むる事」 「鷺」の博物誌ついては、「和漢三才圖會第四十一 水禽類 鷺(総称としての「白

*

の使者、悉く虚空を西へ飛び去ると、人ごとの夢に見へたりければ、「さりとも、)明治、『『『『『『『『『『『『『『『『』』』』。『『『『『』』。『『『』』。『『『』』。『『』。『『』』。『『』。『『』。『『』。』。『『『』。』。『『』。』。』。『『』。』。』。』。』。』。』。 の助けにて、 異賊を退け給はぬ事はあらじ」と思ふ許りを賴みにて、幣帛、捧げぬ人も無

*

ちに逃げ去ったという』。『この伝説に因んで』「一夜の松原」『とも称せられる』とある。 える旗さしもののように見えた』。『敵はこれを数万の軍勢と見て恐れをなしたちまちのう 賊の大群が来襲した 読める同所にある説明版によれば、『ここ気比の松原は三保の松原(静岡県)虹の松原 と称し、ここは嘗ては氣比神宮の神苑であった。同グーグル・マップのサイド・パネルで ものはないようだが、ここから西に二キロメートルほど行った海岸一帯を「気比の松原」 この「氣比宮」は福井県敦賀市曙町にある氣比神宮(けひじんぐう)のこと(グーグル 原因」の「其一を自に就て」にある、 マップ・データ。以下同じ)。現在、同神社の境内には鷺を使者とすることを示すような 「山二二六頁所載鷺大明神」山中笑「本邦に於ける動物崇拝」の「此等の動物崇拜さると (佐賀県) とともに日本三大松原の一つに数えられている』。 『その昔聖武天皇の御代に異 そして松の樹上には気比神宮の使鳥である白鷺が無数に群衆し あたかも風にひるが そのとき敦賀の地は突如震動し一夜して数千の緑松が浜辺に出現し

*

庖瘡の守神に、 鷺大明神と云ふあり。 此神の愛で玉ふ鳥と云ふ。

疱瘡を輕くす』と出してはある。「鷺大明神」は現在の出雲市大社町鷺浦にある伊奈西波岐 を指す。但し、そこより前の「崇拜さる、動物の種類」の章に、『鷺 神社(いなせはぎじんじゃ)こと。 鷺大明神として

部」の「鷺宮」に(踊り字「く」は正字化した。 「懷橘談」松江藩の藩儒であった黒沢石斎が書いた出雲地誌。前編は承応二(一六五三) (谷口為次編・大正三(一九一四)年刊・「懐橘談・隠州視聴合紀」合本版)の、 後編は寛文元(一六六一)年完成。 国立国会図書館デジタルコレクションの活字本 一部の読みは私が推定で附した)、

*

覺え侍る ぬれば、痘疹の病を脱るといひ傳へたりとぞ年老ひたる社司の語りしは、これは瓊瓊杵尊しめんと誓約し給ひし故に、今に至るまで此の宮の石を取りて子兒の守、袋に入れてかける事を悲しみ、天神地祇に深く誓ひ給ひて、末世の人民我に祈る事あらば疱瘡の患を免れ 天成の霊質にて御契淺からざりしが、後に天瘡を患ひ給ひ、花の顔、忽に變じて惡女と鷺宮は何れの神を崇め侍るやと牧童に尋ね侍れば、是は素盞鳴の妾にてましましけるが、 ならせ給ひ、 なり、傳記にいふ所は昔神託兒童而祈我者免;痘瘡之患;爾來爲痘瘡守護神云々、 素盞嗚の命と御中もはやかれかれにならせ給ふ。かくて妾女我身の色衰へた 殊勝にぞ

*

漢文部分は訓読すれば、

*

昔、神、 守護神と爲す。 託して、『兒童にて我れを祈る者は、 痘瘡の患ひを発れしむ』と。 爾來、 痘瘡の

*

語は相応しくない。寧ろ「未」来の「世」に於いてという方が、私は躓かずに読める。実 ら、誤植と考えてよいのだが、そもそもが、この時制にあっては「末世」という仏教臭い熟 というハイブリッドの方が腑に落ちる。また、「未世」は初出を見ても「末世」とあるか あるから、娘が妻であって何ら問題はない。寧ろ、素戔嗚の呪力を持つ娘であり、妻である 「末世」であるのかも知れない)、絶滅されたのである。] 熊楠のそれは、「素盞嗚尊の娘」とするが、ここでは彼の側室である。 疱瘡=天然痘は遂に未来の現世に於いて(いや。やはりそれは別な意味で、

徒か否を檢定せる(Marini, 'Historia del Tunchion,Roma, 1665, p. 7)等、 Europe,1886, in Churchill,s 'Collection,' vol. iv. p. 574.)東京で鳩を殺さしめて、 せり(Gubernatis I. c, ch.x)從つて天主徒亦之を崇め、ラヴエンナの寺え [やぶちゃん注: ママ。]、聖魂十一度鴿形を現じ、來りて十一僧正を撰定し(Careri, 'Travels through ○**鳩**、を神物とし、獨伊和露の民之を食はず、古えシリア及びパレスチナの民甚之を敬 八幡の氏子ならでも、 一生之を食はぬ人多ければ、八幡山に多きのみが鳩を神物と 珍譚多し、 キリスト教

する理由ならじ。

けの読みはルビにした)。 八七年刊)の「ハト」項の「博物誌」より引く(ピリオド・コンマは句読点に代え、後付 に頼りになるのは荒俣宏氏しか、いない。氏の「世界大博物図鑑4 [やぶちゃん注:ネット上には日本語のハトの民俗的博物誌記載が余りない。こういう時 鳥類」(平凡社一九

《引用開始》

ち帰ったという〈創世記〉8章8~1節の記事に由来する。ハトとオリーヴはともに古代 魔女もハトにだけは化けられぬとも、この羽を入れた布団に寝かされた重病人は死なない から無垢と平和の象徴とされており、とくに 1949 年パリで開かれた国際平和擁護会議で ふたたびあらわれたかどうかを調べるために方舟から放たれたハトがオリーヴの小枝をも リーヴの枝をくわえたハトは平和の象徴に用いられる。これはノアの洪水のとき、陸地が ともいわれた。またその旺盛な繁殖力や生命力から、豊饒の象徴と考えられた。さらにオ せられ、殉教者の目からこれが飛び惣つと信じられた。あらゆるものに変身できるという しば天啓の訪れや昇天、聖霊降臨などの化身とされた。 さてキリスト教普及後のヨー ピカソのデザインによるポスターがつくられ、世界中に浸透した。 ロッパでは、ハトは霊魂あるいは聖霊 とりわけ白いハトは聖人の魂に擬 の象徴とな

てしまった。長米、ハトには胆のうがなくなったという。 もっとも方舟から放たれたハトは安全なすみかを失った悲しみのあまり、 胆のうを破っ

られる名前だという。ギリシア神話にあらわれる美貌の女王セミラミス Semiramis の名 ウェヌスの聖鳥ともされた。新大陸の発見者コロンブス けた。一説には、この名はアラビア語のハトの呼称に由来し、東洋では絶世の美女につけ トを示すため、この鳥はしばしばアメリカの象徴に用いられた。 をもった。 ともあれハトは豊饒と平和のイメージから清潔さとも結びつき、さらに女性名とも関連 アッシリア語で〈ハトからきた者〉の意とされる。またこの鳥は美神アフロディテや 旧約聖書の 〈ヨブ記〉42章14節によると、ヨブは長女をエミマ Emima と名づ Columbus の名もラテン語では

世には、ハトの肉も病気に穢されないと考えられ、 ユダヤ人たちは、 神に捧げられる清潔な鳥はハトしかないと信じていた。 ペスト流行時にも平気で王侯達の食卓 したがって中

キジバトは夫婦の貞節の象徴で、 キジバトのように小型で美しい種類は、 このシンボルであった。 一方が死ねば他方も思い焦がれて死ぬと考えられたか またその鳴き声が肉欲をいましめているように聞こえ 愛玩用としても中世人に愛され

るからともいう。

ると信じられもした。 身につければ、あらゆる感情を消すことができる。また、あしを木につるせば実がならな 反面、 その血をモグラのスープに混ぜたものをムダ毛にこすりつけると、きれいに抜け落ち この鳥は黒魔術の道具にも用いられる。この鳥の心臓をオオカミの皮にくるんで

糞〉とよんだ。これはある種のマメ類やエンドウ類のよび名にも用いられ、ヘブライ語で れ、ここよりイギリスのエリザベス朝期には、この鳥を霊鳥として、 たのならおまえはどうやら鷲によって霊感を得たらしい〉というセリフを吐いている。 ら霊感を得たという俗信が広く流布した。シェークスピアの《ヘンリー6世》 ケルで売られたとされる〈はとのふん〉は、本来なら〈マメ〉と訳すべきところだろう。 も同様に衷現する。したがって日本聖書協会発行の聖書〈列王記〉第26章 25節で、銀5シ [やぶちゃん注:中略。] またアラビアでは、樹や岩場にはえるコケ類の一種を〈ハトの糞〉ないし〈スズメの またマホメットは1羽のハトを飼 フランス皇太子シャルルが乙女ジャンヌに向かい〈マホメットが鳩によって霊感を得 い、自分の耳に餌を入れてそれをついばませたとい マホメットはハトか 1幕2場で

り、またたく間に〈人文字〉ならぬ〈ハト文字〉ができあがる。描かれた文字はアルファ た。むろんこの会社、単に善意で奉仕的活動をはじめたわけではなく、本当の目的は自社 まれ、その餌はながらく市の費用でまかなわれていたが、一九五○[やぶちゃん注:アラ Generali> の宣伝にあった。 ビア数字を漢数字に代えた。]年代になると、ある保険会社が餌代を負担しようと申し出 ベットのAとG、 の開祖といわれるくらい古くから知られていた。そのため人びとのマスコットとして親し ところで、ヴェネツィアのサン・マルコ広場に集まるカワラバトは、 餌のトウモロコシで、ある文字を描いて播くのだ。するとハトは餌をめがけて集ま のイニシャルだったのだ。 午前9時、サン・マルコの鐘が鳴るのを合図に、保険会社の社員がひと つまりこの保険会社〈アシクラツィオーニ・ゲネラーリ Assicuraziom いわゆる神殿バト

と述べ、《禽経》には〈鳩は三子を生じ、一は 鶚となる〉とある。 て鳩となり、仲秋に鳩がまた化して鷹となる。故に鳩の目はやはり鷹の目のようなのだ〉 中国には、 ハトは別の鳥に化身するという説があっ仁。《禽経註》は〈仲春に鷹が化し

格で孝行な性格だが巣をつくるのが下手だとし、さらに雨が降りそうなときは雄が雌を追 春秋分に変化したものはなかった〉と述べているのは興味ぶかい。また同書は、 ハトの1グループである〈斑鳩〉は春分に化して黄褐侯となり、 晴れるとその反対に雌が雄に呼びかける、 古来信じられてきた。しかし《本草綱目》に〈嘗て数年間飼養してみたが、 としている。 秋分にはもとに戻るこ 一向に

たときは掌に鵠の字を指で書けばすぐに治るともいわれた。 んで老人に贈った。日本でも8歳以上の功臣に宮中からこの杖が下賜された。また、 いと信じた。それにあやかり、 ハトに関する奇妙な習慣もある。 仲秋にはこの鳥の姿を杖の先にかたどり、〈鳩杖〉 中国人は、ハトはものを食べても決してむせることが とよ

ハトの肉は美味として猟鳥とされた。 それを食えば、 目をよく

れたものは 〈鳩酒〉とよばれ、腰痛や冷え症に効くとされた。 むせることがなくなるという。またこの鳥の肉をたたき、 骨とともに酒

くられた。 せた。これを いっぽう、 猟師たちは両の掌を合わせて吹き、 〈鳩吹く〉という。 さらに 〈鳩笛〉とい ハトの鳴き声をまねてシカなどをよび つて、 この鳥の鳴き声を出す笛も 0

ヨリコイコイ〉とよんだ。しかし九州ではその鳴き声をヨソジコイコイと聞いて〈四十路コイと聞こえることから 老 来 の異名もある。ちなみに日本ではキジバトを京都で〈トシオ・毘グローサー・・ ユンギン れて悶え苦しむともいわれた。さらにこの鳥は形状から数珠掛鳩とか、鳴き声がトシヨリ幡宮の神の使いとみなされたことによる。またそこの氏子が誤ってそれを食べると唇が腫 日本の故事によればシラコバトには八幡鳩の異名がある。 この鳥が八幡山に群棲

宇佐八幡の神を山城の鳩ヶ峰に遷したのがこの神宮である。ただし、源頼朝は幕府をひらためだ。軍神として古くから武家の信仰が厚く、総社は石清水八幡宮。清和天皇の時代に八幡信仰にはしばしばハトの図や像がついてまわる。これはハトが八幡の神使とされるバト〉と称し、東北ではイポウポウとかアポウポウと聞いた。 いたとき、 鎌倉鶴岡に八幡宮を建てた。 鳩が鶴に変わり、さらにご利益が増したかもしれ

はスズメ目の鳥イカルの古名で、文宇を誤用したものといわれる。 なお、日本では斑鳩を〈いかるが〉と読むが、《重修本草綱目啓蒙》 によると、 ح の 訓

欺をはたらくとしてこの名がついた、とある。[やぶちゃん注:以下略。] 物語》には、 横行し、〈鳩の戒〉とよばれた。一説にはこれは〈鳩の飼〉と記し、かれらが神社の の飼料にするためと称して金銭をだましとったことに由来する名称という。しかし してしまう、また秋にはタカに化けてそのまねをするといった俗信から、 日本の近世初期には、山伏や占者などの姿をして全国にまたがって詐欺をはたらく輩が ハトはウグイスの巧みな巣づくりをまねるが、結局枝のあいだから卵を落と ハトは化けて詐 《浮世 ハト

《引用終了》

ろうと思うたので、そうした部分も敢えて引いた。 信仰対象とは異なる記載もあるが、熊楠も生きていたら、とても面白が つ て読むだ

家庭料理のフル・コースの一品として食べたことがある。美味い。 「伊」とあるが、少なくとも現在のイタリアではハトを食べる。しかも、最後に「吾邦に 八幡の氏子ならでも、 一生之を食はぬ人多ければ」ともあるが、私自身、 卜 -スカー ナ

作の中には神話上の動植物の研究などが含まれる。 ロ・デ・グベルナティス(Count Angelo De Gubernatis 一八四〇年~一九一三年)で、著 「Gubernatis」既出既注だが、 再掲しておくと、イタリアの文献学者コォウト・ア

王国が首都を置き、 「ラヴエンナ」イタリアのエミリア=ロマーニャ州ラヴェンナ県の県都のあるラヴェ (Ravenna)。古代ローマ時代から中世にかけて繁栄した都市で、西ローマ帝国や東ゴ 東ローマ帝国ラヴェンナ総督領の首府でもあった。 ンナ

「聖魂十一度鴿形を現じ、 'Collection,' vol. iv. p. 574.)」ジョヴァンニ・フランチェスコ・ 來たりて十一僧正を撰定し (Careri, Travels through Europe,1886, ジェ メリ

いますが 幼子キリストの手に持つハトの絵が消されてしまっているというスゴさがあります。 を依頼され 会の「旅する長崎学」のコラム「銅版画家 渡辺千尋さんインタビュー」に、渡辺氏が 録 "Delle missioni de padri della Compagnia di Giesu " Roma : 1663 - マリーニ - 『イエズス会布教 校)の学長も務めた。一時、ヨーロッパに戻ったが、一六七四年には東洋管区長として再 年)はイタリア人イエズス会員で、東洋での布教を志し、一六三八年にインドに渡り、 Historia et Relatione del Tunchino e del Giappone, Roma, 1665, p.7)』となっている。筆者ジョ Roma, 1665, p. 7)」この引用部分は初出は同じだが、平凡社「選集」版では『(Marini, 群」でもとみに知られるが、イタリア美術の研究家によるラヴェンナのハト装飾図像レポ は一六九三年刊行。「十一僧正」は使徒のことと思うが、「十一」という数字は不審である と教えられたかもしれない。 概念はなかったのではないでしょうか。 は、ヨーロッパでは平和の象徴です。あくまで推測ですが、その当時の日本人にはそんな 刑に処された)『同じ年に、「セビリアの聖母」の』銅版画が制作されていたが、 な?」とちょっと疑りたくなる。キリシタン弾圧の中でこんなことが信徒であるかどうかイタリア語でしかも古語のため、全くお手上げである。しかし、この話、「ほんまかい と判断される(以上は「京都外国語大学図書館」公式サイト内の「MARINI, Gio. Filippo de 赴任し、マカオで没した。東洋管区長と言っても、彼が最初にインドに赴任した頃、既に に当たれないので聖堂名も象徴の意味も判らない。ラヴェンナは「初期キリスト教建築物 が(原型の十二使徒の内のイエスを裏切ったイスカリオテのユダを除いたものか)、 た彼の日本語版ウィキを見られたい。彼の当該紀行「ヨーロッパの旅」(Viaggi in Europa) なったとされる人物であり、「世界初のバックパッカー」とも称される。詳しくは参照し ジュール・ヴェルヌをして、「八十日間世界一周」(Le tour du monde en quatre-vingt jours: 五九七年二月五日))に二十六人のカトリック信者が豊臣秀吉の命令によって長崎で磔の の判定法としてあったという話は少なくとも私は聞いたことがない。また、長崎学 Web 学 本及びトンキンとの歴史と関係」となっているが、日本に関する部分は極めて少ないもの 日本は厳しい禁教令下にあり、マリーニは一度も日本に渡っていない。本書の表題は「日 バンニ・フィリッポ・デ・マリーニ(Giovanni Filipo de MARINI 一六〇八年~一六八二 レリ (Giovanni Francesco Gemelli Careri 一八七三年出版(初出は前年のパリの新聞『ル・タン』(Le Temps)に連載)を著す契機と 『有家町(現南島原市)から』、二十六『聖人が処刑された』(慶長元年十二月十九日(一 「東京で鳩を殺さしめて、キリスト教徒か否を檢定せる(Marini, 'Historia del Tunchion, ・トも読んだが、「十一」という数列を見出せない。識者の御教授を乞うものである。 トンキンで十四年間の伝道をし、マカオにも赴き、同地のイエズス会コレジオ(神学 イコン制作者 の解説を参考にした)。原本は「日文研」のこちらのこれ(PDF)で視認出来るが 公共交通機関を用いて世界を旅した最初のヨーロッパ人の一人で、彼の体験が、 日本では見たことがなかったでしょうから、「バラとは椿みたいな花ですよ。」 て原画を見たところが、『二十六聖人が処刑された時代に作られて、有家版の はわざと絵の中から消してしまっています。 ハトは日本にもいたでしょうから描けないことはないのです マリアの右手に持つ花。西洋ではバラが描かれて 一六五一年~一七二五年)はイタリアの冒険者 では、 聖画のなかの重要な その復刻

おられ、これはこれで、摩訶不思議な仕儀ではあるのである。〕シンボルを消すとは、いったいどのような心理状態だったのでしょうか』と疑問を呈して

を神物とする例、 燕、紀州にて、 多く予未刊の著燕石考に集めたり。 秋葉の神使なれば、之を殺さば火災有りと云傳ふ、

商売なども繁昌するとされる)や、喉と額が赤いことが火をイメージしつつ(フレーザーの 安心して営巣すること(本邦では、火災に限らず、古くから燕の営巣する家は万事安全で、 設)においては、 年十二月に『相次いだ』、『東京の大火の後』、『政府が建立した鎮火社(霊的な火災予防施 仏習合の神。 私は思う。 謂う類感呪術)も、それが逆に実際の火に対峙する防禦シンボルとなっているのであろうと 洞宗秋葉寺は山腹にある。グーグル・マップ・データ)の山岳信仰と修験道が融合した神 毀釈によって秋葉山は神社と寺院とに分離され、現在は秋葉神社上社は秋葉山山頂に、曹 に面白いエピソードなので敢えて引用した。閑話休題。思うに、**燕が人家の軒に繰り返し** して『信仰した。その結果、周囲に置かれた延焼防止のための火除地が「秋葉ノ原」と呼 に分社が勧請され』、『秋葉講と呼ばれる講社が結成された。また』、明治二(一八六九) 時代までは秋葉社と秋葉寺の両方が存在する両部神道であったが、明治の神仏分離・廃仏 岡県浜松市天竜区春野町領家にある赤石山脈の南端にある標高八百六十六メートルの 山頂近くに「火防の神」である秋葉大権現の後身である秋葉山本宮秋葉神社がある。 やぶちゃん注:「燕」スズメ目ツバメ科ツバメ属ツバメ Hirundo rustica。 後に秋葉原という地名が誕生することになる』とあった。「秋葉原」成立史の非常 ウィキの「秋葉権現」によれば、『火防の霊験で広く知られ、近世期に全国 本来』、『祀られていた』官製の神格は無視され、『民衆が秋葉権現』と 之を殺さば火災有りと云傳ふ」「秋葉」は「秋葉権現」。 (つばめ) (ツバメ)」を参照されたい。 秋葉山 は私 江戸 \mathcal{O}

c.1899-1903」(「燕の石」神話の起源)。明治三十二年から明治三十六年にかけて執筆され 取物語』にあらわれる安産のお守りとして、ごみを取りのぞくために目に入れる貝の蓋と る燕石の伝説に関して紹介していく。すなわち、石に関しては古今無双の博物学者である 凡社版『南方熊楠全集』別巻一に収録された。岩村によれば、草稿のうちの二種類のもの あるとだけ言っておこう。サイト「南方熊楠を知る事典」(私は原本一九九三年講談社 たもの。「燕石」とは、判り易く言えば、「竹取物語」に出る「燕の子安貝」もその一つで されないままに、英文も未刊で終わった、論文「The Origin of the Swallow-Stone Myth, 木内石亭の『雲根志』を参考にしつつ、薬用の化石として、 謄本とりにか、る」や、翌四月一日の「朝早起、燕石考清書謄本成る」の記事と合致する の不掲載となったこの論攷は、 す作品である。『ネイチャー』、 てられ、那智時代に補筆・完成された「燕石考」は、 (現代新書) 刊も所持している) のこちらによれば、 「燕石考」南方熊楠が最重要著作として、 おそらく最終稿と考えてよいであろう』。そこではまず、 一九〇三年三月三十一日の日付があるというが、これは同日の日記の「燕石考一本 『ノーツ・アンド・クィアリーズ』の両誌に寄稿したもの 五種類の草稿の形で残されていたのを岩村忍が校訂し、平 刊行を望んでいたが、遂に自身による邦訳も成 熊楠の英文論攷の一つの到達点を示 『ロンドン時代の終わりに構想がた 雲母片岩の一種として、『竹 『熊楠は中国・日本におけ

が、 結んでおられる。私は「選集」及び河出文庫版「南方熊楠コレクションⅡ 楠の英文論攷の到達点たり得ているとすれば、その理由は熊楠が数年にわたってこの統合 学」のモチーフと、 拠とする俗信の科学的な解釈という方法は、ロンドン時代の熊楠の英文論攷に多く見られ 熊楠が挙げていく「燕石」の伝説は、子安貝やスピリフェルの化石、貝の蓋、燕の習性な 考」の中には熊楠の答えを見つけることができず、曖昧な記述にとどまっている。だが 村忍氏の訳で著作権存続であるから、 引き継ぐものにほかならない。そして、「燕石考」において特徴的なのは、この「事の るものであり、人間の想像力のパターン性の追究という「事の学」のモチーフをそのまま させるために多産の象徴となる、 きだと思う』と筆者の松居竜五は評された後、 私は文章全体の調子からいって、この論文の場合にも西洋と東洋の間の文化伝播が示唆さ のそれを持っており、貝類学の趣味の関係上、 つの思考の流れが、ここで統合されようとしていることなのだ。つまり、「燕石考」が熊 るから「燕石」と呼ばれ、目の掃除用に使われる貝の蓋は酸に入れた時に小さな泡を発生 との外見上の類似から安産と結びつけられ、スピリフェルの化石はその格好が燕と似てい れているといってよいと』熊楠が『考えている』こと、『つまり』、『西洋の燕石の伝説 れているのである』。但し、ネタバレとなるが、『この疑問に対して、残念ながら「燕石 「燕石」の伝承のそれぞれと、非常に似通った対応をする伝承が西洋にもあることが記 て、 中国のそれと密接な関係を持ちながら形成されたことを熊楠が認めていた、 一つのキーポイントになっていることが注目されるだろう。つまり、子安貝は女性器 多岐にわたっている。 [みの場として「燕石考」を練り続けていた事実にこそあると考えられるのである』と といった東洋での「燕石」のヴァリエーションが挙げられる。そして、そうした 東洋と西洋の俗信を結ぶ文化伝播論のモチーフという熊楠の初期の二 それらをここであえて簡単に整理するならば、 といった具合である』。『実は、こうした形態的類似を根 残念ながら、 非常に好きな論文なのであるが、 内容について、 電子化は私の生きているうちには出来 『そのような宣言とともに 形態的な類似 南方民俗学」 孰れも岩 ととるべ

名物考卷一四四)、此鳥の動作乘馬に似たるに基くならん。 といへれば、 を尾びこ鳥と云りと述たり[やぶちゃん注:句読点無しはママ。]尾をピコピコ搖かすの 汝の如くクナガしめよと望むを常習とせる遺風にやと思はる、伴氏は山城邊の兒童、鶺鴒 を詳にせざれども、古え此鳥を見る時祝して、吾にも頓て[やぶちゃん注:「やがて」。] 擧たり、媚薬に用ひたるにや有む、但し予が現住する紀州田邊では、小兒此鳥を見る每 1851.) と云ふに、吾邦に古來此鳥を尊崇せしことを聞かぬは、恩に負く [やぶちゃん注: 者其肉を媚藥に作れり(Dufour, 'Histoire de la Prostitution,'tom. i. P. 40, Bruxelles, テ」神の秘密儀は、 も、「逢ふ事を稻負せ鳥の教え[やぶちゃん注:ママ。]ずば、人を戀路に惑はましやは」 み」。伊耶那岐と伊耶那美のこと。]の二尊に男女の大道を教へ奉れる鳥なれば、和泉式部 男女交接の時、男の行ひを「クナグ」と唱ふる也。と云り。諾册[やぶちゃん注:「き・ に、「ミコテウ尾を振れ杓[やぶちゃん注:「ひしやく」。]に一盃金やらう」と呼ぶ、子細 「そむく」。」の甚しき者なり、支那には諸本草之を載せず、大清一統志に其名有る産地を **鶺鴒、伴信友の比言婆衣卷十八に、黃鶺鴒[やぶちゃん注:底本は『黃鶺諾』である** 原本(後掲)と初出で訂した。〕を「ニハクナギ」、背黑き者を「石クナギ」と云ふ、 川柳にも、 此等より「ミコテウ」の名出來れるか、支那の厩神像鶺鴒を踏めるも(類聚 神林中にて行はれしが、其林に信徒より献納せる鶺鴒鳴き遊べり、術 「鶺鴒も一度教へて呆れ果て」とよめり、古え西亞細亞の「アスタル

「神代上」 に属するセキレイ類。私の「和漢三才圖會第四十一 スズメ目スズメ亜目セキレイ科セキレイ属 Motacilla・イワミセキレイ属 Dendronanthus [やぶちゃん注:「鶺鴒」「せきれい」。尾を上下に振ることでお馴染みの私の好きな鳥、 (セキレイ)」を参照されたいが、かなり知られている、「日本書紀」の巻第一の 」)をするシーンについて、 の第四段の一書(第五)に、 初めて伊耶那岐命と伊耶那美命が交合 水禽類 鶺鴒(せきれひ/にはくな

一書曰。陰神、先唱曰。美哉。善少男。時以陰神先言故、爲不祥。更復改巡。則陽神先唱 美哉。 善少女。 遂將合交、而不知其術。 時有鶺鴒飛來搖其首尾。 二神見而學之。

交の道を得。

一書に曰はく、「陰神、先づ唱へて曰 はく、『美哉、善男を』。時に陰神、言を先つるをといる。「陰神、先づ唱へて曰 はく、『美哉、善少女を』。遂に合交せむと將るに、而かも、其の術を知らず。時に、 鶺 鴒 有 以つての故に、『祥なし』と爲し、更に復た、改め巡る。則ち、陽神、先づ唱へて曰く、以つての故に、『祥なし』と爲し、更に復た、改め巡る。則ち、陽神、先づ唱へて曰く、以つての故に、『祥なし』と爲し、更に復た、改め巡る。則ち、陽神、先づ唱へて曰く、以つての故に、『祥なし』と爲し、更に復た、改め巡る。則ち、陽神、先づ唱へて曰く、「陰神、先づ唱へて 曰 はく、『美哉、善男を』。時に陰神、言を 先 つるを

Dendronanthus indicus は左右に振る)をミミクリーとして喩えたに過ぎず、実際のセイ くと、それは長い尾を上下に振る習性(但し、イワミセキレイ属イワミセキレイ が首と尾を振る動作から、それを学んだと伝える(「古事記」にはない)。但し、 黒板勝美編 イの交尾行動とは関係がないので注意が必要である。 上卷」を参考にした)、二柱はコイツスの仕方をセキレイ 言ってお

段後ろから六行目以降で(句読点を打ち、 国学者で。「比言婆衣」(ひこばえ)は弘化四(一八四七)年から刊行を始めた、 図書館デジタルコレクションの画像ではここからで、引用はまず、 の国史・言語・故事の考証随筆。同書の巻十八の巻頭にある「鶺鴒考」の一節。国立国会 「伴信友の比言婆衣卷十八」伴信友(安永二(一七七三)年~弘化三(一八四六)年)は 推定読みを添えた)、 次のコマの左ページ下 全二十巻

*

鶺鴒をニハクナギ、 むねと脊黑の、もはら、川邊に居り、黃鶺鴒の庭にもより來るものなるをもて按 背黑を石クナギとぞ、 別ち云ふめる。

*

集)』とし、『中国の「詩経」には「脊令」とあるが、 言及民俗誌)。生息地のひとつ岐阜県高山では、セキレイをいじめると、「親死ね、子死 南関では子供らがムギわらでセキレイの形を製し、「したたきたろじゃ、 だりに捕らえないのは神使以上に神に交道を教えた万物の師の意味があるという。 なる比較的な謂いであるから、他種も含む可能性が全くないとは言えない。なお、ウィキ cinerea に、「石クナギ」はセグロセキレイ Motacilla grandis に比定同定できそうだが、単 は、學問にて伊邪那岐命の交合の術を學給ふ問となりたる由緣なり』とあるのを繋げたも御歌に麻那婆志良』とあるのを解して、次のページの上段八行目以降に、『麻那婆志良 キレイにまつわる伝承がある。静岡県三島、広島県などではセキレイを神の鳥と称し、み めに置き、鶺鴒の一つがいを飾る)『があるのはそれに由来する』とし、『日本各地にはセ の「セキレイ」の「文化」には、 トツギオシエドリ、トツギマナビドリ、ツツナワセドリ、ツツマナバシラ、ミチオシエド あるかはつまびらかにしないという』とある。また、セキレイには他に、『トツギドリ、 模様があるという(和訓栞)。台湾のアミ族の神話では、日本海の竹島ボトルに男女』二 のである。因みに、色からは単純には「ニハクナギ」はセキレイ属キセキレイ Motacilla 『尻を振り動かす意が多く、ついで尾で物を叩く意、 『神が天下り、ホワック(セキレイ)が尾を振るのを見て交合の道を知った(生蕃伝説 :婚礼の際に供える床飾りの一つ。島形または州浜形で、足は雲形。台上には岩を根固 鍋も茶碗も破れて終え」と鳴いて呪うという。伊勢神宮の神衣大和錦にはセキレイの あした来て叩け」と囃しながら、脚を持って頭尾を上下に動かして遊んだ(動植物方 後の部分は、最初の異名羅列の中の下段一~二行目の『古事記朝倉宮の卷に載たる 飛翔の時に発するチチンチチンという鳴声に関するものなどがある』とある。 セキリ』『などの別名があ』り、『その別名は、 「逢ふ事を稻負せ鳥の教えずば、 以上の神話を語り、 人を戀路に惑はましやは」と詠じ』 脊(身体の背部)を揺るがす意味が 動作の形容、 『婚礼の調度に鶺鴒台』(せきれいだ 英語の wagtail と同じく』、 出現の時期場所に関す 今日は石ゃない 熊本県

ノ上」に古歌として、 正規の和泉式部の一首ではない。 平安末期の歌学書である藤原清輔「奥儀抄」 の

逢事をいなおほせどりのをしへずば

人をこひぢにまどはましやは

戸川柳」の「4 神話」によれば、 『川柳にも、 「鶺鴒も一度教へて呆れ果て」』個人サイ 本句の他に、 「岩田 ヶ丘から駄句冗句」 の 江

鶺鴒は人より先に色氣づき

鶺鴒は極祕を神に傳授なり

か樣遊ばせと鶺鴒びくつかせ

ヲホホとアハハ鶺鴒の尾に見とれ

ああ成程と伊弉諾の尊乘り

鶺鴒の教へた外を色々に

鶺鴒は茶臼とまでは教へねど

などがあるらしい。また、 他のネット記載では、 都都逸にも、

神に教へた鶺鴒よりも

おしの番ひが羨まし

というのがあるそうである(私は川柳も都都逸も守備範囲でないので出典は不明であ

よれば、古代セム人の豊穣女神。バビロニアでは「イシュタル」、「旧約聖書」では「アシ ア神話のアルテミスやアフロディテなどに対応する、とある。 大地の生産力の象徴で、愛と戦いの女神であり、金星がそれを支配する星とする。ギリシ ュトレト」乃至「アシュタロト」と呼び、古代中東で最も広く崇拝された大母神とある。 『「アスタルテ」神』ラテン文字表記で「Astartē」で、平凡社「百科事典マイペディア」に

至る全世界の民族に於ける売春の歴史)。原本を見つけたが、どうも見当たらない。 les peuples du monde depuis lantiquité la plus reculée jusqu'à nos jours」(最古の古代から現代に ピエール・デユフォー(Pierre Dufour)名義で書いた、「Histoire de la prostitution chez tous ペンネームを用いた作家ポール・ラクロワ(Paul Lacroix 一八〇六年~一八八四年)が、 「Dufour, 'Histoire de la Prostitution,' tom. i. P. 40, Bruxelles, 1851.」フランスの作家で複数の

府」の一番最後に、「土産」として、『鶺鴒【府志當陽縣出】』と出る。 八四二年に完成した。「中國哲學書電子化計劃」で調べたところ、巻二百六十六の「安陸 いて記した総合地誌。清建国(一六四四年)から約四十年後の一六八六年に着手され、 「大清一統志に其名有る産地を擧たり、媚藥に用ひたるにや有む」清代の全支配領域につ

の変形とする(ほのめかされた一種の性教育)のも私は決して退けるものではない。 「ミコテウ」不詳。可愛らしい小鳥で「美小鳥」としたくなるが、これは案外、神話繋が 神楽舞に於ける「巫女鳥」なのかも知れない。但し、 熊楠の結論たるコイツスの意

「伴氏は山城邊の兒童、鶺鴒を尾びこ鳥と云りと述たり」先の「比言婆衣卷」の続きのこ

(右ページ上段六行目)。

番)である。まず前者から(基礎データは岩波古典文学大系版を使用したが、 事」(五二七番)で、今一つは同じ巻の「聖覺法印の力者法師築地つきを罵る事」(五四三 持する版本も参考にした)。 められる。一つは「卷第十六(興言利口」の「坊門院の蒔繪師 某、大假名にて返事の『交合を「マク」と云ふ詞、古今著聞集に見え』これは私が調べたところでは、二話で

*

坊門院に、年比めしつかふ蒔繪師ありけり。仰せらるべき事ありて、

「きと、まいれ。」

と仰られたりければ、あさましき大假名にて御返事を申ける、

「たゞいまこもちをまきかけて候へばまきはて候てまゐり候べし」

と、かきたりけり。此ふみの詞は、あしざまによまれたり。

「こは何事の申やうぞ。」

とて、 を途中で止めて。〕、なげたりけり。これによりて、蒔繪師がもとへかさねて、 臺所のさたしける女房、その文を見さして [やぶちゃん注:「見止さして」。

「いかに、かやうなる狼藉の言葉をば申すぞ。たゞいまの程に。たしかに、 參れ。」

と仰られければ、蒔繪師、あはてふためきて、まいりたりけるに、

「此御返事のやう、いかなる事ぞ。」

とて、見せられければ、

「すべて、申しすごしたる事、候はず。『只今、御物を蒔きかけて候へば、 蒔きはて候ひ

て參り候べし』と書きて候へ。」

き事なり。 と申ければ、 げにも、さにて、 ありけり。假名は「よみなし」といふ事、 まことにをか

*

す最中で御座いますれば、その交合を終えましてから、やおら、参りましょう。」というその読みとり方(「よみなし」)を、女房が誤って、「只今、子持ち女を枕きかけておりま えてから、参上致します。」の意であるが、すべて大きな「かな文字」で書いたために、 トンデモない意味にとってしまったのである。次に五四三番。 「たゞいまこもちをまきかけて候へばまきはて候てまゐり候べし」これは「只今、御物 [やぶちゃん注:御道具。] を蒔きかけている最中にてありますによって、それを蒔き終

×

を築かせけるに、築くものども、をのがどち、物語すとて、 っ特明院に「なつめだう」といふ堂あり。淡路入道長蓮が堂なり。築地のくづれたりける持明院に「なつめだう」といふ堂あり。淡路入道長蓮が堂なり。突ょり 聖覺法印の説經の事などをか

といふを、ともなる力者法師、きょとがめて、其折しも、聖覺、輿にかょれて、其前を、とをりけるに、 これらが物語に、 「聖覺の」

「おやまきの聖覺や、はゝまきの聖覺や。」

など、ねめつゝ見かへり、にらみけり。

築地つきをのるにてはあれども、 當座には、 主をのるとぞ、 聞えける。

と、かの法印、人にかたりて、わらひけり。「かゝる不祥こそありしか。」

*

られたかのように感じて、「こんな当惑することに遭うたこともありましたのう」と回想た。それを輿の中でわけも判らず、耳にした聖覚が、突如、自分のことを、その法師に罵 合ったどこぞの畜生の聖覚かッツ?!」と築地築きの職人たちに嚇しをかけたのであっ 覚さまではない、親とまぐわったどこぞの犬の聖覚かッツ?! それとも、母親とつるみ 師。その彼が、下賤の者が尊き法主である主人の名を呼び捨てして話しているのをちら聴 親鸞は「唯信抄」を人々に勧め、それをもとに「唯信抄文意」を作っているほどである。 賤の者に相応しい言い方で、「おやまきの聖覺や、はゝまきの聖覺や。」、則ち、「本物の聖 きして、てっきり悪口を言っているものと勘違いし、彼らを威圧するために、如何にも下 を著わしたことでも知られる。法然の弟子の内で、親鸞が特異的に尊敬した一人であり、 して述べたというのである。 信任を得、安居院一流の基礎を築いた。天台僧である、後に法然の門に入り、 信西の孫で僧・歌人。安居院法印。父の業を継いで、「聖覺」(しょうかく/せいかく 仁安二(一一六七 「力者法師」寺院に仕え、僧体を成しながらも、輿舁きや力仕事に従事した筋肉系の荒法 仁安二 (一一六七) 年~文曆二 (一二三五) 年) 藤原 説経・唱導の名人として後鳥羽院の

館随筆大成版の活字本もあるが、ここでは「人文学オープンデータ共同利用センター」の よる。 改名した校刊本が出版された。題名は各条末に推量表現「なるべし」を用いていることに 元(一七三六)年「可成談」という書名で刊行されたが、遺漏の多い偽版であったため、 のを示す。 スと云ふ也」』「南留別志」荻生徂徠が書いた考証随筆。宝暦一二(一七六二)年刊。元文 『南留別志に「ミトノマクハヒ」と云ふ詞、ミとはメヲト也、 「日本古典籍ヴューア」にある刊本(宝暦一二(一七六二)年版)の当該部を視認したも 四百余の事物の名称について、語源・転訛・漢字の訓などを記したもの。吉川弘文 頭の「一」は外した。 句読点・記号を添えた。 マクハヒ今も田舍にてメグ

×

い」といふ詞、今も田舎にて「めぐす」といふなり。 「みとのまくはい」といふ詞、「みと」は「めをと」なり。 夫妻といふ事なり。「まくは

*

た。国立国会図書館デジタルコレクションの画像で同刊本を視認したところ、ここに発見 した(巻百四十四の「武備部十一」の「馬」の内の「猿を馬の守りとする事」の文中であ で、「泥朗子」の名で洒落本「跖婦人伝」を書き、「逸著聞集」を著わしている)著。成立 (享保一一(一七二六)年~安永九(一七八〇)年:号は明阿。賀茂真淵門下の国学者 (百科事典)で全三百四十二巻(標題十八巻・目録一巻)。幕臣で儒者であった山岡浚明「支那の厩神像鶺鴒を踏める」「類聚名物考卷一四四」。「類聚名物考」は江戸中期の類書 「支那の厩神像鶺鴒を踏める」「類聚名物考卷一四四」。「類聚名物考」は江戸中期の 説明文中の字空け部その他必要と判断した箇所は句点或いは読点に代えた。 明治三六(一九〇三)年から翌々年にかけて全七冊の活版本として刊行され

劍を持しめたり。 神とて、厩の神在す。その形像を圖するにハ、兩足の下に、猿と鶺鴒とを踏せて、二手に なる猿をハ、山父と稱し、馬をバ山子と云へハ、父子の義を以て、守りとする歟。但馬櫪▽歳を馬の守りとする事(○〔萬物故事要决五〕猿を馬の守りとて、馬屋に掛るハ、如何 にや、櫪の字ハ、ふみいた、なり。然るを、馬寮式云、以□櫪艘□、宛□馬二疋□、と云々、劍を持しめたり。宋朝にハ、是を馬の守りとそ。化神の踏る物なれハ、猿ばかりをも用る うまぶねとも讀なり。 常にハ槽字を、うまぶね、と、よむ。櫪ハ二ツに通するには。

名が出る。] 参照されたい。 あるから、「支那の厩神像」と熊楠が言うのは問題ない。この図像は、私の『柳田國男 る。続く、同じ『「河童駒引」(28) 民譚集 原文・訓読・附オリジナル注「河童駒引」(32) (1)』で解説され、私がネットで拾った「北斎漫画」の「馬櫪尊神」の画像を掲げてあ山島民譚集 原文・訓読・附オリジナル注「河童駒引」(2) 「馬櫪神ト馬步神」 ス」のここで当該箇所を視認出来る。「宋朝にハ、是を馬の守りとそ」(「そ」は「ぞ」)と この「櫪」とは馬屋(厩)のこと。 「萬物故事要决」は享保一二(一七二七)年刊の類書。「新日本古典籍総合データベー 後者では、 たまたま、 「猿と河童」について、 「馬櫪神ト馬步神」(2)』及び、少し後の『山島 「守札ヲ配ル職業」(2)』も 熊楠が情報提供しており、

Asiatic Society of Bengal, vol. xi. p. 1124, 1842)非列賓島は鳶が水を蹴て作りし所と云古傳有 ナ」に奪ひ去らる、途上、鳶出で、「ラヷナ」と鬪ふ話あり、 り評判の宜しからぬ樣なれど、金鵄瑞を呈して、長髓彦伏誅せし例もあれば、ずつと大昔 詰たるに大鳶と成て落ちたりと載せ、戴恩記に、魔法成就の時、鳶來り鳴くと云たり、餘 して小兒に苦られし話有り、 ≶ (F. Colin, 'Historia Filipinas,' Madrid, 1663, p. 64) ○蘆、倭漢三才圖會卷四十四に、愛宕神鳶を使者とすと云ひ、十訓抄に天狗鳶の形を現 鳶も多少尊崇されしと見ゆ、印度には「ラマ」王の美后「シタ」、惡鬼王「ラヷ 今昔物語に、源光公、五條道祖神祠の柹樹に現ぜる佛を睨み (Raevenshaw, Journal of the

migrans lineatus)の博物誌も含めて、私の「和漢三才圖會卷第四十四 正規表現に直されてある平凡社版「選集」のそれで特異的に訂した。 判り切ったものらしいが、記号の脱落も見られ、注記としては、甚だ不親切であるので、 1124, 1842)』となっており、底本と初出を見るに、明らかに雑誌の縮約表記で、熊楠には 1842)』となっている。 1124, 1842)」の部分は底本では、『(Raevenshaw, Journ. As. Soc. Bengal, vol. xi p. 1124, されている。 な時から私のお気に入りの「トンビ」、タカ目タカ科トビ亜科トビ属トビ亜種トビ Milvus 「倭漢三才圖會卷四十四に、愛宕神」(あたごしん)「鳶を使者とすと云ひ」鳶(姿も小さ [やぶちゃん注:引用注記の「 (Raevenshaw, Journal of the Asiatic Society of Bengal, vol. xi. p (トビ)」を参照されたいが、良安は鳶が嫌いだったらしく、評釈部では不当に貶 以下に引く。 初出はと見ると、『(Raevenshaw, Journ. As. Soc. Bengal', vol. xi p. 山禽類

ざるなり。鳴く聲、「比伊與呂與呂」と曰ふがごとし。朝、鳴けば、卽ち、雨、に、俗傳に曰はく、「愛宕の鳶」・「熊野の鳥」、以つて神使と爲す。未だ、其の 而も、 尾羽も亦、箭羽に造り、之れを「礒鷲羽」と名づく。しかれども、最も下品なり。脚公按ずるに、鴟、狀、鷹に似て赤黄色、羽毛、婆娑として、尾、扇を披くがごとし。 鳴けば、 俗傳に日はく、「愛宕の鳶」・「熊野の烏」、以つて神使と爲す。未だ、其の「據」を知ら多く、之の鳥、有り。人の爲めに、憎まる[やぶちゃん注:ママ。]所 なり。然るへ、提 げ 攜 へる所の魚物・豆腐等を攫む。總て鳶・鴉は、害、有りて、益、無し。 即ち、 晴る【「三才圖會」の說と少し異なれり。】。

を知ら

ある愛宕神社は『迦遇土槌命(カグツチノミコト)を主祭神として、広く全国に火伏せ ある』が、『元来、愛宕神社(本社)の神使は、 る)愛宕神社は全国に約九百社ほどあるが、その総本社は京都府京都市右京区嵯峨愛宕町 正に嫌悪丸出しである。「愛宕神」(以下は同前リンク先で私が附したものを再加工してあ られたとの故事などに因んで、「猪」とされている』。 にある愛宕神社(旧称は阿多古神社)。サイト「神使の館」の「鳶~トビ(1) (防火)の神として知られている』。この『大豊神社の末社「愛宕社」には「鳶」の像が (大豊神社内) と鳶」によれば (大豊神社は京都市左京区鹿ヶ谷宮ノ前にある)、総社で 神社の創建者である和気清麻呂が猪に助け 『しかし、 この大豊神社では、先代の

諺が紹介されており、『京都市上嵯峨北部の愛宕山の山頂には愛宕神社があり、雷神を祭ら ば、「愛宕殿鳶となるれば鳶の心あり」「太郎坊も鳶となりては鳶だけの知惠」という二つの 調べた中村和夫氏のサイト「鳥のことわざ」の「鳶(トビ)」(現存しない模様)によれ ○)年に(引用元は一年誤っている)『制定された軍人の最高位の勲章、「金鵄勲章」(キ 初代天皇として即位されたとされる』。『現在は廃止されているが』、明治二三(一八九 ミコト)が日向(宮崎県)から東征の途次、長髄彦(ナガスネヒコ)との戦いで苦戦して 彫られた石柱上に鳥がとまっている碑があ』り、『この鳥は、日本書紀に載る「金鵄(キ もらえるかもしれない』とある。同サイトの「鳶~トビ(2) 衆」のことを「とび」ともいうので、防火を祈って鳶像が奉納された』としても勘弁して れた』。『それなら、『愛宕社が防火鎮火にご利益のある社であることに因んで、「火消し 年と恐ろしく新しい)『すなわち、鳶像は、新しい由縁が創られて、それに基づいて建てら 建てたとされる』(写真有り。但し、そのキャプションによれば、昭和四七(一九七二) 宮司が境内の末社「愛宕社」に、愛宕山の天狗がかぶる鳶帽子から、鳶を神使として像を ちが住んでいるとされた』が、『「愛宕殿」とはこの天狗を指して、これがトビになってしま れ、防火の神として信仰されている。ここには愛宕太郎坊と云う大天狗に率いられた天狗た ンシクンショウ)はこの伝承に由来する』とし、『この碑は、皇紀』二千六百『年を記念 て勝利をもたらしたという』。『神武天皇は、その後、大和を平定して橿原(かしはら)で もたらした』とし、福岡県福岡市博多区月隈にある八幡神社の『境内に、「神武天皇」と も指示するように、 **ビを軽蔑している』ともあった**のだ。愛宕と鳶の関係は、「鳶」の本文で良安が言い、熊楠 えば、それなりの心』しか持たない、『つまらぬものなってしまうという意で、いずれもト いると、金鵄が天皇の弓の上端に飛来し、金色のまばゆい光を発して敵兵の目をくらまし ンシ)」と呼ばれる「金色の鳶(トビ)」』とあって、『神武天皇(カムヤマトイワレビコノ して昭和』一五(一九四○)『年に建てられたものと思われる』とはある。しかし、嘗て 金色の鳶)」には、『神武天皇が東征の折、弓の先に金色の鳶(金鵄)が飛来して勝利を 神武天皇の金鵄(キンシ

住む。天狗神を領せしむ。』と。【小説と雖も、附會なれども、之に記す。】。欲す。」と。卽ち、奏して曰はく、「山背國、怨兒山に住むべし。」と。仍りて、其の山に吾、此の國に住みて、軍戰の業を護らん。」と。又、問ひて曰はく、「何くの處に住まんとはく、「何れの神や。」と。奏して曰はく、「天照大神より勅を奉り、鳶に化して來たる。 分。]に止まり、狀、流るる電光のごとし。由て、敵軍、皆、迷眩み、天皇、悅びて問いない。といい、これのではず」と読む。弓の両端の弦をかけるところ。ここは無論、それを上に掲げた部 たず。時に、金色の鳶、飛び來たりて、皇の弓弭[やぶちゃん注:通常は「弭」一字で『天 人 熊 命、化して、「三軍の幡」と成る。而して後、神武天皇、長髓彦と戰ひて、勝為#のひとはのかに。 サース はか はた 。 それを上に掲げた部

に同定比定されて後、 (前半は「日本書紀」の記載に基づく)の俗伝に基づくとは考えられるが、「金鵄」がト つの時代からなのかが、よく判らぬ(「とび」という呼称自体(但し、 特に種としてのトビが「愛宕の神の使い」とされるようになったの 本当に本種に

限定していたかどうかは私は怪しいとは思う)は奈良時代に既にある)。江戸時代よりも どこまで溯れるのか、御存じの方は御教授願いたい。

収)も是非、読まれたい。 事」(心の操を定むべき振舞の事」の中の一条。私は既に【柴田宵曲 續妖異博物館する説もある。建長四(一二五二)年の序がある。これは、その「第一 可定心操振 鎌倉幕府御家人湯浅宗業(むねなり)建久六(一一九五)年~?:紀伊保田荘の地頭で、 る)。三種の諸本を参考に私が独自に読み易く操作したもので、「諸國里人談卷之二 と号した)の通称ともされるが、一方で公卿菅原為長(保元三(一一五八)年~寛元四 本の一つである妙覚寺本奥書によって、六波羅二臈左衛門入道とするのが通説で、これは う(じっきんしょう)」と読むことにしている。 原拠として書かれた、私の「小泉八雲 天狗の話 在京して六波羅探題に仕えた。弘長二(一二六二)年に出家し、かの明恵に帰依し、智眼 (一二四六) 年:鎌倉初期の学者。 「十訓抄に、天狗鳶の形を現して小兒に苦られし話あり」「十訓抄」は私は「じつきん 「佛と魔」(その1)』の注で原典を電子化している(リンク先には宵曲の現代語訳も載 成大會」の私の注でも再掲してあるので、流石にここで屋上屋はしない。また、 文章博士・参議兼勘解由長官で有職故実に通じた) 鎌倉前・中期に成立した教訓説話集。 (田部隆次訳)」(作品集「霊の日本」所 可定心操振舞 四妖異 同話を

臣」と号した。なお、彼は昌泰四(九○一)年の「昌泰の変」に於いて、藤原時平と結託 し、菅原道真を失脚させた張本人の一人とされ、 平安前期の公卿で、仁明天皇の皇子(第三源氏)。 木末に坐す語第三)。主人公 源(光)(承和一二(八四五)年~延喜一三(九一三)年)はちたり、と載せ」「今昔物語集」卷第二十の「天狗現佛坐木末語第三」(天狗、佛と現じて 体が上がらなかった。世人はこれを道真の怨霊の仕業として畏れ慄いたと伝わる。 したが、延喜十三年三月十二日、鷹狩に出た際、不意に塹壕の泥沼に転落して溺死し、遺 「今昔物語に、源光公、五條道祖神祠の柹樹に現ぜる佛を睨み詰めたるに大鳶となって落 (承和一二 (八四五) 年~延喜一三 (九一三) 年) は 道真の後任として正三位・右大臣に叙任 官位は正二位・右大臣。「西三条右大

*

現じた標識であり、 ん注:実の成らない。]柿の木、有りけり。[やぶちゃん注:当時、不実の柿の木は異界を今は昔、延喜の天皇の御代に、五條の道祖神の在ます所に、大きなる成らぬ[やぶちゃ 霊妖の宿るものと考えられていた。〕

無し。車も立て敢へず、步人、は云ひ盡すべからず。此の如き、禮み喤る間、旣に、などを降らしめなどして、極めて貴かりければ、京中の上中下の人、詣で集まる事、其の柿の木の上に、俄かに、佛、現はれ給ふ事、有りけり。微妙き光を放ち、樣々 既に、

された。]の御子也。身の才、賢く、 された。]の御子也。身の才、賢く、智、明か也ける人にて、此の佛の現じ給ふ事を、頗在の京都府京都市伏見区深草に営まれて深草陵とされたことから、異名として深草帝と称 る心得ず思ひ給ひけり 其の時に、光の大臣と云ふ人、有り。深草の天皇[やぶちゃん注:仁明天皇。 御陵が現

此く俄かに木の末に出で給ふべき樣無 此れは、 天狗などの所爲にこそ有

るめれ。外術は七日には過ぎず。 今日、我れ、行て見む。

上げて見給へば、實に木の末に、佛、在ます。若干の諸、集まれる人を掃ひ去けさせて、車を搔き下して、榻を立てて、車の簾、そして、檳榔毛の車に乘りて、前驅など直しく具して、其の所に行き給ひぬ。またれる人と思ひ給ひて、出で立ち給ふ。日の裝束[やぶちゃん注:晴れの装束。衣冠束帯。]、と思ひ給ひて、出で立ち給ふ。日の裝束[やぶちゃん注:晴れの装束。衣冠束帯。]、 直し

を卷き

無し。 金色の光を放ちて、空より様々の花を降らす事、 雨の如し。 見るに、實に貴き事、

れたるに成りて、木の上より、土に落ちて、ふためくを、多くの人、此れを見て、 たものか。]、忽ちに大きなる屎鵄[やぶちゃん注:現行では、奈良時代には、これはトビー 降らしなど有りけれ、。强に守る時に、侘て[やぶちゃん注:どうにも辛抱できなくなっぶちゃん注:現在の二時間。]許り守り給ひければ、此の佛、暫くこそ、光を放ち、花を に似たタカ目タカ科ノスリ属ノスリ Buteo japonicus を指したとされている。]の、 而るに、大臣、 頗る怪く思え給ひければ、佛に向かひて、 目をも瞬がずして、一

「奇異也。」

と思けり。小童部[やぶちゃん注:子供たち。]寄りて、 彼の屎鵄をば、 打ち殺して

大臣は、

と云ひて、 は現はれ給ふべきぞ。人の此れを悟らずして、 「然ればこそ。[やぶちゃん注:思った通りじゃ。]實の佛は、何の故に、 返り給ひにけり。 日來、 禮み喤るが、 愚かなる也。」 俄かに木の末に

の人も、此れを聞きて、 然れば、 其の庭「やぶちゃん注:その場。 の若干の人、 大臣をなむ讚め申しけ Ď.

「大臣は賢かりける人かな。」

と云ひて、讚め申しけりとなむ、 語り傳へたるとや。

本話は「宇治拾遺物語」に同文的同話が載る(三十二話「かきの木に佛現ずる事」。 がらすナビ」 のこちらで読める)。

からず。 板行された。 た松永貞徳著になる歌学書。正保元(一六四四)年頃の成立で、天和二(一六八二)年に ているもの。 「戴恩記に、 ネット 著者の師事した細川幽斎・里村紹巴らの故事や、その歌学思想を平易に述べ 魔法成就の時、 で原本が見られるものの、 鳶來り鳴くと云たり」「戴恩記」俳人・歌人・歌学者であっ 草書崩しでとても探す気にならない。

あれば」前に「和漢三才図会」でも示したが、「日本書紀」神武天皇の条の以下。 「金鵄」(きんし:金色に輝く鳶。)「瑞を呈して長髓彦」(ながすねひこ)「伏誅せし

に忽然、天陰けて、雨たります。とります。とります。とり上が下れている。 其の鵄、 光り曄煜きて、狀、流電の如し。是に由りて、長髓彦が軍卒、皆、て、かかや、かたち、などであれる。乃ち、金色の靈しき鵄有りて、飛び來りて、皇弓の弭に雨冰ふる、乃ち、金色の靈しき鵄有りて、飛び來りて、皇弓の弭に一、皇師、遂に長髓彦を撃ちて、連に戰へども、取勝つこと能はず。吐

と爲す。皇軍の鵄の瑞を得るに及びて、時の人、迷ひ眩きて、復た、力め戰はず。長髓は、是れ、*** ふは、是、訛れるなり。 邑の本の號なり。 仍りて「鵄の邑」と號く。 因りて亦以つて人の名 鳥見と云

*

呼ばれるようになり、さらに変化して富雄村となった』とある。 により、『当地を鵄邑(とびのむら)と名付けた』。『後世、鵄邑は鳥見郷または鳥見庄と みおもとまち)(グーグル・マップ・データ)を中心とした奈良西部の広域に比定され 「訓讀 日本書紀 読は国立国会図書館デジタ ウィキの「富雄町」(とみおちょう:旧生駒郡富雄村/富雄町)によれば、この神話 中卷」を参考にした。「鳥見」は現在の奈良県奈良市富雄元町 ルコレクションの昭和六(一九三一) (ک

君主像であり、ダルマを体現した存在とされる。 で、イクシュヴァーク王朝に生まれた薔薇色の瞳を持つ神話最大の英雄で、インドの理想 『「ラマ」王』ラーマ (デーヴァナーガリー)。インドの叙事詩「ラーマーヤナ」の主人公

belt)の中の一つ)の命名の由来となり、宮崎駿のアニメーション「天空の城ラピュタ」 星「シーター」(244 Sita:火星と木星の間にある小惑星帯(アステロイドベルト:asteroid ラーマがシーターを奪還するための戦争が「ラーマーヤナ」の主題ともなっている。小惑 月のように輝く歯と山のような巨体を持つとされるラークシャサ(羅刹)の王で、ランカ 森で羅刹王ラーヴァナ(熊楠の言う『惡鬼王「ラヷナ」』。十の頭、二十の腕、銅色の目、 ヒロインであるシータ(英語表記:Sheeta)のモデルともされる。 -島(現在のセイロン島)を本拠地とし、ラークシャサ族を治めたとされる)に攫われ、 (現在のネパール)とされる。ジャナカ王の娘で、ラーマ王子の妃。しかし、ダンダカの 『美后「シタ」』シーターは「ラーマーヤナ」のヒロイン。生まれ故郷はジャナカプール

Heritage Library」のこちらの雑誌合本の以下。 Raevenshaw, Journal of the Asiatic Society of Bengal, vol. xi. p. 1124, 1842 | Biodiversity

*

her off to Lunka. grief. Coming to the place where the kite lay half-dead, the kite told them that Ravana had carried Luchmun returned to the hut, and not being able to find Seta any where, they were overcome with Sensoopah, in the orchard called Usoka, succeeded in wounding the kite. In the mean time Rama and On the road a large kite attacked Ravana, who, however, having placed Seta under a tree called

*

年~一八七七年)で、彼は英領インド帝国下のインド東部のオリッサの地方長官を務めた とはエドワード・クックボーン・ラヴェンショウ(Edward Cockburn Ravenshaw abstract Translation from the Pudma Pooran. By E. C. Ravenshaw, Esq ムあり、 E. C. Ravenshaw 四年:在任期間は一八六五年から一八七八年) トーマス・エドワード・ラヴェンショウ(Thomas Edward Ravenshaw 一八二七年~一九一 「the kite」が鳶である。さらに、この文章の標題部分 p1112 に、The Avatars of Vishnoo. An の叔父に当たる人物である。

「非列賓」フィリピン。

の歴史」。] ランシスコ・コリン(Francisco Colin 一五九二年~一六六〇年:マニラ)著「フィリピン「F. Colin, 'Historia Filipinas,Madrid, 1663, p. 64」イエズス会会員でスペイン人の東洋学者フ

三七に云り。 蛇章質盡く白きを見、逃げ歸りしが、白鼠白蛇は寶物の變成せる也てふ事を思ひ出し、 出たる事也とあり、 ゃん注:ママ。」、拜し念じて效ありと信ずる人有り、 て搜て金銀を夥く得たる由見ゆれば、白鼠白蛇を大黑と辨財天の使令とするは、 蛇 [やぶちゃん注:底本は「世間」。 紀州に齒痛む者、 されど輟耕錄卷七に、趙生薪を伐て業とし貧なりけるが、山 他人の打殺せる蛇を貰ひ受け、埋めて之に線香を供え[やぶ 初出に従った。]云ふことらし、と類聚名物考卷三 山二二七頁に、白蛇崇拜は僞經より 漢土にも に入て巨

邦に於ける動物崇拝」』に、 [やぶちゃん注:「山二二七頁に、 白蛇崇拜は僞經より出たる事也、 とあり」「山 中笑

*

より、 辨才天品は眞經なれど、 文、なし。されば、 珠陀羅經上略其形如天女頂上有寳冠中有白蛇中略此神王身如白蛇如白玉下略とあれども、 **偽經なること、沙門浮巌の大辨才天秘訣に、詳に辨明あり。** 起りしなり。 辨才天の使者、又は、化身として崇拜さるれど、經文に、其證、 白蛇崇拜は僞經より出たる、 自餘、悉く僞經なり、と說けり。 となり。白蛇の宇賀神説も、 大辨才天品には、白蛇に關せる 淨嚴は、 無し。 最勝王經の大 頓得如意寶 前記の偽經

*

ないかと思うている。 とあるのを指す。私は基本的に白蛇の崇拝は仏教以前に神道系の神使としてあったのでは

部の漢字を正字化して示したが、原本画像も視認出来る。と言っても、正字化はそれに従 儀の随筆。正式には「南村輟耕錄」(「南村」は宗儀の号)である。世俗風物の雑記である っているわけでもないことをお断りしておく)。「黃巢地藏」と仮標題するようである。 「輟耕錄卷七に、 志怪小説的要素もある。当該話は以下(「中國哲學書電子化計劃」 趙生……」「輟耕錄」は元末の一三六六年に書かれた学者で文人の陶宗 のものを参考に一

*

鄰家疑其爲盜、告其姊之夫嘗爲吏者。吏詢之嚴、不敢隱、隨饋白金五錠。吏貪求無厭、訟 之、行數百步、則入一岩穴中、就啓之、得石。石陰刻押字與歲月姓名、乃黃巢手瘞。治爲 鼠白蛇、豈寶物變幻邪。」。 章質盡白、 趙生者、 一官往廉之。巨室私献金甲、因回申云。具問本根所以、實不會掘發寶藏。其事遂絕。路官 是雖得之亦終失也。 民固得之、 中穴置金甲、 生不獲已。主一巨室、悉以九穴奉巨室、廣行賄賂。有司莫能問、迨帥府特委福州路 宋宗室子也。 珍襲甚、至任滿他適、其妻徙置下。一夕、聞繞榻風雨聲、 昂首吐舌、若將噬己。生棄斧斤奔避、得脫。妻問故、具以言。因竊念曰、「白 **鐍鑰如故。 啓籠、** 不能保之、 餘八穴金銀無算。 家苦貧、居閩之深山、業薪以自給。 巢之亂唐天下、 卽拉夫同往。蛇尚宿留未去、見其夫婦來、回首遡流而上。 而卒歸於富家。 乃無有也。 生掊取畸零、 剽掠寶貨、歷三四百年、 其路官者、 夫婦終老巨室。 仍舊掩蓋。自是家用日饒、不復事薪。 得金甲、 一 目 自以爲子孫百世計、 至于我朝、 伐木溪滸、 嗟夫、天地間物苟非我 頃刻而止。頗怪之、 而爲編民所 所見一巨蛇、

神物化去。是皆可爲貪婪妄求者勸。

*

○七年三月発行・PDF でダウン・ロード可能)の中で、最後の陶の評言部分を除いたメイ 訓読しようとも思ったが、調べたところ、「佛教大学論文目録リポジトリ」にある荒木猛 ンの話を丁寧に現代語訳されておられるのを見つけので、 の論文『「残唐五代史演義」における黄巢物語について』(『佛教大学文学部論集』二〇 以下に引用させて戴くこととし

>

だした。大尽はやむなくこの役人に金甲を贈って口封じを計った。その後この役人は、 だねることとした。するとその大尽は、役所の上下に賄賂をばらまいた為、夫妻への当局 求した。夫妻は当局の追求に耐えきれず、遂にかの黄巢の財宝のすべてを某大尽の手にゆ たのではと疑い、このことを役人に話した。すると役人は、夫妻を捕えて厳しくこれを追 まだそこにいて、 たものに相違ないとして、夫とともに再び蛇に出会った所にむかう。すると、先刻の蛇が の追求は一旦は消えた。しかし後に、福州路帥府の一役人がこのことを嗅付けまた追求し の夫妻は、にわか大尽となった。それで、近所の人々は、夫妻が盗みでも働いてこうなっ などが刻されていた。そして、その名前などよりして、それが黄巢の墓であることが判明 て驚き逃げ、 の下から風のような音がしたので、鍵を開いて籠の中を改めると、 の所に転勤したが、かの金甲を家宝としていつもベットの下に隠していた。ある日ベット した。その墓をなおも掘ると、中から金甲の他に無数の金銀財宝が出てきた。かくしてか [やぶちゃん注:以下略。] [やぶちゃん注:「ひらく」。]と一つの石が出土した。しかもそれには名前や年月、花押 [やぶちゃん注:前略。]福建省のある貧しい樵夫が、ある日山中で一匹の白蛇に出会っ 家に帰って妻にそのことをしゃべったところ、妻はその白蛇は宝物の変化し 二人を更に奥に導きある巌穴の所で姿を消した。夫妻はその巌穴を啓く 金甲はなくなっていた

>

盡く白きを見、逃げ歸りしが、白鼠、白蛇は寶物の變成せる也てふ事を思ひ出し、往て搜 て金銀を夥く得たる由見ゆれば、白鼠白蛇を大黑と辨財天の使令とするは、漢土にも 「章質」「しやうしつ」と読んでおく。蛇の体表の模様(「章」)も地肌(「質」)。 「世々」底本は『世間』であるが、初出で訂した。

知られるようになった。 民間に於いて財福神の側面が大きく打ち出された結果、所謂「七福神」の一柱として専ら 黒色をした憤怒相の護法善神となったが、本邦に伝来すると、 またま「大国主命」との音通により、両者を同一神とする信仰として習合されてしまい、 がインド密教に取り入れられ、「マハー」は「大」・「偉大なる」の意、「カーラ」 「時」・「暗黒」を意味することから、「大黒天」と名づけられて、中国仏教に於いて、 「大黑天」ヒンドゥー教のシヴァ神の異名である「マハーカーラ」(漢音写「摩訶迦羅」) 特に室町以降に於いて、

功徳天なども総てが彼女の異名である。 「辨財天」仏教に於ける智慧・弁舌・技芸の女神であり、弁天・妙音天・美音天・大弁才 サンスクリット語「サラスバティー」の漢訳で、

あるが、「宇賀」の名がサンスクリット語「ウラガ」(蛇の意)に似ることに拠るとも考え た、水と関係ある蛇と結び付けられることも多い。弁才天と結び付けられる神に宇賀神が 琵琶を持つことがある。日本では財産神としての側面が信仰された結果として「弁財天」 授けると述べられてある。その図像的表現は八臂又は二臂で、身色端厳にして、女形では「金光 明 最勝 王経」で、弁才天は、この経を説く人や、聞く人に、知恵・長寿・財産を 地方の古名アラコシアもそれに由来するとされ、インダス平原やガンジス平原にもこの名 とが多い。 と書かれるようになり、また「七福神」の一柱とされた。水辺に祀られることが多く、ま テーニル、ヒラターターテックールーテョッルーッシーシーシードーー教のこれらの概念を受け、仏教に弁才天を登場させたのが、楽神」とされた。ヒンドゥー教のこれらの概念を受け、仏教に弁才天を登場させたのが、 本来はヒンドゥー教の神であっ られる(以上は小学館「日本大百科全書」に拠った)。実際、 の川があった。ブラーフマナ文献では「言葉の神」とされ、ウパニシャッド哲学では「音 アーリア人が東漸する際、各地の川を呼んだ名であり、アフガニスタンのカンダハル て、原義は「水を有するもの」を意味する女性名詞であっ 宇賀神は蛇形に造立するこ

の話の 同巻の 「類聚名物考卷三三七に云り」「類聚名物考」は「鶺鴒」パートで既注。著者山岡浚明は 「不復事薪」 「雜部」の 「吉瑞」の の部分までを引いた後に、 一〇白鼠 白蛇」の項(左ページ上段)で、 先の 「輟耕録」

*

の書にも世にもいふ事と見ゆ 今案に世俗に白鼠ハ 大黑天の使令とし蛇ハ辨財天の使令として福神の下屬といふ是西土

*

と記している。」

生ぜしにや。 混じて生ぜし説にや、若しくは地崩るゝ時、螺類の化石露出するに據れるか、古え堅田 蟲の巨大なる遺骸、化石して顯出せるを蛟と名けしにて、ホラは素と洞の意なるを、 今も人惶れて此谷穴に入らず、案ずるに、 太さ面桶の如く、頭體と直角を爲す狀恰かも槌の如く、急に落下りて人を咬めりと、因て有り「ノーヅツ」と名く、俚傳に云く、昔し野槌と云へる蛇之に住み、長さ凡そ五六尺、 握り飯を與ふるに轉がり來て食ふ事頗る迂鈍なるを目撃せる人、之を予に話せり、前年、 ちゃん注:ママ。]來て牀下に畜しに、只今眼小さく、其體俵の如く短大なる者となり、 智惠の眼も信の手も、戒の足も無き故に、斯る恐ろしき物に生れたりと云り、予熊野の山 中に希に有りと云り、形大にして目鼻手足なく、只口あり、人を取て食ふ、是は佛法を 三才圖會卷四十七にも、凡非地震而山岳暴有崩裂者、 ち」。]出れば山崩るてふ漢土の說を擧げ、蛟を「ホラ」と訓ぜり、斯る地崩れの際、古爬 可登高處、不能逐著、今も此物大和にはさして希ならず、丹波市近所に、昔し捕え[やぶ 清明之瀧邊往々見之、其口大而噬人脚、 五寸、長三尺、頭尾均等、 し、然るに倭漢三才圖會卷四十五には、これを蛇の屬とし云く、深山木竅中有之、大者徑 向名利の爲に學ひ[やぶちゃん注:ママ。]て、勝負諍論して、 山に續きたる陸地なりしが、百餘年計り以前に山の中より螺の貝夥く脫出でゝ海へ飛入 て地崩れより生ぜる谷穴をも呼びしならん、又東海道名所記三に云く、今切の渡し、昔は 又田邊灣の沿岸堅田の地に、古え陷り成れると覺しき、至つて嶮しき谷穴、(方言ホラ) 大坂朝日か大坂每日の地方通信に、和泉の山中に此物有り、土俗「ノロ」と云ふと見え 人に聞しに、野槌は「ムグラモチ」樣の小獸にて、惡臭有りと云り、此說沙石集の文に近 當國日高郡川又にて聞しは、此物倉庫に籠り居る事有り、さまで希ならずと云へり、 山崩れて件の谷穴を成す際、 其跡殊外崩れて、荒井の濱より五里計り、一ツ海に成りたる故に今切と申す也、倭漢 一人死して夢に告て云く、 沙石集五卷、章三に 處々大小有之、龍乎螺乎。未知其實焉、 而尾不尖、似槌無柄者、故俗呼名野槌、和州吉野山中菜摘川、 叡山の二學匠相契りて、先立つ事有ば必ず生所を告ぐべし 我は野槌と云者に生れたりと、是れ常に無き獸、 異樣の爬蟲化石出しより、 自坂走下甚速逐人但登行極遲、是故、如逢之則急 山本亡羊の百品考に蛟[やぶちゃん注:「みづ 相傳云、寶螺跳出而然也、如遠州荒 洞も寶螺も、「ホラ」に訓ずる故、 之を野槌蛇と心得て件の譚 口計りさかしけれども、 \mathcal{O}

「やぶちゃん注:以下、一段落分は底本では、全体がポイント落ちで一字半下げとなっ 同ポイントで示した。前後が一行空けなのはママである。〕

死すと信じ、 るに自竹叢出、 一度出で」、詣者が奉れる山羊兒又鷄を食ふ、それより堀に入て水を呑み、泥中に轉び廻 扨復た窟に入る、吾輩其泥上に印せる跡より推すに、 夷堅志を引て、 波市の野槌の話に似たる外國の例は、 徑り二尺を踰ゆと(V.Ball, 'Jungle Life in India,'1880, p. 491) 崇拜せる神蛇「ナイク、ペンス」を見し人の記に、此蛇岩窟に住み、 其長三丈、 南宋の紹興廿三年(近衞帝仁平三年) 面大如杵、 生四足、 一七六六年、印度山間の諸王が、世界と伴て生 遍身有毛、 建康に現はれし豬豚蛇の事を言 此蛇長さに比して厚きこと非常 作聲如豬、 又淵鑑類函卷四三九 行趨甚疾、 爲逐人吞

嚙人立死とあるは、 野槌を獸とするも、 蛇とするも、 多少似たる所有る樣

病の如く、斯る畸形を生ずるに非るか、無脚蜥蜴に"Uropeltidae" [やぶちゃん注:底本表 也、兄弟八人常在人間、作怪言とあれば、後世野槌は、支那の惡鬼野仲に宛られるゝ程、 Classical Antiquities, London, 1908, p. 531.)類聚名物考卷三三七に、野仲「ノヅチ」、文選の 事乍ら、古事記傳五に、 記は「Uropeltid ae」。訂した。]の一群あり、皆な蛇に似乍ら、 訓に云り、其義註にも詳かならず、張平子殪野仲而殲遊光(ツキガミ)註、野仲遊光惡鬼 賀の二社は、原と野槌を祭れるにて、野槌は蛇の屬たりしこと明けし、神が蛇迄も産し例 るに迨べるならん。 として崇拜されしを、後世其傳を失ひ、異様畸形の蛇を呼ぶ事となり、種々の怪談を生ず る形ちを具する者、 と等しく、 評判惡くなり、神より降て怪物となりし也、思ふに「ミヅチ」「ノヅチ」、何れも古えあり り、又下總國に蛟蝄神社有り「ミヅチ」と讀む、水神罔象女を祭るとある以て考れば、 野の主と云ふ事なるべし、 尊稱にて、野槌等の例の如しと有れば、「ミヅチ」は俗にいふ水の主、又蛇の主、野槌は事乍ら、古事記傳五に、和名抄、水神又蛟を和名美豆知と訓せり、豆は之に通ふ辭、知は し、因て推すに、野槌と稱する者の中、或は一種の無脚蜥蜴の頭尾均等に後體截去られた へる野槌蛇は、予親く見ざれば其虚實を知らず、或は或種の蛇、病に罹りて、人間の象皮 し大蛇を、水に住むと野に棲むに從ひて、其主とせる名ならん、 一は金山彦命を祭り、一は高皇産靈尊等三神を祭る、 野槌の意義に就ては、 希臘の大地女神「ガイア」の子に、怪蛇「ピゾン」有り(Seyffert. 'A Dictionary of 鈴鹿連胤の神社覈錄を檢するに延喜式神名帳、加賀國加賀郡に野蛟神社二ケ所在り、 本邦稀に兩足の蛇を出し、兼葭堂雜錄等に其圖を載す、是は兩脚蜥蜴の一種なるべ 地に押し付けて行動す(Tennent, 'The Natural History of Ceylon,' 1861. p. 302 圖有 其狀恰も斜めに切て、體の後部を取除けるが如く、其の切斷せる如き表面の尖 全く無きを保せずとや言はまし、兎に角、野槌は古えの神蛇で野の神 本誌二八二號六六三頁以下に、出口君の論あり、 日本紀によれば、諾册二尊日神を生み玉へる前に、野槌を生め 野蛟は「ノヅチ」と讀むべしと有 身體短く、尾端太くして頭 大和和泉等に現在すとい

[やぶちゃん注:以下、一段落分は底本では、ポイント落ちで全体が一字下げとなってい 同ポイントで示した。 前後の一行空けは私の仕儀である。]

and Literature of the Middle Ages, London, N. D., p. 221. 有圖、)又龍の歩行頗る迂鈍にして、 大雨の時谷に落て多く死すと、何か中古の欧州書で見たるも、今其名を記せず、 頭尾細き故、身體重く行動甚遲しと(Ramusio, op. cit., tom. i. fol 94; Lacroix, 'Science 人間に欺かれし珍譚多し(Tozer, 'Researches in the Highlands of Turkey,' vol. ii.P. 293 今日希臘で龍(ドラコス)と呼ぶは、 「レヲ・アスリカヌス」曰く、 和泉で野槌を「ノロ」と云ふ事攷合すべし。 アントランテ山に毒龍多く、窟内に住む、 人を食ふ巨人にて、 力强きも智慧甚だ鈍

化注で、当時表記出来なかった字や、学名を斜体にしていないなどの不備があるが、今 在な連想が生じつつも、それがまた本筋を離れないところが、教師時代の私の授業が、脱線 楠自身がこの面妖な生物の考証を心から楽しんでおり、しかもその天馬空を驅くるが如き自 安「和漢三才図会」の「巻第四十五 龍蛇部 とは注意しておく必要があるようには思う)。閑話休題。最初に、 改行されてはあるものの、前の「蛇」の条の続きとして熊楠は書いている感じは拭えないこ な科学的視点に立った推論で記されているのだが、読者を飽きさせない-**す(ここに出すに追記した部分がある)。**リンク先のそれは、私は十二年前に行った全電子 したまま、あらぬ方に語りを変じてしまったのとは大違いだ(但し、本条は初出を見ても、 いうところが熊楠らしくて、好きなところだ。展開と行き着くところを見れば、非常に穏当 [やぶちゃん注:突然、未確認生物が現われ、しかも、異例に非常に長い記載となる。こう ただの蛇のようにしか見えないので、略す。 当該部だけを限定的にリニューアルしてはおいた。挿絵があるが、如何にもしょぼ 龍類 蛇類」の「野槌蛇」それを、以下に示 熊楠の引用とやや異同がある。 のつきへび 熊楠も引いている寺島良 -と言うより、

のつちへび【合木蛇之屬乎】

可登髙處不能逐著 山中菜摘川清明之瀧邊徃徃見之其口大而嗑人脚自坂走下甚速逐人但登行極遅故如逢之則急 △按深山木竅中有之大者徑五寸長三尺頭尾均等而尾不尖似槌無柯者故俗呼名野槌和州吉野

のづちへび

【合木蛇の屬か。】

し之に逢ふときは、則ち急に髙き處に登るべし。逐ひ著くこと能はず。む。坂より走り下ること甚だ速く、人を逐ふ。但し、登り行くこと極めて遅し。 3。反より走り下ること甚だ速く、人を逐ふ。但し、登り行くこと極めて遅し。故に、如和〕の吉野山中の菜摘川、清明の瀧の邊に徃徃に之を見る。其の口、大にして人の脚を嗑和 徑たし五寸、長さ三尺。頭尾均等に

類似した極めて寸胴(誇張的名辞で良安の、直径十五センチメートル、全長九十センチメ の楽しみの 便 と致そう。データは総て所持する信用出来る著作及びネット情報を総合しある。その標準的特質を多岐に亙る情報ソースの最大公約数として以下に列挙して、想免 - トル長い木枕といった感じだ)の蛇で、北海道と南西諸島を除く広範な地域で目撃例が [やぶちゃん注:UMA(未確認動物)ツチノコに同定する。木槌の柄を外した槌部分に

●異名:野槌蛇・杵の子・バチヘビ(東北)・ドコ(滋賀県)・コ」(槌の子)で、これは元は京都での呼称ともされるようだ) 風・近畿地方で広域で通用する。但し、 通称標準和名:「ノヅチ」(ノヅチの方に優先権がある。この呼称の分布は主に東北・中 現在、人口に膾炙しているのは圧倒的に「ツチノ

コ 口 (福井県) ワ

ウガイヒラクチ・タンコロ・コロ ガシ・スキノトコ・三寸ヘビ・尺八ヘビ・五十歩ヘビ・トックリヘビ・ツツ・マムシ ツチ・ヨコ ガリ・バチアネコ・イノコヘビ・ ヘビ・ツチコロ ・ツチコロ ビ・ドテンコ・ ッタリ・五寸八 ッテ ン

・タテクリカエシ・ツチンボ・ツチヘビ・土転び、

)体長:約三十センチメー トルから一メートル。

胴長:約三十センチメー トル弱から八十センチメー

)胴径:七センチメートルから三十センチメートル。

別に、 外のヘビ咬傷死亡例が近代以降に全く認められない以上、 在まで同種の咬傷死亡と認定された明確な事例は公的には三例のみである。 から毒蛇と注意する人はいたが、本種の正式な有毒種認定は一九七四年以降のことで、現 年に対馬の同属の個体群が独立種ツシママムシ Gloydius tsusimaensis として新種記載されて ブフォトキシンン(bufotoxin)で、それを体内貯留して防禦に使用しているのである)以 の顎の奥深くで有意な時間咬まれ続けた場合は、 シ(クサリヘビ科マムシ亜科マムシ属ニホンマムシ Gloydius blomhoffii 。 い症状を呈する。これは頸腺毒であるが、彼らが好んで捕食するニホンヒキガエルの持つ いる)・ヤマカガシ(ナミヘビ科ヤマカガシ属ヤマカガシ Rhabdophis tigrinus 。 であろう。 毒:不明。 頸部を圧迫すると、 無毒とも有毒とも強毒ともいわれるが、 別な毒液が飛び散り、ヒトやイヌなどの目に入った際には激し 極めて危険である。なお、 南西諸島を除き、本邦在来種でマム 無毒、 少なくとも弱毒としてよ 但し、一九九四 ヤマカガシは しかし、同種 但し、昔

)出現(目撃)時期:春~秋(四月から十一月)。

生活相:単独相(複数個体・集合的目撃例は皆無)・昼行性。

)食性:肉食性(カエル・ネズミ等)。

持つ。)体色・紋:焦茶色又は黒色又は鼠色等、 黒いマムシに類似した網目文様と背中に斑点を

通常の蛇に比して有意に大きく、成人男性の小指の爪程の大きさ。

(幅四センチメートル程度)、且つ平板。 頭部形状(全体):毒蛇に特有の典型的三角形を呈し、 通常の蛇に比して有意に大きく

頭部形状(眼):鋭く、瞼があり、瞬きをする(ヘビ類は目蓋に相当する器官はなく、

膜とは異なるものであるから、やはり普通の蛇が瞬きをすることはあり得ない)。 爬虫類(則ち、蛇自体が目蓋を持たない爬虫類の特異群なのである)の持つ目蓋或いは瞬 皮として残っているのを確認出来る。 ぶさってあるので、目は保護されている。脱皮後の残片を見ると、目の表面部分も透明の 「瞬き」をすることはないので、特異点である。 しかし、これは鳥・魚類の一部・両生類・蛇を除く 但し、 実は眼球の表面には透明の鱗がか

|頸部:頭部と胴部の間が明確に短かくくびれ、頸部が明瞭。

通常の蛇に比して有意に中央部が膨れ上がって横に張っており、 前後に伸縮す

張させ、 短かく極めて強靭。 尾部のみで身体を立てることが可能 それで木へ垂下することが でき、 威嚇行動時に は、 胴部を緊

態で円くなり転がって移動することも可能とする。 更に胴と尾を用いて跳躍(約一~二メートル)、また、自身の尻尾を咥えたウロボロス状 |運動形態:蛇行せず、胴部を前後に尺取虫のように伸縮させて直進(後退も可能) Ļ

)その他:「チー!」という鼠に似た啼き声を発し、睡眠時には鼾をかく。

先は学名のグーグル画像検索)。 リア」(!)という和名があるのは、ご存知かな? 私はツチノコの親衛隊ではないので、学名命名権は遠慮することにした。ちなみに、ナマ ズ目ロリカリア科 Loricariidae ロリカリア亜科ロリカリア族 Pseudohemiodon 属のセゥド アルゼンチン・ブラジル・パラグアイ原産の装甲型の扁平なナマズの一種である(リンク へミオドン・ラティセプス Pseudohemiodon laticeps なる魚に、なんと、「ツチノコロリカ このメゴチかノドクサリのような、

以下は上記引用の本文語注。

・「合木蛇」は、この項の直前にある「千歳蝮」 の異名。 訓読したものを引い ておく。

+

 千歳蝮
 析木蛇

 よったいへび
 合木蛇

ツヱン スイ ホツ

なれば、猶ほ、急に之を治す。細辛・雄黄、等分に用ひて、末と爲し、瘡中に内れ、三たり、聲を作して「斫木斫木」と云ふ者は赦ふべからざるなり。若し「慱叔慱叔」と云ふ者く跳り來りて、人を囓む。人、之に中れば、必ず、死す。其の囓み已りて即ち木に跳び上ごとし。其の頭尾、一般にして、大いさ、衣を搗つ杵のごとし。故に合木蛇と名づく。能 「本綱」に、『千歳蝮は、狀、蝮のごとく、長さ、一、二尺、四つ脚、有り。 四たび、之れを易ふ。』と。

目ドクトカゲ科アメリカドクトカゲ Heloderma suspectum 及びメキシコドクトカゲ 「やぶちゃん注:不詳。四足があるので蛇ではない。有毒トカゲは現生種では爬虫綱有鱗

Heloderma horridum の二種のみが知られており、分布域から本種ではない。 のの、その敏捷な動きといい、強毒性といい、「野槌」と共に、あの本邦のUMAツチノ コのモデル候補とはなる種ではあろう。 四足があるも

- チノコである。 ・「其の頭尾、一般にして」とは、頭と尾が丸太のように同じ太さであることを言う。 ツ
- な」という謂いか? ・「斫木斫木」は、「俺の難に咬まれたくなかったら、 木を切れ、木を切れ、 遅いが
- 寛大な叔父さんの僕、博叔蛇だったのさ、すぐに療治すれば助かるよ」との謂いででもあ 意味不明。では「博叔」はというと、これも分からぬ。分からぬついでに勝手に空想する る。「慱」は音「タン・セン」で、憂える、または、円い、という意味で、これでは全く れたのは斫木蛇兄さんじゃあなかったんだ、その寛大な叔父さん、そう、 ・「慱叔慱叔」は多くが「博叔博叔」とするが、原典の「本草綱目」も底本も「慱」であ これは実は弱毒個体か似て非なる別種である「博叔蛇」という蛇で、 この「斫木」「慱叔」には何かの故事の連関があるのであろう。識者の御教授 「あんたが咬ま 斫木蛇兄さんの

を乞う。

- Asarum sieboldii(Asiasarum sieboldii はシノニム)で、根及び根茎は精油成分に富み、細辛 (さいしん) という生薬となる。去痰・鎮痛・鎮静・解熱作用を持つ。 「細辛」はウマノスズクサ目ウマノスズクサ科カンアオイ属 Asarum ウスバ サイシ
- 炎症剤として用いられたが、強い毒性を持つが、解毒剤や抗炎症剤として漢方で利用され ている。詳しくは本巻冒頭の「龍」の項の「雄黄」及び「雌黄」の私の注を参照された ・「雄黃」はヒ素の硫化鉱物で「石黄」とも呼ばれる。化学式は As2S3。漢方では解毒・抗

+

以下、「野槌蛇」の本文注。

- 付近の吉野川の呼称。 ・「菜摘川」とは現在の奈良県吉野町大字菜摘 (グーグル・マップ・データ。 以下同じ)
- 図が附されてある!)は、恐らくネット最強のツチノコ資料集である。必見!)。なお、末 献にみるツチノコ」と、「下北山の目撃者の話」(目撃個体の一つ一つのキャプション入りの 撃記録」及び、別ページの「ツチノコの呼び名の由来と特徴を総点検」或いは「下北山の文 的研究を継続的にやろうじゃないかということである。実際、この斬新な日本国内の共和 守備範囲である)なるものもある(言っておくが、馬鹿にしてリンクしているのではな は、吉野川に流れ込み、北の山を越えたところが、「菜摘」である。この近くには現在、 に来た芭蕉が、 尾になったが、この蜻蛉の瀧は著名な歌枕で、 耳にはちっとも聞こえてこないのである(但し、先にリンクさせた「ツチノコの歴史・目 国から、残念ながらエネルギッシュなツチノコの雄叫びは、少なくともUMA好きの私の 行政主導の「ツチノコ共和国」**(奈良県吉野郡下北山村全**域。熊楠のフィールド・ワークの ・「清明の瀧」は「蜻蛉(せいれい)の瀧」のことで、吉野町上千本からさらに奥へ向か 金峰神社の先、青根ヶ峰(旧金峰山)から音無川沿いに下ったところにある。この川 やるんなら、本気でそれなりに真面目にしっかりとツチノコ探索や生物学的・民俗学 貞享五(一六八八)年三月、 吉野の桜を見

ほろほろと山吹ちるかたきのおと

の句を残している。「ころころと野槌轉ぶかたきのおと」 なんてね!

ちゃぺちゃしゃべる。②語る。③合う。④笑い声。⑤吸う。 「嗑む」は、「かむ」と読ませているのであろうが、 何らかの字の誤字と考えた方がよい。 この「嗑」(音は「コウ」)は、①ペ 飲む、といった意味しかな

*

最後に注した「嗑」は、 次に、先に掲げた「ツチノコ共和国」の記事」を引用させて戴く。 熊楠は 「噬」としている。これは正しく「かむ」の意で、 ょ

《引用開始》

、チノコの呼び名の由来

ツチノコは、 に頭としっぽがついたその太く短い形状が、 漢字で書くと、土の子、ではない。、槌の子、 藁を打つ。 槌, である。 に似ていることからつい これは、ビー 、た名 びん

だ。[やぶちゃん注:中略。」

ツチノコのいろいろな呼び方

から目撃されている。 北は青森から南は鹿児島まで、北海道と奄美・沖縄をのぞく日本各地で古く そして、その名も、地方によって異なっている。

国北部などで使われている。 なわち一方言にすぎないのである。 ツチノコという呼び名は、先のブームで広く定着したが、もともとは一地方の一呼び名す この名は、 京都市北部と鈴鹿山脈、 吉野熊野一帯、

南部)といった豪快な名前まである。 酒を入れる徳利に似ているところから,トックリヘビ=徳利蛇,(滋賀)、納豆などを包 多種多様。臼に人れた穀物をつく、杵に見立てて,キネノコ=杵の子,(京都・兵庫)、 子"(吉野)"ツチンボ=槌ん棒" そのほか、,槌,からついた名には、,ノヅチ=野槌, む藁の束、苞から,ツトヘビ=苞蛇(愛知)、俵を連想した,タワラヘビ=俵蛇, チヘビ=槌蛇, (岐阜南部、大阪)、 "ツチ=槌" (大阪、 (福島)などがある。 (秋田、宮城、 兵庫北部)、 同じように、 ツチンコ=槌ん 岐阜北部)、 形状からの名は

筒状のヘビということで,ツツマムシ,と呼んでいる。 た、秋田では、しつぽか短いことから,バチ(尾が短い)ヘビ,新潟では、 ろう。あるいは同じツチノコでも近畿地方には、やや小型の種がいるのかもしれない。ま 岡山南部)。胴回りが 5 寸(約 15 センチ)、 一方、ツチノコの大ききをそのまま名前にしたのは,ゴハッスン=五八寸, この数値ではやや小ぶりだが、これは、正確さより語感や象徴性を重視したからであ 長さが 8 寸(約 24 センチ)というわけ 滋賀、 マムシに似た

ろび"(鳥取)という具合だ。 ら,コロ,(福井)、,コロリ, もちろん、 その特異な習性からついた名前も多い。 (広島) " コロガリ (福岡)、" ヘビとしては奇妙な。ころがる。癖か ツチコロビ=土(槌)こ

各地で古くから日撃きれていることがわかる。 このように、ツチノコの呼び名は全国で 40 種ほどもある。これだけみても、 ていないため、学名がないのである。 にもかかわらず、 いまだ学術的に確認され ツチノコが

ツチノコの目撃報告は数多いが、 1 匹である。ツチノコは、常に単独で行動しているようだ。 同時に 2 匹以上見たという例はほとんどない。 すべて

多くのヘビは群れを作らず、 から一四立ちして、 ビでは、母体内で卵がかえりヘビの姿で生まれる)ヘビは、それぞれ好きな方向に進み、 ラバラに姿を消してしまう。親はもちろん兄弟とも分かれ分かれになり、 一生孤独な生活をおくるのだ。 1 匹でひっそりと暮らす。卵からかえった(卵胎生の毒 生まれた瞬間

ツチノコもおそらく同じように 1 匹で暮らしているのだろう。 なかなか捕縄されないのである。 数も少ないうえに、

ツチノコの特徴を総点検

ツチノコの特徴や性質は、前述した文献記録や多くの目撃報告などから、 それを総合したツチノコの形状から、まずみてみよう。 かなりわ

ツチノコの姿は、 簡単にいえば、 ビールびんに頭としっぽをつけたような太く短い

イメージすればいい。

している。 体良は 30 ~ 80 センチで、胴の直径は 7 くて粗いしっぽが、尻からチョロッと出ている。体長に大きな幅があるのは、大型種・小 背にはマムシより大さい斑紋があり、うろこも粗い。腹は、 子供・大人、雌雄などの違いからくるのだろうか。 大人の指 3 本で(人差し指、中指、薬指)を並べたほどの大きさ。首があり、 ر 15 センチ。太い胴はやや扁平で、三角形の 体の色は黒、焦茶色・灰色な いわゆる蛇腹で、 黄色を

目撃証言や文献などから、特徴を簡単にまとめれば、 とうわさされている。 に立てる。⑥ころがる。 ③いびきをかく。④薄気味悪い目つきで、まばたきをする。 ⑩春から秋に出没する、となるようだ。 ⑦蛇行せず、まっすぐ前後に動く。⑧ジャンプする. ① 1 匹で行動する。 ⑤胴を張って尾部で垂直 ②昼間行動す ⑨毒がある

《引用終了》

の概説部の一部を引く。 所持する笹間良彦氏の 「図説・日本未確認生物事典」(一九九四年柏美術出版 刊

《引用開始》

憑性が強い。そして蛇のようにうねって走るのでなく、跳躍してから身体を丸めて転がる 猛毒性があるともいわれ、 ように走るから、山坂の斜面の下りは猛速力となる。従って野槌蛇に遭ったら斜面を駆け 毒蛇のように三角型で首は頗る細く尾の方も細い。胴中だけがずん胴で太いという特徴が 下りるのでなく、逆に上の方に駆け上がれば難を避けることができるという。蝶のように あり目撃者の言はすべて一致しているから、捕獲されて公表されなくても実在としての信 最近の報告では、 太さはサイダー瓶位で体長五十センチから長くて一メート 昔は犬などが喰み殺された話はあるが、現代では聞かない。

)。 と伊弉冉尊が天地山海樹木を生んだ次に生んだのが草祖草野姫で、又の名を野槌というとと伊弉冉尊が天地山海樹木を生んだ次に生んだのが草祖草野姫で、又の名を野槌というとは奈良時代にすでに使われており、『日本書紀』巻第一神代上に伊弉諾尊野槌という名は奈良時代にすでに使われており、『日本書紀』巻第一神代上に伊弉諾尊

形をしていたのである。 つまり樹木草など植物の根元である神を蛇とし、 しかも野槌と名付けられるように槌の

ので蝮の異名ともされていたので、『字鏡』六十八には「蝮、乃豆知」、『康頼本草』 「蝶蛇、乃豆知、波美」としている[やぶちゃん注:以下略。] この野槌蛇の伝承は古くよりあり、妖性現されていたので野之霊とも書き、猛毒がある

《引用終了

とある。

地『を登る時は胴体の前部を支点に後部を左右に移動させながら登る』・『味噌、 常のヘビにみられる「蛇腹」がない』・『日本酒が好き』・『歯はすきっぱである』・『傾斜』 変更した)。「目撃談などによる特徴」の内、前に出ていないものを見ると、 填すると判断される一部(補強材料としてダブりも含む)も引いておこう(記号の一部を 頭髪を焼く臭い』を好む』等がある。 最後にアカデミストにすこぶる評判の悪いウィキの 以下、 の項。『ツチノコという名称は元々京 「ツチノコ」の記載の内、以上を補 『腹側に、

賞金もかけられて』おり、『同村には日本唯一のツチノコ資料館である「つちのこ館」 際の結論は、毒の成分から考えてニホンマムシの亜種だったと記されて』あるという。 時の日本軍が捕獲し、軍の研究所で飼育』・『観察されていたとされるツチノコの話』があ た』。『岐阜県東白川村は目撃証言が多く、全国でも有数の目撃多発地帯といわれ』、『捕獲 成さない。和漢三才図会の説明とは異なる」と書き留めている』とある。『太平洋戦争当 た、長野県で出土した縄文土器の壺の縁にも、 文時代の石器にツチノコに酷似する蛇型の石器がある(岐阜県飛騨縄文遺跡出土)。 する吉川弘文館随筆大成版を参考に、漢字を恣意的に正字化して以下に示す。 かの人は毒に侵されたとされ、この坂は槌子坂と呼ばれたという』。これについては、 ものとされる話が以下のようにある。石川県金沢市の坂道で、通行人の目の前で横槌のよ で、数ある目撃例の中でも巨大な、全長約』二『メートルの個体が目撃された』。文化六 て水平に』三『メートル』も『ジャンプしたツチノコらしき生物の目撃情報が寄せられ て目撃情報が多発している』。二〇〇八年八月三十一日、『千葉県白井市の田園地帯におい おり』、『山奥などでなく』、『町中での目撃証言が多い』。『多摩川で、上流から中流にかけ のつち 漢名 千歳蝮」を記す。 八三四)年の脱稿であるが、版行はされず、稿本として残され、約半世紀後の明治一九 **久郡臼田町の神官井出道貞によって書かれた信濃地誌「信濃奇勝録」(本書は天保五(一** には 称があり、ノヅチと土転びは別の妖怪として独立している例もある』。「歴史」の項。 うな真っ黒いものが転がり歩き、雷のような音と光とともに消えた。これを目撃した何人 ノコらしき生物が目撃されている』。『茨城県土浦市がツチノコ捕獲地域として注目されて 「各地の目撃談」の項。『十和田湖付近の山中で、体長約』三十『センチメートルのツチ (一八八六)年に彼の孫に当たる井出通によって初めて出版された)の巻之一に『「野槌 ノヅチ、タテクリカエシ、 (一八○六)年に書かれた鳥翠台北巠著の紀行『随筆「北国奇談巡杖記」に、ツチノコの (布を柔らかくするために、 『不鮮明ながら、モノクロ写真とされる物も残されている』が、『死後』、『解剖された 平成元年に建立のツチノコを祀った「つちのこ神社」もある』。『岐阜県美濃市の農道 『カヤノヒメ神の別名であり』、『野の神、主と書かれてある』。江戸末期に信濃国佐 とされることにちなむ。東北地方ではバチヘビとも呼ばれ、 四国北部などで用いられていた方言であった。わら打ち仕事や砧 ツチンボ、ツチヘビ、 槌で打つ作業) 「八月の頃たまたま出る。坂道は転がって進む。 の際に用いる叩き道具「横槌」に、 ツチノコらしき姿が描かれている』。記紀 土転びなど日本全国で約』四十『種の呼 人に害を

きみあしきところなり。 溢水[やぶちゃん注:「いつすい」。小流れから溢れた水。]流れて、昼もなにとやらんもの じておく。]ありく物あり。 ふる夜半など、たまたま不敵の人かよふに、ころころと轉[やぶちゃん注:「まろび」と訓 あなたこなたと、 小姓町の中ほどに、槌子坂といへる、なだらかなるあやしき径あり。 めぐりめぐりて、既に消なんとするとき、 毎に「やぶちゃん注:「ことに」。 よくよく見れば、 搗臼ほどの橫槌あり。 「殊に」の当て字であろう。] 呵々と二聲ばかりわらひ たゞ眞黑なるものにし

雷のひょきをなし、はつ、と、 二、三日、毒氣にあたり病ぬ。故に槌子坂とよびて、夜はおのづからゆきかひも薄らぎ いかさま古妖と見えて、むかしより人々の沙汰することなりき。 光り、うせぬ。此怪を見たるもの、古より幾人もあり

*

明し、ツチノコになれなかったヘビとの意味で「ツチナロ」と命名された』。『徳島県で三 市)でツチノコ状の生物が発見され、数日後にも同様の生物の死骸が発見された。ツチノ 見された生物が、同年』三月七日『発行の東京スポーツの一面にツチノコではないかとし 篠山市)で、体長約』五十『センチメートル、直径約』十『センチメートルの、サンショ ず、卵を産み落とすと普通のヘビとなってしまった』とのこと。『兵庫県多紀郡(現丹波 額』とある。二○○四年六月には兵庫県美方町で『ツチノコ状のヘビが発見され、「ツー 期」というのは刊本出版のそれであろう。 七○『年代から日本で飼われるようになり、 リックされたい)、確かにそれらしいわな。)『を誤認したとする説。このトカゲは』一九 タトカゲ Tiliqua scincoides の同属のウィキの写真。蛇・蜥蜴系がダメな人は自己責任でク する説』がある一方、『特定種のトカゲ類の誤認とする説』があり、『アオジタトカゲ』 れている』とある。最後に「正体についての仮説」の項。『新種の未確認動物とする説』 コではないかと話題になったものの、川崎医療福祉大学の鑑定により』、『ヤマカガシと判 られる。明らかに大型の蛭である)。二○○○年五月二十一日、『岡山県吉井町(現・赤磐 ちゃん」の名で飼育されたものの、これは妊娠して胴が膨れ上がったヤマカガシに過ぎ ンドネシア・オーストラリア・パプアニューギニア原産。こりゃあ(同属ハスオビアオジ ゲが実在していることから、ツチノコも足が退化した未発見のトカゲの一種ではないかと であることを示しており、海外には実際に足が退化したヘビのような形態のアシナシトカ や『未発見の新種のヘビとする説』があり、『いくつかの特徴が』、『ヘビではなくトカゲ 大分県境付近に発見情報が多い。宮若市、築上町で一時、捕獲の噂が流れた』。『熊本県で 好市をはじめとする県内全域で多数目撃されている』。『福岡県、特に朝倉市を中心とした の nozuchi2008 の「奈良の未知生物」こちらで画像が悪いが、当該対象の動画ヴィデオが見 て掲載された』が、『一部の学者はツチノコではなくヒルとの見方を示し』た(YouTube ウウオに似たツチノコらしき生物が目撃された』。二○○八年三月、『奈良県の竜王山で発 では捕獲に』二『億円の賞金をかけたこともあり、ツチノコの懸賞金としては過去最高 に、ツチノコの背骨といわれる物体が保管されている』。『兵庫県では、但馬地方に』五十 を収録したもので寛政一一(一七九九)年に成立しているようである)。 利考(としやす 安永八(一七七九)年~文化二(一八〇六)年)が武士に語らせた百一話 したツチノコを飼うための「つちのこ飼育庭園」も設置されている。千種町(現宍粟市) 『件以上の目撃情報がある。香美町では「美方つちのこ探索隊」が結成されており、捕獲 『同様の怪異は、昭和初期の金沢の怪談集「聖域怪談録」にも記述がある』(この「昭和初 (有鱗目トカゲ亜目スキンク下目 Scincoidea 上科トカゲ科アオジタトカゲ属 Tiliqua 。 八代市から人吉市にかけての山間部に目撃談が多い』。『五島列島でも古くから目撃さ アオジタトカゲには四本の小さな脚があり、 実際には、調べた限りでは、大聖寺八代藩主前田 一目撃情報が増加した時期に一致するとされて 読売新聞社によって撮影されたツチノ 『新潟県小千谷市

る場合がある』。次に、『大きな獲物を丸呑みして腹が膨れた蛇を誤認したとする説』で、 ニホンマムシなどが妊娠中で腹が膨らんだ状態となると、一見してツチノコのように見え落ちる。一つは『腹の膨れた蛇を誤認したとする説』で、『在来の蛇であるヤマカガシや 認とする説』として、二種を挙げるが、その比定種は毒蛇で、 業が盛んなため、海外から輸入された材木にこのトカゲが混入していたとの推測もある』 チノコと誤認された生物の正体がアオジタトカゲであった事例の報告もあり、同村では林 響で』、『脚がない姿が広まったと述べている。 も、有力比定候補にはなり得ないと思うので載せない。寧ろ、その後に続く説の方が腑に かれている例もあるので何ともいえないところではある』。以下、『胴の短い種類の蛇の誤 るのに対し』、『マツカサトカゲは尻尾が太い点が異なるが、 カサトカゲが繁殖し、ツチノコと誤認されたとの説もある』。『ツチノコは尾が細いとされ カゲは岐阜県の目撃談にもあり、 とある。『マツカサトカゲ』(トカゲ科アオジタトカゲ属マツカサトカゲ Tiliqua rugosa 。 オーストラリア原産。同属のウィキの画像。同前で注意)『を誤認したとする説。このト コとされる生物にも脚があった。作家の荒俣宏は、流行の原因となった漫画』など『の影 『蛇は顎の関節が特殊な構造をしており、自分より大きな獲物を丸呑みする事ができる』 日本国内でも愛玩動物として飼育されている。このことから、野山に捨てられたマツ これでインキ臭い連中も文句は言うまい。 四肢が草むらや胴体の下に隠れている姿がツチノコに近 実際に、前述の岐阜県東白川村の隣町でツ 古い絵図などでは尾が太く描 私は体型が似ているにして

熊楠の本文注に入る。

教訓をたれているが、そこは野槌とは無縁で、かったるだけなので、カットした。底本は 住一円著。弘安六(一二八三)年成立)の当該部の「學生畜類ニ生タル事」。 一九四三年岩波文庫の筑土鈴寛校注本を参考にしつつ、句読点・記号を追加し、読みは一 「沙石集五卷、章三に叡山の二學匠……」「沙石集」(鎌倉時代の仏教説話集。全十巻。無 〕を用い、私が推定で歴史的仮名遣で追加してある。 段落も成形した)。 後に長々と

下にて、稽古しければ、 人契りて云はく、 にて、稽古しければ、殊に見解も、をなじ。山に二人の學匠ありけり。同法にて、年齢な 年齡も、心操・振舞、萬づ變らず。學問も一師の 何事につけても、 同じ體なりける故に、二

、 ぽぽぱ
先立つ事あらば、生所を必ず告ぐべし。」 「我等、一室の同法たり。萬づかはらず振舞へば、當來の生所までも、 能々たがひに契りぬ。 同じ にてぞ

「我は野槌と云ふ者に生れたり。」一人、他界して、夢に告げて云はく、

といふ。

「野槌」といふは、 目・鼻・手・足もなし。只、 常にもなき
獣
が
だもの 口ばかりある物の、 なり。 深山の中に、 人を取りて、 希にあり、 と云へり。形、 食ふと云へり。

者よりも勝れていると思い込むこと。〕等の心にて學すれば、妄執のうすらぐ事もなく、 もなく、信の手もなく、戒の足もなきゆゑに、かかるおそろしき物に生れたるにこそ。 行解のをだやかなる事も、 むすび、憍慢勝他『やぶちゃん注:偉ぶって驕り高ぶっては人を見下し、是は佛法を、一向、名利のために學し、勝負・諍論して、或は瞋恚を起し、 なし。さるままには、 口ばかりは、 さかしけれども、 或は怨 讎 自分が他の

*

[やぶちゃん注:以下略。]

はツチノコっぽくはある。 と、小学館「日本国語大辞典」にあった。モグラ類の体型と、突如、 上方から江戸に移ったことに伴い、「ウグロモチ」に代わって用いられるようになった、 もと江戸言葉で、近世前期には、田舎言葉と意識されていたが、近世中期に文化の中心が モグラをあらわす語としては「ウグロモチ」が一般的であった。「ムグラモチ」は、もと 「ムグラモチ」モグラ(鼹鼠・土竜)の異名。「ムグロモチ」が変化した語か。近世には 出現するような印象

部始終を目撃した人物からの直接の聴き取りなのであるが、 「丹波市近所に……」この野槌の丹波ケースは以下に示されるように、 「大和にはさして希ならず」先の「ツチノコ共和国」も奈良県吉野郡下北山村である。 熊楠自身が、 その一

- ---昔、野槌を捕獲して家の床下に飼っていたことがある
- 両の眼がごく近くに並んでいることを指すか?) -眼が小さい (「只今」は意味不明。或いは「距離的に近いさま」を言うことがあるか
- -体全体は俵のようなずんぐりむっくりの太った短かいものであった
- -握り飯を与えると、転がり来たって食うも、その行動は、呆れるほどゆっくりしてい いかにも鈍くさく、にぶい (「迂鈍」)

がいっぱい」のこちらに、『昭和三十七』(一九六二)『年秋、丹波の船井郡』(京都府のこ 児期に』『ツチノコ』を『目撃し』、『その存在を確信』して、三十五『年間ツチノコ捕獲 波篠山市後川地区(この付近)や丹波市青垣町附近の加古川源流では、オオサンショウウオ ウオ」はそのサイズからオオサンショウウオでしかあり得ないのである。しかも、兵庫県丹 超弩級に貴重なものと言える。そうして、ここから連想し得る実在動物はオオサンショウウ という蒲鉾型の台によく似た、太く短い蛇が目撃されたという情報があった』とあり、 ショウウオに似たツチノコらしき生物が目撃された』という事例である。 郡(現丹波篠山市)で、体長』約五十センチメートル、直径約十センチメートルの、『サン ショウウオ Andrias japonicus しかいない。さらに、先のウィキの中にあった、『兵庫県多紀 の未確認生物の捜索に加わった現地の『Aさんはこの太短い蛇を「スキノトコ」と呼ん の棲息が現在、公的に確認され、保護活動が行われているのである。さらに調べると、『幼 オ(両生綱有尾目サンショウウオ亜目オオサンショウウオ科オオサンショウウオ属オオサン と異様な内容である。これは、 南で兵庫の丹波地区に接する)『の一帯で、農耕用の鋤を立てかけておく「鋤の床」 南西域外直近に兵庫の先の丹波地区がある)『や天田郡』(現在の京都府福知山市。 今までに』四『度の目撃体験』があるとされる方のサイト しかし、野槌記載の中では、全くの作り話でないとすれば、 この「サンショウ

説化して怪物名としてまで完全に定着したことになる。だとすれば、「口裂け女」以前に遡 俗の会発行の『あしなか』(通巻九十六号・昭和四〇(一九六五)年二月)とあるのであ こ)『に、鋤の床という怪蛇がいて、太く短く斜面を転がり、人畜を襲い、専念惟』(意味 キノトコ」が挙げられており、『丹波町須知』(しゅうち:京都府船井郡京丹波町須知。こ る』とあった。さらに「日文研」の「怪異・妖怪伝承データベース」には「鋤の床」「ス はそうないと思われる。 の姿が似ているために』、『このような呼び名が冠せられたのだ』。『しかし』、『結果は空振 だ。この地域でのツチノコの別称である。前述した鋤を立てかける蒲鉾型の台にツチノコ れるアーバン・レジェンドの進化過程の一つとして、これほど明確な震源と遷移が判るもの 野槌(ツチノコ)を命名したのだとすれば、まさにこの噂話は、たった二年余りで、都市伝 野槌の古くからの地方名だったのだろうか?(もし、Aさんが「スキノトコ」という丹波産 不明。「先年、惟」の誤字か?)『に当たって死んだ人がある』とあり、出典として山村民 コ」と呼ぶという事が知れ』た『のは』、『ツチノコを語る上で大きな成果となったのであ りで』、『これといった収穫は皆無であった。ただし、丹波方面ではツチノコを「スキノト 意地の悪い言い方だが、この「スキノトコ」は、本当に、近代或いは近世からの丹波の

し』当該記事もこの異名も確認出来ない。 『大坂朝日か大坂每日の地方通信に、和泉の山中に此物有り、 土俗 「ノロ」と云ふと見え

「當國日高郡川又」和歌山県日高郡印南町(いんなみちょう)川又。

「田邊灣の沿岸堅田」和歌山県西牟婁郡白浜町堅田(かたた)。

「面桶」「ツウ」は唐音。一人前ずつ飯を盛って配る曲げ物。「めんぱ」「めんつ」とも呼壁洞窟」があるが、海食洞であるここを熊楠が「谷穴」と表現するとは思われない。 「ノーヅツ」不詳。白浜町には西の三崎の西側に知られた熊野水軍所縁と言われる「三段 後には乞食が携帯する入れ物を指した。

質・用途等を判り易く記述した類書(百科事典)。天保九(一八三八)年跋。熊楠の示す 室で教え、薬草園を作り、物産会を開いた。「百品考」は動物・植物・鉱物の形態・性 記号を打った)。 に和文(漢字カナ交り)で以下のようにある(カタカナを概ねひらがなに直し、 のは、「百品考」の「下」の末尾に配された「蛟」。早稲田大学図書館「古典総合データベ 「山本亡羊」(安永七(一七七八)年~安政六(一八五九)年)は江戸後期の本草家で医 ス」の原刊本のこちら(嘉永六(一八五三)年版・PDF)の 儒医の傍ら、本草学を小野蘭山に学び、京都本草学の中心として活躍し、 40 コマ目から。

*

起し、 「ホラ」の出ると云を指して云なり。俗人、「ホラ」の名、同じきに依て梭尾螺の山中に蛟は龍の屬なり。常有の物にあらず。然れども、諸書の所說に據て考へ見れば、本邦にて 戸[やぶちゃん注:「たんこ」。漁家。]の爲に採られて、肉を去り、吹物となる。 神靈ある者にあらず。蛟の「ホラ」は諸國共に稀にあることなり。 大風雨を興して海に飛入と云は謬說なり。梭尾螺は琉球海中に産する螺類なり。蜑 裂て、 山谷鳴動し、 數十村を漂流沒すること、 本邦にも、 時時、 大風雨ありて、 此患あ

荒政輯要の說によりて、 預 め辟蛟の法を行なはば、 救民の 一助ならん

は清の汪志伊の撰になる、 種々 の 凶作 防蝗 飢 饉対策を述べた書。 八〇

道名所記」(寛政九(一七九七)年刊行)。 「東海道名所記」名所図会シリーズで一世を風靡した秋里籬島 (生没年未詳) 著の

出された。明治一四(一八八一)年、 二組に分かれて運営した。大通行時には「寄せ船」制度が適用され、周辺村々から船が供 部の開口部に架けられた渡船場。 行く先へ」の「舞坂宿と今切の渡し」(地図有り)に「東海道名所記」を引いて、 川氏時代以来の伝統を有する「十二座」を基幹とし、船百二十艘を三百六十人の船頭が十 けられ、新居関の役人の管轄下、 「今切の渡し」東海道舞坂宿(現在の浜松市)と新居宿(湖西市)の間、 戦国期の地震と津波により、 浜名湖から遠州灘に注ぐ浜名川には橋が架けられていた 新居宿の住人が船を運航した。渡し船の組織は中世 決壊していた。江戸時代、舞坂・新居間には渡し場が設 架橋されて消滅した。しまむー氏のブログ 浜名湖 1の今

《引用開始》

螺の貝おびただしくぬけ出て海へとび入侍べり、 こたへていはく、むかしは山につづきたる陸地なりしが、百余年バかり以前に山の中より 舞坂より舟にのるに、七つ時分よりまへには渡しあり、七つ時分過ればふねをいださずと ミを今切と名付たるよしうけたまハりし、さだめて子細の侍べるやらんといふ、 とのりけり、 はやくのり給へとて、男と共にいそぎふねにとびのる、 山五里バかりひとつにうミに成たる故に、 船頭は舟に棹さし、櫓をたててをす、男たづねけるハ、 その跡ことの外にくづれて荒井の濱より 今切と申すなり 艫のかたひろくて、 いかに船頭殿このう せんどう ゆるり

《引用終了》

良安」から私の訓読文を引い 「倭漢三才圖會卷四十七にも、……」私の ておく (一部表記を修正した)。 「和漢三才圖會

ほらのかひ

『梭尾螺の形、 『梭尾螺の形、梭のごとし。【俗に保良乃加比と云ふ。】 今、 釋子 [やぶちゃん注 吹く所 の者な

兵を進む。修驗行者、鳴り響くさま。」たり。 け、日を經れば、螺、乾き、死し、殼、自ら脫す。之れを取りて、尾のく、食はず。人、肉のやや出づるを待ちて、繩を以て、急に肉を縛り、 、小なる者、二、三寸。五、六旋、盤屈して、尾、窄く尖り、其の肉、按ずるに、寶螺は、狀、海鰤に似て大きく、白黃色、淺紫の斑有り。ト 之れを吹く。其の聲、 地震に非ずして、 (ずして、山岳、暴に崩れ裂くる者有り。相傳へて云ふ、『寶螺、跳毎に山行に之れを吹きて、同行の導きを爲し、且つ狸・狼の害を含ね、生まです。 とうぎょう ままじ しょうしん とを吹きて、先鋒の最も大なる者を用ひて、本朝の軍器と爲し、之を吹きて、先鋒の 海螄に似て大きく、 嘹 喨 [やぶちゃん注:「喨喨」が正しい。音が明るく澄んで死し、殼、自ら脱す。之れを取りて、尾の尖りを穿り、口を 、則ち屋檐)に懸っていまった。 音が明るく澄んで

か、未だ其の實を知らず。り出でて然り。』と。遠州荒井の今切のごとき者の處處に、 大小の之れ、 有り。 能か、

「夫木」 山伏の腰に付たるほらの貝ふくるをまゝの秋のよの月 行圓

*

← Charonia tritonis° 「寶螺」腹足綱新生腹足亜綱タマキビ型目ヤツシロガイ上科ホラガイ科ホラガイ属ホラガ

極めて賛意を表したいのである。 ば、私は熊楠の推察する異形(に見える)古代の化石類を誤認したのではないかという説に る)。また、「大和本草卷之十四 水蟲 介類 梵貝 (ホラガイ)」も参考になろう。さすれ 化石出しより、之を野槌蛇と心得て件の譚を生ぜしにや」**ホラガイと山崩れの民俗につい** 談藻鹽草(堂の釜崩れの事」や、「三州奇談卷之五(縮地氣妖」を見られたい(他にもあ に頻繁に発生するのは異常で、それでは説明がつかない。私の怪奇談では、例えば「佐渡怪 ては、俗信として、修験者の用いた法螺貝が、長年、深山幽谷に埋もれ、それが精気を得 「螺類の化石露出するに據れるか。古え堅田に、山崩れて件の谷穴を成す際、異樣の爬蟲 海中に戻り入る時、山崩れが起きる、という俗信があったようであるが、それがこんな

「伴て」「つれて」。一緒に。

にもなるヘビ亜目ニシキヘビ科ニシキヘビ属インドニシキヘビ Python molurus がモデル 「ナイク、ペンス」以下の原本によれば、英語の綴りは「Naik Buns」。全長が六メートル

「山羊兒」原文は「kids」だが、 人身御供ではない。「kid」は原義が「ヤギの子」。

「徑り」「わたり」。胴の直径。

「踰ゆ」「こゆ」。

(Valentine Ball 一八四三年~一八九五年)のそれは、「Internet archive」のこちらで当該部 「V.Ball, 'Jungle Life in India,' 1880, p. 491」アイルランド地質学者ヴァレンタイン・ボール

く、人を逐ひ、呑噬するの勢ひを爲す云々、人、嚙まば、立どころに死す。」。のごとく、四足を生ず。遍身、毛、有り、聲を作すに豬のごとく、行き、趨ること、甚だ疾一九八年頃成立。二百六巻。訓読すると、「竹叢より出づ。其の長け三丈、面、大にして杵 面大如杵、生四足、遍身有毛、作聲如豬、行趨甚疾、爲逐人呑噬之勢云々、嚙人立死とある」 ○年成立。「夷堅志」は南宋の洪邁(一一二三年~一二○二年)が編纂した志怪小説集。 一一五三年)「建康に現はれし豬豚蛇」(ちよとんじや)「の事を言るに自竹叢出、其長三丈、 「淵鑑類函卷四三九に、夷堅志を引て、南宋の紹興廿三年(近衞帝仁平三年)」(ユリウス暦 「淵鑑類函」は清の康熙帝の勅により張英・王士禎らが完成した類書(百科事典)。一七一

に於ける植物崇拜の痕跡」(PDF)。太字は底本では傍点「○」、太字下線は傍点「丶」。 「本誌二八二號六六三頁以下に、出口君の論あり」「J-STAGE」の『東京人類學會雜誌』 (第二十四巻二百八十二号・明治二四(一八九一)年十二月発行)の出口米吉氏の「我國

記に野神名鹿屋野比賣神亦名謂野椎神と記し、 紀に草祖草野姫亦名野椎と記せるは、

遣唐使船|木靈並山神祭と見えたり。畢竟野神と草神との合同は、比較的完成に進み、山 建具師等材木を取扱ふ者は、十一月に山神を祭りたるなり。さはいへ、後に於ても山神と とコダマの同一視せらるゝ事などは、皆山神木神の合同を語るものなり。されば後世大工為に山神を祭る事あり、材木を伐る時に、山に祭とて、山神を祭る事あり、中古ヤマビコ 此合同は野神と草祖との間に生ぜしのみならず、 代に於て、諸種の神祇に關する傳說を組織的に編成せし時に、既に完了したるものなり。 間に合同生し、 草野姬は草靈あること其名の示す所にして、野植亦野神を意味すとすれば、此等の二の名 ば、狹土、迦具土、御雷、裁名椎、手名椎などのツチと仝じく、ツチのツは助辭にてチは所以なかるべからず。先づ野椎の名稱の意義を尋ぬるに、ヌウチのツチは、記傳に依れ 擧げたり。 傳說の異なる者を記したる者にして、草神を考ふる上に大に注意すべき事とす。 を見るは珍しからず。 久々能智などのチと同じく、尊む名にして、 神と木神との合同は、比較的散漫なりしと見るを得べし。 木神との區別を立て、之を並へ祀りたることもあり。大神宮式に、凡操≧營;;神田 | 盤鍫柄 しが如し。 りと解すれば、其所以甚明了なるが如し。果して然りとすれば、草靈野神の合同は、我古 ヤヌヒメのヒメを以て女性を示し、ヌツチのチを以て男性を示すとすれば、此神は一神に して男女兩性の名を有するなり。依て按ふるに、民間信仰に於て、異なる神祇の間に合同 元來異る二の神に屬すべき者にして、 則ち始は野の神を野椎、草の神を鹿屋野姫と定めて崇めたりしを、後に至りて二神の 毎年二月、先祭二山口(山神)及木下」(木神)然後操レ之と云ひ、 草の神あるべき譯なり。然るに、記には唯野の神のみを擧げ、 略す。 而して其野の神といふ者草の祖といふ者、 神武紀に薪名:1爲嚴山雷 | 草名爲:1嚴野稚 | と云へり。 共に山には山の神あり、 必要となら、リンク先を見られたい。〕 或は野の神に草祖の名を併せ稱し、或は草の神に野の神の名を併せ稱した 殊又野と草との如き其關係深き者の間に於ては、 木には木の神あるを以て、 一神の兼有すべからざる者なるなり。又若しか 野椎とは野の智と云ふが如しとなり。然れば 山神と木神との間にも既に生じつゝあり 共に其名稱を全しうするは何等か其 [やぶちゃん注:以下、延々続 野には野の神あるべく、 猶大嘗祭儀式に木草を探る 紀には唯草の神のみを 甚生し易き變化な

*

年十一月)後の文政五(一八二二)年にかけて板行された。当該部は国立国会図書館デジ の判断で漢文体訓読部などでひらがなにした箇所がある。 入れて電子化し、 タルコレクションの「古事記傳」(向 脱稿したが、版本としての刊行は寛政二(一七九〇)年から宣長没(享和元(一八〇一) 四十四巻から成る註釈書。明和元(一七六四)年起稿で、寛政一〇(一七九八)年成稿を て、野槌等の例の如しと有れば」「古事記傳」は本居宣長の「古事記」全編に就いての全 (左ページ十二行目から現れる。「闇淤加美神」の注釈部)。一部の送り仮名を本文に繰ダルコレクションの「古事記傳」(向山武男校訂・昭和五(一九三〇)年名著刊行会刊 「古事記傳五に、 漢文表記は訓読し、句読点を追加した。 和名抄、 水神又蛟を和名美豆知と訓せり、 読みは総てカタカナであるが、 一部に鍵括弧も添えて読み易くし 豆は之に通ふ辭、 一部の送り仮名を本文に繰り

どの例のごとし。〕又蛇・蛟などの「美」も此なり。又日讀[やぶちゃん注:暦。]の

ま、よとなり、このでは、このでは、このである。とのである。因で名と爲き。今、球草郷と謂ふ汲用せそ」と、勅云ふ。斯に因て曰を「臭泉」と名ふ。因で名と爲き。今、球草郷と謂ふ汲用せそ」と、刺びい、罰じて「龗」がない。〕〕於是に、天皇、「必ず、臰、有からむ。なをおかみと謂ふ』と訓じて「龗」がない。〕〕於是に、天皇、「必ず、臰、有からむ。なをおかみと謂ふ』と返り点のみあり、訓読不詳。仮に読んでおいた。武田祐吉氏はここ分、『龗」於箇美」、』と返り点のみあり、訓読不詳。仮に読んでおいた。武田祐吉氏はここ る血の成れると、下なる闇山津見の陰より成れるとを思ふべし。手俣も陰も山に取ては谷あり。そは山の上なる龍神、この闇淤加美は谷なる龍神なり。〔此神に、手俣より漏出た 彼所爾塵家武」。これら思ふに、此の神は龍にて、雨を物する神なり。書紀に京きてのにまりけむ。 二〔十二丁〕に「吾崗之、於可美爾言而、令落、雪之摧之、を引り。〕「萬葉」二〔十二丁〕に「吾崗之、於可美爾言而、令落、雪之摧之、は、 訛 れるなり。〔此の文、「書紀釋」に引るは誤字多し。今は仙覺が「萬葉は、 訛 擬へに泉水を汲ましむるに、即、蛇龗有りき、〔於箇美を龗とす、[やぶちゃん注:この部集。 こうみ 風土記に球珠郡球覃郷は、此の村に泉有、昔、景行天皇行幸の時、奉膳部之人、御飯令の風土記に球珠郡球覃郷は、此の村に泉有、昔、景行天皇行幸の時、奉膳部之人、御飯令の 美」と云とあり。〔龗は、字書を考るに、龍也とも注し。又靈の字とも通ふなる。〕豐後國 のごとし。〕神名帳に意加美の神の社處々見ゆ。[やぶちゃん注:以下略。] 「巳」を「美」と訓るも、 此意なるべし。さて此神を、書紀に「龗」と書て、此を「於箇 奉膳部之人、御飯令の 書紀に高龗と云も) 「萬葉抄」に引る

*

この部分、個人的には非常に興味深く、面白く読める。

「日本紀によれば、諾册二尊日神を生み玉へる前に、 野槌を生めり」「日本書紀」巻第一

の「神代上」の第五段の本文に、

*

次生海。次生川。次生山。 生みたまひ、 生みたまひ、次に草祖草野姫を生みたまひき(次に海を生みたまひ、次に川を生みたまひ、次に川を生みたまひ、 次生木祖句句廼馳。 【亦の名は野槌。】。) 次生草祖草野姫。亦名野槌。 次に木祖句句廼馳を

*

出る。

和歌を香川景樹に学んだ。 た。「神社覈錄」(じんじゃかくろく:「覈」は「調べる・明らかにする・考える」の意) 戸後期から明治初期にかけての国学者。代々、京都吉田神社の神職で、国学を山田以文、「鈴鹿連胤の神社覈錄」鈴鹿連胤(寛政七(一七九五)年~明治三(一八七一)年)は江 在地・鎮座の年次・神位・由来などを考証して記したもの。また、諸国の国内神名帳も併 は明治三五(一九○二)年刊で、「延喜式」所載の式内社及び式外社について、祭神・所 吉田神社社殿の再建や皇陵の調査に当たり、 後に著述に専念し

る」国立国会図書館デジタルコレクションの同書 のこちらと、次のコマのこちら 「加賀國加賀郡に野蛟神社二ケ所在り、 (巻三十七の「加賀國式社 一は金山彦命を祭り、 (明治三五 (一九〇二) 附錄式外神」 一は高皇産靈尊等三神を祭 の内)

野蛟神社

である。] 當郡兩社あり[やぶちゃん注:頭注に「印本野蚊に作る今一本以呂波字類抄等に據て改 野蛟は乃都知と訓べし〇祭神金山彦命 む」とあるが、 実は現存する神社(後述)との関係から考えると、 【神社帳】〇蚊瓜村赤濱に在す、 「野蚊」が正しいよう 旦

*

野蛟神社

野蛟は前に同じ〇祭神高皇産靈尊、猿田彦大神、 例祭 旦 ○當郡兩社あり 事代主命、 【神社帳】○神谷内村に在

*

続きで沼地も傍あたりまで続いていたものと考えられるので、その ます。ヌヅチの「ヌ」は野原の「ノ」と沼の「ヌ」とを合わせた意味であり、「ヅチ」は そうです。 創建して、祀(まつ)ったのが、野蛟神社の起こりであると伝えられている。後に、聖武 老人は『吾は、ヌヅチの神である、以後祭祀(さいし)(イツキマツルこと)せよ。』と言 老人の教えの通りに行ったところ、不思議にも病気が治ってしまったそうです。そこで、 神谷内町へ一(に現存し(但し、以下に見る通り、地区内で移転している。地図有り)、 説によれば とともに、神社由緒の白髪の老人の言葉とも合ってきます。 何々の霊という意味で【野と水の霊】を示すため『ヌヅチ』と読ませたものと考えられる を素直に読むと「のづち」となりますが、 沙門(多聞天)と称したので、付近の小川を毘沙門川と言ったそうです』。『神社名の野蛟 でき、それより朝廷からの勅使の参拝があり、以降に痘瘡が流行する毎にご加護があった 天皇(天平』八『年)全国的に痘瘡がはやり、 か?》が現れ、老人を乗せ天上雲間に消え去ったそうです。そこで住民はその地に神社を 日のように住民が病に倒れ、亡くなる人も大勢いたそうです。そうした時に、白髪の老人 日)に『創建と伝わる古社の一社です。 野蛟(ぬづち)神社と呼称しており、『今を去る、約』千三百年前の天平四年(旧暦三月三 の境内に在りしを元和』三(一六一七)年に『須岐神社』の『赤浜八幡社地移転に伴 例祭月日 民を救ったと素朴に考えたものと思うのが適当であろう』とあり、 い残し、手に持つ杖を地面に突き刺すと、空がにわかに曇ると同時にアマレリ《龍のこと が現れ『自分の言う通りに従えば、衆人一切を救ってしんぜよう。』と言うので、住民は れていない。 い』、『本町に移転遷座し、爾来』、『加賀爪社としたるを明治』二九(一八九六)年八月、 「うわの」と呼ばれる所に野蛟神社が有ったそうで、 『現社名に改称した』とあるのが、それである。そこでは野蛟神社との関係性には一切触 (現在は境内入口にありますが、) 前田の殿様が参勤交代で神社の前を通るときには の欠字はママ。前者は「石川県神社庁」公式サイ その後、社頭は老廃し、幾多の変遷を経て現在の地に移る。神仏混淆の時代毘 (地図有り)、金沢市蚊爪町ロ一四八に現存し、『当社は元東蚊爪町の須岐神 後者は、同じく「石川県神社庁」公式サイトの解説によれば、 当時神谷内を中心に付近一帯に疫病が流行し、毎 神谷内のお宮さんでは『ぬづち』と呼ばれてい 当社に祈願して、これをくい止めることが その上り口には「赤鳥居」があ トの 古来この地域は、河北潟と地 「野蚊 『また、神谷内には 【野と水の霊魂】が住 **(のが)**神社 現在、 金沢市 」の解

地も河北潟域内で、 地も傍あたりまで続いていたものと考えられる』という叙述からは、前者の野蚊神社(旧 が偉観を誇っていたそうです』とある。しかし、『古来この地域は、河北潟と地続きで沼 必ず駕籠・馬より降りて、神社へ参拝されたと伝わっています。その街道には見事な老松 ない(というより、関係性はあったと考えるべきであろう)。 野蛟神社とは五キロも離れていない)との関係性があってもおかしくは

二十五の「下總國式社 『下總國に蛟蝄神社有り「ミヅチ」と讀む、水神罔象女を祭る』これも「神社覈録」 附録式外神)の末尾にある。

*

蛟蝄神社

午六月、始奉:主田:、神事式祭等始也、 風土記」。諸国地誌であるが、 上】今文間兩社大明神と稱す、 蛟蝄は美豆知と訓べし〇祭神埴山姫命、 圭田三十九東三畝田、所レ祭罔象女也、 古風土記に仮託した後世の偽書である。]百一殘缺云、蛟蝄 例祭 月 日、 罔象女命、【地名記】○布川庄立木村に在す、【同 天平二年[やぶちゃん注:七三〇年。]庚 ○惣國風土記[やぶちゃん注:「日本惣國

*

辺りが海であったころの大地の形が蛟(みつち=伝説上の龍)に似ていたためといわれて 守っておられます』。『「みつち=こうもう」の名に由来は諸説ありますが、はるか昔この じゃ)」を合祀して現在もなお一層の御神徳(ごしんとく)をもって下総國相馬の郷を見 致しました』。 たが』、『氏子崇敬者の声が上がり、御祭神の御魂(みたま)を分祀し』、『門の宮にお祀り が』、『社殿を東の高台(現在の奥の宮)に神社を建てました。門の宮を取り壊すはずでし を合祀(ごうし)し、水害や民家が近いという理由で詳しい年代は分かっておりません 約』二三○○年前(紀元前二八八年)『に現在の門の宮(かどのみや)の場所に水の神様 ます』とあるから、 おります』とあって、『当社の社名は一般的には』「こうもう神社」と『親しまれておりま ゃ)」「天神社(てんじんじゃ)」「稲荷神社(いなりじんじゃ)」「八幡神社(はちまんじん の罔象女大神を祀ったのが始まりといわれています』六九八年『に土の神様の埴山姫大神 めのおおかみ」と読み、 すが、ご祈祷のときの祝詞奏上では蛟蝄神社は「みつちのかむやしろ」と申し上げており (こうもう)神社は茨城県北相馬郡利根町立に現存する。 明治四二(一九〇九)年『に立木地区にあった「八坂神社(やさかじんじ 熊楠の読みは正統である。 水を司る女神。 公式サイトの解説に、『蛟蝄神社の始まりは、 「罔象女大神」は「みつは

原と」 しもと」

された。後にアポローンによって倒された。ニシキヘビ(ヘビ亜目ムカシヘビ上科ニシキ を含む地母神であるガイアの多数の子の一人であるピュトン(ラテン語:Python)。巨大 ヘビ科 Pythonidae)を意味する英単語「python」(パイソン)は、 されることもある。 な蛇の怪物で、雄蛇とも雌蛇ともされ、絵画などでは脚のないドラゴンのような姿で表わ 『希臘の大地女神「ガイア」の子に、怪蛇「ピゾン」有り』ギリシア神話の女神にして天 神託所デルポイを守る番人で神託所をすっぽり巻ける巨体を持つとも 彼の名に由来するもので

読める。 古代語辞典。一八九一年初版(ドイツ語)刊。 オスカル・セイフレット (Oskar Seyffert 「Seyffert. 'A Dictionary of Classical Antiquities,' London, 1908, p. 531.」ドイツの古典文献学者 右ページの「P」の最後の項である。 一八四一年~一九〇六年)の編になる古典語・ |Internet archive」のこちらで、

slain by Apollo with his first 1 arrows. (See APOLLO and DELPHIC ORACLE.) Python. A monstrous serpent produced by Gæa, which haunted the caves of Parnassus. It was

集」は訂されてある)。 ば』「作怪言」の「言」は初出もママであるが、原拠を見るに、「害」の誤り(平凡社「選 平子殪野仲而殲遊光(ツキガミ)註、野仲遊光惡鬼也、兄弟八人常在人間、 『類聚名物考卷三三七に、野仲「ノヅチ」、文選の訓に云り、其義註にも詳かならず、 訓読しておくと、 作怪言とあれ

光は悪鬼なり。兄弟八人、常に人間に在りて、怪害を作す。』と。張平子、野仲を殪して遊光(左に「つきがみ」のルビを振る)を殲す。 註に、

ڻ ِ ا の画像で視認した(右上段中央)。 同巻の「雜部十三」の「靈鬼 表記の一部に異同がある。 妖怪」の以下。国立国会図書館デジタルコレクション

|而殲≒游光|○注、野仲游光惡鬼也、兄弟八人、常在≒人間|作≒恠害|、○野仲| のづち ●文選の訓にいへりその義注にも詳ならす○〔文選〕 〔文選〕東京賦 張平子殪 二野仲

「両都賦」に倣って、当世の洛陽を描いた「東京賦」と、長安を描いた「西京賦」を著し 〜一三九年)の字。一○七年に、·「張平子」は後漢の政治家にして、 一○七年に、太平無事の世に王侯以下が奢侈を貪るのを憂え、 多岐に亙る分野で優れた文人でもあった張衡(七八年 班固の

綱旋尾線虫亜綱旋尾線虫目旋尾線虫亜目糸状虫上科糸状虫属バンクロフト糸状虫 続発性疾患とに分けられる。カによって媒介されるバンクロフト糸状虫(線形動物門双腺 見られる。糸状虫症(フィラリア症。filariasis)から移行するものと、その他の疾患による 皮膚のような状態を呈する慢性皮膚疾患。主に下肢に好発し、次いで陰嚢・大陰唇に多く 「象皮病」ヒトのそれは、リンパ液の鬱滞によって皮膚及び皮下組織が厚くなり、ゾウの

或いは熱帯性象皮病とよばれる。日本では嘗て沖縄・九州南部に一種の風土病として見ら Wuchereria bancrofti)が原因となるものは、熱帯及び亜熱帯地方に多く、 頭痛・腰痛・関節痛などを伴う。この症状は数日で軽快するが、反復して発症するうち れている。 俗に「くさふるい」(歴史的仮名遣「くさふるひ」)と呼ばれていたが、 象皮病へと移行する。 真正の糸状虫症は、まず、下肢や陰嚢に発赤腫脹として現われ、同時に発熱・ 糸状虫に拠らない慢性潰瘍・慢性炎症性疾患・再発性丹毒・腫 糸状虫性象皮病 現在は根絶さ

瘍及びリンパ節摘出などに続発して発症するものを続発性象皮病と呼んで区別するが、 らも糸状虫症と同じくリンパ液の鬱滞に起因する。

嫌いはクリックしない方がよろしい)。 な角質の盾を持つことによる。グーグル画像検索「Uropeltidae」をリンクさせておく オヘビ科 Uropeltidae。 いない。学名はギリシャ語の「ura」(「尾」)と「pelte」(「盾」)に由来し、尾の先端に大き 「無脚蜥蜴に"Uropeltidae"の一群あり」**現在はヘビ類に分類される、ムカシヘビ上科ミジカ** 八属五十四種が現生するが、インド・セイロンに分布し、 本邦には

尾の部分の断ち切られたような楯状形状がよく判る。 政治家であったジェームズ・エマーソン・テナント(James Emerson Tennent 一八〇四年 に先の属の一種でキャプションには「THE UROPELTIS PHILIPPINUS」とある。 ~一八六九年)のセイロンの自然史誌。「Internet archive」のこちらで、 「Tennent, 'The Natural History of Ceylon, 1861. p. 302 圖有り」イギリスの植民地管理者で 「The Reptile Database」の「Rhinophis saffragamus KELAART, 1853」の画像を見られたい。 の Rhinophis saffragamus のシノニムである) とともに視認出来る。蛇の大丈夫な方は 原本の挿絵(まさ これは現

二)年:大坂で酒造業、後に文具商を営む傍ら、奇書珍籍・書画骨董・標本類の収集に努 学者で南画家でもあった木村(蒹葭堂)孔 恭 (元文元(一七三六)年~享和二(一八〇 当該の画像もそのままトリミングせずに示す。 書館デジタルコレクションの原本画像を視認し(句読点を打ち、読みは一部に留めた)、 頼を受けた大坂の知られた著述家 暁 鐘 成 が整理抜粋し、刊行したもの。池大雅の印譜や 物について考証し、 なかなかに見ごたえがある。指示するそれは、二之巻の「紀伊國異蛇之圖」。 下鴨神社蔵の三十六歌仙絵巻などの珍品が紹介されており、松川半山筆の多くの挿画は、 れた)著で安政六(一八五九)年刊。各地の社寺の蔵する書画器物や見聞した珍しい動植 「本邦稀に兩足の蛇を出し、兼葭堂雜錄等に其圖を載す」「兼葭堂雜錄」江戸後期の博物 絵は黄檗僧鶴亭や池大雅らに学んだが、寧ろ、博学の好事家として全国に名が知ら 人から聞いた珍談奇説などを書き留めた原稿を、著者没後に子孫の依 国立国会図

て、四脚のもの有といへども、二足の蝮は更に載ず。竒といふべし。
く、尾末は、角のごとく 突 、刺あり。舌は 獸 の舌のごとし。木草綱目に、千歳蝮と、尾末は、角のごとく 突 、刺あり。舌は 獸 の舌のごとし。木草綱目に、千歳蝮と黒く、身、肥、 勢 、壯んなり。長六尺三寸、 圍七寸二足あり、指は 猬 毛 のご黒く、身、肥、 勢 、壯んなり。長六尺三寸、 圍七寸二足あり、指は 猾 毛 のごと暦五年亥の夏、紀州在田郡湯淺に 於、奇しき蛇を捕ふ。其形、凡、 蛇 に似て、○宝曆五年亥の夏、紀州在田郡湯淺に ホュヒ ぁキ のごと

「宝曆五年亥」「乙亥」。一七五五年。「在田郡湯淺」和歌山県有田郡湯浅町。

ニック・ネーム。 行家で地理学者。「レオ」はローマ教皇レオX世から与えられた名で、「アフリカヌス」は 一四八三年?~一五五五年?)の名前で知られる、本名をアル=ハッサン・ブン・ム 「レヲ・アスリカヌス」**レオ・アフリカヌス**の誤り。 ・ル=ザイヤーティー・アル=ファースィー・アル=ワッザーンという、アラブの旅 レオ・アフリカヌス (Leo Africanus

ントランテ山」 初出も平凡社 「選集」 b ア トランテ」 とするので誤植 € √

ある褶曲山脈。サハラ砂漠と地中海・大西洋の海岸部とを劃しているが、古代からヨーロ は、「Atlantes」で現在のアトラス山脈のことであろう。アフリカ大陸北西部のマグリブに ッパ人に知られ、ギリシア神話のアトラスの郷土ともされる。

ジオ(Giovanni Battista Ramusio 一四八五年~一五五七年)の「航海と旅行」。 「Ramusio, op. cit., tom. i. fol. 94」先の「海豚」に出たジョヴァンニ・バティスタ・ラムー

After Miniatures in the "Book of the Marvels of the World." — Manuscript of the Fourteenth 八〇六年~一八八四年)が書いた「中世の科学と文芸」。「Internet archive」のこちらで、 本のドラゴン三体の挿絵とともに見られる。画像キャプションは「Fig. 162. — Dragons. -したフランスの作家で複数のペンネームを用いた作家ポール・ラクロワ(Paul Lacroix) 「Lacroix, 'Science and Literature of the Middle Ages,London, N. D., p. 221.有圖」「鶺鴒」で注 - National Library, Paris.」とある。

「龍の歩行頗る迂鈍にして、大雨の時谷に落て多く死すと、何か中古の欧州書で見たる 今其名を記せず」如何にもしょぼくらしいドラゴンの話、原拠が知りたい。

代地理学者でもあったヘンリー・ファンショー・トーザー(Henry Fanshawe Tozer コス」(Drakos) が語られてある。 九年~一九一六年) の作品。「Internet archive」のこちらの原本の右手。熊楠の言う「ドラ 「Tozer, 'Researches in the Highlands of Turkey,'vol. ii.p. 293 seqq., 1869」イギリス人作家で古

「攷合すべし」「かんがへあはすべし」。

当たる井出通によって初めて出版された)の巻之一の「野槌」である。国立国会図書館デ が、版行はされず、稿本として残され、約半世紀後の明治一九(一八八六)年に彼の孫に 載とされて、先のウィキの引用にも出た、江戸末期に信濃国佐久郡臼田町の神官井出道貞 によって書かれた信濃地誌「信濃奇勝録」(本書は天保五(一八三四)年の脱稿である が、幾つか追加しておく。一つは、現在知られているところの、最古のツチノコの絵入記 な挿絵も添える。これは初出記事として特異的にそのままで示す。 ジタルコレクションの明治二十年四月の刊本の当該部の画像を視認して電子化する。 さても、 ここまで注してきたので、何となく、心残りな資料があるので、熊楠ではない

なす事なしといへり三才図會に吉野の奥に此物ある事をしるす此説に異なり尺二三寸太さ一尺廻り行るも蛇のことし岨坂を横きるときは轉ひ落て行事ならす敢て害をま出るといへとも稀にして見るのみ少し形蛇の如く中太らかにして大小あり大なるは長一馬篭より妻篭の間に一石峠とてわつかの嶺あり此山中に壁槌と云ふ物あり八月の頃たまた野 槌 漢名千歳蝮

○五)年)の紀行記「西遊記」(寛政七(一七九五)年初版刊行後、三年後には続篇も書 「一石峠」は現在の長野県木曽郡南木曽町吾妻にある、 次に、江戸後期の医者で紀行家であった橘南谿(宝暦(一七五三)年~文化二(一ップ・データ航空写真)かと思われる。この図はまさにツチノコの正統的それである。 しらきあらためばんしょ)跡附近から同住所の一石栃立場茶屋の間辺り(グーグル・マ (宝曆(一七五三)年~文化二(一八 一石栃白木改番所(いちこくとち

視認(7・8 コマ目)して示す。読みは一部を除き、除去し、記号を追加し、段落を成形し 出る怪蛇譚で、前者は呼称から見ても野槌である。後者は野槌とは無縁だが、 ておく。以下に、早稲田大学図書館「古典総合データベース」の原本(PDF・第一巻)を いている。「東遊記」と合わせて、優れた奇事異聞集となっている)の、巻之一に続けて 踊り字「く」は正字化した。 併せて引い

成りたるに、其またの間うつろに成りゐて、其中に年久敷、大虵、 なはち、求麻川なり。其川端に大なる榎木あり。地より、上、三、 肥後國求麻郡の御城下、榎木の大虵 五日町といへる所に、いっかまち 知足軒といふ小菴あり。其庵の裏は、 すめり。 四間程の所、 二またに

時に、此榎木のまたに出るを、 城下の人。は、多く、見及べり。

とて、此木の下を通るものは、頭をたれて通る。常の事なり。「顔を見合すれば、病む事ある。」

足のなきがごとく、又、芋虫によく似たり、といふ。 ふとさ、弐、三尺まはりにて、惣身、色白く、長さは纔に三尺餘なり。 たとへば、

下にいたり、うゞひ見しかど、折あしくてや、 所の者、是を「壹寸坊虵」と云。昔より人を害する事はなしと也。 ついに、見ざりき。

猪の狩倉の大虵

長さ、八、 ふ所あり。 是も予が遊びし前年の事なりし。求麻の城下より六里ばかり離れて、「猪の狩倉」とい 九尺ばかりなる大蛇、草のしげれる間より、 此所の百性、弐人、山深く木こりに入りしに、 其ふとさ、 四斗桶ばかりにて、

「さは」

と出て、追來る。

はたらきのがれ得べうもあらざれば、弐人とも、 働しに、 つゐに、大虵を打殺しぬ。 取てかへし、木こる那刀もて、 命をかぎりに

この事、『が求麻にいたりし頃、

見ん。」 「右の打殺せし所に、いまだ、骨は朽殘り、其時の 俤 をも見つべければ、この事、ドが求麻にいたりし頃、いまだ半年斗の後なれば、 ・
ざ
や
。

と、求麻の本艸者右田助右衛門、 益なし。 誘ひしかど、 もはや、 蚺蛇膽は腐りぬべし、

「是ばかりの大さの蚺虵は、 此邊にては、 めづらしからず。」

等閑に打過しぬ。

此蛇も榎木の虵と同種類なるべし。かく短く太き蛇もあるものにや。

乎もあまり珍竒の事にも思ひ取らで等閑に打過せしなり。かへすがへすも残り多き事なりても行て見るべき事を、彼地の人ゞの、とかくめづらしがらざるにて、それに聞なれて、 膽・骨ともに得たくて、右田をも、すゝめしなり。今にておもへば、独りに 皆、醫家の珍重する竒藥なり。テントまだ是までに其眞物を見る事をだ

猪鹿倉山が地名にある。この付近がロケーションかいのからのやまの物名にある。この付近がロケーションかの狩倉」は熊本県球磨郡湯前町(ゆのまえまち)で、 | いのかくのやま | なま 本 県球 磨郡 湯前町(ゆのまえまち)で、宮崎県との県境に近く、字での狩倉」は熊本県球磨郡湯前町(ゆのまえまち)で、宮崎県との県境に近く、字でオ図会四十五・野槌蛇)。つちのこ』とバッチリ特定されているのである。二話目の「猪 脚をかむ。坂より走り下るのははなはだ速く、人を追う。しかし、登り行くのは極めて遅 蛇」(現代仮名遣「いっすんぼうへび」)に宗政氏は注して、まさにこれを「野槌蛇」とさ 谿が来訪したのは天明三(一七八三)年二月上旬で、 字通り、城の南西で球磨川を挟んだ対岸である。岩波の宗政五十緒氏の脚注によれば、南となっている。これは熊本県人吉市麓町にある人吉城のことで、「五日町」はここで、文 きさ』で、月の『上旬には頭に近く、中旬には心臓に近く、下旬には尾の近くに在る』 膽」宗政氏の注を引く。『蚺は蚦の俗字』・蚦蛇は、にしきへび。その胆は薬用に供され、 槌と呼ぶ。大和吉野の山中、菜摘川清明の滝のあたりで往々見られる。口は大きく、人の 八癇を治し、目を明らかにする(和漢三才図会四十五。蚺蛇)』とある。私の よく痛みを止めるという。にがみの中に甘味があり小毒がある。形状は鴨の卵ぐらいの大 ンチ)に及ぶ。頭と尾とが均等で、尾が尖らず、槌の柄のないのに似ているので、俗に野 れた上、『深山の木の洞に居り、大きいものは直径五寸(一五センチ)長さ三尺(九○セ た。 (これは本草でしばしば各種の動物の胆について言われる体内移動である)。 『小児の五疳(これは本草でしばしば各種の動物の胆について言われる体内移動である)。 『小児の五疳 ゆえに、これに出逢うと急に高い処に登るとよい。追い付くことができない(和漢三 作成が十二年前で当時は「蚺」が表記出来なかった)を見られたい。 「新日本古典文学大系」版では、最初の話は「求麻郡相良壹岐守御城下」 龍蛇部 また、また。この付近がロケーションか(国土地理院図)。「那刀」鉈。「蚺虵この付近がロケーションか(国土地理院図)。「那刀」鉈。「蚺虵」 龍類 蛇類」の「※1蛇(うはばみ)」(※1= 凡そ五十日滞在している。 ったこで壹寸坊 「和漢三才

らて、最後となった。

代えた)。 社一九九○年刊)の「毒ヘビ」項の「千歳蝮」 氏に登場を願うこととする。以下は荒俣氏の「世界大博物図鑑3 **蛇類」を手掛けた際の強い感想でもあったのである。**さすれば、このトリには御大荒俣宏 私は若干の躊躇を感ずる。それは、記紀神話に出るからと言っても、それが現在知られてい 小説及び本草書が流入した中で、そこには中国伝来の怪蛇の要素が色濃く浸潤したのではな はいたのかも知れぬ。 果して、 いかと思われるからである。これは私が嘗て「和漢三才圖會 卷第四十五 龍蛇部 てからのように思われるからである。確かに、本邦生まれの妖怪「口だけ」みたような妖獣 るような、ずんぐりむっくりの蛇(或いは蛇形)となったのは、かなり近世も終わりになっ そのオリジナル・ナショナリズムを無条件に受け取ってよいかどうかという点で、 野槌は、どの記載を見ても、 既に述べたことと、 しかし、本草研究が進むうちに、強力な圧を以って中国の伝奇・志怪 かなりダブるが、 一貫して本邦独自の妖蛇として扱われるのであるが、 の条である(ピリオド・コンマは句読点に カットせずに引く。 両生・爬虫類」(平凡 後付けの読みはルビ

《引用開始》

声を聞いてから立ち去るという。 省)に出るとある。この動物は人を咬んだ後、樹上で頭を垂れ、咬まれた人が痛みに叫ぶ だし敏速に処置しなければ意味をなさない。《字林》には、トカゲ形の睩聴が魏興(陝西 音写するなら「ポォーシゥー」。」と鳴くものなら手当てしだいで助かるかもしれない。 ムゥー」。]と鳴くものならまず助からないが、〈博叔、博叔〉[やぶちゃん注:より正確にねあがるが、このとき〈斫木、斫木〉[やぶちゃん注:より正確に音写するなら「ヂゥオれる。蝮に似て短く、 4 本のあしがあり、跳ねて人を咬む。咬んだ後、たちまち木に跳 の一種の風聞が伝わったものらしい。 ん北米産の毒トカゲではありえない。木村重、上野益三両氏の考定によれば、やはりハブ に、千歳蝮という名で、毒をもつ爬虫類を思わせる生物が記載さ おそらく千歳蝮と同じ動物を指したものだろう。もちろ

様の動物がいると述べられる。山中の神社の奥に大きな松の木があるが、 6 月ごろにな ると 4 尺ほどのトカゲに似たヘビがあらわれる。土地の人はヤマカガシとよんでいる。 人の声がすると、後ろの2本あしで立って、人が来るのを待っているという。 ちなみに《重訂本草綱目啓蒙》では、千歳蝮が何を指すか不明だが、信州戸隠山中に同

進めないなど、いささか間抜けなところもある。ただし、人に害を加えることはないらし 籠のあいだの一石峠に 8 月ごろたまにでる。坂を横切るときに、転がってしまって前に るという。ところで、野槌蛇は信州にもいるらしい。《信濃奇勝録》によれば、馬籠と妻 ば、毒トカゲとも毒へビともつかぬ動物であり、その形は杵の形をしているという。だと斫木蛇のなかまだろうか、と述べている。斫木蛇は千歳蝮の別名で、《本草綱目》によれ なので、このヘビに会ったときは高いほうへ逃げればよいという。同書では、このヘビを き、坂を走り下って、たいへん速く人を追いかけることができる。 ものは直径 5 寸、長さ3尺。頭、尾は均等で尾はとがっていないので、柄のない槌に似 チノコの原型と思われる。それによると〈野槌蛇〉は深山の木の穴のなかにいて、 とれるヘビで柱のような形状、長さ 2 尺、跳躍し人を刺し、ときどき声をだすものであ がマムシに似て、毒が強く、長さは 2 尺余りと、やや小型に記されている。 すれば、ツチノコの故郷は中国だったのかもしれない。《桃洞遺筆》では、斫木蛇は全身 ていることから名がついた。大和の吉野山中でみかけられる。口は大きく人の足に咬みつ また日本にも千歳蝮がいたとする記録がある。《和漢三才図会》の一文だが、同時にツ 《嶺南雑記》にある冬瓜蛇と同じではないだろうかとも述べる。それは厦門で ただしのぼりは不得意 また、千歳 大きい

《引用終了

以下、少し以上の荒俣氏の解説に注を附しておく。

して記載されている。 ・「本草綱目」の「千歳蝮」は巻四十三の「鱗之二 蛇類」の「蝮蛇」(マムシ) の附録

*

必死。其囓已卽跳上木、 [附錄] 千歲蝮【頌日、 東間、 作聲云斫木斫木者、 一種千歲蝮。 狀如蝮而短。 不可救也。若云博叔博叔者、 有四脚、 能跳來囓人。 猶可急治之。 人或中之

長一二尺、談埜翁方、名斫木蛇。又名望板歸。救之用嫩黃荆葉、 來囓。之囓已還樹垂頭聴聞哭聲、 細辛雄黃等分爲末、内瘡中。日三四易之。又以栝樓根桂末著管中、密塞勿令走氣。佩之、 注:以下はその「膽」・「肉」の処方・功能であるが、略す。] 中毒急敷之。緩卽不救。時珍日、 按字林云、睩聽、形如蜥蜴。 乃去卽此也。 其狀頭尾一般、 大如搗衣杵。俗名合木蛇。 出魏興。居樹上見人、則跳 **搗爛敷之。**】[やぶちゃん

*

括樓根・桂末を以つて管中に著け、密塞して、氣を走らせしむこと勿れ。之れを佩び、毒素ののに、等分、末と爲し、瘡中に内る。日に日に、三、四、之れを易ふ。又、からざるなり。若し、『博叔、博叔』と云ふは、猶ほ、急ぎ、之れを治すべし。細辛・雄からざるなり。若し、『博叔、博叔』と云ふは、猶ほ、急ぎ、之れを治すべし。細辛・雄 れ、囓み已みて、 ひ、搗き爛らして、之れを敷く。】る。]に、「斫木蛇」と名づく。又、「望板歸」と名づく。 頭・尾は一般にして、大いさ、衣を搗く杵のごとし。俗、「合木蛇」と名づく。長さ、 て、樹に還へりて、頭を垂れ、哭聲を聴聞し、乃ち、去る、卽ち、此れなり。其の狀、し。魏興に出づ。樹上に居し、人を見るときは、則ち、跳り來りて、之を囓む。囓み已 に中るときは、急ぎ、之れを敷く。緩きときは[やぶちゃん注:症状の回復が遅い時栝樓根・桂末を以つて管中に著け、密塞して、氣を走らせしむこと勿れ。之れを佩び、 一、二尺、談埜翁が方[やぶちゃん注:医書「談野翁試驗方」なる書は本書によく見かけ! れ、囓み已みて、卽ち、木に跳り上りて、聲を作して、『斫木、斫木』と云ふは、救ふべし。四脚、有り、能く跳び來りて、人を囓む。人、或いは之れに中れば、必ず死す。其[附錄]千歲蝮【頌曰はく、東の間に、一種、千歲蝮あり。 狀、 蝮 のごとくして、短 『いち、救へず。時珍日はく、按ずるに、「字林」に云はく、『睩・聽、形、蜥蜴のごと即ち、救へず。時珍日はく、按ずるに、「字林」に云はく、『睩・聽、形、蜥蜴のごと 之れを救ふに、 嫩黄・荆葉を用 囓み已み

*

漢方生薬は労多くして益がないので注さない。悪しからず。

- 設置された広域地名。この中央部。 ・「魏興」は三国時代から隋初にかけて現在の陝西省安康市と湖北省十堰市に跨る地域に
- 設けたが、佚書で、 全七巻とされ、凡そ一万二千八百二十四字を収め、「説文解字」と同じ五百四十の部首を ・「字林」晋の呂忱によって編纂された部首別漢字字書。「隋書」の「経籍志」によれば、 現在は他書に引用された佚文のみが残る。
- 有種)が吻上部にある赤外線感知器官ピット(pit)器官で以って、木の下を通る獲物を感知 俣氏の記す、 し、確実に咬み打つのと、酷似している。 サリヘビ科ハブ属 Protobothrops 及びハブ Protobothrops fluvoviridis 。日本の南西諸島の固 ・「トカゲ形の睩聴」諸本、人を囓む毒虫とするが、具体な形態は未詳。但し、ここで荒 木からぶら下がって獲物に咬みつくというのは、荒俣氏の言う通り、ハブ(ク
- アメリカドクトカゲ Heloderma suspectum のこと。 ・「北米産の毒トカゲ」とは有鱗目トカゲ亜目オオトカゲ下目ドクトカゲ科ドクトカゲ属
- 年~文化七(一八一○)年:松岡恕庵に学び、京に私塾衆芳軒を開いた。 なり、江戸の医学館で教授した。広く植物採集と研究を重ね、本邦の本草学を集大成した 人物として知られる)の死後、 ・「重訂本草綱目啓蒙」江戸中・後期の医師で本草家の小野蘭山(享保一四(一七二九) 弟子が編集した弘化四(一八四七)年刊の本草書。

会図書館デジタルコレクションの原本を視認して示す。言わずもがな、「本草綱目」に則 族の部の全電子化注)等の誤りを指弾することが一つの動機でもあった。当該部を国立国 綱目」を考証する形で書かれている。貝原益軒の「大和本草」(リンク先は私の同書の水 らがなに代え、句読点を打った。 巻三十九の「鱗部」の「鱗之二」の「蝮蛇」の「附錄」である。 カタカナを概ね、

*

毒蛇ありて、人を害するを畏れて、登り見る人聲を聞は、後足のみにして立て、 らずと云。其神社より奥に三十餘抱の珍しき大松あれども、 〔附錄〕千歳蝮 詳ならず、信州戸隠山は髙くして、雪深く、六月に非れ 若、螫るれば、毒、猛けれども、 蝮蛇よりは輕しと云。此類なるべし。 六月比は、ヤマカガヾシと呼 ば、登るべから 人の来る

*

三)年)・二編(嘉永三(一八五〇)年)に編集、刊行された。なお、 学んだ。熊野などの動植物を調査し、和歌山藩医となり、医学館本草局を主宰した。「御 げた姿勢から、伸び上がって攻撃に移る際の印象を誤認したに過ぎないと私は考える。 考えてよい。後ろ足で立つというのは、蜷局を巻いた状態から警告のために鎌首を伸ばし上 と、概ね正しいものの、如何にも、しょぼい記載で、殆んどヤマカガシそのものの記載と き読点は普通のものに代え、句読点を施した。歴史的仮名遣の誤りはママ。 る)。以下に「桃洞遺筆」巻之三の「附錄」に載る「野槌蛇」を国立国会図書館デジタル などを採り上げて、絵と考証で解説している。孫の良直によって初編(天保四(一八三 国産物考」・「魚譜」・「南海禽譜」などの優れた博物誌を書いた)の遺稿集で、植物や動物 四六)年~文政八(一八二五)年:本名は良貴。医学を吉益東洞に、本草学を小野蘭山に コレクションの原本画像を視認して(ここから)電子化する。読みは一部に留めた。白抜 て非常に高く評価している(私はブログ・カテゴリ『畔田翠山「水族志」』を手掛けてい んじる研究態度は同藩門人の畔田翠山に継がれており、私はこの二人を熊楠の先駆者とし 彼の実地検証を重

野追沱 附 千歳蝮(せんざいふく)のづちへび

ならず、本草啓蒙に、信州戸隱山ハ髙クメ雪深ク、六月ニ非ザレバ登ルベカラズト云、ならず、本草啓蒙に、信州戸隱山ハ髙クメ雪深ク、六月ニ非ザレバ登ルベカラズト云、ふ、これ野槌蛇[やぶちゃん注:「のづちへび」とルビもする。]なるべし○千歳蝮ハ 雜記に、瓊州『有』二冬瓜蛇』、大サ如ニメ[やぶちゃん注:「メ」は約物で「にして」と読む。]レ柱ノ、而長サ二尺 嘗て聞く、 ノ形ニ似タリ、 して、尾、 本草綱目頌 [やぶちゃん注:「しょ」はママ。]の説に、有リニ四脚」といへば、充らず。按に、 ______ 其行ク「「セーネฺチャムカサ:「「」は約物で「くこと」と読む。」跳躍逢ゝトメ有レ声、螫セバレ人立処ニ死スといに、瓊州「有リ」冬瓜蛇」、大ッ如・・・・・ 如く、口、大にして、能人を嚙む、 甚 毒ありといふ。古説に千載蝮を充れど突らず、槌の柄なきがごとし。全身蝮蛇 [やぶちゃん注:「反鼻」でマムシの頭部形状からの知られた和州吉野山中、本州熊野奥等に産すと、其形は長さ二尺餘 、頭 、尾、均しく

ケレ圧、蝮蛇ヨリハ軽シト云フ。此類ナルベシといへり。

*

誌。「冬瓜蛇」(とうかじゃ)は、早稲田大学図書館「古典総合データベース」の「雑記五 出向いた呉震方が著した、中国南部の「五嶺」(南嶺山脈)よりも南の、 広西チワン族自治区・海南省の全域と及び湖南省と江西省の一部に当たる嶺南地方の地方 ・「嶺南雑記」清の康熙年間(一六六二年~一七二二年)の前半に当地の地方長官として 桃洞の引用とほぼ同じだが、原拠資料として別に電子化しておく。 (江戸で板行された漢籍合本)に収載されたこの(PDF・同書下巻)53 コマ目に出 現在の広東省・

k

瓊州有冬瓜蛇大如柱而長止二尺餘其徃跳躍蓬蓬有聲螫人立死

*

か?! とした短い俵状の冬瓜だ。ずんぐりむっくりの野槌には如何にも親和性があるではないつ、そそられない。しかし、「冬瓜蛇」という現地名には着目する必要がある。かのぼてっ れはどうみても、「本草綱目」の「千歳蝮」の転載っぽく、熱帯性の毒蛇としても、今一とある。「瓊州」(けいしゅう)は現在の海南省海口市(海南島北側)一帯である。が、こ

者拱手落淚如乞救者云々と言るは、十七世紀の終りに英國學士會員「フライヤー」がスラ dexploration aux Sources du Dong-Nai, Cochinchine Francaise, No. 10. 1882, p. 44)° 話有り、倭漢三才圖會卷七六に、淡路の由良島に、每年六月三日、 來たり贈り、忽ち死し、其螺を寶とし其龜を葬りしに、官命じて龜靈明神と號せしめたる 夫、二年續けて同一の龜を得、酒多く呑せ放ち遣りしに、第三年めに其龜鸚鵡螺一を負ひ 時して浮上り、 兒の如く啼く、裏返し置く時は行く能はずと言るに近し、 り推して、古え吾邦に、龜を神若くは神使とする風盛んなりしを察すべし、 India and Persia, 1698, p. 122)° ツトで、海龜捕るを記して、此物全く蟾蜍の愛すべきに似たり、婦女の如く長大息し、 小の海龜必ず來游群を成すと云へり、神代に、豐玉姬龜に乘り、海を渡る事有り、安南 トラヲスの祖も、 之を龜の浮寶と名け、見る者尤も幸運の兆也とす、只野眞葛の磯通太比に、奥州の漁 之を殺す者、古來その業を世傳し、他人之を殺さず、余が知れる新宮の船頭、 海龜を漁事に不祥なりとする事、倭漢三才圖會卷四六に出、其偶有得、 早龜と云ふ龜に乘り、 紀州田邊にて、海龜を獲るも殺さず、酒を飮せて放ちやるを常とす、海に入て 恩を謝して去るといふ、 龜に乘り水を涉り來しと云ふ。(Néis et Septans, 'Rapport sur un Voyage 其人躬ら見し事無けれども、海龜罕れに綠色で甚だ光る異寶を抱き浮 長門豐浦に到りし由、類聚名物考卷三一一に見ゆ、是等諸例 實は呼吸に暇とるなり、 (Fryer, この海龜を食ふ人多き 'A New Account of East 社僧龍王を祭る時、大 又海坊主と 又鹿島明 ょ

産卵が確認されている種は、 [やぶちゃん注:「海龜」爬虫綱カメ目潜頸亜目ウミガメ上科 Chelonioidea の内、 本邦で

内各所に実在している』とある) ガメ」によれば、『静岡県御前崎市は「御前崎のウミガメおよびその産卵地」が国の天然 ウミガメ科 Cheloniidae アカウミガメ属アカウミガメ Caretta caretta(ウィキの「アカウミ 記念物に指定されるなどアカウミガメとのかかわりの深い地域であるが、漁業関係者の間 では大漁、 豊漁のシンボルとして敬愛され、死んだアカウミガメを供養した「亀塚」が 市

を今も忘れることが出来ない。また、二十の頃には、 食したこともある) は高校時代、水族館で死んだ同種の解剖を見たことがある。強烈な生臭さが漂っていたの アオウミガメ属アオウミガメ Chelonia mydas(本邦では「正覚坊」という異名もある。 行きつけの寿司屋で本種 0 生の卵を

玳瑁のそれではなく「鼈」(スッポン)の「甲」羅と誤魔化したことに由来するという話 ずる倹約令で輸入物の玳瑁の甲羅が禁制となり、 タイマイ属タイマイ Eretmochelys imbricata(玳瑁・瑇瑁。鼈甲細工の原料とされる。 に「鼈甲」という語については、 一説に、寛文八(一六六八)年に幕府が出しだ奢侈を禁 密輸入が行われ、 糺された際に

オサガメ科 Dermochelyidae オサガメ属オサガメ Dermochelys coriacea(ウミガメ類の最大 甲長一・三〇~一・六〇メート

種であるようだが (最初の三種では種間雑種が確認されている)、 他に、

して、

の起源をめぐって一」が読み応えがある。 ・成一六(二○○四)年度の人文学科卒業研究の永谷恵氏の論文「亀の中国思想史」そ 「体が現認されている(本邦では産卵はしないとされる)。なお、中国限定であるが、 の民俗誌として、 ヒメウミガ 茨城大学名誉教授真柳誠氏のサイト「医史学の真柳研究室」内にあ メ属ヒメウミガメ Lepidochelys olivacea

「躬ら」「みづから」。 「暇とる」「ひまとる」。 呼吸の必要性から頭を海上に出すだけのことである、

「罕れに」「まれに」。

ぽり外套膜で覆ってウミウシのようであり、見た目の色は貝殻とは似ても似つかない)も 貝殻も緑色を呈することはないと思われ、ウミガメ類に附着するとは考えにくいので、 す」不詳。なお、腹足綱直腹足亜綱 Apogastropoda 下綱新生腹足上目吸腔目高腹足亜目タ に名が同じという偶然であろう。 っておくが、貝類図鑑のそれは殼であって、 ている。側面と腹面は白色であり、タカラガイの類では、識別が最も容易な一種である がいるが、 マキビ下目タカラガイ超科タカラガイ科タカラガイ属ウキダカラ 「綠色ではなはだ光る異寶を抱き浮く、 成体(海外サイトで確認したところ、外套膜は暗紫色或いは褐色で緑色ではない。 同種は、 一般には殻の背面が白色に三つの黒帯を巻き、上下を白帯で区切られ 之を龜の浮寶と名け、見る者尤も幸運の兆也 タカラガイ類の多くは生体では殼全体をすっ (浮標宝)Cypraea asellus

婚し、 帰り、 養女となった女流歌人。紀州藩に仕えた)に古典を学び、国学者で歌人の村田春海(はる 抱いた。荷田蒼生子(国学者で伏見稲荷神官であったに荷田春満の弟高惟の娘で、春満の明者は四千人を超えた)に遭遇し、苦しむ貧民に心を寄せ、後々まで続く経世済民の志を 橋・日本橋に延焼、江戸城下の武家屋敷を焼き尽くした。死者は一万四千七百人、行方不 る。 二五)年)は私の好きな江戸中・後期にあって稀に見る才能を開花させた女流随筆家であ 出版に反対し、自ら「独考論」を著し、真葛の論に反撃し、手紙で知り逢ってから一年余 み)に和文の才を認められ、また、滝本流の書もよくした。仙台藩に奥勤めした後、家へ 江戸の滝沢馬琴に送り、批評と出版を依頼したが、馬琴は禁忌に触れる部分があるとして り、文政二(一八一九)年、五十五歳の時、胸の想いを全三巻に纏め、「独考」と題して 石取りの只野伊賀行義の後妻となり(彼女はその前に望まない老人と、一度、短期間、 「只野真葛の磯通太比」**只野真葛(ただのまくづ 宝暦一三(一七六三)年~文政八(一八** 仙台藩医で「赤蝦夷風説考」の著者でもあった工藤平助の娘で、名は綾子。 明和九(一七七二)年二月、 「兎園小説」での号)作の「眞葛のおうな」)。真葛は体系的な学問をしたわけではな 離縁している)、 母亡き後の家政を見た。三十六歳で、落魄れた工藤家復興を期し、 「兎園小説」に書き留めたからででもあった(第十集の最後にある著作堂(馬 しかしまた、真葛の事跡が、現在、ある程度まで明らかとなっているの 蘭学などの教養を身に着け、 仙台へ下る。 十歳で「明和の大火」(目黒大円寺から出火、麻布・京 江戸勤めの多い夫の留守を守りながら、 その上にオリジナルな思想を築 仙台藩士千二百 思索に耽 江戸生ま 13

認して示す。段落を成形し、句点のみなので、それは自己判断で句読点に変更或いは追加 治四二(一九〇九)年博文館刊の岸上質軒校訂「續紀行文集」(「續帝國文庫」第二十四 在の宮城県宮城郡七ヶ浜町(しちがはままち)へ仲間と旅した際の紀行文で、途中で採取し ばなし」・「奥州ばなし」などが残る(以上は主文を「朝日日本歴史人物事典」に拠りつ 編)の当該部(リンク先は冒頭ページ。左ページの一行目から次のページにかけて)を視 た。「独考」には一種の偏頗な部分もあるものの、江戸期の女性の手になる社会批判書で まで電子化した。歴史的仮名遣の誤りはママ。 た海辺の珍しい話も挟まり、これもその一つ。国立国会図書館デジタルコレクションの明 し、話が一旦、離れて歌などが詠まれるが、カットせずにこのカメ・パートの切れる最後 (記号を含む)をした。読みは一部に留めた。踊り字「く」は正字化した。中間部に少 オリジナルに補足を加えた)。「いそづたひ」は文政元(一八一八)年に宮城郡七浜(現 当時としては稀有の女性解放を叫ぶ書として評価できる。著作には他に・「むかし

此島の周圍を離れぬ小舟ありき。

「人を乘せてんや。」

と、とはせつれば、

は、道行く人の必ず過ぎ給ふ所なれば、立寄らせ給ひて、見給へかし。今、(僕、も參り「今よりは、七、八年前に、龜の持來し、『浮穴の貝』といふものを、持はべり。我家なるものから[やぶちゃん注:逆接の接続助詞。]、心よからず。此釣人の語るやう、 といふ故、乘て見れば、 「二人、三人は可。」 蛸釣る舟には有し。今、捕たるを、膝の下に打入るいは、珍らか も参りて

とぞ、 いひし。

舟より上るとて、今、 捕りたる蛸を乞求めて、家苞にしたり。

ど、おほく積入れて、折敷などは有げにも見えぬに、斯く振舞ふは、いみじき寳と思へるて、引網・たく繩[やぶちゃん注:「たくなは」。「栲繩」でコウゾの繊維で作った繩。]なと乞へば、内なる女、あしたかき折敷に白き箱を据て、持出たり。この磯屋の標・材豊に と乞へば、内なる女、あしたかき折敷に白き箱を据て、持出たり。この磯屋の樣、板敷に「浮穴の貝てふもの、持たりと聞くを、見せてんや。」()の家にいたりて、

「こをこを」

と鳴りながら、

「是を得て、八歳になれども、乾きもせず。」と鳴りながら、いさゝかもこぼれ出でず。

とぞいひし。

兎角する中に、 釣 歸り來て、 事の由を語る。

り前、 沖に出て釣し侍 りし時、 四尺餘の龜をえ侍りき。 乘合ひし釣

僕申したりしを、海士共も、戦は酒好む物と聞けば、飲ませてん。』

『よからん。』

候ひし。りしに、例の龜にぞ候ひし。 は、いつも、朝、とく、磯邊を見回り侍つれば、見怪しみて、汐をかつぎ分て、往て見有て、此度は此貝を背に負ひて、磯より半道許り隔てたる所に、浮び寄て候ひき。(僕文、沖中にて釣せし時、龜の出て候ひつれば、捕へて、酒を飮ませて放ち侍りしに、一 と申して、 飲ませ侍りしに、一本許り飲み候ひき。 放ち遺候ひしに、 翌る年の夏、

『例の如く、 酒を飲ませて、放たん。』

吊 ひ侍りき。今は公より仰せ蒙りて、「亀靈明神」と申し侍る。此貝を、初めよりよき物と、最哀れに悲しまれ侍りつれば、骸を陸に擔上げて、小高き所の地を掘て、埋め候ひて注。」、沖に漕出で、放ちて歸り侍りしに、夕つ方、又、元の所に來て死侍りき。注。」、沖に漕出で、放ちて歸り侍りしに、夕つ方、又、元の所に來て死侍りき。と、し侍しに、左の手を物に囓取られんと思しく、甚き疵を負ひて、動くべくもあらず見と、し侍しに、左の手を物に囓取られんと思しく、甚き疵を負ひて、動くべくもあらず見

と識り侍らば、斯は仕候らはじを、 只 珍らしとのみ思ひ侍りしかば、海士乙女共の、亀靈明神」と申し侍る。此貝を、初めよりよき物

半にて、脹切たる所にも、針もて突きたる程の穴、あきて候ひしを、と言ひつら、手々に打缺き打缺きして、取らるら程は取り侍りつれば、『亀の持て來貝、得させよ。』 斯く損じ侍る。

と思ひ侍りて、角ある鐵箸もて、『汐をぬきて、孫共に與へん。』 の出侍らねば、其儘にて半年許、 休みたる旅人の、 聊かも汐

と、其故を問聞き侍りて、且、感じ、且、缺損じたることを、『こは。まさしう「浮穴の貝」といふものなり。如何にして得 ったることを、 惜 しみ如何にして得し。」 [やぶちゃん注

「惜しむ」の意の上代の古形。〕侍りて、

と、教へ侍りしによりて、俄に尊み候ひぬ。」『得がたき物なるを、今よりは寳とせよ。』

つゝ磯づたひし行けば、湊藥師[やぶちゃん注:ここ(グーグル・マップ・データ)。]のにつれて、下り上りするが、うちあげられたるは、蒔繪に異なることなし。かゝるを、愛 たるは、晴やかにて、際なく快いこゝをはなれて山路にかゝるは、 ことに清し。眞砂の中に、黃金の箔を敷たらんやうに見ゆるが交りて、波の打寄るは、晴やかにて、際なく 快 し。又、居たちて、磯づたひの道にかゝる。湊濱のわた よそに過行きたり。 心づきなかりしを、出離れて、海のみおものふと見え 後、思出て悔るも、 かひなし。 『千鳥は冬ならでは、

をらじ』と思へりしを、 がら逃行き、退く時は、又、隨ひて、あさり、 「をしへ鳥」の形したり。 ら逃行き、退く時は、又、隨ひて、あさり、大浪の打かられば飛立て、即ち、水際にゐら逃行き、退く時は、又、隨ひてば、羽勝にて、燕に似たり。小波の寄する時は、歩みなづけば、遠く居つら、毎も同じ樣也。繪に書たるを見しとは異なり、身は細りて長く、らじ』と思へりしを、十羽許り、群居て、水際を去らず、求食は、最めづらし。人のちらじ』 波に千鳥とは、いはまほし。

磯千鳥みぎは離れずあさりつ。

清き渚によをやつくさん

しうて、 日の斜に成ぬれば、家路に歸らんことの、 わづらはしく思はるいを、 所得がほに、 心おだ

『あれは、うらやまし。 世に千どりがけといふことのあるは、 何の故ぞ。』

と思ひしを、

『打波、引波につれて、あゆむさまをもて、よそへしことぞ。』 是あはせられし。此磯は、御殿崎より見し時だに、程あるやうなりしを、下立ちて思あはせられし。此磯は、御殿崎より見し時だに、程あるやうなりしを、『おりた

「家づとに貝拾ふ。」

は、最測りなし。

真)。サイド・パネルを見ると、 とて、 く頃は、心あはたゞしくなりぬ。 時うつしつ。、蒲生の濱[やぶちゃん注:ここ(グーグル・マップ・データ航空写 現在もチドリだけでなく、 野鳥の楽園のようである。〕行

(かえ子) [やぶちゃん注:同行者の名。]

かへりゆく道もわすれてうちよする

眞砂にまじる貝ひろひけり

と飽かねども、濱を離れて、先に遠く見し松原を經て、 家路へと赴きたりし。

おもひはかるおしあてごと

傷められながら、辛き思ひに取得て來りしとにや』と思へば、哀なり。世に强き例に引度々故、此報ひに、龜も珍らしき物を贈らんと、强て求むとて、海底の荒魚と戰ひ、身を海土に捕られて、東京とことにより、 とするに依りて、貝を持て來しには非じ、貝を獲んとして、命、失へるなるべく龜の、弱り果たるをもて思ふに、海の底にて、甚く戰ひしとは知られたり。 海士に捕られて、死すべき命、たすけられしのみならず、珍らしき酒を飮ませられしもぁまにして、恐ろしき荒魚ども栖て、中々、人の及び難き所故、取得ることもなきを、此龜、「『』』、「『』』、「『』』、「『』、 いように、字空けを添えた。前書下の原割注の「川子濱」は同定し得ないが、伝承からみ [やぶちゃん注:以下の長歌は、底本では全体が二字下げ。前後を一行空け、 『此貝を、龜の、 松ヶ浜のどこかであろう。因みに、古い時代のこの辺りの地形は、 元魚ども栖て、中々、人の及び難き所故、取得ることもなきを、 の3.8 痛手負ひながら、持て來しをもて考ふれば、此貝の在る所は、 命、失へるなるべし。 かなり現在と異 歌は読み易 此龜、

海中のさまをよめる歌(海士人の住所は川子濱也)

「今昔マップ」のそれを参考に示しておく。]

四尺餘の大龜の「浮びたりしを「倶乘の「海士とはかりて」をなるます。 はまの磯屋にすむあまの「沖に出居て例のごと 放ち遣りしに 又の年 同じき龜のたく繩に 海士とはかりて美酒を「與へ飮せて」元のごとは居て例のごと「釣れる雜魚に加はりて」 寄りて來ぬれば うま酒の ゆかしとにや

根に栖魚のしと窺へり 行くを 根には 千萬の をふり 隙に き上りつ ひつゝ 浮穴といへる玉貝を 得めと思へど 荒魚の れば潮さへ のませつら 海士人の 大龜は 美酒をさへめぐまれし 人の情の報ひには 得難きものをさょげもてませつ。 またもはなちてやりつれば 龜のおもはく 死る命 全く保 八龜は「入得ぬ方に分ゆきて」貝を取得て背に負ひつ「心いさみて行觸れがたみ」容易くも「取得られねば悔しとに」思て弱い「するな | 「大きは | で、飛ぶがごと 追て來ぬれば 荒汐は うな逆立て卷返り齒を剝出で、飛ぶがごと 追て來ぬれば 荒汐は うな逆立て卷返り 搔のぼり 潮のさかひを 超ぬべく 成りぬる時に荒いをの 睨みり へ 血しほと成て大龜は 心消つゝ一行に 弱りてあれど やうやうに 海路辿いとひかゝれば 拂ふ手を ふつと囓れて一度に 汐の境は去ぬれど 重傷にあいとひかゝれば 拂ふ手を ふつと囓れて一度に 汐の境は去ぬれど 重傷にあ 神鳴騒ぐ如くにて 聞くも畏く肝迷ひ 家の 邊 の磯邊まで たやけ、一人でありとは知りつれど、千尋に餘る、荒潮の階も異なれば、そこに有りとは知りつれど、千尋に餘る、荒りのである。 取得られねば悔しとは 思ひ染つ、荒魚の 寄來こぬ 貝を負來て 沈まじ浮んと空様に 生命歿けり弱りてあれど 怒りかしこみ事なくは 取得がた 死る命 全く保ちしのみな 尻を成しつい りかぶ魚 奉らめと思 底の闇は

萬代を經ぬべき龜はうま酒の

あぢに命をつくしぬるかも

龜がよはひ酒にたちけりみじかゝる

人の命は捨るもうべなり

萬代の齡ゆづりしかひなれば

手にとる人も千代はへぬべし

文政はじめのとし葉月五十六歳にてしるす

眞 葛

推定訓読を附す。] では、以下の漢文が附されてある。返り点を除去して恣意的に正字化して示し、 [やぶちゃん注:底本では、ここで終わっているが、所持する国書刊行会「江戸文庫」版 後に私の

洋々焉而去、後數日、 へ給へるなり。 不數人、介族知恩、 松濱之漁父、網而獲一大龜、飮之酒而放之、如此者二囘矣。賤而有仁、可不賞乎。龜旣 傳以爲美談。其不朽也、勝徒壽遠矣。[原割註―こは、かの國にいます南山禪師のそ 與巨魚鬪、而至此乎。介而知恩以死報之、可不哀且賞乎。然而細民有仁、 亦所希覩也。可謂奇遇耳。夫、龜以壽稱者也。 負珍貝來、 少焉殭矣。怪而視之、損其一足、似爲物所齕斷。意采貝 而爲恩强死、 衆漁中蓋

*

殭す。「怪し」として之れを視るに、其れ、一足を損じ、齕斷せる物たるに似たり。意ふ き、二囘たり。賤しくして、しかも、仁、有り。賞すべからざるか。龜、旣に洋々焉[や ぶちゃん注:はるか遠いさま。〕として去り、後、數日、 松濱の漁父、網にて一大龜を獲り、之れに酒を飮ませ、而して之れを放つ。此くのごと 重淵に貝を采り、巨魚と鬪ひ、 亀を指す。」にして、 しかも、 恩を知り、 而して此に至れるか。介[やぶちゃん注:広義の魚介 死を以つて之れに報ふ、哀れみ、 珍貝を負ひて來り、 少焉にして 且つ、

るなり。】 不朽や、徒に壽とするに勝れるに遠し、と。【こは、かの國にいます南山禪師のそへ合へり。而して恩を爲し、强て死す。人、哀れむと所と爲し、傳へて以つて美談と爲す。其の族、恩を知る、亦、希覩とせんや、奇遇と謂ふべきのみ。夫れ、龜、壽を以つて稱す者なすべからざるか。然して、細民、仁、有り、衆漁の中、蓋し、人を數ふべからざるに、介

*

我々はこれを、 素敵な一文ではないか! しかも、真葛が対象の詳細なデータを記して呉れているお蔭で、

或いはよく知られた一種、 頭足綱四鰓(オウムガイ)亜綱オウムガイ目オウムガイ科オウムガイ属 Nautilus の一種

オウムガイ Nautilus pompilius

は現存するのである。「七ヶ浜町役場」公式サイト内にあった観光パンフレットの中に「浮 鵡螺」と、同じく私の「オウムガイ(松森胤保「両羽(りょうう)博物図譜」より)」を 置で二つに切断した殻一個体を所持している)、一応、私の毛利梅園「梅園介譜」の「鸚 まう)であるが、死貝の殻はしばしば日本沿岸に漂着するので、黒潮に乗って仙台の海岸 海(百から六百メートル。八百メートルを超えると殻が水圧に耐え切れずに縮崩壊してし 穴ノ貝(富結の貝)(ふけつのかい) 民話2」として本話が載っており、 リンクさせておく。 に流れ寄っても少しもおかしくないのである。 であると確かに認識出来るのである。 しい)と、保存されている「浮穴の貝」の写真が載っているのである。 無論、二つともにカラー図版附きである。さて、この「浮穴の貝」、実 同種の分布は南太平洋からオーストラリア近海の深 知らない人はおるまいが(私は殻を正中位 現在の祠(新

《引用開始》

尺程(1・2m)の大亀が海上に浮き上がりました。珍しがった漁師は亀を家へ連れて帰 文化4年(1807)頃、松ヶ浜の漁師が御殿崎の沖合いで釣りをしていたところ、 酒を振る舞った後、背中に印を付けて海へ帰しました。

しみに待ちました。 亀は翌年もやってきました。漁師は再び酒を振い、海へ帰した後、 翌年の再来をまた楽

よくよく見れば、亀は左手に、何者かに食いちぎられたような大けがを負っていました。 すると翌年、亀は見たこともない貝を背中に背負ってやってきました。貝を受け取って 酒を飲ませて船に乗せ、沖合に帰しました。

内に埋葬し「亀霊明神」と名付けてまつりました。そして、漁師は亀の背に乗ってきた貝 ところが翌朝、その亀が死んでいるのを見つけて、 家の入口付近に置きました。 気の毒に思った漁師は、養松院 の境

師に語りました。半信半疑で漁師がそのようにしてみると、大漁が続いた事で、 「これは浮穴の貝という深海の珍宝で、出漁前に拝めば大漁をもたらす」と漁 はるばる四国から拝みにやってくる人もいたといいます。 漁師の家の前を通りかかった旅の僧侶が、その貝を見つけて仰天しま 噂はたち

(ふけつ)という読みの音から「富結」という縁起のい い字を当てることもありま

て今も供養を続けています。 この漁師の子孫は、今も松ヶ浜に暮らし、 亀霊明神の祠を養松院から自宅そばに移し

崎で、アップすると、一時保管されてあった「養松院」が見える。恐らくはこの範囲内のど この漁師自身に直接逢って、 こかに、祀られ、その子孫の御自宅に「浮穴の貝」はあるのである。 ている。この(グーグル・マップ・データ航空写真)松ヶ崎港の東北の一角部分の岬が御殿 行くことがあったら、 この時制記載が正しいとすれば、真葛さんは、 是非ともこのオウムガイ、いやさ、「浮穴の貝」を拝みたいと思っ 話を聴き、「浮穴の貝」を親しく観察したことになる。 この奇談のあった時から僅か十一年の後に、

龜必ず來游群を成すと云へり」同巻に載る「大日本國」の中の「淡路」の「由良島」であ 「倭漢三才圖會卷七六に、 所持する原本より電子化する。原文の訓点は除去し、後に訓読を示した。 淡路の由良島に、每年六月三日、社僧龍王を祭る時、大小の海

*

由良島【非名所】 在由良之南西海中

修祭儀時大小龜來群游於石※毎度無違人甚爲奇 島周凡三里許有奇石名金藏作此處或見猩猩蓋俗說 又有大石名比良波惠其石出於海中而上 面平也方二丈許每六月三日土人備供物於石上謂之龍王祭【八幡宮神宮寺】社僧來誦陀羅尼

[やぶちゃん注:「※」はグリフウィキのこれ。「邊」の異体字。 訓読では「邊」とし

*

由良島【名所に非ず。】 由良の南西海中に在り。

小の龜、來りて、石邊に群游す。毎度、違ふこと無し。人、甚だ奇と爲す。「龍王祭」と謂ふ。【八幡宮の神宮寺の。】 社僧、來り、陀羅尼を誦し、祭儀を修す時、 て、上面、 り、蓋し、 周り、 平なることや、方二丈許り。毎六月三日、土人、供物を石上に備ふ。之れを 俗説ならん。又、大石、有り、「比良波惠」と名づく。其の石、海中より出で 凡そ三里許り。奇石、有り、「金藏作」と名づく。此の處、猩猩を見ること或

*

キの「沼島」には『「和漢三才図会」には「龍宮の表門」と書き記されている』と書いて ある(こここそ開闢神話で最初に出来た原日本「おのころ島」であるとする伝承があ 六キロメートルの紀伊水道北西部に浮かぶ、兵庫県南あわじ市に属する沼島(ぬしま) え」(海中に上方に突き出した根(岩礁帯)を「はえ」と呼ぶ。 あるが、ネット上の複数の活字本(私の所持するのは原刊行本の一種)を見ても、 る)。上及び下立神岩・屏風岩・「あみだバエ」などの奇岩があるが、中でも高さ約三十メ 載を見出せない ートルの「上立神岩」は「竜宮の表門」(グーグル・マップ・データの「上立神岩」のサ の大きさと由良からの方角、奇石群があること等から、これは現在の淡路島の南沖合四・ 「金藏作」の読みは不詳。現在、この呼称は生き残っていない。「比良波惠」は「ひらば ・パネルの現地の説明版を見よ)とも呼ばれ、ウミガメと親和性が強い。 (同書には大きく分けて良安の初版と手入れをした改訂版の二種があるか 魚介類が多く集まる)。

ら、或いはそうした記述がある版があるのかも知れないが、どうも不審である)。

た』というラスト・シーンを指していようが、これは海亀のようには私には見えない。 邇」、「日本書紀」の一書では「八尋大熊鰐」とする)『となり、腹這い、蛇のようにうね 尊に「妾産む時に幸(ねが)わくはな看(み)ましそ。」と請うた。しかし火折尊は我慢 豊玉姫は約束の通り、妹の玉依姫を従えて海辺にいたった。出産に望んで、豊玉姫は火折 母、母方の伯母とされる。ウィキの「トヨタマヒメ」に、『豊玉姫は海神(豊玉姫の父) 『海陸相通わしめて、永く隔て絶つこと無からまじ。今既に辱みつ。将(まさ)に何を以っていた』(「古事記」)。『豊玉姫は恥じて、「如(も)し我を辱しめざるならば、則ち』、 できず、ひそかに盗み見た。豊玉姫は出産の時にヤヒロワニ』(「古事記」では「八尋和 玉姫は「妾(やっこ)已に娠めり。当に産まんとき久しからじ。妾必ず風濤急峻の日を以 か。」と言った。海神は火折尊に助言を与え、故郷に帰した。帰ろうとする火折尊に、豊 のことをおもってなげいた。これを聞いた豊玉姫は、自らの父である海神に「天孫悽然と の宮にやってきた火折尊と結婚し、火折尊はその宮に』三『年間住んだが、 て親昵なる情を結ばんや。」と言い、子を草でつつんで海辺にすてて、海途を閉じて去っ て海浜に出で到らん。 して数(しばしば)歎きたまう。 「安南のトラヲスの祖」「安南」は現在のヴェトナムだが、「トラヲス」は不詳。 請う我が為に産室を作りて相い持ちたまえ。」と言った』。『のちに 海を渡る事有り」「豐玉姬」は女神で、神武天皇の父方の祖 蓋し土(くに)を懐(おも)いたまうの憂えありて 火折尊は故郷

Francaise, No. 10, 1882, p. 44」(「;」は「'」の誤植であろう)フランスの医師で探検家のポ のアルバート・セプタンズ(Albert Septans 一八五五年~一九五六年)の共著になるヴェ ル・マリー・ネイス(Paul Marie Néis 一八五二年~一九〇七年)と、フランス海軍将校 トナムの東南部にある現在のドンナイ省の探検報告書らしい。 Néis et Septans, 'Rapport sur un Voyage dexploration aux Sources du Dong-Nai; Cochinchine

「類聚名物考」は「鶺鴒」パートで既注。著者山岡浚明は同巻の「樂律部第一(舞踏「鹿島明神、早龜という龜に乘り、長門豐浦に到りし由、類聚名物考卷三一一に見ゆ」 住吉神社の縁起に見える、「面に布を覆ひて舞といへる」それについて、 雜叢」の最初の方にある「政納舞 (せいのうのまひ)」の項 (右ページ下段)

御樂を始められたり我此神樂を見なから いかてまゐらさるへきやとて早龜といふ龜に乘 愛し年序を送り長眠を好給ひける故に御顔に蠣[やぶちゃん注:「かき」。貝のカキ。]な けんおそく參り給ふ故召よはんとて長門の國豐浦にして御神樂をすゝめさせたまひけり五 と多く吸ひ付けるによりて色黑くかたい見にくゝおはしましけるによりて恥しくやおほし けりさてこそ世迄も政納といふ舞の顔に布をたれけるもかゝる由有故ならん 人の神樂男云々鹿島明神ハ海中におはしましけるか遙に是を見給ひ我を早々參れと思召て ○〔住吉記考〕然るに此吉丸ハ(鹿島大明神の御事なり)常陸の國 鹿島の浦に住て魚を 衣の袖を御顔に引おほひ御領に鼓をかけて政納といふ舞をまひ給ひ

*

とあるのを指す。

將殺之時此者拱手落淚如乞救者云々と言る」私の「和漢三才圖會 はこれをウミガメとは比定していない)。 「海坊主とて、海龜を漁事に不祥なりとする事、倭漢三才圖會卷四六に出、其偶有得、 寺島良安」より原文・訓読及び私の注を少し補正を加えて引く 図はこちら。 卷第四十六 介甲部

*

おしやういを

うみぼうず 【俗云海坊主】

和尙魚

ホウ シヤン イユイ

三才圖會云東洋大海中有和尚魚狀如鱉其身紅赤色從潮汐而至

此其諾也乃扶放去矣所謂和尙魚是矣 利遇有捕得則將殺之時此物拱手落泪如乞救者因誥曰須免汝命以後不可讎我漁乎時向西仰天 △按西海大洋中有海坊主鱉身人靣〔=面〕頭無毛髪大者五六尺漁人見之則以爲不祥漁罟不

*

おしやういを

うみぼうず 【俗に海坊主と云ふ。】

和尚魚

ホウ シヤン イユイ

をすべからざるか。」と。時に、西に向かひて天を仰むく。此れ其れ、諾なり。ふ者を乞ふがごとし。因りて誥げて曰く、「須らく汝が命を免ずべし。以後、母 △按ずるに、西海大洋の中、海坊主といふもの有り。 鱉 の身、人の面、頭に毛髪無く、大じでスッポンのこと。]のごとく、其の身、紅赤色。潮汐に從つて至る。』と。 けて放ち去る。所謂る、 り得ること有らば、則ち、將に之を殺さんとする時、此の物、手を拱きて泪を落とし、 なる者は五、六尺、漁人、之を見つときは、則ち以て不祥と爲す。漁罟利あらず。 「三才圖會」に云ふ、『東洋大海の中、和尚魚有り。 和尚魚、是なり。 狀ち、鱉[やぶちゃん注:「鼈」に り。乃ち、扶、我が漁に讎、我が漁に讎、救 乃ち、

説を導くのであろう)だが、 草をする動物、水族館のショーで見たことがあるでしょう?)等を綜合すると、 形状をよく思い出して頂きたい。 ら命を救ってくれることを乞うかのような動作や空を仰ぐような姿勢をする点(こんな仕 顔面が人の顔に似ている点、坊主のように頭部がつるんとしている点、一・五から二メー ッポンに似ているという点で付図のような甲羅を背負ってしまう訳(それがウミガメ誤認 れは哺乳綱ネコ(食肉)目アシカ(鰭脚)亜目アザラシ科 Phocidae のアザラシ類か同じネ 「やぶちゃん注:多くの資料がウミガメの誤認とするが、私は全く賛同できない。寧ろ、 Arctocephalinae に属するオットセイ類等の誤認以外の何物でもないという気がする。ス (食肉)目アシカ(鰭脚)亜目アシカ科 Otariidae のアシカ類及びアシカ科オットセイ亜 ル弱という体長、魚網に被害をもたらす点、両手を胸の前で重ね合わせて涙を流しなが これは断じてスッポンの甲羅では、ない。実際のスッポンの 甲羅は厚い皮膚に覆われており鱗板 (りんばん。 私にはこ

みになることをお薦めする。 巨大なスッポンと誤認したのではないかという解釈が示されている(この「アザラシやオ あろうか? ットセイ」の部分の同サイトのリンク先「鯥魚」(ろくぎょ)も必読である)。 「この私のスッポンの叙述」は恰も上に上げた水生哺乳類のイメージとかけ離れているで には私と全く同じような見解からアザラシやオットセイ、ヨウスコウカワイルカを 爬虫類の鱗が癒合して板状になったも 四肢を見ると、 背甲と腹甲が固着することなく、側縁の部分は一種の結合組織 私にはよく似ているように思われるのである。ちなみに 前肢は長く扁平なオール状を呈しており、後肢は短い。 つるんとして平た 「山海経動物記 で柔軟に結び ·]]

たりしたと時は、不吉とするのみならず、その和尚魚が漁網に入ると、網が破れたり、流 うとするのである。 れて亡失したりして実利的にも被害がある、 に立たない」と訳しているが、 「漁罟、利あらず」「漁罟」は魚を獲るための漁網のこと。 如何にも乱暴な訳である。ここは、 という意味である。だからこそ、漁師は殺そ 東洋文庫版では「漁網も、 和尚魚を見たり捕らえ

は敬礼の動作に当たる。 手出しをせずに傍観している様を言う。 したもの。意味は、両手を胸の前で重ね合わせる(腕を組む)ことを指し、 「手を拱き」の「拱く」は、実は本来「こまぬく」で、現在の 但し、現行の用法は異なり、 何もしないで(する能力がなくて) 「こまねく」 これは中国で はそれが変化

アンスに加えて、命令を下すの意味も含まれる字である。 「誥げて曰く」の「誥」は、単に告げるという意味よりも、 教え諭すとか、 戒めるのニュ

須」暗記の再読文字の一つ。「きっと~しなければならない。」「是非~すべきだ。」等と訳 る」では如何にもおかしい。ここは本来の「須」の持っているところの、 の命を救ってやらねばならない」「是非ともお前の命を奪うことを免じてやるべきであ す必須・義務・命令の用法ではある。 「須らく汝が命を免ずべし」の「すべかラク~すべシ。」は高校の漢文ではそれこそ「必 った意味を利かせて、「暫く、お前の命を救ってやろうと思う」ぐらいがよか しかし、 時には臨機応変な訳が必要。「きっとお前 しばしとか、

いて空を仰ぐこと。 した』というしるしなのである、 諾なり」の「其れ」は強意で指示語ではない。この和尚魚のする動作 西方浄土にかけても約束を守るということであろう)こそが という意味。] (西を

*

ギリスの医師ジョン・フライヤー(John Fryer 行く能はずと言るに近し、 がへる)「の愛すべきに似たり、婦女の如く長大息し、小兒の如く啼く、 『英國學士會員「フライヤー」がスラツトで、 (Fryer, 'A New Account of East India and Persia,' 海龜捕るを記して、此物全く蟾蜍』(ひき 一六五〇年~一七三三年) 裏返し置く時は 1698, p. 122)』 ィ

「Internet archive」の「A New Account of East India and Persia」の三巻本の、 からの段落の最後の部分 (右ペー Vol.1 p305 €

turned on its back, it is shiftless. altogether it is as lovely as a Toad: It sighs like a Woman, and weeps like a Child; being taken and

*

る。ここ(グーグル・マップ・データ)。]「スラト」とある)で、インド北西部にあるグジャラート州南部の港湾都市のことであト」は、「SURAT」で同地名のウィキによれば、表記は「スーラト」(以下に示す地図ではとあり、又、一巻本では、熊楠の指定通り、P122にある(左ページ中央)また、「スラツ

られたり、 Decameron its Sources and Analogues, 1909, p. 139)予曾て英國學士會員「ブーランゼー」氏に 久延毘古を召問て其の名を知りし事あり、詳しくは古事記傳卷十二を見よ。 と記憶す、古事記に大國主神、始て少名毘古那神を見、其誰たるを知ず、蟾蜍の言に從ひ、 の直話に、學生の時貧にして屢ば此を烹食せしが、隨分可なりの味は有る、然し爪を去らず ひ(倭漢三才圖會卷五四)Huc, 'LEmpire Chinosis,' 1854. 支那に之を祠れる廟あるをいへり に食へば頗る苦かりしと、吾邦には、歐州とかわり[やぶちゃん注:ママ。]此者を福と名 人家に幸福を齎す者とす、たしか、風俗文選にも記せりと覺ゆ、和漢共其靈物なるを言 は耶蘇教國一汎に之を大毒有り、罪惡有る者として忌嫌ふ、(A.C. Lee, 然るに支那に多く之を食ひ、本邦にも九州に然する所ありと聞く、 しに、蟾蜍の皮下に毒物有るは事實なりと語られ、昨年頃此事を學士會院で論ぜ 山座圓次郎氏

記して論じておられ、ここに挙げるには最適な論文の一つと言える。 英一氏の「蛙神事の源流 引いている、 方・島根県東部までの山陰地方北部に自然分布する。 長は七~十七・六センチメートル。鼓膜は小型で、眼と鼓膜間の距離は鼓膜の直径とほぼ 邦の鈴鹿山脈以西の近畿地方南部から山陽地方・四国・九州・屋久島に自然分布する。 点が入る個体が多く、背にも斑点が入る個体もいる。但し、さらに言えば、厳密には現在 赤褐色などで、白・黒・褐色の帯模様が入る個体もおり、変異が大きく、体側面に赤い斑 は大型で、眼と鼓膜間の距離よりも鼓膜の直径の方が大きい)に分けられている。 同じ)と、亜種アズマヒキガエル Bufo japonicus ormosus (本邦の東北地方から近畿地 ではこのニホンヒキガエルは、さらに亜種ニホンヒキガエル Bufo japonicus japonicus ガエル類はいるが、ここでは、これで代表させて問題ない)。その体色は褐色・黄褐色・ ル科ヒキガエル属ニホンヒキガエル ヒキガエル類とし、本邦の記載部分では、現在、本邦固有種と考えられている、 は脊索動物門脊椎動物亜門両生綱無尾目アマガエル上科ヒキガエル科 Bufonidae に属する 。なお、『桃山学院大学キリスト教論集』第四十号(二○○四年二月発行)所収の井本 やぶちゃん注:「蟾蜍」は「ひきがへる」。 私の「和漢三才圖會卷第五十四 (1)」(PDF でダウン・ロード可能)は、西洋のカエル信仰も併 Bufo japonicus と同定してよいであろう(他にもヒキ 熊楠は汎世界的な記載であるからして、まず 濕生類 体長六~十八センチメートル。鼓膜 蟾蜍(ひきがへる)」を見られた ヒキガエ (本

に於けるヒキガエルのネガティヴなシンボリズムは今一つ、纏まった記載が見当たらな 「蟾蜍は、耶蘇教國一汎に、之を大毒有り、罪惡有る者として忌嫌ふ」西洋のキリスト教 ル」の項の「博物誌」の一部を引く(ピリオド・コンマは句読点に代え、 。荒俣宏氏の「世界大博物図鑑3 ルビ化した)。 両生・爬虫類」(平凡社一九九〇年刊) 後付けの読み の「ヒキガ

《引用開始》

を大別して、 ヒキガエル) ア時代にヒキガエルの定義が成立していた。博物学の開祖アリストテレスは、カエルの類 動植物をかなり詳細に分類・命名する傾向のあった古代地中海世界では、すでにギリシ 〈バトラコス batrakhos〉(ふつうのカエル) の2種に分けていたからである。 ヘプリュ ノス Phrynos〉 (ガマ、

その生態を詳しく述べてはいない。《動物誌》に散見する記述を集めてみても、 の性質ではない。 べる、とこれだけである。いずれもカエルに共通する特徴であり、ヒキガエルなら、は脾臓が小さく、体内に黒いもの(腸らしい)をもち、ノスリに食べられ、ミツバ アリス とこれだけである。 テレスといえども、 ずれもカエルに共通する特徴であり、 ヒキガエルを直視することは気が進まなかっ

内には薬が充満していいっぽうプリニウス かにもしぶとそうな印象を与えたためであろう。 である。そのため、 の奇妙な伝承を流布させた。そのひとつは、ヒキガエルが首に心臓をもつ動物とする俗信 これら地中海世界の知見を中世以後に引きついだヨーロッパでは、ヒキガエルについて それゆえヒキガエルの背中には、たえず有毒な分泌物が充満しているのだという。 ヒキガエルは首をかき切る以外殺しようがないという。 おそらく、

豊穣の化身とされたカエルとは、正反対のイメージである。 いずれにせよ。ヒキガエルはふつう、忌わしい生きものと考えられ た。 古代エジプト で

てくるところが描かれている。ここでは、悪魔がヒキガエルの姿であらわされ クスピア《マクベス》でも、魔女の煮物の材料としてヒキガエルが使われる。 その証拠に、中世の悪魔払いの絵では、 一般にヒキガエルは魔女の眷族とされ、魔女自身が変化した姿のときもある。 悪霊にとりっかれた人の口からヒキガ れているのだいが出 シェ

力があるという。 エル ヒキガエルに化けた魔女は、人間を魔女にしたり、邪眼をもたせたり、 男 toadman〉に変えてしまう。このヒキガエル男には、 ウマ、ブタ、 さらに 女を支配する は ヘヒ 丰

れ、さわるものすべてを毒し、すみかの近くの野菜は食べられなくなり、ヒキガエルが触い色合いと不格好な形をしているので、恐怖の対象となった、とある。猛毒のもち主とさコールドスミス《大地と生物の歴史》にも、ヒキガエルは自然界でもっともいまいまし れた薬草は毒草になるともいう。

という。17 世紀の伝説的な錬金術師エイレナテエウス・フィラレテスは〈復活せるリプリ やがてヒキガエルは白色に変化する。このヒキガエルからとれた薬は、あらゆる毒を酒す 破裂し、毒の汗を流しながら黒色に染まり、死にいたる。 8 日後に死体を火にくべると、 秘密を赤いヒキガエルに託して記した。赤いヒキガエルはブドウ酒を飲んだために内臓が の支配下にある期間である。それゆえ、土星を暗示する赤い色をしているのだ、とフィラ て純粋な物質を抽出せねばならない。この作業が行なわれるのは、 である。ただし、地上における黄金は多くの夾雑物を含んでいるので、一運の作業を通じ ー〉の表題のもとに、 15世紀の錬金術師 G. リプリーは、《十二の門》という難解な寓意詩において、 明する。 しかし、ふつう錬金術では、 このヒキガエルは、 この詩を詳細に解釈した。それによると、ヒキガエルは黄金の象徴 〈赤彩〉 サトゥルヌスは鉛にあたり、 (賢者の 石の別称) 土星(サトゥルスス) に直結するものと受 黒色であら 錬金術の

は冬眠中も食物をとり続けるとされ、 強欲の象徴とされた。 たとえば、

・ン時代 肉ったも のである キガエ ル に座 った女性の絵を残しているが、 これもその女性 の 欲

と、窓に大きなクモがいるので、 きれず、修道士の顔からとびのいた。幸い命に別状はなかったという。 敵を見て挑みかかった。ヒキガエルはじっとこらえていたが、 で眠っていると、 しては苦手意識があるらしい。エラスムスの記述によると、イギリスのある修道士が部屋ヒキガエルがきらうものは日光である。また、意外にもクモをきらう。大きなクモに対 ヒキガエルがきらうものは日光である。 彼の同輩がそれに気づいたが、 どこからかヒキガエルが近づき顔の上に乗り、鼻も口もふさいでしまっ なかまと力を合わせて窓辺に寝台を動かした。クモは宿 ヒキガエルは顔に張りついて離れようとしない。見る また、意外にもクモをきらう。 ついに3度目の攻撃に耐え

毒が充満している。 セルは、背反しあうものの外見が似るのも自然の妙だとしている。 な解毒剤は、人の母乳だという。 小便〉とよぶ人もいる。魔女は人を殺すとき、この毒を使うといわれる。 トプセル 《爬虫類の歴史》によると、ヒキガエルは肝臓をふたつもち、 怒って身体が膨れると、尻から毒を放出する。 なお、ヒキガエルの毒は色合いも母乳に似ていて、 これを〈ヒキガエルの その もっとも効果的 61 いっぽうに トプ

《引用終了》

ことしか判らない(生没年も検索で出てこない)。 譚」か。著者がアルフレッド・コーリングウッド・リー 「A. C. Lee, 'The Decamerons its Sources and Analogues,' 1909, p.139」「デカメロンの原拠と類 (Alfred Collingwood Lee) である

「ブーランゼー」イギリスの動物学者を調べてみたが、不詳。

「昨年頃」平凡社「選集」では、ここの編者割注があり、『一九〇九年』とある。本文の

初出は明治四四(一九一一)年七月である。

した。 外アソシエーツ「20世紀日本人名事典」に拠った)。彼のウィキによれば、『東京大学予備 員として浪人の活動を宮庁側から支援し、大陸浪人と政府のパイプ役となった(以上は日 も親しかったらしく、熊楠の随筆にも酒を酌み交わした記録が残されている』とある。 城公使館勤務を経て、明治三四(一九〇一)年、政務局長となった。明治三十八年の「ポ 明治の外交官。筑前国福岡生まれ。 「山座圓次郞」(やまざえんじろう の同期には、夏目漱石・正岡子規・南方熊楠・秋山真之らがおり、特に熊楠とはその後 ツマス条約」の締結時には、講和全権大使の小村寿太郎に随行して、補佐役として活躍 明治四十一年英国大使館参事官、大正二年、北京駐在特命全権公使。「玄洋社」社 帝大法科大学卒。 慶応二(一八六六)年~大正三(一九一四)年)は 外務省に入り、 釜山・ロンドン・京

にある多くのイボからも、 で引用した通り、 へば頗る苦かりしと」「和漢三才圖會卷第五十四 濕生類 「學生の時貧にして屢ば此を烹食せしが、隨分可なりの味は有る、然し、 のあるセロトニン つ強心配糖体の一種で、主として心筋(その収縮)や迷走神経中枢に作用するヒキ ブフォトキシン(bufotoxin)などの数種類の強心ステロイドを含み、 体温調節など重要な機序に関与する、 後頭部にある大きな耳腺から強力な毒液を出し、 (serotonin:血管の緊張を調節する。 牛乳のような白い有毒の粘液を分泌する。後者は激しい薬理作 ホルモンとしても働く物質である) 蟾蜍(ひきがへる)」 ヒトでは生体リズム・ また、 皮膚、 爪を去らずに食 の私の注 特に背面

る」で頭に出てくる)。 摂取すると、 ている。調理写真もあるのでリンクは張らない。フレーズ検索「オオヒキガエル 食べ 成分とし、 の痺れや腹痛を発症したとあるので、これはもう、食べてはいけない(とその筆者も書い にある)を試みに食した記事があったが、どうも、 属オオヒキガエル しまった特定外来生物種に指定されている中南米原産のヒキガエル科ナンベイヒキガエル である。ネット上には、石垣島・小笠原諸島・大東諸島に害虫駆除目的で人為移入され ような神経伝達物質なども含むため、少しでもそれが混入すれば、 ヒキガエル類の毒性としては非常に強く、 心臓麻痺を起こすこともあり、卵嚢や幼生も総て毒を持つと、同種のウィキ 重篤な自体に至るケースは報告されていないようだが、 Rhinella marina(同じく有毒な白濁液を分泌するが、アルカロイドを主 どう調理しても苦味を除去出来ず、舌 目に入ると失明したり、大量に体内 かなりの苦味を覚える

誌」では、西洋の民俗誌の後に、非常に詳しい中国及び日本のそれを記しておられ、 けを引く(ピリオド・コンマその他は同前)。 に面白いのだが、そこは当該書を読まれたい。 大博物図鑑3 「吾邦には、 歐州とかわり此者を福と名け、人家に幸福を齎す者とす」荒俣宏氏の「世界 両生・爬虫類」(平凡社一九九〇年刊)の「ヒキガエル」の項の「博物 ここでは、「ヒキガエルの縁起物」の条だ

《引用開始》

玄関や人口に ろう。とくに料理屋や料亭などでは、客が伺度もやってくるようにと、招き描のかわりに 選ばれておらず、中国ではマイナーな仙人である。一方、日本において蝦蟇仙人は仙人の中でも特に人気があり、絵 る。特に後者は日本でも画題として有名』となり、顔輝の「蝦蟇鉄拐図」『の影響で李鉄拐(鉄拐仙人)と対の形で描 妖術を使うとされる。参照した同ウィキによれば、『左慈に仙術を教わった三国時代の呉の葛玄、もしくは呂洞寳』(り は明治のころ、千八師という俳優がこの犬明神に願をかけたところ、 ガマが奉納され、居並んでいる。また、この大明神は芸能人の守り神でもある。その由来 の蟇大明神もヒキガエルを祭神とし、家業繁栄の神とされている。社務所では瀬戸物のガ かれる事が多い。しかし、両者を一緒に描く典拠は明らかでなく、李鉄拐は八仙に選ばれているが、蝦蟇仙人は八仙に かつがれ商売繁盛の印とされた。ガマ仙人『やぶちゃん注:蝦蟇仙人。中国由来の仙人。青蛙神を従えて で開運したからといわれる。 マを売っており、 ょどうひん)『に仙術を教わった五代十国時代』の『後梁の劉海蟾』(りゅうかいせん)『をモデルにしているとされ 装飾品、歌舞伎・浄瑠璃など様々な形で多くの人々に描かれている』とある。]の故事の影響もあるのだ ヒキガエルは〈引き返る〉あるいは音転して〈福かえる〉に通じるというので、縁起を 〈客引き〉のカエルの置物が据えられることが多い。 願が成就すればこの分身は返上される。そのため祠には犬小さまざまな 浅草田原町本覚寺境内 幸福を 〈引き〉こん

《引用終了》

没していたが、墓守をしていた関某という人が霊感によって土中より掘り出し、 物が家業繁栄を願って蛙蟇塚を建て、代々信仰したことに始まるという。 今御朱印研究室」の同寺の記事によれば、『蟇大明神は、 浅草田原町の日蓮宗龍鳴山本覚寺はここ(グーグル・マップ・データ)。個人ブログ てて祀った』。 『その頃、 下谷に住んでいた千八』(「せんぱち」でよかろう) 『という人が 天保の頃、檀家の秋山某なる人 お堂を建

説」で、 をつけていま一戦(ひといくさ)せん!!」の「本覚寺 ~蟇大明神~ たという』とある。 たことから、花柳界・歌舞演劇界・映画界などの人々を中心に広く信仰されるようになっ 身を与えて霊験あらたかなことを説いた。千八は歌舞をよくし、その方面に知人が多かっ 蛙蟇塚に願をかけたところ、その願いが叶った。千八は現在の場所に蟇堂を建て、蟇の分 膨大な蟇蛙の置物の山の写真が見られる。 合気道月光流道場長チョコ助と伊東健治の公式ブログ「骸(むくろ) 【東京の妖怪伝

七〇六)刊。 いるのだが、熊楠の指す部分に行き当たらなかった。 「たしか、風俗文選にも記せりと覺ゆ」「風俗文選」は森川許六編の俳文集で宝永三(一 松尾芭蕉及び蕉門俳人二十八人の俳文百十六編を集める。 昨夜から縦覧して

蟾蜍(ひきがへる)」で良安は、「本綱」の「蟾蜍」を引き、 「和漢共其靈物なるを言ひ(倭漢三才圖會卷五四)」「和漢三才圖會卷第五十四 濕生類

之れを取りて、反縛りて、 密室の中に着けて、 之れを閉じ、 明くる且視るに、

と述べ、さらに「抱朴子」を引き、

此に於いて推すべし。に。〕、能く指使を聽く[やぶちゃん注:よく、命じた通りにする。〕。物性の靈有ること、 用ふべし。以つて霧を起し、雨を祈り、兵を辟け、「自」ら縛れるを解く。今、技者有り用ふべし。以つて霧を起し、雨を祈り、兵を辟け、「自」ら縛れるを解く。今、技者有り人ならざる山人或いは狒狒に似た妖獣。]を食ふ。人、得て、之れを食ふ。仙術家に取り丹術のシンボルであろう。]有り。名づけて「肉芝」と曰ふ。能く山精[やぶちゃん注: て、蟾を聚めて、戯と爲すに[やぶちゃん注:ある種の妖術を使えるように調教する

とあり、加えて、

、『ふき片ら虫。』を殺す。而して、疳病・癰疽・諸瘡の要藥と爲す。く陽明經に入りて、虚熱を退け、濕氣を 行 し、蟲 蟨[やぶちゃん注:身体に入り込んだに應じて、性、靈異たり。土に穴して蟲を食ふ。又、山精を伏し、蜈蚣を制す。故に、能怪しむに非ざるなり。蓋し、蟾蜍は土の粡たり、ニートニュ こ悪じて、性、靈異たり。土に穴して蟲を食ふ。又、山精を伏し、蜈蚣を制す。故に、能怪しむに非ざるなり。蓋し、蟾蜍は土の精なり。上は月魄[やぶちゃん注:月の霊性。]蟾、三足の者、有り。而れども、龜・ 鼈 にも、皆、三足有るときは、則ち、蟾の三足も暑 五月五日、 東へ行く者を取りて、 陰乾しにして用ふ。

とした後、自身で評して、

蟾蜍、海に入りて眼張魚と地に在き、桶を上に覆ひて、

成る。 多く半ば變ずるを見る。

悪戯好きなヘンな奴、おらへんかったですか?…… ンデモ化生実験をして、実証したとまで言っている。 ……良安センセ、 御弟子の中

archive」のこちらで読めるが、私は探す気にならない。悪しからず。 知られていないかったチベットについても記事も残している。フランス語原本は「Internet でカトリック司祭。 ト・レジス・ユック(Évariste Régis Huc 一八一三年~一八六〇年)はフランスの宣教師 「Huc, 'L'Empire Chinosis,' 1854. 支那に之を祠れる廟あるをいへりと記憶す」エヴァリス 清代の中国・モンゴルを旅し、多くの著作をものした。当時、殆んど

古を召問てその名を知りし事あり、詳しくは古事記傳卷十二を見よ。」「古事記」の、 「古事記に大國主神、始て少名毘古那神を見、其誰たるを知ず、蟾蜍の言に從ひ、

許男命。爲兄弟而。作堅其國。故自爾。大穴牟遲。與少名毘古那。二柱神相並。作堅此 古必知之。 歸來神。爾雖問其名。不答。且雖問所從之諸神。皆白不知。爾多邇具久白言。 神產巢日御祖命者。 故大國主神。 然後者。其少名毘古那神者。 於今者山田之曾富騰者也。 即召久延毘古。 坐出雲之御大之御前時。自波穗。乘天之羅摩船而。内剝鵝皮剝。爲衣服。 答告。此者實我子也。於子之中。 問時。答白此者神產巢日神之御子。少名毘古那神。故爾白上於 此神者。 度于常世國也。故顯白其少名毘古那神。 足雖不行。盡知天下之事神也。 自我手俣久岐斯子也。故與汝葦原色 所謂久延毘古 此者久延毘

て、衣服に爲て、歸り來たる神、有り。」(戦」の誤りとする。][やぶちゃん注:「古事記伝」では「鵝」は「蛾」の誤りとする。] 大國主神、出雲の御大の御前に坐す時に、波の穗より、天の羅摩の船に乘りて、「「」をは、「「」をは、「」なま」」となって、「これ」とは、「なま」がある。 の皮を内剝ぎに剝ぎ

爾に其の名を問はせども、答へず、且、 所從の諸神に問はせども、

と白しき。「知らず。」

「此は、久延毘古ぞ、必ず、之れを知りつらむ。爾に、多邇具久、白して言さく、

卽ち、 神産巢日の神の御子少名毘古那の神なり。」
外外をサガを召して問ひたまふ時に、答へて白さく、

「やぶらゃん主:こぼれ落ちた。]子なり。故、汝葦原色許男の命と兄弟と爲「此は實の我が子なり。子の中に、我が手俣[やぶちゃん注:手の指の間。]故、爾に神産巢日の御祖の命に白し上げしかば、答へて告げ、と りて、 より久岐し

國、作り堅めよ。」

爾れによりて、 大穴牟遲と少名毘古那と、 二柱の神、 相 ひ並びて、 此 の國を作り堅

山田の案山子。]といふ者なり。此の神は、足は行かねども、天下の事を、、盡(知れる神少名毘古那神を顯はし白しき。所謂、久延毘古は、今には山田の曾富騰[やぶちゃん注:めたまひき。然ありて後には、其の少名毘古那の神は、常世の國に度りましき。故、其のめたまひき。

*

は神名をカタカナで表記するのが生理的に嫌いなので、カタカナ部分は、 という部分についての宣長の評釈で、「古事記傳」巻十二当該部は国立国会図書館デジタ に直した。 の右ページの二行目から始まる「多邇且久」の注の中に現れる。 コレクションの「古事記傳」(向山武男校訂・昭和五(一九三〇)年名著刊行会刊のこ 一部を訓読して示す。 総て、 ひらがな

*

見ては誰もおどろきつべしと云意か。又は野鎚と云ふとも、 * 選案のざあることは、漢籍にも見え、世の人も知れる如くなれば、今此の事も、由ありて霊異わざあることは、漢籍にも見え、世の人も知れる如くなれば、今此の事も、由ありて ざまに居物なる故なり。〔久々は蛙の類の惣名にて、蟾蜍を谷具久とはいふか。〕此物にるが當れること、萬葉と照していちじるし。〕具久は鳴く聲による名、谷と云は、物のは も多し。又祝詞の今の本に、蟆を加麻と訓れど、字音なれば誤なり。師の具久と訓まれたの加閇流なれば、比伎加閇流とは、別なるが如くなれども、古へ通はし云ること、漢籍に 元: 「やぶちゃん注:底本は黒字反転。] 多邇且久の [やぶちゃん注:底本は黒字反転。] 多邇且久 の意を按に、 所念ゆ。〔本朝文粹、村上天皇御製古調の詩に、又、異體の者有り、名號して最明と爲 にしてのたまへるなれば、 も此れを見ば、驚くべしと云意か。若し後の意ならば野鎚蝦蟇は、 野鎚誰れか辨ることを得む、 かの異體者の形狀、野鎚・蝦蟇に似たり。かゝる者は、誰れかは辨へ知む。 此に由あり。 蝦蟇尤も驚くに耐へたり。 故に引つ。〕 誰れか此者を辨へ知む。 とある、 物をよく辨へ知るもの 此の野鎚蝦蟇の對句 此の字を

孔子が神能見夢於元君、而不能避豫且之網と言けるに基き作れるか。 して去り、獲らるゝに及んで、腹に先刻人に饗せられたる團子存せしと云話しは、 し其僧に化し來て、 ○【イハナ魚、想山著聞奇集卷三に、美濃信濃に此魚坊主に化るてふ迷信多き由云り、但 人に漁を止めんことを訓え[やぶちゃん注:ママ。 「をしへ」。」、食事

或いは日本固有亜種ニッコウイワナ Salvelinus leucomaenis pluvius 又は日本固有亜種ヤマ トイワナ Salvelinus leucomaenis japonicus ° [やぶちゃん注:「イハナ魚」硬骨魚綱サケ目サケ科イワナ属イワナ Salvelinus leucomaenis

その中でも熊楠の指摘する「想山著聞奇集 卷の參 私は「怪奇談集」で全篇電子化注を終えており、私の偏愛する奇譚集である。また、特に 名古屋藩士で右筆を勤めた大師流書家で随筆家としても知られた三好想山(みよししょう 聞奇集」(しやうざんちよもんきしふ(しょうざんちょもんきしゅう))は江戸後期の尾張 回、この一篇のみ、文中に入れた割注のポイントを落しておいた。 十七話の奇談を蒐集したもの。全五巻。没年の嘉永三(一八五○)年に板行されている。 の第二十六の一節。 の事」は、特に好きな一篇である。 「莊子に、孔子が神能見夢於元君、 「想山著聞奇集卷三に、美濃信濃に此魚坊主に化るてふ迷信多き由云り、 ?~嘉永三(一八五○)年)の代表作で、動植物奇談・神仏霊異・天変地異など五 而不能避豫且之網と言ひける」「莊子」の 私の注は神経症的に過ぎて、本文が読み難い イハナ坊主に化たる事 ……」「想山著 ので、 鰻同斷

*

刳龜、 尺」。君曰、「獻若之龜」。龜至、君再欲殺之、再欲活之、心疑卜之曰、「殺龜以卜吉」。乃 予。」元君覺、使人占之、曰、「此神龜也」。君曰、「漁者有余且乎」。左右曰、「有」。君 曰、「令余且會朝」。明日余且朝、 宋元君夜半而夢、人被髮闚阿門、曰、「予自宰路之淵、予爲淸江使河伯之所、 七十二鑽而无遺筴。 君曰、「漁何得」。對曰、「且之網、得白龜焉、其圓五 漁者余且得

仲尼曰、「神能見夢於元君、而不能避余且之網、知能七十二鑽而无遺筴、 知而大知明、 如是、則知有所困、神有所不及也。 去善而自善矣。嬰兒生无石師而能言、 雖有至知、 與能言者處也」。 萬人謀之。魚不畏網、 而不能避刳腸之 而畏鵜鶘。

*

宋の元君、夜半にして夢みる。

得たり。」 宰路の淵より、きたり。予、淸江の爲に河伯の所に使ひす被髮して阿門[やぶちゃん注:屋敷の角にある小さな門。] 清江の爲に河伯の所に使ひするに、漁者の余且、仕:屋敷の角にある小さな門。]を闚ひて日はく、 予を

ع

元君、覺め、人をして之れを占はしむるに、日はく、

「此れ、神龜なり。」

こ。君、日はく、

「漁者に余且なるもの有か。」

೬ と。君、日はく、 「有り。」 と。左右、 「余且をして朝に會せしめよ。」 日はく、

明日、余且、朝す。 日はく、

と。對へて日はく、 「漁して何を得たる。」

「且の網するに、白龜を得たり。 其の圓、 五尺。」

「若の龜を獻ぜよ。」と。君、曰はく、 と。

ځ

之れを卜して日はく、 至る。君、再び之れを殺さんと欲せしも、再び之れを活さんとも欲す。 心に疑ひて

錐で穴を開けて占ったが、吉凶は必ず当たり、 と。乃ち、龜を刳り、七十二鑽して、遺筴、无し[やぶちゃん注:その亀甲で七十二度も「龜を殺して、以つて[やぶちゃん注:その亀甲を以って。]、トせば、吉なり。」 一度として外れたことはなかった。]。

仲尼[やぶちゃん注:孔子。]日はく、

生。]无くして能く言ふは、能く言ふ者と處ればなり。」 七十二鑽して遺筴无きも、而れども、 腸 を刳らるるの患を避くること能はず。是くのご「神は能く元君の夢に見はるるも、而れども、余且の網を避くること、能はず。知は能く

掛かってのことであるけれども。〕 ことのように思うのである。まんず、「想山著聞奇集」親衛隊を自任する私のバイアスが のと考えるからである。中国のそれとは、私はある種の平行進化の結果で似ているだけの拠であるとは思わない。ここにあるのは、仏教の放生会などの影響の方が遙かに大きいも 私の大好きな「荘子」得意のパラドクスである。但し、私は熊楠の言うように、これが原

島海人、鰻及び「ハモ」を神とする事 Waitz und Gerland; Anthropologie der Naturvölker; 6te Teil, Leipzig, 1872. s. 傳ふる所あり。 紀州の某所に片目の鰻あり、之に祈れば必ず雨ふるといふ事紀伊國名所圖會に有 伊豆三島の神、鰻を神使とする由、 大鰻僧に化け來て之を止めんとせし事を載す、 280,296. に出たり、 老媼茶話に、慶長十六年、 明良洪範、東海道名所記等に見えたり、 今も紀州に大鰻池の主なりと 蒲生秀行只見川に毒

参照)。 記念物指定)。また、栃木県栃木市平井町にある太平山神社では、鰻がこの地まで神 (現 実際にこの地区では鰻を食べず、公的にも鰻を保護して捕獲も禁止されている(国の天然 空蔵菩薩でその使者が鰻であるからとも、また、この辺りに跋扈していた「さるとらへ 陸・フィリピンなど、東アジアを中心に広汎に分布し、マリアナ海溝付近で産卵している Anguilla japonica 及びオオウナギ Anguilla marmorata。ニホンウナギは朝鮮半島・中国大 といって日(天照大神)・月 かったし、それは他国にも知れ渡っていた、という驚くべきことが書かれているのであ を乗せて来たという言い伝えがあり、同神社では鰻は禁忌食物となっている(公式サイト 在、主祭神は瓊瓊杵命・天照皇大御神・豊受姫大神であるが、次の次のリンク先を参照) を討つために遣わされた藤原高光(天慶二(九三九)年?~正暦五(九九四)年)が山中 う。鰻を神仏の使者として食べない地域を私は幾つか知っている。最も知られているのは ことが近年の調査で明らかなっており、オオウナギの分布はより広範囲で、アフリカ東岸 山川町の鰻池集落には、本邦でも珍しい「鰻」姓の一族が住んでおられ、 に立派な六角堂が建てられ祀られている。栃木の人は日参・月詣りと信仰が厚かった』と で虚空蔵菩薩が本尊である。 で迷った際、鰻が川を泳ぎながら道案内をし、退治できたという伝承に基づくともされ、 び」(猿虎蛇:頭は猿、胴体は虎、尾は蛇という鵺的なハイブリッドな妖獣)なる化け物 岐阜県郡上市美並町粥川(かゆかわ/かいかわ)地区であろう。ここで尊崇される仏が虚 からフランス領ポリネシアに至り、産卵場はフィリピン南部の深海と推測されている。 (ポリネシア)を挙げているので、その場合はオオウナギであるとするのが正確かと思 [やぶちゃん注:本邦産は条鰭綱ウナギ目ウナギ亜目ウナギ科ウナギ属ニホンウナギ そしてそれは、前に出した星宮の信仰と関わるのであって、『神道としては三光神社 中国には他に他種が複数棲息しているものと思われる。ここで熊楠は「多島海」 奉名帳にびっしりと鰻姓の名前が記されてあった。この部落というか、 虚空蔵で鰻と繋がるのである。 いや、 鰻を食べない。嘗て食べて亡くなった人がいるとも、 サイト「龍鱗」の「太平山と鰻」によれば、嘗ては栃木の人は鰻を食わな 神仏分離で虚空蔵菩薩は一時荒れ果てたが、 (月読命)・星(瓊々杵命)を祀るが、仏教では星の宮と呼ん 他にも、 以前に泊まったことがある鹿児島県指宿市 宿の鰻さんから、直 村社を覗いたと 「鰻」姓の

十八巻二十三冊からなる。 紀伊国の寺社・旧跡・景勝地の由緒や来歴を実景描写の挿絵と解説で紹介した地誌書。 「紀伊國名所圖會」文化八(一八一一)年から嘉永四 当初の企画・執筆・出版は和歌山城下の出版人であった七代目 (一八五一) 年にかけて刊行された

後編では第十代藩主徳川治宝の命により、加納諸平が編集に当たるなどし、次第に紀帯屋伊兵衛こと高市志友で、三編完成前に志友が没した後は紀州藩御抱え絵師が加わ 主導の刊行事業となった。ネット上で版本を視認出来るが、 した限りでは「片目の鰻」らしき対象は見当たらなかった。 あまりに膨大で、目録を縦覧 発見したら、 追記する。 次第に紀州藩 Ď,

するが、 「伊豆三島の神、鰻を神使とする」現在の伊豆の三嶋大社は大山祇命・事代主神を祭神と あそこで鰻を食べるのが、私の楽しみの一つである。 本来は伊豆諸島の造島神であったとする説も有力である。 古くは三島(嶋)大明神を祀っていたのであり、三嶋大社は記紀神話の神ではな 三嶋大社の神使は鰻とされ

詳。膨大で、 世紀初頭までの徳川氏・諸大名その他の武士の言行・事跡等、 「明良洪範」(めいりょうこうはん)は江戸中期の逸話・見聞集。十六世紀後半から十八 江戸千駄ヶ谷の真言宗聖輪寺の住持増誉の著。 調べる気にならない。 悪しからず。 全二十五巻・続編十五巻。 七百二十余項目を集録す 成立年は不

(一七九七) 年刊行。 「東海道名所記」名所図会シリーズで一世を風靡した秋里籬島 (生没年未詳) 著。

用いられるようである。但し、漢和辞典にはその用法はない)。 も「ハモ」を指す(但し、単漢字「鱧」は、現代中国語では「ライギョ」を指す語として 「鱧」は本種「ハモ」であり、「海鰻」もまた「ハモ」としてよい。後者は現代中国語で 「ハモ」条鰭綱ウナギ目ハモ科ハモ属ハモ Muraenesox cinereus 。本来の本邦に於ける

ないので、悪しからず。 イツの人類学者で地球物理学者でもあったゲオルグ・コーネリアス・カール・ゲランド 人類学者であったテオドール・ワイツ(Theodor Waitz (Georg Cornelius Karl Gerland 一八三三年~一九一九年)の共著になる、「原始人の人類 Waitz und Gerland, Anthropologie der Naturvölker 6te Teil, Leipzig, 1872. s. 第六部」か。 一八六○年版を「Internet archive」で見つけたが、ドイツ語は全く分から 一部の綴りに疑問があったので、平凡社「選集」版で補正した。ドイツの心理学者・ 一八二一年~一八六四年)と、ド 280,296.」底本で

二(一七六五)年)が記録した会津地方を中心とする奇譚(実録物も含む) される寛保二(一七四二)年の序(そこでの署名は「松風庵寒流」)を持つ「老媼茶話 んとせし事を載す」「老媼茶話」は三坂春編(元禄一七・宝永元(一七〇四)年?~明和「老媼茶話に、慶長十六年、蒲生秀行只見川に毒を流す前に、大鰻僧に化け來て之を止め (らうあうさわ (ろうおうさわ))」。私は 只見川毒流」を見られたい。 「怪奇談集」で全電子化注を終えている。 を蒐集したと

「紀州に大鰻池の主なりと傳ふる所あり」 不詳。 川の淵ならば、 情報はある。]

漢名。ここは「トンボ」の意でよかろう。〕の形有りと言ふに似たり、 チ」島もとは鮫たりしと云事、吾邦蜻蜓[やぶちゃん注:「せいてい」。狭義にはヤンマの 游ぐことあり、この神の信者を食はず、此鮫を舟行の神とし、社を建つ、古傳に「タヒ 進退し、舟覆へる時、他人を食ふも祠官を食はず、之を乘せて廿哩[やぶちゃん注:二十 尊崇すること、 有て、年々此島に到る、其種每に初物を取りて鮫神に献ぜり、思ふに古え定れる季節に、 注:「ハワイ」。]のモロカイ島には、古え海角每に鮫を神とせる祠立てり、諸魚各々定期 Tennent, op. cit., p. 398, Frobenius, 'The Childhood of Man', London. 1909, p. 242 タヒチ島の ん注:「セイロン」。]、トレス峽等には、漁に臨んで種々に鮫を厭勝[やぶちゃん注:「え ス」 恒 く い (Ellis, 'Polynesian Researches, 1831. i. p. 166., Seqq., iv. p.90., Waitz, l.c., s. 319) 鮫此等の魚を追ひ到りしを見て、神魚人を利すと心得、之を神とせるならんと、「エリ マイル。陸距離のマイルでは約三十二キロメートル、海里では三十七キロメートル。]も んしやう」。咒(まじない)。]して其害を免れんと力む[やぶちゃん注:「つとむ」。] ーダツア、 「やぶちゃん注:以下、底本ではポイント落ちで、全体が一字下げ。前後を一行空け |鮫(サメ又フカ)|、東印度諸島及び阿弗利加で鮫を甚く[やぶちゃん注:「いたく」。] マツト」は、海の大神にて、鮫を使ふ、 F. Schultze, 'Fetichism,' trans, New York, 1885, p. 79 に出で、錫蘭[やぶちゃ 但し青鮫に限り、 此鮫祠官の令に隨て 布哇 [やぶちゃん

(Gubernatis, I. c. p. 340)ハイチ島發見の時人を乘せて湖を渡す「マナタス」獸有りし抔似抔の例有り(淵鑑類函卷四四二)泰西にも希臘の美少年神「エロス」海豚に乘る事有り たる事也(Ramusio, tom. iii. fol. 33) 魚人を乘せて游ぐ事、支那に琴高鯉に乘り、陳侯の子元自ら水に投ぜしを魚負て救ひし

この鮫五七頭社に近き海濱に游ぎ來る、もし前年中人を害せし鮫ある時は之を陸に追ひ上 鮫は長さ四五間、頭細く、體に斑紋有り、「エビス」と名くる種に限る、每年祭禮の日、 受け所持し鮫船を襲ふ時之を投ずれば忽ち去るとぞ、「タヒチ」島の例と均しく、神使の 漁人の話に、 ん注:「そひ」。粗い鮫皮。]を以て磨り[やぶちゃん注:「こすり」。]去れる也と、古老のは破船す、其船底を見るに、煎餅の如く薄く削り成せり、是れ此鮫の背の麁皮[やぶちゃ ち去る、之に漁を祈る者、五日七日と日數を限りて漁獲を求む、日限畢る迄漁し續くる時 齋き祀れる也と。 ママ。〕、利を得ること莫大なり、信心厚き漁夫の船下に潜み游ぐ、 と名く、 本邦には伊勢國磯部大明神は、今も船夫漁師に重く崇めらる、鮫を使者とし、厚く信ず 數時間之を苦しめて罰す、此鮫海上に現るゝ時、 海に溺れんとする時、鮫來り負ふて陸に達すと云ふ、參詣の徒神木の樟の皮を申し 每日一定の海路を游ぎ來るに、無數の堅魚之に隨行するを捕え[やぶちゃん注: 海濱に夷子[やぶちゃん注:「えびす」。]の祠多きは實に此「エビス」 漁夫之を祭り祝ふ、「エビス付キ」 信薄き輩の船來れば忽

[やぶちゃん注:以下、同前。]

鱷を捕ふるを見し話有り(宇冶拾遺三九章)十七世紀に、韓國に漂着して十三年留居の蘭 and Traditions of Palestine, 1864, P. 39.)又實際鱷なき韓國にて、筑紫の商人、虎が海に入て 見也、大和本草、 1752, P. 735)° の鮫なり、其形多少漢文鱷の記載に似たるを以て杜撰に之を充てたるなりと有し、眞に卓 の海邊に鱷有り、羊を害すと云ふは、實は鮫ならんてう說參考すべし。(Pierott,Customs し、十餘年前或人「日本」新聞に寄書して、吾邦の「ワニ」は「ワニザメ」と稱する一種 人の記にも、 古書に鮫を神とせし事見當らず、但し鱷[やぶちゃん注:「わに」。]を神とせし事多 其水に鱷多き由筆せるは、孰れも鮫の事と思はる、(Churchill, op. cit. vol. vi. 倭漢三才圖會等鱷を記せる、何れも海中の鮫類と見ゆ、今日パレスチナ

神に覗はれしを憤り、化して八尋の大鱷となり、 する由緒古きを見るに足れり。 神代卷に、海神一尋の鱷に、彦火々出見尊を送り還さしむる事あり、又豐玉姬、 海を渉りて去ると云り、 鮫を神靈有りと 産場を夫

[やぶちゃん注:以下、同前。]

メ」に足を食去られ死せしを、十三年目に、其子年頃飼し犬を殺し、其肉を餌として鱷を て、天武帝二年七月、一女鱷に脛を食はる、其父哀みて[やぶちゃん注:「かなしみ 上に言る、 殺せし鱷を剖くに女の脛出しと見ゆ、眞葛女の磯通太比に、奥州の海士「ワニザ 復讐せりといふ譚は之より出たるならむ。 神祇に祈りしに、須臾にして百餘の鱷、一の鱷を圍繞し來る、父之を突殺すに諸鱷 鮫が罪ある鮫を罰する話も、古く有しにや、 懷橘談に、出雲國安來の北海 に

六年三月末時点に於いては、世界に九目三十四科百五属五百九種が存在し、日本近海には 解の問題性(サメ種の他にフカ種がいるといった誤認)も少ないと思う(山陰では別に「わ た限定用法として流通名とは別に「フカ」は生き残るであろうと思われる。ただ、寧ろ、 裂が下面に開くエイと区別される。但し、中間型の種がいるので絶対的な属性とは言えな 中・小型のものを指す総称とされるが、大型の種群や個体との厳密な境界はなく、「鱶」 Elasmobranchii のうち、一般にはエイ上目 Batoidea に含まれるエイ類を除くサメ類の内 広義の「サメ(鮫)」の関西以西での呼び名が「ふか」であるとした方が判りがいいし、 別は無効に近い。但し、超巨大なものを「フカ」と呼ぶのには違和感はないので、 の総称である。但し、中小型でも「ふか」と呼ぶケースもあるので、個体の大きさでの区 と混淆して用いられているのが現状である。形態学的に概ね真正の「サメ」を規定しよう 九目三十二科六十四属百三十種が確認されているとある。さて次に、「サメ」の語源であ に」という呼称も現在、普通に生きている)。 とするなら、 いので注意が必要である)。一方の「フカ(鱶)」を補足すると、サメ類の内、大型のもの [やぶちゃん注:「鮫(サメ又フカ)」現行では、「サメ(鮫)」とは、軟骨魚綱板鰓亜綱 一般には「狭目」「狭眼」「さめ」の意とする説が幅を利かしているようだが、 一般的には――鰓裂が体の側面に開く種群の総称 さても、 ウィキの「サメ」によれば、 ―としてもよかろう (鰓

辞典」にも書いてない。これも何となく長屋の御隠居にまんまと言いくるめられた熊八みた 付いたというのだ。まことしやかに例えばカジカなどを挙げるのだが、「カ」を呼称辞にし 当てられるというのは、私は眉唾であると考えるからである。別説に「斑魚」説があり、 生と言えば言い得る)がおり、卵胎生の方が多い。かくせば、「子」を「養」う「魚」の意 卵生である中、サメ類には卵生・卵胎生(近年は胎生と呼ぶことが多い。ヒトも結局は卵胎 れはまあ、そうかもと思わせる。第二に、お馴染みの漢字「鱶」の分解説で、魚類の多くが 目(さめ)」であろうと思うのである。一方の「フカ」は一見、頷かれそうな説が複数あ 眼」或いは「細い眼」ではない。されば私は寧ろ、鮫肌、 が知るようになるのは歴史的にはごく新しいはずで、にも拘らず、そうした原義でこの字が はない。これを「ふか」と訓ずるのは国字としてである。鮫が卵胎生であることを一般庶民 というわけだが、どうも如何にもそれらしいこの謂いが、却って嘘臭い感じを与える。そも ような気がしてくるのだ。 ている魚はそんなにいはしない。接尾辞としての「か」も魚の意味とは小学館「日本国語大 「ふ(斑)」体表のザラザラの細かな斑紋で、それに「魚」類を示す接尾辞である「か」)が 一の単位)で、「非常に小さい粒」を意味する「沙」(シャ・サ)の「粒」(「目」)で「沙 一つは「深」説で、大型のサメ類の多くは沖合の深いところに棲息することからで、 「鱶」の正字は「鯗」であり、漢字としてのそれは「魚の干物」を意味し、フカの意味 その巨体に比べれば小さいとは言えるものの、 その語源があるのではないかと考えている。則ち、「沙」(シャ:一億分の 一般的な種群は、有意に「狭 一部の鮫の皮膚表面の細かなブ

ギ崇拝の記事も続いている。 archive」で原本が見られる。ここ(右ページ左の中央)。直ぐ後にはミクロネシアでのウナ 「F. Schultze, 'Fetichism,' trans, New York, 1885, p. 79」ドイツの哲学者フリッツ・シュ (Fritz Schultze 一八四六年~一九○八年)の書いた「呪物崇拝」の一節。「Internet エ

該ウィキに拠った)。ここ(グーグル・マップ・データ。 惧種であるジュゴンやアオウミガメ・タイマイ・ヒラタウミガメなどが棲息している(当 がされているほか、美しいサンゴ礁の島々はリゾート地ともなっており、 るメラネシア系の先住民(トレス海峡諸島民)が暮らしている。漁業が盛んで、真珠養殖 ンゴ礁の諸島で、南北百五十、東西二百~三百キロメートルのトレス海峡に位置してい ストラリア領であるトレス海峡諸島(Torres Strait Islands)。二百七十四の小島からなるサ 「トレス峽」オーストラリアのヨーク岬とパプアニューギニアとの間にある、現在、オー 数百の無人島からなるが、その内の十二の島に人が住み、「アイランダー」と呼ばれ 以下同じ)。 海中には絶滅危

Emerson Tennent 一八〇四年~一八六九年)のセイロンの自然史誌。**但し、「398」には鮫** かれているのを見出せた。ここの章の標題は「SHARK-CHARMER」で「鮫を 呪 う者」或 の記載はない。そこで調べてみたところ、こうした内容は「378」から「379」にかけてに書 イギリスの植民地管理者で政治家であったジェームズ・エマーソン・テナント(James 「Tennent, op. cit., p. 398」前に「野槌」に出たイギリスの植民地管理者で政治家であったジ ームズ・エマーソン・テナント(James Emerson Tennent 一八○四年~一八六九年)の 「鮫使い」といった意味である。

の当該箇所が見られ、そこの右ページ「242」中央にある図のキャプションに、 「Frobenius, 'The Childhood of Man, London. 1909, p. 242」「Internet archive」のこちらで原本

*

fishing season, when, no doubt, efforts are made to propitiate the sharks, who are so dangerous to the here, represents a kind of sharks head. Above (Fig. 228) a face. Is probably worn at the dances in the Fig. 227. Tortoise-shell mask from Hama, Torres Straits (British Museum). Seen from the side,

k

険な存在であるサメを、多分、何としても宥めんがために、漁期に行われるダンスに於いもの(図 228)[やぶちゃん注: ̄ ̄の左ページの図。]。恐らくは、漁民にとって非常に危 館)。横から見ると、ここにあるように、一種のサメの頭を表わしている。顔の上部見た とあり、これは、「トレス海峡のハマから齎されたカメの甲羅で出来たマスク(大英博物 て着用されるものである。

>

といった意味のようである。

れないからである。 この神「トフ」や、その時空間をドライヴしてきた神聖な「タタウ」とは無関係とは思わ 与え、天国と地上を結びつけていると、「タヒチ観光局」公式サイトの日本語版には書か 模様を与えたとされており、この「トフ」の存在が、「タタウ」それぞれに意味と生命を 通じて、過去の「マオリ」(ポリネシア人の一族。原義は「普通の人」)が現在と将来の タウ」(tatau)と呼んでいたことが記載されており、それがタトゥーとなったものである。 されたジェームズ・クックのタヒチへの航海に関する本で、「現地人が入れ墨を指してタ れてある。 しかも、その入れ墨はタヒチ人の個人史を物語っており、身体に描かれる一つ一つの線を し、「海の大神にて、鮫を使ふ」『古傳に「タヒチ」島もとは鮫たりし』と熊楠が言う時、 トゥー」(tattoo)の起源は、タヒチの島々に伝わる「タタウ」であり(一七六九年に出版 「マナ」に繋がるとされ、「タタウ」の神は「トフ」であり、海の総ての魚に現在の色と 『タヒチ島の「ダツア、マツト」』不詳。ただ、我々が使っている入れ墨の意の英語「タ この辺りとこの「ダツア」や「マツト」という発音には親和性を私は感じる

速で時速三十五キロメートル以上の速さで泳ぐとされる。人を襲った記録は少ない。 は「mako」で、これはマオリ語の「サメ」の意である(同ウィキに拠る)。 「青鮫」和名種としては、軟骨魚綱板鰓亜綱ネズミザメ目ネズミザメ科アオザメ属アオザ Isurus oxyrinchus がいる。最大全長四メートル、体重五百五キログラムに達し、最も高

「吾邦蜻蜓の形ありと言ふ」日本列島の古名「あきつしま」のこと。

「モロカイ島」ここ。

「海角」「かいかく」。岬。

カル等を旅し、その体験を記したかなりの量の著作を残している「Internet archive」の第一 一七九四年~一八七二年)イギリス人の宣教師で作家。 'Polynesian Researches,' 1831. i. p. 166., Seqq., iv. P.90.」 ウィリアム・エリス (William 彼はハワイ諸島やマダガス

巻のここから以下と、第四巻のここ。

九年)の共著になる、「原始人の人類学 第六部」か。 グ・コーネリアス・カール・ゲランド(Georg Cornelius Karl Gerland Waitz 一八二一年~一八六四年)と、ドイツの人類学者で地球物理学者でもあったゲオル 「Waitz」「鰻」に出たドイツの心理学者・人類学者であったテオドール・ワイツ 一八三三年~一九一 (Theodor

王士禎らが完成した類書(百科事典)。 抔の例有り (淵鑑類函卷四四二)」 「淵鑑類函」は既出既注。 「魚人を乘せて游ぐ事、支那に琴高鯉に乘り、陳侯の子元自ら水に投ぜしを魚負て救ひし 同巻「魚二」に、 清の康熙帝の勅により張英・

*

陳侯、 令元自殺。 戓 投遼水。 魚、 負之以出。 元日、 「我罪人也。 故求死耳。

1

鯉石 【「廣輿志」、 鯉石、 在巴山。 世傳、 琴髙先生於此得道、 所乘之鯉化而爲石。

*

こある。

Mythology, 1872, vol. ii」を見ると確かにそう書いてある。「Internet archive」のこちらの左 された。しかし、前に出たイタリアの文献学者コォウト・アンジェロ・デ・グベルナティ 少年神」となったメリケルテースなら知っているが。オルコメノスの王アタマースとイー ス(Count Angelo De Gubernatis 一八四〇年~一九一三年)の著「Gubernatis, 'Zoological イモーンはイルカに乗った少年神の姿で表わされ、海難者を救い、港を司る神として信仰 ページ本文の下から五行目以下に記されてある。 ノーの子であったが、死後にパライモーンと呼ばれる海神に生まれ変わったとされ、パラ 『希臘の美少年神 「エロス」海豚に乘る事有り(Gubernatis, l. c. p. 340)』「イル カに乗った

流域・河口・沿岸であるから、「湖」という記載は不審ではない。 淡水域と海水域を回遊し、少なくとも、 ティー属アメリカマナティー Trichechus manatus Linnaeus, 1758 の種小名である。同種は この伝承は確認出来ないが、この「マナタス」とは、哺乳綱カイギュウ目マナティー科マナ au-Prince:「王子の港」の意)。一八○四年に独立(ラテン・アメリカ初で、 を接し、カリブ海のウィンドワード海峡を隔てて北西にキューバが、ジャマイカ海峡を隔 年~一五五七年)の「航海と旅行」。「ハイチ」は中央アメリカの西インド諸島の大アンテ 家・地理学者のジョヴァンバティスタ・ラムージオ(Giovanni Battista Ramusio 33)』引用書はベネチア共和国の官吏(元老院書記官など)を務めた人文主義者で歴史 リカ大陸で二番目、しかも世界初の黒人によって樹立された共和制国家である)。ここ。 てて西にジャマイカが存在する。首都はポルトープランス(Pòtoprens/フランス語:Port-イル諸島内のイスパニョーラ島西部に位置するハイチ共和国。 『ハイチ島發見の時人を乘せて湖を渡す「マナタス」獸有りし』「(Ramusio, tom. iii.fol. 淡水域では永住が出来、 東にドミニカ共和国と国境 棲息フィールドは河川の下 尚且つ、アメ

かに鮫を神使いとする伝承を持っている。 「伊勢國磯部大明神」三重県志摩市磯部町にある伊勢神宮内宮の別宮の一社伊雑宮は、 ウィキの 「伊雑宮」によれば、 『七匹の鮫が的

は、命や目を取られると、漁師は出漁を自粛し、海女は潜水しないものとされていた』。 た(これはウィキの「海豚参詣」(いるかさんけい)のイルカ以外のクジラやサメのケー 知る、嘗て「売春島」と呼ばれた島である)の『暗礁がサメの休息処のようです』とあっ 島」(旧』『伊雑宮の神領で「オノコロジマ」と呼ばれ』た、『現在の渡鹿野島』。知る人ぞ 来て、七『本のサメ(沢山の?)がお参りに来る日と言われ、的矢湾大橋近くの』「神の との伝えがある』とある。『これは気候や海流の関係で』、この時期に『サメが回遊し』て 地方』一般に、『祭りの当日』『を物忌む日として、漁師は漁を』、『海女は潜水を忌む習慣 六月二十五日の大祭を『「磯部の御祭日だ。七本ザメがお参りに来る」といって』、『この 神が内宮と同じく天照大御神であるから当然)『といわれている。志摩地方では、 る)『に唄われているサメは俗に「七本ザメ」と呼ばれ』、『伊雑宮のお使姫』(女神格。祭 宮は竜宮様よ八重の汐路をサメが来る」と』伊雑宮の『御田植祭』(「御神田」と呼ばれ 乗の安乗崎沖の岩礁(大グラ)近くの海底に鳥居に似た岩があり、 れる。大御田橋からは蟹や蛙に化身して伊雑宮に参詣するともされる。またこの日は志摩 と云われ、また龍宮の使いと伝える説もある』。『七本のうち一本は殺され、今は六本とさ 矢湾から川を遡って伊雑宮の大御田橋までのぼると云われる。この七本鮫は伊雑宮の使い 日「ゴサイ」は「御斎」であろう)。また、別のネット記載では伊雑宮は地元では「イゾ て』、七『本のサメが参詣に訪れ、渡鹿野島で休息をとるとの伝承が有り、祭祀の当日 という伝承が伝わる。旧磯部町の伊雑宮(いざわのみや)の』六『月の祭祀に合わせ ス事例に、『三重県志摩市の渡鹿野島(旧志摩郡磯部町域)などに、『七本鮫の磯部参り』 志摩きらり千選」には、 ウグウ」とか、親しく「イソベさん」と呼ばれているともあった。 があ』り『子供達は海水浴』も『できない』。『この日、海に入ると「命か目」を取られる の海女たちは海に入ることを忌み、伊雑宮に参詣する』とあり、また、『志摩市阿児町安 いわれる』伝承があり、『伊雑宮は漁業に従事する信仰者が多い』とある。 『この海女の休漁日をゴサイという』とあり、引用元原記載も確認した(この海女の休漁 志摩市磯部町の「七本ザメの磯部参り」と標題して、 伊雑宮の鳥居だったと サイト「伊勢 『「磯部伊雑

「四五間」七・二七~九・〇九メートル。

条件が合致する。サメ類の化石種と形態的に類似を示しており、古いタイプのサメと考え 色から黒色或いは灰色で、腹側は白色を呈する。体中に多数の黒色又は白色の斑点が見ら 最長全長で三メートルほどである。流線型に近い円筒形の体幹を持ち、体色は背側が暗褐 られている(ウィキの シ・イルカ・サメなどを追い込んで捕食することからも、七頭が群れを成すという点でも ビスザメ属エビスザメ Notorynchus cepedianus がいる。但し、こんなに大きくはならず、 ンベエザメ Rhincodon typus の小・中型個体群であったのかも知れない(頭部が扁平なのは 大きさは、或いはジンベイザメ(軟骨魚綱テンジクザメ目ジンベエザメ科ジンベエザメ属ジ 「細く」としても違和感がなく、甚平模様の斑点も合致する)。前記ウィキにも書かれてい 『頭細く、體に斑紋有り、「エビス」と名くる種』板鰓亜綱カグラザメ目カグラザメ科エ 関東などの地方名でジンベエザメをエビスザメとも呼ぶからである。 エビスザメは群れで狩りをすることが知られており、仲間と協力してアザラ 「エビスザメ」に拠る)。ただ、ここで示す「四五間」という有意な

とされる』。『これが出たときにはカツオが大漁になると言われる』とあるのである。 れている』。『船の下へ入って船を支えていることがあり、首尾がつかめないほど巨大なもの という関東方言による呼称などはまさにこのことを表すものであるし、その他の各地でも 福の神のように考えられてきた。「えびすざめ」(生物学上実在するエビスザメとは無関係) え、『ジンベエザメの周囲には常にイワシやカツオ等の大小の魚類が群れている。日本では ザメにこそ相応しい雰囲気とも言えるからである。実際、ウィキの「ジンベイザメ」にさ 観点から「此鮫海上に現るト時、 るという伝承が残る海の怪「ジンベイサマ」は、その正体がジンベエザメではないかと言わ ており、祠(ほこら)は大切に守られている』とあり、さらに、『宮城県金華山沖に出現す く』、『ジンベエザメもその正体に含まれているという。そして、 この関係が』、『経験的に古くから漁師に知られ、本種は地域によっては大漁の吉兆とされ、 大なり」というのも、先の真正のエビスザメよりも、 「えびす」「えべっさん」などと呼ばれて崇められてきた漁業神には、クジラ類だけでな 一定の海路を游ぎ來るに、 無數の堅魚」(カツオ)「之に隨行するを捕え、利を得ること莫 漁夫之を祭り祝」い、『「エビス付キ」と名』け、 悠々たるプランクトン食のジンベイ この信仰は現在も活き続け

性で殆んど生態は判っていない、レアな種であるから、彼らではないので注意されたい。 属オオワニザメ Odontaspis ferox がおり、日本近海(南日本太平洋岸)にもいるが、深海 桐・佐藤紅緑・石井露月らがいる。なお、 初代社長兼主筆は陸羯南。 たいものだ。日本主義を標榜した日刊新聞『日本』は明治二二(一八八八)年二月創刊。 多少漢文鱷の記載に似たるを以て杜撰に之を充てたるなりと有りし』原記事を確認してみ む))」に出るのは(原文・訓読文・私の注も引く)、 はない。実際に「大鰐鮫」、軟骨魚綱板鰓亜綱ネズミザメ目オオワニザメ科オオワニザメ な(或いは押しなべてそう思われていた)鮫」という意であって、特定の種を指すもので 「大和本草」貝原益軒の「大和本草卷之十三 魚之下 『「日本」新聞に寄書して、吾邦の「ワニ」は「ワニザメ」と稱する一種の鮫なり、 歴代の記者には長谷川如是閑・正岡子規・中村不折・河東碧梧 ここで言っている「ワニザメ」とは「荒く獰猛 フカ (サメ類(一部に誤りを含

*

三作此即鱷魚也南州志云斬其首乾之極厺其齒而更生 ○鰐フカハ四足アリ鼈ノ如シ首大ナリ能人ヲ食フ李淳風日河有怪魚乃名日鰐其身已朽其齒

*

く、『可こをます-。 *** · ** · *** · 其の齒を厺れども、 のごとし。首、大なり。能く、 更に生す』と。 已に朽つるも、其の齒、 人を食ふ。李淳風、 之れを乾

*

- 亜綱主竜型下綱ワニ形上目ワニ目 Crocodilia のワニの記載である。 ・「鰐ぶか」漢籍からの引用から、 これは正真正銘の脊椎動物亜門四肢動物上綱爬虫綱双弓
- 属ニホンスッポン 「鼈」爬虫綱カメ目潜頸亜目スッポン上科スッポン科スッポン亜科キョクトウスッポン Pelodiscus sinensis(本邦産種を亜種 Pelodiscus sinensis japonicus とする

説もある)。当該項で既出既注。

- 側に発生する事実を発見し、天文気象現象の記録を整理した。著書に占星術的気象学を記 書」の中の「天文志」と「律暦志」を編み、また「算経十書」の注釈を行った。 黄道環・赤道環・白道環よりなる三辰儀を備えた渾天儀を新たに作った。「晋書」と「隋 した「乙巳占」がある。 ・「李淳風」(六○二年~六七○年)は初唐の天文学・数学者。 日本では「儀鳳暦」として知られる「麟徳暦」を編んだ。 太史令を歴任。六三三年、 彗星の尾は常に太陽と反対 高宗の
- 志」と同じく、三本の歯だけは生きていて、 ・「其の身、已に朽つるも、其の齒、三つ、 作れり」意味不明。 新たに生えてくるというのか? 仮に訓じた。 後の「南州
- ・「鱷魚」「鱷」は「鰐」の異体字。
- 州異物志」のことか。 ・「南州志」三国時代(二二〇~二六五 年)の呉の万震が記した華南から南方の地誌
- ・「厺」「去」の異体字。

*

熊楠が何を以って「何れも海中の鮫類と見ゆ」と言っているのは、てんで、判らない。 は鮫ではなく、間違いなくワニ類である。 これ

見たって、正真正銘、ワニだがね!!! 無鱗魚 「倭漢三才圖會」これも「何れも海中の鮫類と見ゆ」というのはトンデモない話で、 寺島良安」をやはり本文・訓読・注を引く。 私の「和漢三才圖會 見事にワニである挿絵はこちら。 卷第五十一 魚類 江海

*

わに

鰐【音諤】 鱷【同字】

【和名和仁】

クワア、

中斷如象之用鼻徃徃取人其多處大爲民害亦能食人既飽則浮在水上若昏醉之狀土人伺其醉殺 其亦靈三才圖會云鰐南海有之四足似鼉長二丈餘喙三尺長尾而利齒虎及龍渡水鰐以尾擊之皆 和名抄云鰐形似蜥蜴而大水潜吞人卽浮說文云鰐食人魚一生百卵及成形則有爲蛇爲龜爲蛟者

春雨 よの中は鰐一口もをそろしや夢にさめよと思ふ斗そ

成有大口頗象鰐頭俗謂之鰐口其來由未詳古有神駕鰐之事據于此乎 鱝尾其尾足掌之甲皆黑色小者一二尺大者二三丈社頭拜殿懸鐵鉦以布繩敲之形圓扁如二鉦合 有各二層牙上下相貫交嚙物無不斷切者故諺曰稱鰐之一口也無鱗背上有黑刺鬣而有沙尾長似 △按鰐狀灰白色頭圓扁足如蜥蜴而前三指後一指偃額大眼尖喙稍長口甚濶牙齒利如刄上下齒

魚 大明一統志云真臘國有建同魚四足無鱗鼻如象吸水上噴高五六丈是亦鰐之別種乎

*

わに

鰐【音、諤。】 鱷【同字。】

【和名、和仁。

クワア、

人を食ふ。既に飽くときは、則ち浮かんで、水上に在り。昏醉の狀のごとし。土人、其のを用ひるがごとし。徃徃にして人を取る。其の多き處は、大いに民の害を爲し、亦、能く まると、『鰐は、南海に之有り。四足、鼉に似、長さ二丈餘。 喙 、三尺。長き尾にして、云ふ、『鰐は、南海に之有り。四足、鼉に似、長さ二丈餘。 喙 、三尺。長き尾にして、ては、則ち蛇と爲り、龜と爲り、蛟と爲る者有り。其れ亦、靈なり』と。「三才圖會」に 浮く』と。「說文」に云ふ、『鰐、人を食ふ魚なり。一たび百の卵を生む。 醉へるを伺ひて、之れを殺す』と。 利き齒あり。虎及び龍、水を渡れば、鰐、 「和名抄」に云ふ、 蜥蜴に似て、大にして、水に潜りて人を呑むときは卽ち 尾を以て之を撃つに、皆、中に斷れる。 形を成すに及び 象の鼻

夢にさめよと思ふ 斗 ぞ 「春雨」 世の中は鰐一口もをそろしや

ならず。 し。大なる口有り。 頗る、鰐の頭に 象る。俗に之を鰐口と謂ふ。其の來由、未だ詳らか社頭拜殿に鐵鉦を懸けて、布繩を以て之を敲く。形、圓く扁たく、二鉦を合成するがごと尾・足・掌の甲、皆、黑色。小さき者は一、二尺、大なる者、二、三丈。 刺鬣有りて、沙[やぶちゃん注:粒状の突起。]有り。尾長くして鱝の尾に似る。其のむ。斷ち切らずといふ者無し。故に諺に曰く、「鰐の一口」と稱す。鱗無く、背上に黑きず、()())())()))()))))(利きこと、刄のごとし。上下の齒、各々二層有り。牙の上下、相貫き交はりて、物を嚙造、後に一指あり。偃たる額、大なる眼、尖りたる喙のやや長く、口、甚だ潤く、牙齒、指、後に一指あり。偃たる額、大なる眼、尖りたる喙のやや長く、口、甚だ潤く、牙齒、 △按ずるに、鰐の狀、灰白色にして、頭圓く扁たく、足、蜥蜴のごとくにして、前に三

建同魚 とく、水を吸ひ、上げて噴くこと、高さ五、六丈』と。是れ亦、 「大明一統志」に云ふ、『眞臘國に建同魚有り。古へ、神、鰐に駕するの事有り、此れに據るか。 四足にして鱗無し。 鰐の別種か。

Eusuchia のみで、アリゲーター科 Alligatoridae、クロコダイル科 Crocodylidae、ガビアル 科 Gavialidaeの三科分類が一般的で、二十三種。ガビアル科 Gavialidae(独立させずクロ [やぶちゃん注:爬虫綱ワニ目 Crocodilia に属する動物の総称。現生種は正鰐亜目

他のワニでは外見上の雌雄の判別は出来ない)。 尖っているものがクロコダイル科である。更に閉じた口を横から見た際、下顎の第四歯が がない(インドガアビルの成体の雄は鼻が大きく膨らんでおり、雌と容易に区別できる。 イル科。ガアビル科(一種のみであるが)は、喙が細長い吻となっているので、誤りよう 上顎の穴に収まっているものがアリゲーター科で、牙の如く外に突出いるものがクロコダ コダイル科とする考え方もある)はインドガビアル Gavialis gangeticus の一属一種であ 頭部を上から見た際、喙(口先)が丸みがかっているものがアリゲーター科で、細く

「一たび百の卵を生む」は誇張。 科によって異なるが、 十〜五十個が相場。

「靈」は、人知を超えた不思議な働き、玄妙な原理。

ぽん」のルビを振るが、 この和名。ヨウスコウワニかチョウコウワニの方がまし)。東洋文庫版ではこれに「すっ 「鼉」はアリゲーター 属ヨウスコウアリゲーター 甚だしい誤りである。 Alligator sinensis(お洒落じゃないね、

(和とも表記)名類聚鈔 (抄とも表記)」 で、 平安中期に

順によって編せられた辞書。

説明であるとする。 安が記すような記述は「倭名類聚鈔」にはなく、これは「説文解字」の「蝉」(わに)の 体系的に試みた最初の字書。後漢の許慎の著。但し、東洋文庫版後注によると、 りである。 「說文」は「說文解字」で、 まず「倭名類聚鈔」の「卷第十九 漢字の構成理論である六書に従い、 鱗介部」の「鰐」の条は以下 その原義を論ずることを ここで良

Н

麻果切韻云、 [やぶちゃん字注:「鱉」はスッポン、 鰐。【音萼和名和仁】似鱉有四足喙長三尺。 みのがめ (背中に藻を生やした亀) 甚利齒虎及大鹿渡水鰐擊之皆中 を指す

「鼈」と同字。]

「麻果切韻」に云ふ、 甚だ利き齒あり。 『鰐【音、萼。 虎及び大鹿、 水を渡らば、 和名、 和仁。」。繁に似て、 鰐、 之を撃ちて皆、 四足有り、 中に斷れる。

4

安の記述の「龍」は「大鹿」の字の読み違いのようにも思われる)。 は以下の通り(「廣漢和辭典」の「鱉」の字義の例文にある)。 一見してお分かりのように、これは良安が直後に引く「説文」の内容とほぼ一致する(良 更に、 「説文」 の解説

+

鱉侣蜥易。長一丈、水潛、吞人卽浮。出日南也。 从虫屰聲。

(繁は、蜥易〔=蜥蜴〕 日南に出づるなり。 虫に从〔=從〕ひ、「屰」の聲。) に佀〔=似〕る。長さ一丈、水に潛し、 人を吞めば、 即ち、

+

文」から、 授を乞う。 最後の部分は解字である。 従って「説文」には「鰐」の別項はないと思われる。では気になるのが、 としたこの引用文の出所である。東洋文庫もそれを記していない。 「廣漢和辭典」によれば「鱉」は、「鰐」と同一語異体字とあ 彼が「説 識者の御教

物を指している可能性がある。 普通である(東洋文庫版もそうとっている)が、 「春雨」は、 三島由紀夫も称揚した上田秋成の幻想小説集「春雨物語」を指すと思うのが 次項のような次第で、 実はこれは別な書

ない可能性が高い 「世の中は……」の和歌は現在調査中であるが、 (「岩波古典文学大系 索引」 でこの和歌は掲載されていない)。 これは「春雨物語」 の中には所収し

は四本である。これはそのキッチュさが大好きな「熱川バナナワニ園」で得た貴重な知識 「前に三指、 後に一指」は正しい表現ではない。 そもそもワニの指は前肢が五本で、後肢

額」と訳しているが、そもそも「偃」にそのような意味はない。但し、堰と同義で、土を ぶせになった) 「偃たる額」の「偃」の字を私は「ふス」と読んだ。 流れをせき止めるの意味の敷衍ならばとれないことはないが、 一口」は 頭部を示すものとして違和感がない。 「鬼の一口」と同じとする見解が多い。 東洋文庫版では、 これは扁平で地べたに伏せた(うつ だとすれば、 やや強引である。 ここを「出ばった 処理の仕方が素早

く確実であるという意味と、文字通り、ひどく恐ろしい目に遭うことの意味となる。

「鱝」は軟骨魚綱板鰓亜綱 Elasmobranchii のエイである。

「鰐口」については川崎市教育委員会 HP の指定文化財紹介ページ「青銅製鰐口(市民ミ ジアム)」の概説が言うべきことを洩らさない非常に優れたものなので、 本縦書版ではアラビア数字を漢数字に直し、 一部の記号を変更させて貰っ 以下に引用

《引用開始》

垂のための「耳」を付した独特なものである。 縄で打ち鳴らすもので、今日でも一般によく知られている。その形態は偏平円形で、左右 神社や仏閣の軒先に懸けられ、礼拝する際にその前に垂らされた「鉦の緒」と呼ばれる布 製であるが、まれに鋳鉄製や金銅(銅に鍍金を施したもの)製のものもみられる。通常は に「目」と呼ばれる円筒形が張り出す。また、下方に「口」が開き、 鰐口は梵音具(打ち鳴らして音を出すための仏具) の1つで、多くは鋳銅 上緑部 2 (銅の鋳物) 箇所には懸

中に記されるのが初見である。それ以前の鰐口の銘文には「金口」とか「金鼓」といった 鰐の首に似たるが故にこれを名づくるか」と推察しているが、 呼称がみられることから、古くはこのように呼ばれていたのが、鎌倉時代末頃以降、「鰐 口を仰ぎみる時、このように考えることは十分にうなずける。 の著『和漢三才図会』(正徳三年(一七一三)自序)のなかで「口を裂くの形、たまたま 口」と称されるようになったものと考えられている。江戸時代中期の医家、寺島良安はそ 「鰐口」という呼称は、正応六年(一二九三)銘をもつ宮城大高山神社蔵の作例の銘文 実際に堂宇に懸けられた鰐

媛奈良原経塚出土の平安時代後期に推定される例があるにすぎない。 例には、長野松本市出土の長保三年(一〇〇一)銘鰐口(東京国立博物館保管)の他、 鰐口の現存遺例は室町時代以降の作例が多く、それ以前のものは少ない。平安時代の作

たとする見方や鐃との関連も考えられている。 鰐口の祖形には、韓国の「禁口」と呼ばれる鳴物が考えられているが、 [やぶちゃん注:以下略。]

まではあるなどと 文と潮の潮汐を自在に操る秘密兵器、塩盈珠・塩乾珠を手渡す。そうして火照命の としなるなま、しになるなま 仕打ちを語る。豊玉比売の父海神は鯛の喉から件の釣り針を発見、それを兄に返す際の呪 き、そこで豊玉比売と契った火照命は、三年経って、自分がここに来た理由と兄火照命佐知毘古は火湿をあるという)。失くした釣り針を求めて綿津見神(=海神)の宮殿に赴を指しているか。海佐知毘古とは海の漁師の意味で、彼の正しい神名は火照命であるを指しているか。海佐知毘古とは海の漁師の意味で、彼の正しい神名は火照命である 部を以下にテクスト化しておく。[やぶちゃん注:中略する。私の本体版を読まれたい。] 葦原中国への帰還のシ ここで、 く、「卷第十九 神祭 付り佛供器」の「鰐口」の項の叙述である。次いでなので、該当 「古へ、神、 この執筆者が引いている「和漢三才図会」の叙述は、 《引用終了》 ーンとなるのであるが、 そこに「和邇魚」が登場する。 ゎたっきのかみ 彼の正しい神名は火照命である(山 自分がここに来た理由と兄火照命の 本項の鰐口の部分ではな

鹽乾珠弁せて兩個を授けて、卽ち悉に和邇魚どもを召び集めて、 問ひて日ひ

「僕は一日に送りて、即ち還り來む。」といひき。故、各己が身の尋長の隨に、て、 覆 奏 すぞ。」 日を限りて白す中に、 一尋和邇白しけらく

+ き。故、其の一尋和邇は、今に佐比持神と謂ふ。[やぶちゃん主・人;~?」をりき。其の和邇返らむとせし時、佩かせる紐小刀を解きて、其の頸に著けて返したまひと告りて、即ち、其の和邇の頸に載せて、送り出しき。故、期りしが如、一日の内に送りと告りて、即、其二暑々 若し、海中を渡る時、な惶畏ませまつりそ。」

の登場生物として広く信じられていたということを指すともとれようか。 がここで想起したのがこの神話であったとすれば、所謂、爬虫類のワニが、 しかし、現在、この「和邇」はワニではなく、サメとするのが定説である。 当時は本神話

「大明一統志」は、 明の英宗の勅で李賢らによって撰せられた中国全土と周辺地域の総合

「真臘國」は「旧唐書」に、

真臘國、在林邑西北、本扶南之屬國、崑崙之類。

(真臘國は、林邑の西北に在り、扶南の屬國にして、崑崙の類なり。)

三、四『世紀頃から南下をはじめ、扶南を吸収合併していった』。七『世紀にはほぼ現在 帯を領有する扶南国があり、メコン川中流にはクメール族の真臘国があった。真臘は』 のカンボジアと同じ領土を有していた。』とあり、 とある。渡邉明彦という方のアンコール遺跡群の記事のカンボジアの歴史についての記載 (現在、存在しない模様)によれば、『紀元前後、メコン川下流のデルタ地帯から沿岸地 現在のカンボジア王国と同定してよ

七」にも「南蠻海中有魚名建同、 ここと同様の記述がある。当初、ジュゴン Dugong dugon を想定してみたが、 「建同魚」が分からない。ワニでは毛頭あるまい。「隋書」の「卷八十二 何方かの鮮やかな同定を期待する。 四足、無鱗、其鼻如象、 吸水上噴、高五六十尺。」と、 叙述としっ

起。]有り。尾長くして鱝の尾に似る。其の尾・足・掌の甲、皆、黑色」という部分だけく、「鰐の一口」と稱す。鱗無く、背上に黑き刺鬣有りて、沙[やぶちゃん注:粒状の突層有り。牙の上下、相貫き交はりて、物を嚙む。斷ち切らずといふ者無し。故に諺に日良安の評釈部の後半の「口、甚だ濶く、牙齒、利きこと、刄のごとし。上下の齒、各々二なお、引用に際し、改めて原本その他と校合して、表記を改めてある。敢えて言うなら、なお、 「ワニ」以外の何物でもない。思うのだが、熊楠が「何れも海中の鮫類と見ゆ」と記してし サメの記載かのようにも見えるが、全体は、最早、弁解するべくものなく、

まったのは、益軒の「大和本草」の記載が「魚之下 フカ」の一条であったこと、良安の

を借りて読み、書写したりしたのは、少年期であって、そこに記憶不全があるのは間違いな 記していることが結構多いように見受けられる(本篇のここまでの記載の中にも当該書を幾 博覧強記ではある。流石に欧文の書誌注をする際には書誌情報や当該部のページを直に確認 書くためにわざわざ両書を再見はしていないせいではないかと考える。熊楠は尋常ではない ら見ても見つからないケースが複数ある)。それでも、 していることが多いであろうが、どうも和書の場合は、現物を再確認せずに、記憶に頼って の直後に真正の「鮫」の項が置かれてあるという、 「和漢三才図会」の記載が「魚類 江海無鱗魚」の中に組まれてあったことと、 絶対に熊楠は「何れも海中の鮫類と見ゆ」と書くはずはないからである。 だって、もし、ちゃんとここを書くのに、以上の二書の以上の記載を再確認したとなら 記憶に基づいて書いており、 凄いのだが、彼が「和漢三才図会」 その「鰐」 この記事を

習慣と伝統」。「Internet archive」のこちらで原本の当該箇所が読める。但し、羊だけでな をサメではないか?とは記してはいないように思われる。 について、ある種の疑問を抱いているような感じが、後を読むと感じられるものの、それ く、二人の兵士を襲って食ったという注記が載り、そこで筆者がそれがワニであるどうか であったエルメーテ・ピエロッティ(Ermete Pierotti 一八二一年~?)の「パレスチナの 「Pierott,Customs and Traditions of Palestine, 1864, P. 39.」イタリアの技師・建築家・数学者

九章)」三十九の「虎の鰐取たる事」(巻三の七)である。一九五一年岩波文庫刊「宇治拾 的同話である。 一部に読みを入れ、段落を成形して読み易くした。本話は「今昔物語集」巻第二十九の 「實際鱷なき韓國にて、筑紫の商人、虎が海に入て鱷を捕ふるを見し話有り(宇冶拾遺三 「鎭西人渡新羅値虎語第三十一」(鎭西の人、新羅に渡りて虎に値ふ語第三十一)と同文 上巻」を使用したが、句読点・記号を追加し、「新潮日本古典集成」本によって

*

に、山のね[やぶちゃん注:麓。]にそひて、 是も今は昔、筑紫の人、あきなひしに、新羅にわたりけるが、あきなひはて」、

「舟に、水、くみいれん。」

とて、水の流出たる所に、舟をとょめて、水をくむ。

て。]、物をうかゞふ。その影、水にうつりたり。 である。〕ばかりあまりたるうへに、虎、つゞまりゐて[やぶちゃん注:小さく蹲 たり。たかき岸の三、四十丈[やぶちゃん注:誇張し過ぎ。「今昔」版では「三、四丈」 そのほど、舟にのりたるもの、船ばたにゐて、うつぶして海を見れば、山の影、うつり

その時に、人々につげて、水くむ者をいそぎ呼びのせて、手ごとに櫓を押して、 いそぎ

其ときに、虎、 おどりおりて、舟にのるに、舟は、とく、いづ。

虎は、おちくるほどのありければ、いま一じやうばかりを、えおどりつかで、 海におち

いそぎて行まい に、 この虎に、 目をかけてみる [やぶちゃん注: 注視して

が)」。]ざまにのぼりて、汀に、ひらなる石の上に、のぼるをみれば、左のまへあしを、しばしばかりありて、とら、海より出きぬ。をよぎて、くが[やぶちゃん注:「陸(く 膝よりかみ食きられて、ち、あゆ[やぶちゃん注:血が滴っている。]。 をよぎて、くが「やぶちゃん注:「陸(く

「鰐に食ひきられたる也けり。」

と体を平たくしていたが。」、 みる程に、其きれたる所を、 水にひたして、 ひらがりをるを [やぶちゃ 、ん注: ぺたん

「いかにするにか。」

をもて、わにの頭に、つめをうちたて、、陸ざまに投げあぐれば、 投げあげられぬ。 みる程に、沖の方より、わに、とらのかたをさしてくると、みる程に、虎、 一じやうばかり、 右の前足

ざをみるに、なからは、死入ぬ[やぶちゃん注:恐懼のあまり、舟人らは皆、半ば死んだて、くだりざかをはしるがごとく、のぼりてゆけば、舟のうちなるものども、これがしわ かり、 ような気抜けになってしまった。]。 たにして。]、かたに打かけて、てをたてたる樣なる岩の、五、六丈あるを、三の足をもち り、打ふりて、なよなよとなして[やぶちゃん注:新潮版では『なへなへ』。くったくおとがひ[やぶちゃん注:顎。]の下を、をどりかょりて、食ひて、二たび、三たびば のけざまになりてふためく 顎。]の下を、をどりかゝりて、食ひて、二たび、三たび。[やぶちゃん注:仰向けになってばたばたとしている。]。

と思ふに、きも心うせて、舟こぐ空もなくてなん からんには、何わざをすべき。」 「舟に飛か」りたらましかば、 いみじき 劍 ・刀をぬきてあふ共、 [やぶちゃん注:舟の行く先もおぼつか かばかり力つよく、 はや

ぬままに。]、 つくしにはかへりけるとかや。

因みに、「今昔物語集」のそれのエンディングは、

來たりける。 ける。外の人も、此れを聞きて、極じくなむ、恐ぢ怖れける。 各々、 妻子に此の事を語りて、奇異しき命を生きて返りたる事をなむ、

此れを思ふに、鰐も海の中にては、猛く賢き者なれば、虎の海に落ち入たりけるを、 咋ひ切りてける也。 其れに「やぶちゃん注:それなのに。」、 由無く [やぶちゃん

とて、陸近く來て、 「尙ほ、虎を咋はむ。」 命を失なふ也。

の事、 此れが如く也。 此れを聞て、

「餘りの事[やぶちゃん注:身の程知らずなこと。] は止むべ 只 吉き程にて有るべ

人、語り傳 へたるとや。

と教訓が附されてある。ともかくも、 この 「鰐」は で間違い な 61 のは言うまでもな

「Churchill」「鳩」に既出既注。

豊玉彦の宮から、 は所謂、「山幸彦」のこと。「日本書紀」の巻第二の「神代下」の第十段の第一書に、 「神代卷に、 海神一尋の鱷に、彦火々出見尊を送り還さしむる事あり」「彦火々出見尊」 彼が地上に帰る際、

於是乘火火出見尊於大鰐。 以送致本鄉。

是に於いて、 火火出見、 大鰐に乘せまつりて、 以つて本郷に送致りまつる

と出る。

り」同前の直後に、 「豐玉姬、産場を夫神に覗はれしを憤り、 化して八尋の大鱷となり、 海を渉りて去ると言

留其女弟玉依姬、 聽。猶以櫛燃火視之。時豐玉姬化爲八尋大熊鰐。匍匐逶虵。 先是且別時。豐玉姫從容語曰。 是後豐玉姬果如其言來至。謂火火出見尊曰。 持養兒焉。 [やぶちゃん注:以下略。] 妾已有身矣。當以風濤壯日、 妾今夜當產。 出到海邊。請爲我造產屋以待 遂以見辱爲恨。 請勿臨之。 火火出見尊不 則徑歸海鄉。

産屋を造り、 以つて、待ちたまへ。」 請ふ、 我が為に

·妾、今夜、當に産まんとす。請ふ、な臨しまそ。」是の後に、豐玉姬、果して其の言のごとく、來至 豐玉姬、果して其の言のごとく、來至る。 火火出見尊に謂して曰さく、

火火出見尊、

てのたくった。]。 時に、豐玉姬、 身をくねらせ

「恨めし。」

と爲して、則ち、 徑だに 海郷、 に歸る。 其の女弟玉依姫を留めて、 見を持養さしむ。

黄泉国での伊耶那岐・伊耶那美と全く同じ「見るな」の禁忌システムが起動して、 よって世界 (二人の愛にシンボライズされる) が致命的に変成する部分が圧巻である。

州視聴合紀」合本版)の本文の殆んど冒頭の「意宇郡」の「安來」にあるが、しかしこれ 雲地誌。前編は承応二 (一六五三) 年、 は、 館デジタルコレクションの活字本(谷口為次編・大正三(一九 て神祇に祈りしに、 『懷橘談に、 殺せし鱷を剖くに女の脛出しと見ゆ』「懷橘談」は松江藩の藩儒黒沢石斎が書いた出 熊楠にして、 出雲國安來の北海にて、天武帝二年七月、一女鱷に脛を食はる、其父哀しみ 出典が頗る不適切で悪い。 須臾にして百餘の鱷、 後編は寛文元(一六六一)年完成。 一の鱷を圍繞し來たる。父之を突殺すに諸鱷去 古くは「出雲風土記」の一節に出るものであ 一四)年刊・「懐橘談・隠 国立国会図書

不進不退。 之一脛屠出。 傷助給。以此知神靈之所神者。爾時有須臾而。 志。麻呂。箭銳鋒撰便處居卽擡訴云。天神千五百萬。 埼上。大發聲憤。號天踊地。行吟居嘆。 吾御心者安平成詔。 日經六十歲。】。 九社及海若等。大神之和魂者靜而。荒魂者。皆悉依給猪麻呂之所乞。良有神靈坐者。吾所 十三日。語臣猪麻呂之女子。 安來鄉。郡家東南二十 猶圍繞耳。爾時擧鋒而刄中央一和爾殺捕。 仍和爾者殺割而掛串立路之垂也【安來鄉人語臣等之父也。 故云安來也。卽北海有毘賣埼。飛鳥淨御原宮御宇天皇御代。 七里一百八十步。神須佐乃烏命天壁立廻坐之。 遊件埼。邂逅遇和爾所賊不歸。 晝夜辛苦無避斂所作是之閒經歷數日。然後興慷慨 和爾百餘靜圍繞一和爾徐率依來從於居下。 已訖然後百餘和爾解散。殺割者女子 地祇千五百萬。 爾時父猪麻呂所賊女子斂毘賣 並當國靜坐三百九十 爾時來坐此 自爾時以來至于今 甲戌七月 度而

神須佐 乃。 冷鳥命、 天の壁、 立て廻ぎ らし

と詔りたまひき。 故、「安來」と云ふ。

| 賊はえて歸らざりき。武天皇。]、甲戌七月七 卽ち、 。]、甲戌七月十三日、北海に毘賣埼有り。恐いれる。 件の埼に遊びて、 ひ ••

門に動日を經歴たり。然して後、慷慨の志を興こし、麻児間に數日を經歴たり。然して後、慷慨の志を興こし、麻児間り、行きては吟き、居ては嘆き、晝夜、辛苦みて、斂め踊り、行きなは吟き、居なは嘆き、晝夜、辛苦みて、斂め、爾の時、父猪麻呂、賊はえし女子を毘賣埼の上に斂め、 飲めし所を避ること無し。 麻呂、箭の鋭き鋒を撰りて、 大發聲に憤り、 天に號び、 りて、便の。是く作る。たよりな、地に就び、地に

神靈坐有さば、吾が傷めるを助け給へ。此を以ちて神靈の神たるを知らむ。」神靈光等、大神の和魂は靜まりて、荒魂は、皆、悉に猪麻呂の乞む所に依り給へ。『天つ神千五百萬、地つ祇千五百萬、並びに當の國に靜まり坐す三百九十九の社、『天つ神千五百萬、地つ祇千五百萬、並びに當の國に靜まり坐す三百九十九の社、處に居り、卽ち、撎み訴へて云ひしく、 此を以ちて神靈の神たるを知らむ。 良を及れた

「う寺、鋒を擧げて、に依り來從りて、進まず」の時、須り、 進まず、 和爾、 中央なる一つの和爾を刄し殺し捕りき。****** 猶ほ、圍み繞るのみなりき。 百餘り、 静かに一つの鰐を圍み繞り に率て、 居る 下景

のりて、和爾を殺ち割きて、串に掛けて路の垂に立てき【安來の鄉の人、殺ち割けば、女子の脛一つ、屠り出だしき。 と、これでは、女子の脛一つ、屠り出だしき。 日に訖へて、然して後、百餘りの和爾、解散けき。 爾の時より以來、今日に至るまでに六十歳を經たり。】。 語臣等の父

右ページの四行目下部から)。ここは奇しくも「海龜」で引用した箇所の直前である。そ む』只野眞葛と紀行文「磯通太比」については「海龜」で既出既注。そこと同じ国立国会 其子年頃飼し犬を殺し、其肉を餌として鱷を捉へ、復讐せりといふ譚は之より出たるなら 文論集』(第二十二号・平成五(一九九三)年三月)。 のジョイント・シークエンスもダブらせて添えておく。これで「いそづたひ」の後半部が 図書館デジタルコレクションの画像を底本として同じ仕儀で当該部を電子化する(ここの カバー出来た。近いうちに別に全電子化をしようと思うている。 が、上代の「わに」をすっきりと解き明かしていて、まことによい。お薦めである。 『真葛女の磯通太比に、奥州の海士「ワニザメ」に足を食去られ死せしを、十三年目に、 神田典城氏の論文『「ワニ」小考』(学習院女子短期大学国語国文学会発行 こちらで PDF ダウン・ロード可能) 『国語国

も の。 の、 は、白布を曝せるとぞ思はる。海の水面に、日の影さし移りたるは、黄金白銀の浮べる樣は、蒲生の松原也けり。其處より此わたりまで、磯つゞきたる直濱に、絕ず波の打寄るして、浮たり。右(西)の方に遠く見ゆるは、相馬の崎、其前に黑う、木立の引續きたる す所に定められしかば、御殿崎とはいふ也。暫し休みて見渡せば、水際、やょ遠く聳えたまで、程よくさし出たる岩山有り、四方の能く見遣るゝ故、代々御國知しめす君の、出まき。松が浦島などいふは、ここの分名[やぶちゃん注:「別名」。別称。]なりけり。海中こゝを立て、菖蒲田濱を經て、松が濱にいたる。爰は濱々の中に、分て愛たき所なり る岩に、松、ほどよく生たり。向ひ 白沫をきせ流し、あるは玉と成て、砕けつ、散るも、いと清し。底の深し、横折れる松の葉越に見ゆるも目はゆし。面白き岩どもの多く有るに、 以下同じ。]は、空も一つに、際なき海なり。左(東)の方に、金花山の寶珠の形、松、ほどよく生たり。向ひ(南)[やぶちゃん注:底本が原本の傍注をかくした 砕けつい散るも、いと清し。底の深さは七丈有 打かいる波

鮑 と り し に 、 西 の 方 の なるをのみ、 此海には、 西の方の國より、 取て有りしを、此海士は、然る事も知らざりし故、水底に入て取りつるを、鰐鮫などいふ荒魚の栖めば、こゝなる海士は、恐れて底迄は入らで、小やないといい。 日毎に、最大きなるを獲て、鬻ぎしほどに、幾程もなく、富たりき。、 日毎に、最士人夫婦、男子一人伴ひて、此處に留まりて、かづきしつゝ、のの國より、為まびとよりよ

此處なる人は思ひ居しに、果して、大鰐、見つけて追ひし故、

て所」の意であろう。「命あっての物種!」の謂いである。] 「命を、はか。」[やぶちゃん注:「はか」は「計・量・果・捗」などを当て、 掻分けつい逃つれども、最速くおひ來て、こいなる岸に登りて、松が根眞手かた手 [やぶちゃん注:「両の手を使って全力で」の意であろう。]、 「目当て・

松が根に取縋りて、

巻返して、逃去りけり。入れんと、角力ふほどに メットスれんと、角力ふほどに、足を付根より引拔かれて、狂ひ死に死にけり。上らんとせし時、鰐、飛付て、引おくれたる方の足を食たりしを、海士は๑ッッ゚ 海士は上らん、鰐は 鰐は、荒波、 引

子は、まだ廿に足らぬ程にて有りしが、 岸に立て見つれども、 爲ん術なければ、

きに泣きけり。

「父の仇を報ひん。」其骸を納めて後、

とて、 日毎に、斧・ 鉞を携へて、 父が縋りし松が根に立て、 瞬ぎもせず、 海を睨みて、

「鰐や出づる。」

٤, 窺ひ居けるを、 人々、

物、年、半計りも過たる頃、:とて、哀がりけり。 とて、哀がりけり。 「孝子也。」 釣の業を能うせし海士の、 修行者に成て、 國巡りするが

爰に舍りけり。

は」の意を作る。」、 未然形「けら」に接尾語「く」が付いたもので、「~であったこと:~であったことに 教へけらく[やぶちゃん注:「けらく」は過去の助動詞「けり」の「ク語法」。「けり」の かぃることの有といふ事は、 人每に語りつれば、其修行者も聞知りて、 最哀れがりて、

注:「研ぎたる」の意。」、尺餘の大釣針を鍛すべし。夫に五尺の鐡鎖を付て、「鰐を捕らんと思ふに、斧・鉞は不要ならめ。良き鋼にて、兩刄にとげたる「鰐を捕らんと思ふに、斧・鉞は不要ならめ。良き鍋にて、兩刄にとげたる して、沖に出て、釣すべし。 必ず、 寄來ぬべし。」 肉を餌に串 [やぶちゃん

孝子、甚く悦びて、と傳へけり。 教へし如くに設け成して、 釣せしに、 鯨の子を獲しこと、

「今日ぞ、必ず鰐を獲て、父に手向ん。」 其日の回り來し時、法のわざ、慇ごろにして、來集ひたる浦人にむかひ、幾年、往回へりて、父がくはれし時を算ふれば、十餘三とせに成にけり。

「今日ぞ、

と誓ひて、

力戮せ給はれ。」

ひとつ心に成て、 主の仇なる鰐を、

て、針、卸せしに、孝子の一念や、『と言聞かせつ』、淚を拂いて、首、牡れ。』 打落し、な 屆きつらん、 を切裂きて、 誤たず、大鰐、針に懸りしかば、 釣針につき串きて、

「思ひし事よ。」

と悅びつつ、 浦人にも、

「か く。 」

と告げて、 設置きたる、 「か□らさん」 「やぶちゃ ん注: 不詳。 なのかも 知 れ ぬ が

御教授を是非とも乞うものである。]と云物に懸て、父が食れし斷岸に引寄せて、本)では『かつらさん』とあるが、これも不詳。桟を葛で組み縛ったものか? 恐らくは判読不能だったのではないか。国書刊行会「江戸文庫」版(曲亭馬琴自身の写 切屠りけり。

から事の聞え、隱れなかりし故、國主にも聞し召付られて、其鰐の丈は七間半[やぶちゃん注:十三・六三メートル。]有りしとなん。

「松が濱の孝子」

と、賞させ給へる御言書を給はりて、

「鰐を釣し針は、永く其家の寳にせよ。」

年~宝暦元(一七五二)年)のこと(戒名の「續燈院殿獅山元活大居士」に拠る)。元禄 う)は第五代仙台藩藩主にして「中興の英主」と呼ばれる伊達吉村(延宝八(一六八○) は、今も正しう有て、道ゆく人は、寄りて見つ。[やぶちゃん注:「獅山公」(しざんこ鰐の頭の骨は、海士人を埋し寺の内に置たり。獅山公の御代の事なりき。此の二つと仰せ下りつれば、今も持たり。 て藩主を務めた。本書の作品内時制は文政元(一八一八)年。] 一六(一七〇三)年から隠居した寛保三(一七四三)年まで、実に四十年もの長きに亙っ 此の二つの物

人とりし鰐に増りてたくましや。からる事も有けり、と思へば、畏し。

仇をむくひし孝の一念は

海士人のすがりしといふ松、今も枯れずて、たてり。

此島の周圍を離れぬ小舟ありき。

「人を乘せてんや。」「二人、三人は可。」

は、道行く人の必ず過ぎ給ふ所なれば、立寄らせ給ひて、見給へかし。今、(僕)も參りて「今よりは、七、八年前に、龜の持來し、『浮穴の貝』といふものを、持はべり。我家なるものから[やぶちゃん注:逆接の接続助詞。]、心よからず。此釣人の語るやう、な といふ故、乘て見れば、 蛸釣る舟には有し。今、捕たるを、膝の下に打入るいは、珍らか

舟より上るとて、 今、 捕りたる蛸を乞求めて、 家苞にしたり。

巢に掛れるを救ひし返酬に、蜂群來て助勢し、敵を亡ぼしければ、 蜜蠟程稠厚[やぶちゃん注:「ちうこう(ちゅうこう)」。濃く厚いこと。]ならずと有る 代りに一種の木あり、好季節を以て之を傷け、出る汁を蒸溜して蠟代りの品を採れども、 Breve Ragguaglio del` Giapone ristampato in Firenze,1585(天正十三年、 とせしも蕃殖せず(藤岡平出二氏日本風俗史上編六三頁)。延喜式、諸州の貢物を列せる 名は美知といふも實は漢音也。推古帝の朝、百濟の王子豐璋、蜜蜂を三輪山に放ち飼はん 285.) 本邦には、斯る事を聞ず、 蜂故無くして巢を損るは[やぶちゃん注:「すつる」。]、家主死す可き前兆と信ずる者多く 傳へて、樂土に報ぜしむる風あり(Notes and Queries. May 30, 1908, p. 433)。英國には、 派遣せる使節より、聞く所を板行せる也)に、 (Hazlitt, `Faiths and Folklore,'1905, vol. i. p. 38.)、支那には、蜂の分る,日を吉日として、 但し日吉山王利生記卷三に蜂は山王の使者と見え、十訓抄一に、余五太夫蜂が蜘蛛の 蜜蜂を擧げずと記憶す、後世にも其産甚希なりしにや、予が大英博物館にて閱せし 便ち[やぶちゃん注:「すなはち」。]家に飼える[やぶちゃん注:ママ。]蜜蜂に訃を 漆の事を言るにや、兎に角蜜蜂を飼ふ事稀なりし故、 造作始めし、 寺を建たる話有れども特に蜜蜂とは記さず。 蜜蜂は神に捧ぐる蜜酒を原造するを以て、 又市を立る所あり(予の'Bees and Lucky Days' N. & Q., Oct. 10, 1908, P 深山に石蜜木蜜有れど、古くは之を採らざりしにや、其 日本に蜜蜂無ければ、蜜も蜜蠟も無し、其 神使となし、今も歐州に死人有 蜜蜂を神異とせる譚も聞かざる 死したる蜂の跡弔はん 九州の諸族が羅馬に

蜜酒は農耕が始まる以前から存在し、およそ』一万四千年『前に、狩人がクマなどに荒ら を決定づける行為である」と分析している』。 物を使うようになり、ビールに近い味になっていった。蜂蜜酒の製造は共同体での活動に されて破損した蜂の巣に溜まっている雨水を飲んだ時が最古の飲酒だと言われている。 フリカ諸国、 蜂蜜酒の市場は東欧やロシアが主である。自家生産される地域は中東、エチオピアなどア 他の醸造酒が台頭するに連れて蜂蜜酒は日常的な飲み物ではなくなっていった』。『現在、 旧石器時代末にまで遡ると言われている』。『青銅器時代に蜂蜜の消費量が増加したことか 祖語で蜂蜜を意味する』『médʰu に由来する』。『水と蜂蜜を混ぜて放置しておくと』、『自然 よれば、『蜂蜜酒(はちみつしゅ、ミード)は』『国によって呼称が異なるが、 に酒の成分であるアルコールになることから、発祥は人類がホップやブドウに出会う前の 「混ぜる」という基礎的な料理行為から作られたミードは「飲み物」の先祖と見ることが [やぶちゃん注:「蜜酒」蜂蜜を原料とする醸造酒。英語「mead」。 ウィキの ・レヴィ=ストロースは蜂蜜酒の発明を、「自然から文化への移行であり、 人々の絆を強めるといった霊的交流や宗教、儀礼行為へとつながっていった。クロ 蜂蜜酒の生産がこの頃に拡大していたと推測される。しかし、ビールやワインなどの 加熱も不要な最も原始的な発酵飲料である。製法が発展するに従い』、『湯や他の植 (英語:Bell-beaker culture)。 中米からブラジルにかけて点在している』。『日本でも生産されている』。『蜂 酔いを分かち合うという目的を与えた。酩酊による非日常感 紀元前二千六百年頃から紀元前千九百年頃までの後期 『新石器時代のビーカー文化』(鐘 状ビーカ 多くは印欧

時代が下ってビールとなっていった』。以下、「製法」があるが、略す。 た』。『蜂蜜酒に代わり』、『一般市民が飲むために穀物から醸造されるエールが開発され、 期のスラヴ人とゲルマン人の間で、ビールと並んで最も一般的な酒であった。当時はワイ 神話と強い結び付きがある。古代アイルランド・ケルト人は、 されている』。『また、古代ケルト文化の人々には蜂蜜酒は「不死の飲み物」とされ、 酒は貴族的な飲み物となった。一般市民には軍隊生活や祭礼の時に飲まれる程度だっ 六『世紀までは』、『蜂蜜酒と問題なく共存していた。 込めて蜂蜜酒の入った桶で溺死させて、 の地図を参照されたい)『の遺跡では、蜂蜜酒を飲むための土器と考えられる遺物が発見 新石器時代から初期青銅器時代にかけて広がっていた、「鐘状ビーカー」と呼ばれる独特 ンやビールに蜂蜜を入れて飲むことが多く、ビールにホップが入れられるようになる』十 の大型広口杯の分布域。 人口が増えるにつれ』、『蜂蜜酒が行き渡らなくなり、中世のイングランド人にとって蜂密 「家に飼える [やぶちゃん注:ママ。] 蜜蜂に訃を傳へて、樂上に報ぜしむる風あり 「文化」とつくが、単一の文化圏ではない。分布域は当該ウィキ 祖先のもとに送った』という。『古代から中世初 イギリスにおいても同様であるが、 先王が失脚すると、敬意を その

の右中央にある「TELLING THE BEES」に、 (Notes and Queries. May 30, 1908, p. 433) 」「Internet archive」の当該書のこちらの右ページ

*

told if a death occurs in a family. What follows seems to be new, and was given to me recently in wiltshire, where the bees are still

- 1. Bees foretell, by their behaviour, weather-changes sooner than these can be discerned by their
- 2. They foretell death when a swarm alights on dead wood
- 3. Or good luck, by alighting on living wood.
- born King. 4. They awake at midnight on Christmas Eve and hum loudly in their hives to salute the new-

*

の前書と、「2」及び「3」が該当する内容である。

Faiths and Folklore,1905, vol. i. p. 38.)」「Internet archive」の当該書のこちらの左ページの右 にある「BEES」の条の頭の部分に、 「英國には、蜜蜂故無くして巢を損るは、家主死す可き前兆と信ずる者多く(Hazlitt, ^

*

commonly all the bees die in their hives if the master or mistress of the house chance to die, except read: "Who would believe without superstition (it experience did not make it credible), that most removed but on a Good Friday. In "The Living Librarie, "translated by Jhon Molle, 1621, we but in things, corn for instance, to the value of the sun agreed upon. about 1790, that when a Devonian makes a purchase of bees, the payment is never made in money, hives, the owner of them will die soon after. A clergyman in Devonshire informed Mr. Brand, A vulgar prejudice prevails in many places of England that when bees remove or go away from their And the bees are never

蜜蜂の移動(分蜂)と人の死の呪的関連が書かれている。] way stained with superstition." [やぶちゃん注:一部の綴りを改めた。 the hives be presently removed into some other place. And yet I know this hath happened to folke no 以下、 略すが、

*

の内容がそれらしく読める。

像と電子化がある。こことここ。 Bees and Lucky DaysN. & Q., Oct. 10, 1908, P. 285.)」欧文「Wikisource」で、 「支那には、蜂の分る・日を吉日として、婚姻、造作始めし、又市を立る所あり(予 一部の表記を原画像で補正した。 当該論文の画

*

at 10 S. ix 433, col. 2):old entertained a belief in bees living in direct contact with the gods (cf. Mr. Gommes work quoted tan, completed in 1691 (Brit. Mus. 1533 1. e. 3, lib. iii. fol. 3b), it is manifest that some Chinese of BEES AND LUCKY DAYS.-- From the following passage in Wang Shi-Chins 'Chi-pei-yau-

which enables them to communicate freely with the Creator." swarm were either unlucky or void of import. So wonderful is the mystic instinct of these animals those days without exception marked dies albi; whereas all other days on which the bees did not hundred and odd. On his return home, he examined the calendar, and was astonished on finding and during this time he attentively recorded the days when bees swarmed, altogether numbering one conceal the fact. Once upon a time a trading stranger came and sojourned in the locality for a year, neighbours and servants go round the place with the news; indeed, the people never attempt to ceremonies of marriage and of beginning buildings. Thus, swarm in whose house the bees may, the put off till another occasion of bees swarming. On such a day also are celebrated ordinarily the all kinds is favourably transacted on it. Should some business chance to be unfinished in the day, it is family keeps. Whatever day the bees happen to swarm, is deemed unfailingly lucky, and business of calendar, but in its stead they observe punctually every morning and evening the hives which every "The inhabitants of certain mountains south of Yau-yüe are all in a lifelong ignorance of the

Kumagusu Minakata.

Tanabe, Kii, Japan.

*

機械翻訳でも述べている内容は概ね了解出来たものの(「albi」は遂に判らない)、**原拠の** 第二十三巻に、 前)であった。そこで「中國哲學書電子化計劃」で「同書」を「蜂」で検索した結果、その ット検索で「Wang Shizhen」の転写を見つけた)の随筆集「池北偶談」(*Chibei outan*:同 お世話になる、中国語に堪能な私の教え子のS君にメールをした結果、数分で解明してくれ 「Wang Shi-Chins 'Chi-pei-yau-tan,'」が中国語に冥い私には全く判らなかったため、何時も これは、 清朝初期の詩宗で別名を王漁洋と称した王士禛(一六三四年~一七一一年:ネ

*

謝皐父晞髮、 集有「粤山蜂分日記」云、 「甌粤之南某山、 其民老死不知歲曆、 惟戶養蜂四

星、則常日也。物性之靈、能通造化、 留一年、書蜂分之日。凡百有竒歸取曆驗之、皆、黃道紫微天月、德吉曜也。其不分者、非凶之分、日至於婚嫁興作、皆、候焉蜂移之家。若隣若僕無遠近、逓相報不敢隱有販者、至其地 時。旦暮悉候之蜂之分、也其日必吉、人家無大小貿易、皆、趣成之事。未及辨、 如此。」。 則

*

資料として示しておくだけである)。 部の漢字表記を変更した。前と同じく、やはり部分的にしか意味は判らぬ。後学者のために した)。 る)。因みに、ここに出る、「粤某山蜂分日記」なるものも、中文「維基文庫」の「晞髪集 とあるのを見出せた(一部の漢字表記を日本人にも判るように変更し、自然流で句読点を施 (四庫全書本)」(南宋の詩人謝翱の詩文集)に発見したので、以下にベタで示しておく(一 さても! これが、熊楠の原拠である(但し、私には意味の判らないところがあ

*

者不怨則爲廉為房以自居則爲智有蠆以自衞則爲勇脩是數德而又能知天時以協人事則夫貪賄無 生而有髭則爲異舉族附之不敢後則爲忠遭物害而去有相失者不肯附他族必徬徨噬囓自相枕籍以 里親戚置酒嬴老相與賀數向之獲是而吉者例指以爲盛事蜂移之家若僕若隣無遠無近逓相報俾皆 者置不問聽其所止而休焉率以蜂之多寡爲家之厚薄四時旦暮悉候於蜂故曆與甲子可無也蓋衙而 浮圖戶養蜂分地蒔花編竹若護蔬菓擘杉桐卷之或取雜木刳其中爲蜂房纔百之一每數日蜂輒有分 歐粤之南有某山焉跨羅浮挹九疑穴其寶而下空洞橫亘數千里與勾漏通山之陽其民至老死不知歲 謀亂行離次棄君事讎反覆變詐以取富貴利祿者身爲蠆尾而不衈雖其形則人也使其居深山中與不 知是日之吉不敢隠有販者至其地留一年書蜂分之日凡百有竒歸而詰曆驗之皆黃道紫微天月德活 至於婚嫁已納采而未迎興作已畢工而未落成皆候焉或父子兄弟分業而居則候其日時而幷用之隣 郡其人皆能言之蜂之分也其日必吉人家無大小貿易偶及蜂分則趣成之事未及辦則以待後之分日 知早晚出入而知寒暑四時之花卉不同而蜜亦異味是其候也至於有事而涓吉亦於蜂候焉濵是山之 曆唯以甲子紀日由穴之隂而南雖甲子亦不書山衆夭小鑿石竅繩鐵其上屋纍纍而下者若蒙髙者若 知甲子之民將必顚到五行以爲民害寧不爲茲物之愧哉 死則爲貞出則紛然先後奔走之不暇則爲勤歸則翕然集若赴期會而聴號令則爲整食蜜之餘以遺取 曜其星也其不分者非凶星則常日也余聞之始而疑中而信久而驚以愧不知兹蜂之爲何物也且其王

*

「石蜜木蜜」「和漢三才圖會卷第五十二 蟲部 蜜」(リンク先は私の電子化注)

*

木蜜は「樹の枝に懸けて之を作るは、色、青白。石蜜は「巖石に生ず。色、白くして膏のごとし。最も良と爲す。

*

漢三才圖會卷第五十二 とある。同書の記載は、ややあっさりしていて、やや不満足なので(但し、その前の「和 ので、電子化しようと思った(「学校法人中村学園図書館」公式サイト内にある宝永六 「大和本草」の巻十四の「陸蟲 蟲之下」の「蜂蜜」が、本邦の養蜂を語っていて面白い (一七○九)年版の貝原益軒「大和本草」の分割 PDF 版のこれの **蟲部 蜂」では蜜蜂を扱っているので読まれたい)、** コマ目からで)のだ 貝原益軒の

させて戴くこととした。原文は漢字カタカナ交じりで、訓点附き漢文であるが、 ば養蜂研究会のサイト「ハチドットネット」のこちらに電子化されているのを見出したの ひらがな交じりとし、漢文部は訓点に従って訓読した。但し、送り仮名等の一部は私が施 で、それを加工用に使用させて戴きながら、上記の「中村学園」版を視認し、正字で表記 が、これが、また、同条自体、かなり長 し、難訓と思われる箇所には推定で歴史的仮名遣で読みを振った。 ナのままで残した。句読点・記号等も追加し、改行も施した。 い。躊躇していたところ、 幸いにして、サ 益軒の振った読みはカ 総て漢字 一つく

*

「木蜜」あり、 「本草」[やぶちゃん注:明の李時珍の「本草綱目」。]を考ふるに、 「土蜜」あり、 人家に養ふ家蜜あり、 すべて、 四種なり。 「石蜜」 あり、

日本にも亦、此の四種あり。

「石蜜」は高山の岩石の間に之れを作す。 日本にも、 處々、之れ有り。 其の蜂、 常の蜜蜂に異り、 **黑色にして、** 虻に似

養ふも、 蜜」は木の空虚の内に房を作る者、多し。枝にあるは稀なり。 出入す。穴、大なれば、熊蜂、入りて、蜜蜂を喰ひ殺し、蜜を吸ひ取る。 「木蜜」は、 本、是れを取り來る。又、大木の空虚の内に房を作り、南方より小穴を開けて、は、陶弘景日はく、「樹枝にかけて、巢を作る」と。日本にも之れ有り。人家に 山にある「木

之れ、有り。 「土蜜」は山の崖など、 かはきたる土中に房を作る。是れ、「土蜜」は日本にも稀れに、

は、人を螫ず、人さはれば、さす。人家に養ふ者、此の三種は、同じ蜂なり。 常の蜂に似て、 小なり。 色、 微黃なり。 常に

伊勢・紀州・熊野・尾張・土佐、其の外、諸國より出づ。 土佐より出づるを好品とす。

蜂房の内、處々に 自 したゞり、たまるを、とり、用ゆ。是れを「眞蜜」とす。生蜜なの國より出でても、「眞蜜」を好しと爲す。 上品とす。藥に用ふべし。蜂房を煎じ出だして蜜とす。 是れは下品なり。 藥に用 \mathcal{O}

蜜の眞僞を試る法。鐡の火箸を、赤くやきて、蜜の中に入るゝに、たぎりて氣の出づるは蜜の眞僞を試る法。鐡の火箸を、赤くやきて、蜜の中に入るゝに、たぎりて氣の出づるは「果」である)も実は偽物の糖類を煎じ煮つめたものが多い」の意であろうか。] 蜜」あり、擇ぶべし。「黑蜜」は、黑砂糖に酒と水とを加へ、煮て、蜜と爲す。「白蜜」 煮熟せざる生蜜をもちひ、我が家にて煉熟すべし。 て売られているもの(「果」を法律用語の「天然果実」の意でとる。販売用の成果物の (原文『長崎ニテ蜜煎ノ果モ糖煎多シ』で読みが不審。「長崎にて「蜜を煎じた」と称し 擇び用ふべし。又、長崎にて、蜜煎の果も、糖煎多し。[やぶちゃん注:最後の部分白砂糖の煮汁なり。此れ、二品は用ふべからず。異邦・諸國より來るにも、眞僞あ 烟 出づるは僞なり。 是れ、 時珍が說なり。 藥肆に賣るに、「眞蜜」あり、「砂糖

して、入れ、重湯にて湯煎し、浮く沫を箆にて、すくひ去り、蜜を、少♪○蜜を煉る法。先づ、陶器に、蜜を、布にて、こして入れ、其の陶器を、 [やぶちゃん注:ここも原文不審。 『滴テ、』。 このカタカナの反復記号「丶」は、 蜜を、少し、 鍋に沸湯をわか 水に てょ

百五十グラム。]を得べし。此くのごとくずれば、年をへて、敗せず。 べし。百六十匁[やぶちゃん注:六百グラム。]を煉りて、百二十匁[やぶちゃん注:四 りではないかと私は判断する。]、珠をなして、散らざるを、 と爲し、壺に納め貯ふ

飽きて、鮓を食へば、暴死す。 葱・萵苣[やぶちゃん注:現代仮名遣「ちしゃ」。レタス。]と同食すべからず。蜜を食し #** 『『ちゅうじつ』。虫刺されのような皮膚疾患。』を生ず。小兒、尤も戒しむべし。生ん注:「ちゆうじつ」。虫刺されのような皮膚疾患。」を生ず。小兒、尤も戒しむべし。生命分な水分の悪質な気が身体に滞留し、熱を持つようになった状態。]と虫靨[やぶちゃ ○蜜を多く食ふべからず。溼熱[やぶちゃん注:「しつねつ」。「溼」は「濕」の異体字。

ウム科 Clostridiaceae クロストリジウム属クロストリジウム・ボツリヌムボツリヌス Firmicutes クロストリジウム綱 Clostridia クロストリジウム目 Clostridiales クロストリジ 力低下を引き起こす感染症で、生命を脅かすことがあります。フィルミクテス門 「やぶちゃん注:凄い言い方やねん!?! 但し、小児の摂取を警告しているのは正し 「乳児ボツリヌス症」を発症する危険性があるからである。 乳児ボツリヌス症は、 筋

脚・呼吸に関わる筋肉に伝播する。重症化して筋緊張が広範囲に消失、呼吸困難に 含んだ食べものを摂取すると、芽胞が腸内で活性型細菌に変化し、毒素を作り出してしま 時に酸素がない環境(動物の腸管等)で活性型細菌に戻る。乳児がボツリヌス菌の芽胞を 菌で、本種は芽胞を形成することで過酷な環境でも生き延びる能力を持っており、環境が る。発症原因も不明であるが、 死に至る場合もある(主に「MSD マニュアル家庭版」に拠った)。] の感染児では便秘を初症状とする。 ており、現在、医師は十二ヶ月未満の乳児に蜂蜜を与えないように推奨している。 よくなると、芽胞は活性型の細菌に戻る。ボツリヌス菌の芽胞は水分と栄養があって、 んだものを摂取した乳児に発生する。ボツリヌス菌は生存に酸素を必要としない嫌気性細 (菌) Clostridium botulinum の芽胞(細菌が不活性の休眠形態になった状態を言う)を含 その機序には不明な点も多いが、この症状は生後六ヶ月未満の乳児に最も多く発生す 一部ではハチミツ摂取と関連していることが明らかになっ 次に筋力低下が起こり、顔面・頭部に始まり、 殆んど

盡さず。取盡せば、うへ、「やぶちゃん注:ママ。」死す。 蜜蜂は、甚だ風寒を畏る。冬の初めより、出でず、房の中に蟄居す。其の間は、曾て釀し蜜蜂は、甚だ風寒をます。冬の初めより、出でず、房の中に蟄居す。其の間は、曾て釀し て貯へ置きたる蜜を粮とし、食ふ。 いは、花の汁を含み來り、 房中に、ぬり付けて、醸て蜜となす。酒を醸すがごとし。 蜜は蜂の粮なり。 故に蜜を取るに、粮を殘して、 凡そ

て諸花を醸して、乃ち、和熟を得。飴を作るに、 「藥性解」に云はく、「蜂蜜、良に百花の精有り、 神奇を生ずるなり」。 以つて、之れを釀す」。 無毒の花を采つて醸すに大便を以つてして蜜と成す。 陶弘景曰く、「凡そ、蜂、 且つ、人の溺[やぶちゃん注:小便。蘗を須ゆるに似たるなり」。李中梓が 蜜を作る、皆、 [やぶちゃん注:小便。] 人の小便を須ゆ。以つ

皮に苦味がある。過去に木曽でキハダ餅を作ったという事実がある。現在は長野県大町市 [やぶちゃん注:「蘗」ムクロジ目ミカン科キハダ属キハダ Phellodendron amurense 。 ダ飴本舗」のみが製造している。「李中梓」明代の著名な医師。 「藥性解」 は彼

の書いた著名な薬学書・処方書で正式には「雷公炮製藥性解」という。]

況や、 の言や、吾、蜜蜂の爲に、寃を訴ふるのみ。つて實と爲す。孟子曰はく、「盡く、書を信 むを知らずして、 漫 る說、傳へ誤る者、多し。一人、虛を傳へれば、萬人、傳へて、以々々、ひが言なり。信ずべからず。古人の博洽[やぶちゃん注:博識。]と雖も、 自 ら試でです ひが言なり。信ずべからず。古人の博洽。 蜂の大便、人の小便を用ゆと云ふ事、返す百花の清潔なる精液を用ひて作り出せるなり。蜂の大便、人の小便を用ゆと云ふ事、返す や。此れ、理なし。又、人の小便は、けがらはしく、鹽あり、これを加ふべき理、なしの糞に非ず。蜂の蜜を釀スすは、粮にせんためなり。何ぞ、我が糞を粮として食すべき あつまる。 便を用ると云へる説、甚だ非なり。蜂、 ○蜜蜂を家に久しく養ひて、能く知る者、 股の間に花を挾み來りて、房に、ぬり付けて、釀し成せるなり。蜂の糞は、皆、下に 岩蜜・木蜜・土蜜は山中無人の處にあり、 時々、是れを取りて、 すつ。すてざれば、 書を信ぜば、書無きに如かず。」。 毎日、巢の内より多く出でて、其の口及び翅の日、數人の説を委しく聞きしに、蜂の大便、人の小 數人の說を委しく聞きしに、 人の小便を取るべからず。凡そ、 虫、生じて、害あり。是れ、蜜は蜂 誠なるかな、 蜜は、 なし。 自ら試

べからず。 釜に入れて煮て、蠟を取り、其のあとを煎じつめて、 分の二を取りて、大器の上に、竹を、わたしならべ、其の上に、 と爲すべし。然れども、多く得難し。故に蜂房をわりて、三分の一は殘して粮と爲し、三 注:「ヲ」のみが右上に振られてあるのである。〕たまれる蜜をとる。是れ、 て天日に曝せば、蜜、煖氣にとけて、器中に滴りをつるを取る。是れ、中品なり。蜂房を 蜜を煎じて、面に浮ぶ査なり。黄蠟と故に生蜜を上品とし、熟蜜を下品とす。 蜜とす。 是れ、 わり取りたる蜂房を置き 下品なり。 上品なり。薬 [やぶちゃん 薬ニ入る

○蜜蠟は、 黄蠟と云ふ。

ほど益軒に全共感出来た記載は、これが初めてである。 私は「大和本草」の水族の部の全電子化注を終わっているが、 これほど面白く、 また、 これ

第二百四十に、 「其名は美知といふも實は漢音也」源順の 「和名類聚抄」の巻十九「蟲豸部第三十一」

ゆ」。】黒蜂は竹木に在りて孔を爲す。又、室に有る者や、「本草」に云はく、 【蜚零附】方言注に云はく、「蜜蜂」【は和名「美知」。「波知蜜」は「飮食の部に見 「蜚零」【今、案ずるに「蜚」は、古く「飛」の字なり。】。 「蜜蜂子」。

Polistinae の種群を指すようである。 ない。膜翅(ハチ)目細腰(ハチ)亜目スズメバチ上科スズメバチ科アシナガとある。この附帯する「蜚零」というのは、少なくとも現代中国語ではミツバ チ類を指さ バ チ亜科

紀」巻第二十四の皇極天皇二(六四三)年の条の末尾に、 「推古帝の朝、百濟の王子豐璋、 蜜蜂を三輪山に放ち飼はんとせしも蕃殖せず」「日本書

百濟の太子餘豐、 密蜂の房四枚を以つて、 三輪山 に放ち養ふ。 而れども、 終に蕃息

スは、 章」本邦に滞在中に百済本国が唐・新羅連合軍に滅ぼされたため、百済を復興すべく帰国 位:六四一年~六六〇年)の王子。「日本書紀」での表記は「餘豐璋」「餘豊」「豐璋」「豐 したが、復興は果たせなかった(詳しくは彼のウィキを参照されたい)。このシークエン 亡国のイメージとともに、私には何か哀しいものとして映像化される。 扶余豊璋(ふよ ほうしょう 生没年不詳)は百済最後の王であった義慈王

七)年東陽堂刊。国立国会図書館デジタルコレクションの画像で当該箇所が読める(左ペ 「藤岡・平出二氏日本風俗史上編六三頁」藤岡作太郎・平出鏗二郎共著。明三〇(一八九 -ジ三行目)。 しかし、この引用指示も熊楠らしくない。「日本書紀」と堂々と言えばよ

使われていたようです。(と言ってしまってもよいでしょうか?)』とあり、『平安時代に 寺に使を遺わし、毎寺雑薬』二『櫃と、蜜缶』一『口とを施すとあり、貴重な薬としても 極二(六四三)年の『くだりに出てくる「百済の太子余豊、蜜蜂の房四枚をもって三輪山 う』。以下ダブるが、『文献上で「蜜蜂」の語が初めて用いられたのは「日本書紀」の』皇 蜂」という文字も言葉もなく、これを蝿の群れと呼ぶほか表現の方法がなかったのでしょ 現れたのは「日本書紀」の』推古三五(六二七)年の『くだりに「夏五月、 す』とあるからである。因みに以下、『源氏物語の「鈴虫」の巻の冒頭には、「荷葉の方を みつの貯まった巣のことですから、はちみつだけでなく、蜜巣まで献上されていたようで なると、国内でも蜜を献上していた記録が見られるようになります』。「**延喜式」(九〇五年** るほど、貴重な物であったことがうかがえます』。天平宝字四(七六○)年には、五『大 三斤」と『はちみつが献上されていますが、蜜』三『斤が豹の皮』六『張と同格に扱われ る養蜂のはじめだというのが通説になっています。』『奈良時代には、はちみつは三韓など れり、その凝り累なること十丈ばかり、虚に浮かびて以て信濃坂を越ゆ。 から「文王致聖武天皇書」に添えて』「大蟲皮、羆皮各七張、豹皮六張、人參三十斤、蜜 から貢物として献上されています。たとえば』、天平一一(七三九)年に『対岸の渤海国 が奈良の三輪山で養蜂を試みたけれど、失敗に終わったという記録で、これが日本におけ に放ち、養う。しかれどもついに蕃息(うまわ)らず」 という記載です。百済人の余豊 蜂協会公式サイトの「日本の養蜂の歴史」に、『日本ではじめてミツバチのことが史上に にかけての間では、 一升五合、備中國一升、備後國二升」と『あり、 〜九二七年)には、「蜜、甲斐國一升、相模國一升、信濃國一升、能登國一升五合、越後國 「延喜式、 すなわち東のかた上野国に至て散りぬ」との記載があります。この頃は一般には「蜜 では庶民の間でミツバチが飼われていた様子が描かれています。 ていたことがわかります。平安時代の終わりごろには、「今鏡」 諸州の貢物を列せるに、蜜蜂を擧げずと記憶す」これは熊楠の勘違い。 伊勢國蜂房一斤十二兩」を『献上したと記載されています。蜂房とは、はち 蜜をかくしほろろげて、たき匂はしたる」とあり、 上に養蜂関係の記載はみられません』とあって、 別の箇所には』「攝津國蜂房(蜜の貯まっ 当時、はちみつで香 では貴族が、「今昔 鎌倉時代から中世 当時の朝廷の連 鳴く音雷の如 蝿有り、聚集 日本養

中は、ガッツリ、蜂蜜を民草から奪取し、舐め食っとるぜよ!

S. モース(石川欣一訳) 第十四章 函館及び東京への帰還 説もしている。 Day by Day"で、現在の岩手県二戸市附近を通った際に見かけた「漆採り」の図を載せ、解ス(Edward Sylvester Morse)一八三八年~一九二五年)が一九一七年に出版した"Japan 外国人」として来日し、東京大学で教え、進化論を本邦に移植した一方、 たと考えねばならない。また、リンクの一ページ目にも載っているが、明治期に「お雇い あり、次のページでは、貴重な漆蠟燭と普通の蠟燭の灯した光の違いが画像で見られる。 料のことで、力士が髷(まげ)を結う時などに使われるものです』。『漆の樹液は、 実は「蝋分」(ろうぶん)という成分を含んでいます。江戸時代から昭和』三十『年代ま と言っているが、熊楠の謂いが正しいとすれば、「漆蠟」は既に戦国時代に一般化してい 江戸の夜を照らしたのは、暖かなオレンジ色であった。なお、引用では『江戸時代から』 を美しく、また丈夫なものにしてくれました。そして、漆の実は、電気のない時代に、 たい。解説部と私の附した注を引いておく。 人々の暮らしに火を灯し、また、人々の装(よそお)いを美しく整えてくれたのです』と の原料として用いられてきました』。『鬢付油は日本髪を結う時に髪型を整えるための整髪 燭(ろうそく)」に、『漆の実もまた、昔の人々の生活を支える大切なものでした』。『漆の て蠟代りの品を採れども、 レンツェで転載(増刷?)された日本に就いての短い要約」か。岩手県浄法寺町発信のサ 「予が大英博物館にて閱せしBreve Ragguaglio del Giapone ristampato in Firenze,1585(天正十 この蝋分を絞り出して、蝋燭(ろうそく)や鬢付油(びんつけあぶら)などの化粧品 本邦各地を精力的に探訪したアメリカ人動物学者エドワード・シルヴェスター・モー 「うるしとわたしたちのくらし」の「漆の木 九州の諸族が羅馬に派遣せる使節より、聞く所を板行せる也)に、 蜜も蜜蠟も無し、其代りに一種の木あり、好季節を以て之を傷け、出る汁を蒸溜し 私は既に同書訳を総て電子化注している。その「日本その日その日 蜜蠟程稠厚ならずと有るは、漆の事を言るにや」書名は「フィ **-429** はこちら いろいろな使い方 漆の実で作った蝋 5 二戸辺り」を見られ 大森貝塚を発見 木の器

*

得する、植物蠟をつくりつつあった。この蠟で日本人は蠟燭をつくり、また弾薬筒製造の 多くの産業が、ここでは家庭で行われる。我々が工場で大規模に行うことを、彼等は住宅 働き、みんな貧乏しているように見えるが、窮民はいない。我国では、大工場で行われる 木の槌を叩く大きな音が私の注意を引いた。この家の人人は、 る迄が行う。 内でやるので、村を通りぬける人は、紡績、機織、植物蠟の製造、その他の多くが行われ ているのを見る。これ等は家族の全員、赤坊時代を過ぎた子供から、盲の老翁、考婆に至 いは見受けられたが、 た。これはこの国民が如何に一般的に勤勉であるかを、示している。 間通過した村は、 ~ 何トンと輸出する。 私は京都の陶器業者に、殊にこの点を気づいた。 他の人々は、いずれも田畑で働くか、あるいは家の中で忙いつでも無人の境の観があった。少数の老衰した男女や、 昨年国 へ帰って いた時、 私は あるいは家の中で忙しくして ぬるでの一種の種子から取 コネテイカット州 一軒の家の前を通った時 人々は一人残らず 小さな子 ブリッジ

れ、この袋を巨大な材木にある四角い穴の中に置く。次に袋の両側に 楔 を入れ、二人の男子を集め、反鎚で粉末にし、それを 竈 に入れて熱し、竹の小割板でつくった丈夫な袋に入 ると話した。ここ、 は穴の下の桶に流れ込むこと、図 429 に示す如くである。 が柄の長い槌を力まかせに振って楔を打ち込んで、袋から液体蠟をしぼり出す。 トの弾薬筒工場を訪 何百万という弾薬筒をつくっているが、その全部に日本産の植物蠟を塗 北日本でも、同国の他の地方と同じように、この蠟をつくる。先ず種 れた所が、工場長のホップス氏が、同工場ではロシア、トルコ両 すると蠟

蝋と性質のよく似た木蠟であるが、 県島原市にわずかに残るのみである。木蝋の主成分はワックス・エステルではなく、化学 衰退した。二十一世紀初頭の現在においては『海外で人気が復活しているが、日本国内で 搾する玉締め法が、近代工業的には溶剤抽出法が用いられる。日本では主に島原半島など 伝統的には蒸篭で蒸して加熱した果実を大きな鉄球とこれがはまり込む鉄製容器の間で圧 るが、果肉と種子を分離せずに抽出したものでは種子に含まれるものとの混合物となる。 Toxicodendron succedaneum の果実から作られる蠟で、『主として果肉に含まれるものであ 蠟はハゼノキと近縁なウルシ科ウルシ Toxicodendron vernicifluum の果実から採取するハゼ 的には中性脂肪である』。主成分はパルミチン酸のトリグリセリドである。一方のウルシ の生産量は減少の一途で、特に良質の製品が得られる玉締め法を行っている生産者は長崎 では"Japan wax"と呼ばれ、明治・大正時代には有力な輸出品であった』が本邦での生産は の九州北部や四国で生産されている。和蝋燭や木製品のつや出しに用いられる。日本以外 のと言える。 ていない』。主成分はハゼ蝋と同じ、とある。この図 429 に相当する装置をネット上で探 があった。ウィキの「蝋」によれば、ハゼ蠟はムクロジ目ウルシ科ウルシ属ハゼノキ したが見当たらない。 [やぶちゃん注:「植物蠟」木蠟(生蠟とも呼ぶ)は当時は主にハゼ蠟で、他にウルシ蠟 モースのスケッチはもはや失われた蠟造りの実際を伝える貴重なも ハゼ蠟に押され、 『現在の日本ではほとんど生産され

実と本邦産のそれが、明治の初めから、多量に、殺人兵器の必要原料として、多量に輸出 され続けていたという事実を私は初めて知った。 「弾薬筒」原文"the cartridge"。明らかに薬莢であるが、ここでモースが詳述するような事 ш

*

導入状況は国によって異なり、 の条に拠った)。 日とすることによって使用が開始されている(ここはウィキの ユリウス暦一五八二年十月四日木曜日の翌日を、グレゴリオ暦一五八二年十月十五日金曜 リス・ロシア・ギリシャ等)では後れた。グレゴリオ暦の実施が最も早かった国々では、 は早く、プロテスタント諸国(ドイツ・オランダ・北欧等)や独自の国教を持つ国(イギ なお、この天正十三年の三年前の一五八二年に、 ック教会の主導でユリウス暦からグレゴリオ暦へ改暦されている。但し、グレ カトリック諸国(イタリア・スペイン・ポーランド等)で 日 ロッパで用いられる西暦 「天正」の「西暦の改暦」 ゴリオ暦の

しやうき(ひえさんのうりしょうき)」と読む。 「日吉山王利生記卷三に蜂は山王の使者と見え」「日吉山王利生記」は「ひえさんのうり 鎌倉後期の成立とされる。著者は未詳。

クションの「續群書類從」(写本)のここで現認出来る(左頁後ろから三行目)。 近江坂本に鎮座する山王権現を廻る霊験譚を集めた神道書。国立国会図書館デジタルコレ

 $\ddot{\overline{}}$ 弘長二(一二六二)年に出家し、かの明恵に帰依し、智眼と号した)の通称ともされる なり 前・中期に成立した教訓説話集。写本の一つである妙覚寺本奥書によって、六波羅二﨟 ず」「十訓抄」は私は「じつきんせう(じっきんしょう)」と読むことにしている。鎌倉 を亡ぼしければ、死したる蜂の跡弔はんとて、寺を建たる話有れども、特に蜜蜂とは記さ 「十訓抄一に、余五太夫、 (ろくはらにろう) 左衛門入道とするのが通説で、これは鎌倉幕府御家人湯浅宗業 (むね 年の序がある。これは「柴田宵曲 續妖異博物館 文章博士・参議兼勘解由長官で有職故実に通じた)とする説もある。 好きな話である。リンク先は、 未読の方は、 一方で公卿菅原為長(保元三(一一五八)年~寛元四(一二四六)年:鎌倉初期の学 建久六(一一九五)年~?:紀伊保田荘の地頭で、在京して六波羅探題に仕えた。 是非、どうぞ。」 蜂が蜘蛛の巢に掛かれるを救ひし返酬に、蜂群來て助勢し、 蜂譚(漢籍も一つ含む)を判りやすく解説しているの 蜂」の注で既に電子化してある。 建長四(一二五

舞於此原、 倭漢三才圖會卷六八云く、立山有地獄道追分地藏堂、每歲七月十五 呼日生靈市、 此蝶は生靈の化する所と云義にや。 日夜、 胡蝶數

間も問わずー 姫君」の虫女カルチャー以前に、 接歌った歌がない。即ち、古えに於いては、蝶はなんらかの不吉なシンボルとして認識され 井彰氏の「蝶の民俗学」によれば(私の長い愛読書の一冊である)、「万葉集」には蝶を直 た如く、意外の感を持たれるかも知れないが、 ある。 沼に落ちて死に、チョウに化身して沼に住み着き、現在に至るまで曇った日や月の夜に飛 る』。]『奥州白石では、チョウが大好きだった女性が死に、遺体から虫が湧いて無数のチ 年の内に家族が死ぬ」「チョウが仏壇や部屋に現れるのは死の前兆」という言い伝えもあ 夜ふけの道で無数の白い蝶が雪のように舞い、息が詰まるほどに人にまとわりつき、これ 照)。 『秋田県山本郡ではチョウの柄の服を好む者は短命だという』。 『高知県の伝説では、 棄・風葬・埋葬するべき触穢の空間 のとして一般に認知されていたわけでは実は、ない。例えば、一九七八年築地書館刊の今 び上がって人を脅かすという。そのことからこの沼を備中沼、または別蝶沼ともいう』と ウを仏の使いという』。『チョウを死霊の化身とみなす地方もあり、 栃木県宇都宮市で、 る「レイッピャー」が『そのまま〈魂〉という意味で用いられる場合もある』。『日本でも うために蝶が群がるというシークエンスもなかったとは言えない。 に白く空を浮遊する対象物は容易に死者の霊魂を想起させたと思われる。遺体の体液を吸 対的に緑の多い都会の辺縁部であって、そこは古くはイコール-ていた可能性が極めて高いということである。 ョウと化したという話が伝わる。また』、『秋田県上総川の上流で、 ではこれを横死した人間の亡霊と伝えている』。『「春に最初に白いチョウを見ると、その に遭うと』、『病気を患って死ぬといわれる怪異があり、同県香美郡富家村(現・香南市) ではチョウは魂や不死の象徴とされる』。『ビルマ語に至っては 「生霊の市」といって、毎年』七月十五日の『夜に多数のチョウが飛ぶという』(後注参 や霊に関連する観念が見られる。キリスト教ではチョウは復活の象徴とされ、ギリシャ 私は何度も語っているのだが、「和漢三才圖會卷第五十二 蟲部 蝶」の注で示し ーこそ、 :ウィキの「チョウ」の「伝承」の項を引く。 盆時期の黒いチョウには仏が乗っているといい、千葉県でも夜のチョ 蝶や蛾は― 死後の世界や霊界とアクセスする回路の虚空を一 -実は跳梁していたのではなかったか? ーでありー 蝶が多く棲息するのは、市中ではなく、 実は古来、蝶は必ずしも、美しく愛でるも ―死と生の境界― 『世界各地にチョ 〈チョウ〉を表す語』であ かつて備中という侍が 立山の追分地蔵堂で 清少納言や「虫愛ずる 死んだ者の亡骸を遺 一であったのだ。そこ と私は思うので

節。但し、非常に長いので、当該部を含む「室堂」パート 文はカットして、 「倭漢三才圖會卷六八云く、 〕は私が推定で附したもの。歴史的仮名遣の誤りはママ。 訓点に従って私が一部(記号を含む)を補って訓読したもののみに示 ……」地誌部の「越中」の部の「立山權現」の解説中の一 だけを原本より電子化する。

*

【此の地 より絶頂に至る。 凡そ一里に八町。】 左に、 Щ 有り、 「三寳 崩 づ

爲す。右に根尾の社、有り、又、「天狗の嶽」有り。其の峯に龍神の社、有り、是れ、乃金剛童子の爲め、逐はれて、牙、拔け、口、噤りて、死す。其の牙、今に在りて、寶物とを殺し、人を害し、遂に善自善變じて鬼神と成り、尖れる牙を生じ、此に隱る。別山のく。昔、飛驒の小萱鄉に北山石藏といふ者有り。性、貪欲・猛惡にして、 毎 に物の命く。昔、飛驒の 寓る。【余月は、人、住まず、參詣の人も亦、無し。】。室堂 陀・聖觀音・地藏の三體、有り。 【四間に五間、三棟。】阿彌

*

この「精霊市」が語られており、心霊スポットとして立山の室堂及び地獄ル・マップ・データ航空写真拡大ではこの中央。私の「諸國里人談卷之三 くから知られていた現世と霊界が同時に存在する稀有の場所であったのである。] 附近のグー ト・ビュー)最古の山小屋とされる「室堂」の南に建つ)に安置されてある。グーグ グル・マップ・データ航空写真をリンクさせておく。ここにある建物(ストリ 心霊スポットとして立山の室堂及び地獄谷はかなり古 立山」にもこ

麒麟貝、「コバンウヲ」等を懸て、邪鬼を禦ぐことあり。 土人怪其形狀、 金毘羅を信ずる者、蟹を食はず、其神使は蟹也と云、本草綱目に筆談云、 收乾者懸門上辟瘧、 不但人不識、 鬼亦不識也、 紀州の人家戶口に平家

め、英語でもドイツ語でも癌のことを、カニを意味する言葉でよぶようになったというわ とは事実のようで』あると記す。『これが、ラテン語でひろくヨーロッパに伝わったた か』は『よくわか』らないものの、『ヒポクラテスが最初に「癌とカニ」を関連させたこ たカニのようだったのか、進行した乳癌に侵された乳房がカニの甲羅のように見えたから なったという説明も多くあ』るとあって、『切り刻んだ乳癌の断面の様子が手足を伸ばし を起こすため、これがちょうどカニの甲羅のように見えるので「カニ」と言われるように をしている』という。これは『癌の部分が周りの組織に浸潤している様子が、手足を伸ば 紀元前の古代ギリシアでは、すでに乳癌の外科的治療が行われていた』とされ、『癌の部 元前三七五年頃)『だと言われて』おり、 癌をカニにたとえたのは、古代ギリシアの医師、ヒポクラテス』(紀元前四六○年頃~紀 持つことを考慮したものと思われる。「細胞検査士会」公式サイト内のこちらに、『最初に のである。 けで』あるとある。こうした嫌悪状況では、凡そ神使になり得ないのは容易に想像される 分を切り取ったあと、そこをたいまつで焼くという、荒っぽい』外科手術を施していたら したカニのように見えた』ものかとも思われ、実際、『進行した乳癌は、皮膚に引き攣れ り刻み、そのスケッチを残していて、そこに「カニのような(カルキノス)」という記述 しい。『当時の科学の最先端を走っていたヒポクラテスは、そうやって取った癌の塊を切 「Krebs」が「大きな蟹」の意に由来し、神使というよりも、醜い病原のニュアンスを強く [やぶちゃん注:熊楠が西洋の例を引かないのは、癌の英語「Cancer」、ドイツ語 特に『乳癌は体の表面から判る病気のためか、

地に建てられ、金毘羅権現は祀られていた』。また、長寛元(一一六三)年のこと、 乗りから信仰され、一般に大きな港を見下ろす山の上で金毘羅宮、 蛇型とされる。クンビーラ(マカラ)はガンジス川を司る女神ガンガーのヴァーハナ(乗 た』。『クンビーラ(マカラ)は元来、ガンジス川に棲む鰐を神格化した水神で、 院』『の縁起によれば、大宝年間に修験道の役小角(神変大菩薩)が象頭山に登った際に その神仏分離以前は讃岐国象頭山松尾寺金光院(現在の香川県琴平町の金刀比羅宮)を総 観音、十一面観音など諸説ある。祭神は、天竺からの飛翔仏である』から、『日本の神々 由来との伝承から、これが象頭山金毘羅大権現になったとされ、不動明王を本地仏とし 天竺毘比羅霊鷲山に住する護法善神金毘羅(クンビーラ)の神験に遭ったのが』、『開山の 本宮とする日本全国の金毘羅宮および金毘羅権現社で祀られていた』。『象頭山松尾寺普門 に『鎮座する山岳信仰と修験道が融合した神仏習合の神であり、本地仏は不動明王、千手 り物)でもあることから、 「金毘羅」ウィキの「金毘羅権現」から引く。金毘羅権現は現在の香川県琴平町の象頭山で金毘羅」 「保元の乱」で讃岐に配流されたのは保元元(一一五六)年七月二十三日) 明治初年の神仏分離・廃仏毀釈が行われた以降は、大物主とされた。 金毘羅権現は海上交通の守り神として信仰されてきた。 金毘羅権現社が全国各 日本では

羅大権現に豊漁・航海安全を願って奉納されたものと思われる。奉納者名に父とあること 狗、使いと見立てられる犬は出るが、蟹は出ない。サイト「神使の館」(本全篇に興味の 亀街道、多度津街道、高松街道、阿波街道、伊予・土佐街道をはじめとする金毘羅街道が 羅参りの際には、天狗の面を背負う習俗も生まれた』。『今は讃岐三天狗の一狗で金剛坊と 起き』、『周りの者共は卒倒したという。なお、奥社で今でも祀られているとも云われてい 松尾寺本殿に合祀されたとされる』。『現在も金刀比羅宮本殿の相殿に崇徳天皇は祀られて けて代参した者には依頼者と同様にご利益があると信じられた』とある。眷族としての天 参の習俗もあった。陸上では犬、水上では流し樽(舟)に賽銭を入れて金毘羅権現に祈願 整備された』。『江戸時代の庶民にとって金毘羅参りの旅費は経済的負担が大きかったの 現を深く信仰し、全国の寄港地で金毘羅信仰を広めることに貢献した』。『江戸時代後期に る』。『江戸時代になると、天狗の面を背負った白装束の金毘羅道者(行人)が全国を巡っ もに浦の谷において焼却されたとされるが、その時、宥盛像を火中に投じると』、『暴風が 盛像も非公開だったので、その後、法衣長頭襟姿の宥盛像が金毘羅権現そのものと思われ されたかは不明だが、 野町にある金毘羅神社(グーグル・マップ・データ)に奉納された蟹の石像が見られる ある方は必見!)の する木札や幟とともに放ち、誰か見ず知らずの者に代参を依頼するもので、これらをみつ た講員が積立金を使って讃岐国象頭山金毘羅大権現に各金毘羅講の代表として参詣し、海 は、象頭山金毘羅大権現に詣でる金毘羅参りが盛んとなった。これに伴って四国には、丸 呼ばれる(他は八栗寺の中将坊と白峯寺の相模坊)』。『塩飽』(しわく)『水軍は金毘羅権 て金毘羅信仰を普及した』。『また、全国各地から讃岐国象頭山金毘羅大権現を詣でる金毘 るようになった。その宥盛像は廃仏毀釈で明治』五(一八七二)『年に他の仏像仏具とと 体を守り抜く」と『誓って天狗になったとの伝説も生まれた』。『本殿の神体は秘仏で、宥 六一三)年没)は、 興した金光院第』四『代院主で修験者でもあった金剛坊宥盛』(ゆうせい 慶長一八(一 には「当山ノ天狗ヲ金比羅坊ト名ヅク」と記された。また、戦国時代末に金毘羅信仰を中 上交通安全などを祈願して帰郷した』。『金毘羅講以外にも、こんぴら狗や流し樽などの代 『象頭山松尾寺境内の古籠所に参籠し、その附近の御所之尾を行宮』とした『と云われる 『カニは奉納石像で』あるが、『神使とは異なる』と明言されておられ、『なぜカニが奉納 (先の地図データのサイド・パネルでも二つ (こことここ) 見られる)。但し、筆者は 金毘羅講という宗教的な互助組織(講)を結成して講金を積み立て、 が確認出来た。部分だけ引くと(コンマは読点に代え、アラビア数字は漢数字にし 息子を漁か海で亡くしたか…』…と述べられ、蟹像は幅が九十センチメートル前後 『修験道が盛んになると』、『金毘羅権現の眷属は天狗とされた。『和漢三才図会』 という伝えは 御霊信仰の影響で、『崩御の翌年の』永万元(一一六五)年から『崇徳上皇も 平凡社「世界大百科事典」の「金毘羅信仰」の解説に蟹を使者とする 慶長十一年に、『自らの像を作って本殿脇に祀り、亡くなる直前』「神 「蟹〜カニ 魚介類に関する禁忌がある。カニを金毘羅神の使者として、 カニは干潟を代表する生物なので、漁業、航海の守護神である金毘 61 カニを水の神の使者とする信仰の変化したものであるが 金毘羅神社(金毘羅大権現)の蟹」で、 交代で選出され 長崎県諌早市小

現でも、カニを食べたあと五十日は参詣してはならないという厳しい規定があった。権現 には、ほかにも、川魚は三十五日、アミは三十日といった、一般の神社にはない禁忌があ 金毘羅神の特異性を示している』とあった。

明」の中に、 「本草綱目に筆談云、……」巻四十五の「介之一」の「蟹」の項の (非常に長い)、

沈括筆談云、 關中無蟹。土人怪其形狀、 收乾者懸門上辟瘧。不但人不識鬼亦不識也。

沈括が「筆談」に云はく、「關中、蟹、無し。土人、其の形狀を怪しみて、乾く者を收め 門上に懸け、瘧を辟く。 但だ人、識らざるも、 鬼も亦、識らざるなり。」と。

談」のことである。 者で、「筆談」とは彼の随筆集で中国科学技術史に於いて重要な文献とされる「夢溪筆 のが判らない点が遺憾である。沈括(一○三○年~一○九四年)は北宋中期の政治家・学とあるのを言っているが、「沈栝」という著者名を落しているので、それが、書名である その巻二十五の「雜志二」に、

家有病虐者、 關中無螃蟹。 元豐中、餘在陝西、聞秦州人家收得一乾蟹。土人怖其形狀、 則借去掛門戶上、 往往遂差。不但人不識、鬼亦不識也。

蟹(ヘイケガニ)』の私の注を参照されたい。 亜門 Chelicerata に属する節口綱カブトガニ目カブトガニ科カブトガニ亜科カブトガニ属 Tachypleus)のような、異形のそれらの、 ビ)亜目短尾(カニ)下目 Brachyura)とは全く無縁な、クモやサソリなどが含まれる鋏角 しい鬼面や威しの武具に似ることからの、呪的アイテムとして、恐らく中国でも古くから用 には節足動物門甲殻亜門軟甲(エビ)綱真軟甲亜綱ホンエビ上目十脚(エビ)目抱卵(エ いられていたことを示す記録であると思われる。詳しくは私の『毛利梅園「梅園介譜」 「關中」「秦州」とあるから、内陸に於いては知られていない海産の蟹であることが判る (「螃蟹」は広義のカニ類を指す)。則ち、ヘイケガニやカブトガニ(彼らはカニ類(狭義 内臓が背甲の外骨格に表象する凹凸が、

麟」により似るのは後者である)。「コバンウヲ」顎口上綱硬骨魚綱条鰭亜綱新鰭区棘鰭上 chiragra 或いはサソリガイ属クモガイ Lambis lambis であろうと思う(形状上から「麒 sexdentata Heikeopsis japonica 或いはその近縁種(サメハダヘイケガニ Paradorippe granulata ・キメ 家蟹」は節足動物門甲殻亜門軟甲綱十脚目短尾下目へイケガニ科へイケガニ属へイケガニ 目スズキ系スズキ目スズキ亜目コバンザメ科コバンザメ属コバンザメ Echeneis naucrates ンガニ Dorippe sinica ・カクヘイケガニ Ethusa quadrata ・マルミヘイケガニ Ethusa ーから、腹足綱前鰓亜綱盤足目ソデボラ超科ソデボラ科サソリガイ属スイジガイ Lambis (コバンイタダキの名でも知られるが、 『紀州の人家戸口に平家蟹、麒麟貝、「コバンウヲ」等を懸て、邪鬼を禦ぐことあり』「平 ・イズへイケガニ Ethusa izuensis)を指し、「麒麟貝」は思うに形状のミミクリ これは和名異名である)。孰れも、 体型

ちゃん注:ママ。〕捨るに、六七人にて持行けり、翌年、 義通封を奪はれし前に、其小姓早朝登城の途中、大手門内の池より、大石を引出せる如く from Combat of Shellfish, Nature c. 1897. に出せり、又之に就て、 田螺を以て軍の勝負を占せし由を載せ、 上に五尺許りの丸き物有て磐石の如し、能く能く見ると田貝と云ふ物也、元の池え[やぶ三重を打破り坪の中に入て雪垣を破り、椽より上り座敷に入れる跡有り、入て見るに床の ならず、柬埔寨[やぶちゃん注:「カンボジア」。]にも行はる,こと、予の'On Augury ひ行きしと云へば、是も田螺を指せると見ゆ。 一尺餘り積れる初雪を左右に分ち、土を顯はしたる跡あるを慕ひ行くに、 [やぶちゃん注:「どぶがひ」或いは「からすがひ」。]かと思へど、既に丸しといひ、 ボルネヲにも此占法有りと報ぜり、又奧羽永慶軍記卷卅六に、羽州山北の城主小野寺 此物多少神異とせられしにや、常山紀談(續帝國文庫本六三七頁)に大阪陣に 武備志にも此兆を出したりとあり、 城主遠流と成ると、 或る印度人同雜誌に寄書し 土堰を上り、塀 日本支那のみ 田貝は蚌

武将の逸話四百七十条から成る江戸中期の逸話集。明和七(一七七○)年完成とされる。 螺女房」が直ちに想起されるが、この昔話は本邦のオリジナルではない。晩唐の作者不詳 始紐舌目リンゴガイ上科リンゴガイ科リンゴガイ属スクミリンゴガイ Pomacea canaliculata 名で主に西日本で繁殖し観察されるものは、台湾からの人為移入種(食用目的)である原 chinensis chinensis の亜種として扱われるようになった。殻高約四・五~六センチメート として Cipangopaludina 属のタイプ種であったが、その後、中国産のシナタニシ Bellamya これは「常山紀談拾遺」の巻一にある「野間左馬之進田螺を以て勝負 占 物語の事」で、 武備志にも此兆を出したりとあり」「常山紀談」は備前岡山藩主池田氏に仕えた徂徠学派 廣記」の「異人三」の「吳堪」で原文が、サイト「寄暢園」のこちらで和訳が読める。 に裏山の田圃でとったのはマルタニシ Bellamya (Cipangopaludina) chinensis laeta (独立種 タニシ科 Bellamyidae として扱う説もある)の四種が棲息する。最も一般的で私が幼少時 の儒者湯浅新兵衛常山(宝永五(一七〇八)年~安永一〇(一七八一)年)の書いた戦国 の伝奇集「原化記」(原本は散佚)の「吳堪」で判る。「中國哲學書電子化計劃」の「太平 であるが、本邦にはアフリカヒメタニシ亜科 Bellamyinae(特異性が強く、アフリカヒメ 楠の指示する原本のそれは、国立国会図書館デジタルコレクションの画像のここから視認 [やぶちゃん注:腹足綱新生腹足上目原始紐舌目タニシ科 Viviparidae に属する巻貝の総称 「大和本草卷之十四 水蟲 介類 御覧の通り、タニシとは全く縁のない種であるので注意が必要である)。他の三種は 分布は北海道から沖縄)である(なお、 私は所持する岩波文庫版(森銑三校訂一九四〇年刊・下巻)で電子化する。 (續帝國文庫本六三七頁)に大阪陣に田螺を以て軍の勝負を占せし由を載せ、 田螺」の私の注を参照されたい。田螺と言えば、「田 現在有害外来種として「ジャンボタニシ」の

けて一夜置くとき、其今歌勝負のまけの方を追こみ、 の城中秀賴、 左馬之進物がたりに、 進物がたりに、田螺を折しきの片隅に三ツ、又かた隅に三ツよせて、○野間左馬之進田螺を以て勝負占物語の事 木村、 大野と稱して盆の一方に三ツ、 また一方に闘東方家康公、 かちの方は進み出ることなり。 兩方へわ

此兆を出したり。考ふへし。 たにしを追込たるとなり。 堂と稱して三ツたにしを置て、一夜置くにかならず關東方の三ツの田にし、内方の三ツの堂と稱して三ツたにしを置て、一夜置くにかならず關東方の三ツの田にし、内方の三ツの 勝負の吉凶を兆ふこと是よりよきはなし、 となり。 武備志にも

年?)が編纂・刊行した兵法書。全二百四十巻で膨大な図譜を添える。「第八十」に以下 のように出る。「中國哲學書電子化計劃」の原本画像を視認して起こした。電子化された に堪えないひどい代物である。 ものが添えられてあるのだが、 「武備志」漢籍。明の一六二一年に軍学者茅元儀(ぼう げんぎ 一五九四年~一六四〇 機械読み取りで全く補正が行われておらず、 惨澹たる見る

盆中水用一寸深天明便見吉凶、放田螺之時、見營、右爲賊營、用田螺兩個一個寫賊人軍將、一營、右爲賊營、用田螺兩個一個寫賊人軍將、一 放田螺之時、望北斗叩頭誠心頂禮、 一個寫賊人、放田螺在水、、用新盆一面、中心界斷、 自然徴應 分左右、

の「睽車志」(十二世紀(金と南宋の時代)成立。但し、孰れも熊楠が見たのは後代に於志」よりもさらに古い漢籍である馮拯の「番禺記」(九九〇年~九九四年頃成立)と陸偉所持しており、それで既読である。ここと同様に「常山紀談」を引き、その後に、「武備 就いて」。『ネイチャー』誌へのイギリス留学中の一九八七年五月十三日投稿の短い論考。 本を熊楠は見ていないため)、と述べる。これに続けて(田村義也氏訳。〔 〕は訳者によ 原文は「Internet archive」のこちらで確認出来る(左ページ右中段から次ページにかけ て)。私は邦訳された「南方熊楠英文論考[ネイチャー]誌篇」(二○○五年集英社刊)を いて引用されたもの)には、この占術法が嶺南で古来より行われてきたとあるらしい(原 「予の 'On Augury from Combat of Shellfish,' Nature c. 1897. に出せり」「貝合戦に拠る占い

《引用開始》

を体系的に調査した最初の考古学者である。〕が述べていることも興味深い。 [やぶちゃん注:原文「Etienne Aymonier」(一八四四年~一九二九年)。 先に挙げた湯浅の言に関連して、カンボジアの占いについてエテイエンヌ・エモニエ 今日のカンボジア・タイ・ラオス・ベトナム南部のクメール帝国の遺跡 彼はフランスの言

戦が、実際の戦争の行方を占ってくれるよう祈る。戦士を表す二匹のクチャウは、一方が 捕って、たらいの底にお盆を敷き、そのなかに砂で小さな土俵を作り、水をいれてこの二 匹の貝を浸ける。蠟燭を灯して香を焚き、王国の守護神を呼びだして、このささやかな海 ひっくりかえるまで闘わされるのである」(「カンボジア人の習慣と俗信」、『フランス領コ - チシナー旅行と現地調査』一六号一四二頁、サイゴン、一八八三年) 「〔カンボジア〕王国に外国の軍隊が攻めこんだときには、多くの人々がクチャウを二匹

地域に、 今のところ、貝を闘わせて占う風習は東洋に限られているように思われる。 こうしたやり方の記録例はないだろうか 世界の

《引用終了》

ウ」について、タニシ科と推定したことについて補足した最後の部分で(田村氏訳)、じ『ネィチャー』の翌年一八九八年二月十日の記事で、カンボジア人が使う占貝「クチャ ることができる』と言い添えている。なお、この論考投稿には、補足の続きがあって、同 文庫」版、二巻四五八頁のメアジ・ホーウィットによる「附論」を参照)などの例を挙げ ては、 巻)』と記し、最後にも注して、『戦の行く末を占うのに、神託による類似のやり方につい 雄鶏がみな白い雄鶏に負けたのを見て、源氏につくことを決意した」(『平家物語』一一 ニエの引用の最後にも注して(田村氏訳)、『この指摘は、ある日本の古伝承を想起させ ボック『文明の起源』五版二四五頁、およびエンネモーザー『魔術の歴史』ボーン「科学 で、仏堂の前で、白い雄鶏七羽と赤い雄鶏七羽とを闘わせ、 い旗(つまり源氏)に仕えよであったが、これに確信がもてなかったのである。彼はそこ とあって、 熊野別当湛増という僧兵が、 すなわち、「壇ノ浦の合戦 [やぶちゃん注:中略] がまさに始まろうとしていたと の類似例から推して、これもタニシ科の一種である可能性が高いとする。また、エモ 木の枝を使うニュージーランド人の方法や、ゴート族の王がブタを用いる方法(ラ この記事は終わっている。「クチャウ」は原文「k'hchau」で、熊楠は注して、 源平いずれにつくか迷っていた。 (平氏の赤い旗を表す)赤い 護持仏のお告げは、白

《引用開始》

裏付けを与えてくれるくだりに行きあたった。カンボジアの軟体動物の学名を挙げるなか チシナ―旅行と現地調査』九号四七九頁、一八八二年)を読んでいると、私のその意見に ン語名パルディナ Paludina に同定している。 で、この著者は、クショー(おそらくクチャウのフランス語における異形だろう)をラテ 最近になって、M・A・パルヴィの記事「カンボジアその他への旅行」(『フランス領コー カンボジア語名「タル」とされている。 なお、近親属のリンゴカイ Ampulllaria

《引用終了》

名。「リンゴカイ Ampulllaria」はリンゴガイ属のシノニムで、*Ampullaria giga*s は先のスク ミリンゴガイのシノニムである。 と記している。「Paludina」はタニシ科 タニシ亜科 Viviparus 属(欧州・北米産種群)の古

のここの左ページ上部にある、熊楠の最初の投稿へのコメントで、 「或る印度人同雜誌に寄書して、ボルネヲにも此占法有りと報ぜり」「Internet archive」

*

On Augury from Combat of Shell-fish.

according as they have settled previously whether motion or rest is to prove the case. " squeezed upon them, and the one that moved first shows the guilt or innocence of the owner, gives the following:—"Another is with two land shells, which are put on a plate and lime-juice from the combat of shell- fish. In Spencer St. John's "Life in the Forests of the Far East, " vol. i. p. 77, amongst various ordeals related by him as being practised by the Sea-Dyaks of Sarawak, he In your issue of May 13 (p. 30), Mr. Kumagusu Minakata. quotes several examples of augury

*

総称で、頭の「Sea」はダヤク族の中でも海辺部に住む人々の謂いと思われる。 島に居住するプロト・マレー系先住民の内で、 三分の二を占めるサラワク州である。「Sea-Dyaks」の中のダヤク族というのは、ボルネオ こるのが、 それ。「Sarawak」(サラワク)はボルネオ島にある現在のマレーシア領の西側 イスラム教徒でもマレー人でもない人々の

が残る。 間(一五九六年~一六一五年)を中心に記されていることに拠る。全三十九巻。 六九八)年に成立した。書名は、内容が永禄年間(一五五八年~一五七○年)から慶長年 国雄勝郡横堀村(現在の秋田県湯沢市)の医師戸部正直によって編纂され、元禄一一(一 元(一五三二)年から元和九(一六二三)年までを対象とした軍記物語。久保田藩領出羽 「奥羽永慶軍記卷卅六に、……」「奥羽永慶軍記」は戦国時代の東北地方を中心に、天文 写本のみ

義道の常の座敷に来て死んでいたという怪異が語られてある(義道は旗印の紋を牛にして 熊楠の語る奇怪譚は次のページの後半部に記されてある。その前には、大きな牛が一疋、 将として最上・秋田・由利党・六郷氏の軍勢が大森城へ押し寄せ』、『城内に侵入したが、 軍に与したが、『出羽の東軍旗頭が仇敵の最上義光であったことや、その最上氏が上杉景 年譜には天正一四(一五八六)年、『小野寺義通、最上義光と有屋峠に戦う』とあるのだ 城主である義道の弟・大森康道が自ら大長刀をもって切り込み』、『必死の防戦を図り、 勝の攻勢に苦戦中であり、友軍の伊達政宗はそれを傍観していたことから上杉方に味方 慶軍記」では(巻三十六のここ)、「小野寺遠江守義道流罪#先祖事」となっており、とす が、実は国立国会図書館デジタルコレクションの「史籍集覧 部に推定で読みを歴史的仮名遣で附した)。 によって改易され、子の左京、弟の康道とともに石見国津和野に流罪とされた』とある。 の包囲を続けつつ、城主不在の吉田城を狙ったが、陳道は大森城を出て里見義近率いる最 らに弟の吉田城主・小野寺陳道や兄・義道の援軍もあり押し戻すことに成功した。 ると、これは小野寺義道(永禄九(一五六六)年~正保二(一六四六)年)ということにな へは鮭延秀綱が攻め寄せ、城主柳田治兵衛は孤軍奮闘の末、討ち死にした。 「羽州山北の城主小野寺義通」秋田の横手城主小野寺義通で、こちらの「秋田の歴史」 彼は彼のウィキによれば、慶長五(一六〇〇)年の「関ヶ原の戦い」では、当初、東 西軍に寝返った。 義道の救援もあって最上勢は引き上げた。戦後の』翌慶長六年に『徳川家康 電子化する(カタカナはひらがなに改め、 しかし、西軍が関ヶ原で敗れたことで形勢は逆転』、『清水義親を大 句読点・濁点等を挿入した。 第八冊」に載る「奥羽永 東軍は大森城 さ

×

有し池の中より、 登城せんと、 酉之助、 是を見て、 大石を引出せる如く、 我家を出て、大手の門に入て、朴木坂を二町ほど上りみれば、鳥海酉之助とて、生年十六歳に成しが、夙に起て、裝束、かひ 一尺餘り積れる初雪を左右に分、 土を顯したる跡 かひつくろ 前代より

不思議や。 此池より 大蛇の出たる跡にてもあらん。 ともあれ、 附止てみん。

上より上り、座敷に入し跡あり。酉之助、何くまでも押入ける。弓手を通り、土堰を上り、塀を打破る事、三重にして、坪の内に入り、雪垣を破て、緣のと思ひ袴のそは[やぶちゃん注:裾のことか。]を高く取て、其跡を慕ひ行き、道よりと思ひ袴のそは[やぶちゃん注:裾のことか。]を高く取て、其跡を慕ひ行き、道より

酉之助伯父鳥海一五郎、高橋彌八郎なども追々來り、 酉之助、 『之助、刀の脊を以て打て見るに盤石の如くなり。能々見るに、「田貝」といふものな床の上に五尺[やぶちゃん注:一・五メートル。]許の丸きものあり。 同座中に入て見れば、 何とも知ら

義道、此よしを見て、

「不思議なるもの哉。元の池に捨よ。」

と下知す。

中間、六、七人にて行けり。

かゝる不吉の有しにや、翌年、遠流の身とは成しなり。

*

何らおかしくない。「這ひ行きし」は確かに運動性能ではタニシの専売特許とも言えなくは ちも判らぬではないが、「蚌」の字は二枚貝を指し、上記二種は「五尺」はあり得ないもの 或いは、イシガイ科カラスガイ属カラスガイ Cristaria plicata 。熊楠がタニシにしたい気持 ないが、タニシは大きくなるオオタニシ Bellamya (Cipangopaludina) japonica でも七センチ の、長径が二十~三十センチメートルにも達することがあり、それを「丸し」と表現しても メートルに及ばないので、分は悪い。] 「蚌」軟体動物門斧足綱イシガイ目イシガイ科ドブガイ属ドブガイ Sinanodonta woodiana

「追記」(ポイント大太字)を除いて、ポイント落ちで、 [やぶちゃん注:以下は初出の最後に附された「追記」である。底本では、 全体が一字下げになっている。] 以下は標題の

に騎し現れ玉ひしと、 ○狸、熱田の大神は狸を愛し玉ふにや、 源平盛衰記卷十二に見ゆ。 師長公社前に琵琶を奏でし時、 明神白狸

野槌の誕[やぶちゃん注:「はなし」。]は、例令[やぶちゃん注:「たとひ」。]多くの虚言 Churchill. op.cit. vol. vi, 1752. p. 14.) 旣に東西兩半球に斯く迄相似たる譚多きを攷れば、 驚きしが、遂に之を殺し了ると云へり(F. N, del Techo, 'The History of Paraguay,'etc. in を發すと信ぜらる、其蛇長二丈五尺、胴の厚さ牛の如く、眼頗る小にして輝くこと、頭至 ちゃん注:「スペイン」。」の「アルヅール、ヌニエツ」艦隊を率ひ [やぶちゃん注:マ せ考ふべし、又斯る蛇の譚、西半球にも古くより存せし證は、十六世紀に、西班牙[やぶ 蛇の樣にて、指六つある足六所に附き、長さ一丈に足ざるに、太さ桶の如く頭尾遙かに細 て被はる、兵士之を銃撃するに及び、大に吼え、尾を以て地を叩き震動せしむ、 これに棲み、戰死の尸[やぶちゃん注:「しかばね」。]を享け食ふ、魔此蛇に託して豫言 を混じ有るにせよ多少の事實に基けるを知るべし。 て厚く短きに相應せず、齒鐵の如きが二列有り、尾滑かなれども他は悉く大皿樣の巨鱗も マ。〕秘露[やぶちゃん注:「ペルー」。]に入し時、八千戸有る一村に圓塔あり、一大怪蛇 建部綾足の折々草、夏の上の卷に、信濃の人|野守||てふ虫を殺せし話有り、 惡臭を放つ、と。野守は野槌と等しく、野の主の意なるべし、本文列擧せる諸例と併 頭は常なる小 一同大に

(明治四十三年七月、第二五卷)

読点・記号・改行も増やして示す。 字を正字化し、漢文表記部は訓読し(詩賦では白文を掲げ、後に推定訓読を施した)、句 二)年三弥井書店版刊)「源平盛衰記(二)」で確認した。カタカナをひらがなに直し、漢 表する音楽家として知られ、ここで見る通り、殊に箏・琵琶の名手であった。指示するの デターで、清盛によって関白松殿基房とともに解官された上、師長は尾張国井戸田に流罪 年)。安元三(一一七七)年、従一位・太政大臣。治承三(一一七九)年の平清盛のクー 衰記卷十二に見ゆ」「師長」は藤原師長(保延四(一一三八)年~建久三(一一九二) は同巻の「師長熱田社琵琶事」。やや長いが、電子化する。所持する(平成五(一九九 に処された。その後、出家し、三年後に帰京を許された。彼は源博雅と並ぶ平安時代を代 [やぶちゃん注:「師長公社前に琵琶を奏でし時、 踊り字「く」は正字化した。一部表記を別本で変え 明神白狸に騎し現れ玉ひしと、源平盛

*

重立雲と云三十一字の言葉は、 付ても、神さびたる氣色也。此宮と申は、 、緋玉垣色をそへ、和光利物の榊葉に、引立標繩の兎に角に、風に亂るょ有樣、何事に或夜當國第三宮、熱田の社に詣し給へり。年へたる森の木間より、漏り來月のさし入 此御時より始れり。 素盞烏尊、 景行天皇御宇に、 是也。始は出雲國の宮造りして、八 此砌に跡をたれ給へ

低、耳、欹といへども、更こ青哥・・・、に、本より無智の俗なれば、情を知人希也。邑老・村女・漁人。野叟、る。調彈數曲を盡し、夜漏、深更に及て、「流泉」・「啄木」・「揚眞藻」 驚す。 そは嬉く覺すらめ。曉係て吹風は、岸打波にや通らん、五更の空の鳥の音も、旅寢の夢をは、自然の感を催す理にて、滿座、淚を押へ、諸人袂を絞けり。增て神慮の御納受、さこ しかば、魚鱗、踊 躍き。虞公、歌を發せしかば、梁塵、動 搖 けり。物の妙を極る時低、耳、 欹 といへども、更に淸濁を分ち、呂律を知事はなけれども、瓠巴、琴を彈ぜ 師長公、終夜、神明、納受爲し、初には、法施を手向奉り、後には琵琶をぞ彈じ給け 夜も、やうやう、あけぼのに成行ば、月も西山に傾く。 情を知人希也。邑老・村女・漁人。野叟、參り集り、 大臣、 御心をすまして、 の三曲を彈じ給處 旅寢の夢を

普合調中花含粉馥氣 流泉曲間月擧淸明光

(普合の調中 花 粉馥たる氣を含み

流泉の曲間 月 清明たる光を擧ぐ)

と云朗詠して、重て、

願以今生世俗文字業狂言綺語之誤 飜爲當來世々讃佛乘之因轉法輪之緣

(願はくは 今生 世俗の文字の業 狂言綺語の誤りを以つて

飜りて 當來 世々讚佛乘の因轉法輪の緣を爲さんと)

詠まれて、御祈念と覺しくて、暫物も仰られず。

切々として、又、淨々たり。嘈々竊々として錯雜彈、大絃・小絃の金柱の操、大珠・小珠良ありて、御琵琶を搔寄て、「上玄」・「石象」と云祕曲を、彈澄給へり。其聲、凄々 の玉盤に落るに相似たり。

簾のさゞめきけり。靈驗に恐て、大臣、暫、琵琶を 閣 給けり。 御祈誓の驗にや、 御納受の至か、神明の感應と覺くて、寶殿、『パー 大に動搖し、 裸振玉の ちはやふる

神明、白狸に乘給、示して云、

歸京の所願、疑なし。必ず、本位に復し給べし。」 汝が祕曲に堪へず、我、今、影向せり。君、配所に下り給はずは、 爭 此祕曲を聞べき。は、赤青童子と示して、一切衆生に珍寶を 與、今、此社壇に垂跡して、年、 久。而を、「我、天上にしては文曲星と顯て、一切衆生の本命元辰として是を化益し、此國に天降て

と御託宣有て、明神、上らせ給たりしかば、諸人、身毛、 竪だち て、 奇異の信心を發す。

「平家、係る惡業を致さずは、今、 此瑞相を拜し奉るべしや、 災は幸と云事は、 加様の事

と、感淚を流し給ても、又、末、憑しく[やぶちゃん注:「たのもしく」。]ぞ覺しける。

綾足(享保四(一七一九)年~安永三(一七七四)年)が明和八(一七七一)年に書いた 生物の追加情報。「折々草」は、江戸中期の俳人・小説家・国学者で絵師でもあった建部 随想的奇談集。 「建部綾足の折々草、夏の上の卷に、……」以下は、既に起項されてある「野槌」の疑似 ンの明治四 当該話は「夏の部」の「野守とふ蟲の事」。国立国会図書館デジタル 一(一九〇八)年冨山房「袖珍名著文庫」版 (幸田露伴校訂) の当該話

を視認して示す。加工用として、所持する「岩波新古典文学大系」版を読み込んだものを した。記号も添えた。読みは一部に留めた。踊り字「く」は正字化した。電子化しなが 面白かった。 『露伴なら、 また校合や語注の参考にもした。句読点を変更したり、増やしたりし、段落を成形 きっとここは書き換えるよな』と思う箇所がしっかり変わっているの

データ航空写真)。現在の松城城のある市街地の、 するが、結構、山深い。」に住む人、來て、 信濃なる松代[やぶちゃん注:現在の長野県長野市松代町はここ(グーグル・マップ・ 、かたりき。 北東部や南部は現在、 同じ松代町を冠

どちと二人、山に入りて、柴刈りて侍る歸途に、淸水の流 出たる細道の、眞葛、這廣ごり其邊の山里に、名高き力雄の侍りて、相撲なども取歩きけるが、水無月ばかり、是が友はたり 刈りたる柴どもは、物に結附けて振り擔げたり。 怪しき木蔭の侍る所を來るに、一人の男は先に立ちて行き、 かの力雄は、後に立ち

に、眞葛原、騷 立ちて、桶の丸さばかりなるが、起返りて、足より肩に打ち掛けて、下る道なりしかば、彼の難しき 邊 を走り來るに、何にかあらむ、物踏みたる心地する、 「くるくる」

咽を狙ふにや、高々と、 と巻きておぼゆるに、見れば、 頭 は、犬などよりも大きく見ゆるが、 きょうさし上げたり。 眼》 の

『是は、大蛇なり。いで、口より引裂かさり。』此男、勇みたるものなれば、事ともなくおもひて、此男、勇みたるものなれば、事ともなくおもひて、 又、尾とおぼしきは背をめぐりて、肩を打こして臍の邊まで卷きしめて侍り。

いで、口より引裂かさむ。』

おもひて、荷ひたる柴をば放ち、左の手を伸べて、 下の

と、とらへ、右の手して、 鎌は持ちたりしかど、先なる男の腰に挿させたれば、、とらへ、右の手して、上の腮をにぎりて、引裂かな · たれば、此所には有らず。 引裂かむとするに、叶はず。

『さるにても、 いづち、行けむ。』

る木にのぼりて おもひて、大聲をあげてよべば、 是は、 13 と甲斐なき男にて、 爾見るより、

「あや、あや。」

と見居たるが、

「此所なり。」

「汝、言甲斐なき者かな、ど、いふ。 其腰に挿したる鎌なむ、 おこせよ。

投下したり。と、いへば、なほも、 木の末[やぶちゃん注:木の枝。]に居りながら、 鎌は拔きて

足を上げて、 下の腮を踏固め、 左の手にて、 上の顎を持代へて、 右の手に鎌を握り

足らず、周圍の太き所は、 扨、頭よりはじめ、尾の邊は、傍なる谷に打込み、扨、頭よりはじめ、尾の邊は、傍なる谷に打込み、らず、周圍の太き所は、桶ばかりも侍りて、頭の方、 中にも太き所をば荷ひて、

「今日の名譽を親にも見せ、所の者共をも驚かさむ。」

とて、持て歸りにけり。

親は甚く老いて侍るに、待ちつけて、

「などて、今日は、遅かりし。」

を取り「やぶちゃん注:ママ。」、 ロロ 』とルビする。 塊り。]

「斯るめ見しが、悪く思ひて、かく、 斬責て侍る。 見給へ。

とて、出す。

驚きて、

思はず。家に、な入りそ。」 「よからぬ事をば、 しつる。是は山 の神ならむ。 必、祟いで來なむ。

る奴は、たとへ、神にまれ、命は取るべし。さるを、か「譽られむとて、持て來つるを、思の外にも侍るかな。とて、おひ出しけるほどに、此男は、 何の山の神ならむ、 人を食はんず

おはさじ。」 かく、 懲らし給ふは、 己が親にて

さて、其切りて持たるをば、など、言争ふを、里長の來り合せて、彼や斯く言宥めてけり。

「見む。」

香の去らで、これには、惱みけるを、醫師の良き藥を與へて後は、其香、やうやら此男も、いと臭き香の移りて、着たる物どもをば、取捨て、手も足も洗へども、と言ふ方へは遣はし、一日も二日も歷る程に、いと臭くありつれば、捨てつ。 やうやう、

又、其醫師の言ふは、

「是は野守とて、大蛇の類にもあらず。」

と申せしよし。

又、此男には何の報も侍らざりしが、三とせ經て後、公より、占置かれし山又、此男には何の報も侍らざりしが、三とせ經て後、公より、占置かれし山世に、井守、屋守などいふ蟲の、野に侍るまゝに、「野守」とは言ひけん。 命を召れけり。

「是は、其が復讐したる也。」
て、宮木を盜みたる罪の顯れ侍るによりて、

人々、 いひはやしける、 となむ。

いのだが、何か、妙に具体で、象徴的な別の凄惨な事実を謂うているようにも感ずる。]はパラグアイの宣教師・歴史家。この驚くべき話はちょっと飛び散って来る一片も信じ難「F. N, del Techo」ニコラス・デル・テチョ(Nicolás Del Techo 一六一一年~一六八五年)

たもので、「j-stage」のこちら(PDF)で初出原文が視認出来る。 グを施した。] [やぶちゃん注:以下は、最後に書誌が出るもの(本篇発表に四ヶ月後)に追加掲載され 今まで同様にマーキン

補遺

ひしに、夜十一時頃、龜出來しを見出し、海岸に人の山を築き、早速神官を呼び、町民は年[やぶちゃん注:明治四三(一九一〇)年。]七月廿六日、該町辨財天祭にて人多く賑 述たり。今も然する所有るは、今年七月三十日の紀伊每日新聞に、「淡路志筑町[やぶち 鳥以石爲居也、然無貢者、此石可以當之云、固有欲之々色、乃納之、幸公悅之と記せり、 之、余有一石、高峻而成双尖、幸公曰、金吾宗全之孫、其呼爲次郎者、好鶺鴒而籠之、此 その例あり、碧山日錄卷一、長祿三年四月五日、攝州太守幸公與春公相率而來、予以禮侍 注:「鶺鴒」の条。]に、予大淸一統志に**鶺鴒**の産地を擧げたるは、媚藥に用ひしならんと 此圖に似たり、今の倭犬は悉く洋種を混じたれば、頗る固有の倭犬と異るに及べりと言れ 年土用に、甲の幅三尺餘の大龜、 言えり[やぶちゃん注:ママ。]、再び案ずるに、是れ籠鳥として弄びしならん、 たり、本邦の狼と犬との關係に多少緣有る事なれば附記す、○同號三三三頁[やぶちゃん 犬に類す、 類從卷卅所收、八幡愚童訓卷下に、淀の住人八幡に參り祈りしに、 は今日專ら毘沙門の使者と信ぜらるれども、古えは他の神の使者とも爲せしにや、 邊邊の漁民は、海龜卵を下す地が波際を去る遠近を見て、其秋波の高低をト 注連を張り、神官をして其發育を祈らしむる例也、然らざれば、狂波俄かに起て、 來るは、久しき以前よりの事にて、一定の場所へ、每年必ず十二列十二重に、百四十八 勿體無しとて、遠くより打眺むる由、龜穴を掘たる儘、卵を産まずに去れり、此大龜例年 ゃん注:現在の兵庫県淡路市志筑(しづき)。グーグル・マップ・データ。]の海岸へ、每 〇三三七頁[やぶちゃん注:「海龜」の条。]に、古え日本人海龜を神又は神使とせし由を も思はる)の圖を、畵家川島友吉氏に示せしに、昔し唐人が倭犬を畵きたる物あり、甚だ と尾尖黑しと有れど本草綱目に、黃腰獸、豹より小さく、腰以上は黃、以下は黑し、形ち 群團して猛虎を殺すを以て著名也、此獸、體色赭く[やぶちゃん注:「あかく」。]、 ツド」氏の動物圖譜中の「コルスン」(Cuon dukhuensis. 印度の西疆に産する野<mark>犬</mark>也、能く の經立は、恐しき物也、御犬とは狼の事也」と見ゆ、(三六章)前日予何の心も無く、 養父大明神も狼を使者とすと記せり、近頃柳田氏の遠野物語を覽るに、「猿の經立、 山等で、|狼|犬同源の遺跡を留る者と論ぜり、其後、上垣守國の養蠶秘錄を見るに、但馬の 人類學會雜誌二九一號三二九頁[やぶちゃん注:先の「狼」の条。]に、予は御嶽玉置 :「つつんで」。] 小なりと雖も能く虎と牛鹿を食ふと云るは、此獸の事を多少誤聞せる記載かと 是れ福の種也と仰ゐで [やぶちゃん注:ママ。]、 約三ケ月後ちに孵化する迄、子供近かづけず、産卵後直ちに其周圍に 宿所へ還り、 扨孵化せし龜は、母龜共に遠く海に出で去る、其時町民打寄 神酒を呑ませ歸すを例とす」と載せたるにて證す可し、 一定の場所に來り、產卵するを、 深く崇め祝ひしに、 所々より大名共來て問丸と爲り、 寶藏の内より大なる百 町民神として敬ふ、今 袖に裹んで「やぶちゃ 本邦にも 町民は ーウ

るべし。 軍虫と云ふとあり、拙妻の亡父の話しに、蜻蛉を勝ち蟲と名け、武士の襦袢等の模樣に用 考卷二五八、錢を數ふる異稱の條々、禮家に云傳るは、蜻蛉結びを武家に用ゆ、 ぶちゃん注:「蟹」の条。] 参照)。越中放生津の諏訪社に白蛇あり、諏訪様と名く、 當時迄淀第一の德人也と見え、神宮雜用先規錄卷下に、皇太神宮神主荒木田氏の祖の名を ゆ、自身も長州征伐の時然せりと、神武帝蜻蛉に依て國に名け玉し事あり、雄略帝、此蟲 ふ者に似たりと、三州奇談後篇一に見ゆ、○**蜻蜓**[やぶちゃん注:「とんぼ」。]類聚名物 が蟲を誅せしを褒め云ひし事も有り崇拜と迄無くとも、 く引連れ出で遊ぶ、澤蟹多く出て諸人を迎ふるは、此地の不思議にて、大要使はしめと云 (明治四十三年十一月人類第二十六卷) 牟賀手有り、 是は蜈蚣を吉祥として名とせしにや、○蟹(同號三四一頁[や 古來吉祥の虫と看做されたるを知 此虫を將

府は、オランダ王室通訳官ホフマンにフランス語訳を命じ』、嘉永元(一八四八)年に が、文政一二(一八二九)年には、かの『オランダ東インド会社のシーボルト』が、この 井篤忠の手助けによって、江戸・大阪・京都の書林から刊行され』、守国の死後である 古書』二十五『点を引用』し、『当時は文字が読めない人も多いため、 給桑、上族、繰糸などの全般を解説し、下巻では真綿製法、養蚕の話題を書いて、和漢の 述べ、蚕名、 三巻から成る養蚕技術書「養蠶秘錄」で、これは最も代表的な江戸時代の養蚕書として知 丹後に養蚕業を普及させた。享和二(一八〇二)年四十八歳の時に著したのが、上中下の き、蚕種を仕入れ、蚕種改良に励み、大屋谷養蚕の原種(但馬種)を創出、さらに丹波・ せり」江戸中。後期の養蚕家・蚕種商人上垣守國(宝暦三(一七五三)年~文化五(一八[やぶちゃん注:「上垣守國の養蠶秘錄を見るに、但馬の養父大明神も狼を使者とすと記 國に鎭座まします養父大明神なり』と始まって、養蠶の神と語り、左頁のポイント落ちの注 は、『パリとトリノで農業技術書として出版』された。これは『日本文化輸出第』一『号 ○八)年)。但馬養父郡蔵垣村(現在の兵庫県養父市大屋町蔵垣。グーグル・マップ・デ の頭で(そのままに視認して電子化した)、歴史的仮名遣の誤りはママ。 にある「日本養蠶(こがひ)始(はじまり)之事」の中のここの、 であると評価されて』おり、『日本国内でも』、実に明治二十年代まで八十年以上に亙って 『出版され続け』た、とある。国立国会図書館デジタルコレクションの同書原本の上巻冒頭 「養蚕秘録」を『日本からオランダに持ち帰り』、その有用性を聴き知った『フランス政 - タ)の庄屋の家に生まれた。十八歳の時、養蚕の先進地であった陸奥国伊達郡福島へ赴 「養父市」公式サイト内の「養蚕の神様上垣守国」によれば、『上巻で養蚕の起源を 蚕種、栽桑、蚕飼道具を図解し、中巻では養蚕の実務を述べ、孵化、 右頁四行目から、『但馬 掃立、

も立去るなり又參詣の節 狼 をつれ皈らんことを願へば其人の後 につき添來る事あまねく 人の知れる所にして農業を守らせ給ふ靈驗斯のごとし

この本、個人的に甚だ気に入った!

た)の一節で、私はブログ・カテゴリ「柳田國男」で原本の電子化注を終わっているのであ る。だから「原点と違う読みだな」と直ちに思ったのである。当該部は、 ○)年六月十四日に『著者兼發行者』を『柳田國男』として東京の聚精堂より刊行され 感じて、初出を見ると、正しく(後述)『猿の經立』となっているので、特異的に訂した。 也」と見ゆ、 喜善・述/柳田國男・(編)著「遠野物語」(初版・正字正仮名版) の採取したものを書き改めた「遠野物語」(本記事初出の五ヶ月前の明治四三(一九一 因みに初出「御犬」に『オイヌ』とルビしてある。さてもこれは、柳田國男が佐々木喜善 『柳田氏の遠野物語を覽るに、「猿の經立、御犬の經立は、恐しき物也、御犬とは狼の事 (三六章)』実は「經立」のルビは底本では『ツイタテ』である。「変だな」と 三六~四二 『佐々木 (鏡石)

以下が本文である。

り。正面より見れば生まれ立ての馬の子ほどに見ゆ。後から見れば存外小さしと云へ上に御犬うずくまりてあり。やがて首を下より押上ぐるやうにしてかはるがはる吠えたき二ツ石山は岩山なり。ある雨の日、小學校より歸る子ども此山を見るに、處々の岩の三六。猿の經立、御犬の經立は恐ろしきものなり。御犬とは狼のことなり。山口の村に近三六。猿の經立 御犬のうなる聲ほど物凄く恐ろしきものは無し。 シャマ猿の經立、御犬の經立は恐ろしきものなり。御犬とは狼のことなり。猿の經立、御犬の經立は恐ろしきものなり。カサイヌ

リンク先の私の注も、是非、読まれたい。

他である。 ジ・ウッド(John George Wood 一八二七年~一八八九年)の「Illustrated Natural History」 ったハリソン・ウィリアム・ウィアー(Harrison William Weir 一八二四年~一九〇六年) である。但し、挿絵は彼が描いたものではなく、イギリスの画家熱心な動物愛好家でもあ 『「ウツド」氏の動物圖譜』博物学的読本を多数書いたイギリスの作家ジョン・ジョ

草綱目に、黃腰獸、豹より小さく、腰以上は黃、以下は黑し、形ち犬に類す、小なりと雖 も能く虎と牛鹿を食ふと云るは、此獸の事を多少誤聞せる記載かとも思はる)の圖』 以て著名也、 『「コルスン」 (Cuon dukhuensis. 印度の西疆に産する野犬也、能く群團して猛虎を殺すを 體色赭く [やぶちゃん注:「あかく」。]、足喙耳と尾尖黑しと有れど本

ネシア (ジャワ島・スマトラ島)・カンボジア・タイ王国・中華人民共和国・ネパール・ る。ウィキの「ドール」によれば、別名をアカオオカミとも呼ぶ。現在はインド・インド Dukhuensis.」となっている。但し、この学名は不審。検索自体で全くかかってこないか バングラデシュ・ブータン・マレーシア(マレー半島)・ミャンマー・ラオスに分布する ジにまで及ぶ)である。図のキャプションは「KHOLSUN, OR DHOLE.— Cuon は二十八~五十センチメートル、 「Internet archive」の「Illustrated Natural History」のここの右ページの図と解説(次のペ 生息数は減少している。頭胴長は七十五センチメートルから一・一三メートル、尾長 現在はシノニムでさえない。本種は食肉目イヌ科ドール属ドール Cuon alpinus であ 肩高は四十二~五十五センチメートルで、体重は♂で十

る』。『インドでは』九月から十一月に『交尾を行』い、『妊娠期間は』六十日から七十日 他の個体が開けた場所で待ち伏せる』。『大型の獲物は背後から腹や尻のような柔らかい場 生林)、『乾燥林から湿潤林、常緑樹林から広葉落葉樹林・針葉樹林など様々な森林に生息 褐色や黄白色』を呈し、『尾の先端は黒い個体が多いが、先端が白い個体もいる』。『鼻面 で、十一月から翌年の四月にかけて出産し、一度に二頭から九頭を産む。『繁殖は群れ』 所に噛みつき、内臓を引き裂いて倒す』。『群れでトラやヒョウなどから獲物を奪う事もあ は臭いで追跡し』、『丈の長い草などで目視できない場合は』、『後肢で直立したり』、『跳躍 こともある』。『自分たちで狩った獲物や、他の動物が狩った動物の死骸も食べる』。 ウ類も含むウシ類・イノシシなどを食べる』。『齧歯類や爬虫類、昆虫、果実などを食べる る』、『群れは排泄場所を共有し、これにより』、『他の群れに対して縄張りを主張する効果 る』。『狩りを始める前や』、『狩りが失敗した時には互いに鳴き声をあげ、群れを集結させ を基にした群れを形成し』て『生活するが』、二十から四十頭の『群れを形成する事もあ び下顎第』一『大臼歯(裂肉歯)には、歯尖が』一『つしかない』、『指趾は』四『本』。 は短い』。『門歯が上下』六『本ずつ、犬歯が上下』二『本ずつ、小臼歯が上下』八『本ず 十日で『巣穴の外に出』、生後五ヶ月で『群れの後を追うようになる』。生後七~八ヶ月で けし』、『獲物を吐き戻して与える』。『幼獣は生後』十四『日で開眼する』。生後七十~八 の内でただ一頭のいのみが行い、授乳期間は二ヶ月、『群れの他の個体が母親や幼獣を手助 があり』、『嗅覚が重要なコミュニケーション手段だと考えられている』。『シカ類・レイヨ 活動するが』、『夜間に活動する事もある』。五~十二『頭からなる』、『メスが多い家族群 し、草原や森林がパッチ状に点在する環境やステップにも生息する』。『朝や夕方に活発に 『狩りに加わる』。『生後』一『年で性成熟する』とある。 して獲物を探す事もある』。『茂みの中で横一列に隊列を組んで獲物を探しつつ追い立て、 『乳頭の数は』十二~十六個である。『一次林』(原生林)『や二次林』(火災などの後の再 大臼歯が上下』四『本ずつの計』四十『本の歯を持』ち、『上顎第』四『小臼歯およ ログラム、🖁で十〜十七キログラム。 『背面は主に赤褐色、腹面・四肢の内側は淡 『獲物

綱目」(「獸部第五十一卷」の「獸之二」)の記載は以下。独立項ではなく、「虎」の項の 襲って殺す虎に似た「 酋 耳」、西域の野生の犬で虎を食うとする「渠 搜」というけったい と雖も能く虎と牛鹿を食ふと云るは、此獸の事を多少誤聞せる記載かとも思はる」「本草 な妖獣の後に、 「本草綱目に、黄腰獸、豹より小さく、腰以上は黃、以下は黑し、形ち犬に類す、 「附錄」の項に添えられてある。この点でも如何にも怪しげな記載であって、同じく虎を

*

豹に似て小なり。 なりと雖も、 **黃腰【「蜀志」に黃腰獸と名づく。鼬の身、** づく」と。】 なり。腰以上は黄なり。以下は黑し。形、犬に類して、獼猴を食ふ。黄腰とター小にして能く、虎、及び、牛・鹿を食ふ。又、孫愐云はく、「豰。音『斛』。」に黄腰獸と名づく。鼬の身、貍の首、長ずるに、則ち、母を食ふ。形、小 黄腰と名

*

と記されてある。 熊楠はその獰猛さを「多少誤聞せる記載か」とわざわざ述べているが、

集団で襲い得る気がしている。 ル」の引用から判る通り、牛・鹿を襲うのは当たり前で、小型の弱った虎 各個体自体の大きさより遥かに大きな畜類(牛の類だったと思う)を 虎ではなかったが、ドールが集団の狩りの様子を映

見事に成功していた。

事典」(一九九三年刊講談社現代新書)の記載に拠った)。 別号もあった。熊楠とは明治三五(一九〇二)年に双方の知人の紹介で出逢い、 山植物調査にも同行している。日高の宿屋で客死した(以上は所持する「南方熊楠を知る 楠の身辺近くにあって、菌類の写生の手伝いもしたらしい。大正九(一九二〇)年の高野 は草堂。田辺生まれ。絵は独習。酒豪で奇行が多く、 「畫家川島友吉」(明治一三(一八八〇)年~昭和一五(一九四〇)年)は日本画家。 短気であったことから、 「破裂」の 以後、熊

詩の覚書にも使われている』。『文正、応仁の頃の紊乱した世情が活写されており、この 記述も見られるため、室町時代後期を検証する史料として貴重である』。『内容は太極の生 年・文正元年・応仁二年などの『記述が欠落しているものの、長禄』から『応仁年間に言 キによれば、『東福寺の境内に「碧山佳拠」と呼ばれる草庵があり、それが名前の由来と 録」は「へきざんにちろく」と読み、室町時代の東福寺の僧雲泉太極の日記。同書のウィ 頃』に『台頭してきた足軽や、下層市民に関する記述が豊富』で、『中でも山城国木幡郷 活や私事と、僧侶としての渉外などの公務が中心となっている』が、『古代の名僧の伝記 及した史料は希少であり、また筆者の立場上』、『寺院の運営、僧侶の仕事や生活に関する なっている』。記述は長禄三(一四五九)年から応仁二(一四六八)年に及び、寛正元 訓読しておく。 平凡社「選集」版が訓読しているので、それを参考(従えない箇所が複数ある)に以下に なり熟達しており、鮮明な個性と独特の雰囲気を醸し出しているが、それゆえに晦渋な点 は、「史記」を『初めとする古文書の影響があったと考えられている』という。『文体はか 対する感想を述べていることが特徴である。記事に付属する太極の論評』という形式に の郷民の活動や、清水寺の勧進僧が民衆に施した救済に関する記述は注目されている』。 や語録の抜粋や、教典に対する太極の解釈や考証、絵画や書物の鑑賞も含まれている他、 「碧山日錄卷一、長祿三年四月五日、攝州太守幸公與春公相率而來、予以禮侍之、余有 『それぞれの記事の末尾に「日録云」と称して、記事の要点の摘出と、太極自身の記事に 然無貢者、此石可以當之云、固有欲之々色、乃納之、幸公悅之と記せり」「碧山日 高峻而成双尖、幸公曰、金吾宗全之孫、其呼爲次郞者、好鶺鴒而籠之、此鳥以石爲居 太極自身の経歴に不詳な点が多いことも、 難解さに拍車をかけている』とある。

と云ひ、 石を以つて居と爲すなり。然れども、「貢」る者、無し』と。此の石、「金吾宗全の孫、其れ、呼んで、次郎と爲す者、鶺鴒を好みて、之れれを侍す。余に一石有り、高峻にして、双尖を成す。幸公日はく、長祿三年四月五日、攝州の太守、幸公、春公と相ひ率いて來たる。 固より、 之れを欲するの色、 有り。 乃 ち、 無し』と。此の石、以つて之れに當つべ 之れを納る。 、之れを籠 予、 之れを悅ぶ。 禮を以つて、 ひ、『此の鳥、

子で教豊の養子であったともされる。彼の幼名は小次郎である。応八(一四九九)年?)のことか? 父は山名宗全の嫡男山名教豊。 詳。同前。「金吾宗全の孫」で「次郎」というのは山名政豊(嘉吉元(一四四一)年~明 「長祿三年」は一四五九年。「攝州の太守、 幸公」不詳。識者の御教授を乞う。 但し、 或いは宗全の

「淡路志筑町の海岸へ、毎年土用に、甲の幅三尺餘の大龜、 町民神として敬ふ」調べてみたが、残念なことに、今はやって来てはいないようであ 一定の場所に來り、產卵する

読みを添えた。 鎌倉後期に成立した石清水八幡宮の霊験記。作者未詳。本地垂迹説に従って書かれてお り、内容が大きく異なる多種の異本が現存する(まさに探すのに、それらに嵌ってしまっ でやっとここに見つけた。 て往生した)。 しに、所々より大名共來て問丸と爲り、當時迄淀第一の德人也と見え」「八幡愚童訓」は 大なる百足這懸りければ、是れ福の種也と仰ゐで、袖に裹んで宿所へ還り、深く崇め祝ひ 「續群書類從卷卅所收、八幡愚童訓卷下に、淀の住人八幡に参り祈りしに、 国立国会図書館デジタルコレクションの写本(但し、非常に状態がよい) カタカナをひらがなにし、 句読点・記号を添え、 寶藏の内より

者。〕さいれたりければ、 ることが出来ずにいたが。]、測らざるに、安居頭[やぶちゃん注:陰暦十二月十三日から淀の住人あり、世間、合期せざりけるを[やぶちゃん注:時流に乗って上手く商売をす 十三日までの間、石清水八幡宮に籠って精進潔斎する神事の際に選ばれて主役となる

とて、すべていたます夫妻共に精進して、參宮して祈請しける程に、 「身にては叶ふまじき事なれども、神の御計にこそ有らめ。」 宝殿の内より大なり

「やぶちゃん注:ママ。」百足、這はひかょりければ、

きて、安居勤仕するのみにあらず、當時まで、淀汁一の德人也。 と、仰て、袖につょみて、宿所にかへり、天名ども、來て問丸となりける程に、と、仰て、袖につょみて、宿所にかへり、深く崇め祝けり。『是れ、福の種なり。』

是は、心も誠あり、物をも賤くせねば、

内外相應の利生也。

陸揚・管理に当たる問丸が現われ、荘園領主から「得分」 に従事した業者を指す。平安末期の頃から、淀・木津・坂本・敦賀など、荘園領主の旅行ここに出る「問丸」は、鎌倉から戦国時代、港町や主要都市で,年貢運送管理や中継取引 じて行った。 に当たって手数料として問料 を取り、 に当たって、 いたものが、次第に商業的機能を帯び出し、やがて、 遂には、 船などを準備する問丸が見られ、 戦国時代の問丸には、港町の自治を指導し、外国貿易に参加する豪商が出た 運送などの機能を捨て、純粋な卸売業となり、 さらに貢納物から商品の取引を専門とするよう転 鎌倉時代になると、荘園の年貢米の運送・ 独立の業者となった。貢納物の販売 配給機構の中核を構成するよ

うになった (以上は「ブリタニカ国際大百科事典」に拠った)。

右頁一行目に、 「神宮雜用先規錄」「宮内庁書陵部図書寮文庫蔵」の電子データの同書の 「神宮雜用先規錄卷下に、皇太神宮神主荒木田氏の祖の名を列せる中に、 「45」コマ目の 牟賀手有り」

*

荒木田牟賀手己波智賀袮子

>

とある(父の名は「 40 」コマ目末尾も確認されたい)。

吉屋右次郎衛門)が蒐集した奇談集を散逸を憂えて再筆録したものとされる。完成は宝 次男で、金沢の伊勢派の俳諧師で随筆家(歴史実録本が多い)の堀麦水(享保(一七一 談を集成したもので、金沢片町の蔵宿(藩の年貢米の売却のために置かれた御用商人)の 諸人を迎ふるは、此地の不思議にて、大要使はしめと云ふ者に似たりと、三州奇談後篇一 蟹」である。ガッツリと注も附してある。 ている。当該話は正しくは「後篇」ではなく「續編」で、「三州奇談續編卷之一(靈社の御 話で全百四十九話からなる。私は既にブログ・カテゴリ「怪奇談集」で全電子化注を終わっ 暦・明和(一七五一年~一七七二年)頃と推定される。正編五巻九十九話・続編四巻五十 に見ゆ」「三州奇談」は加賀・能登・越中、即ち、北陸の民俗・伝承・地誌・宗教等の奇 八)年~天明三(一七八三)年)が、先行する同派の俳諧師麦雀(生没年未詳。俗称、住 「越中放生津の諏訪社に白蛇あり、諏訪様と名く、蟹多く引連れ出で遊ぶ、澤蟹多く出

聞集」を著わしている)著。成立年は未詳で、 巻)。幕臣で儒者であった山岡浚明(享保一一(一七二六)年~安永九(一七八〇)年:で再掲しておくと、江戸中期の類書(百科事典)で全三百四十二巻(標題十八巻・目録一 用ゆ、 錢)」の内の「錢を數ふる異稱」の条中に、 号は明阿。賀茂真淵門下の国学者で、「泥朗子」の名で洒落本「跖婦人伝」を書き、「逸著 本を視認したところ、ここに発見した(巻二百五十八の「調度部十五」の「財貨(金銀 て全七冊の活版本として刊行された。国立国会図書館デジタルコレクションの画像で同刊 「蜻蜓類聚名物考卷二五八、錢を敷ふる異稱の條々、禮家に云傳るは、蜻蛉結びを武家に 此虫を將軍虫と云ふとあり」「類聚名物考」は複数回既出既注であるが、 明治三六(一九〇三)年から翌々年にかけ 最後なの

*

故云には出る所不詳 羽はれ、禮家に云ひ傳ふるハ蜻蛉結を武器に用る此虫を將軍虫と云ふその羽四ツなろ

*

とあるのを指す。

のとして、「勝ち虫」と呼ばれ、 『退かないところから「不転退 「蜻蛉を勝ち蟲と名け、武士の襦袢等の模様に用ゆ」和装小物の「かくいわ芝田」のサイ のこちらに、『トンボは素早く飛び回り』、『害虫を捕らえ、また』、『前にしか進まず』、 (えびら) 刀の鍔(つば) などの武具、 縁起物として武士に喜ばれ』て、『戦国時代には兜や鎧 (退くに転ぜず、決して退却をしない)」の精神を表すも 陣羽織や印籠の装飾に用いられた』とある。

考にした)、 卯)(機械換算紀元前六三〇年)四月乙酉朔の条に(訓読は国立国会図書館デジタルコレ クションの昭和六(一九三一)年岩波書店c刊黒板勝美編 「神武帝蜻蛉に依て國に名け玉し事あり」「日本書紀」第三巻の神武天皇三十一年(辛 「訓讀 日本書紀 中卷」を参

三十有一年夏四月乙酉朔。 【妍哉此云鞅奈珥夜】。雖内木錦之真迮國。 皇輿巡幸。因登腋上嗛間丘。而廻望國狀曰。 猶如蜻蛉之臀呫焉。 由是始有秋津洲之號也。 妍哉乎國之獲矣

くもあるか。是れに由りて、始めて「秋津洲」の號有り。哉」、此れをば「鞅奈珥夜」と云ふ。』。内木錦の眞迮國と雖も、猶ほ、蜻蛉の臀咕胺上嗛間丘に登りまして、國の狀を廻りませりて日はく、「妍や、國の獲えつきの本味を選出した。「妍や、國の獲えつきの本味を選出して、「姻や、國の獲えの本語の本語のはは、「姻や、國の獲えのととり/いついう) 朔、「皇」輿巡幸す。因りて、三十有一年夏四月乙酉(きのととり/いついう) 朔、「皇」輿巡幸す。因りて、三十有一年夏四月乙酉(きのととり/いついう)。 猫ほ、蜻蛉の臀呫のごと妣 や、國の獲えつ【「妍

比定されている。「臀呫」は蜻蛉の雌雄が交尾して、互いに尾を咥え合って輪になって飛この「腋上嗛間丘」は一説に奈良県御所市柏原の国見山(グーグル・マップ・データ)に ぶことを指す。 (グーグル・マップ・データ) に

換算四六〇年)の以下。 此蟲が蟲を誅せしを褒め云ひし事も有り」「日本書紀」の雄略天皇四年 訓読は国立国会図書館デジタルコレクションの昭和六(一九三

一)年岩波書店刊黒板勝美編「訓讀 日本書紀 中卷」を参考にした。

歌賦之。」群臣莫能敢賦者、 來、噆天皇臂、於是、蜻蛉忽然飛來、囓虻將去。天皇嘉厥有心、詔群臣曰「爲朕、 秋八月辛卯朔戊申、行幸吉野宮。庚戌、幸于河上小野。命虞人駈獸、欲躬射而待、 天皇乃口號日、 虻疾飛 讚蜻蛉

磨等能矩儞嗚 婀岐豆斯麻登以符」。】 岐豆斯麻野麻登【一本、以婆賦武志謀以下、 能阿武嗚 斯々魔都登 以飫裒磨陛儞麼鳴須、易飫裒枳彌儞麻嗚須。】 野麼等能 阿娯羅儞陀々伺【一本、 嗚武羅能陀該儞 婀枳豆波野倶譬 倭我伊麻西麼 之々符須登 波賦武志謀 以陀々伺、易伊麻伺也。】 佐謂麻都登 挖例柯 飫裒枳瀰儞磨都羅符 儺我柯陀播 倭我陀々西麼 易舸矩能御等 飫裒枳瀰簸 舉能居登 施都魔枳能 陀倶符羅爾 儺儞於婆武登 賊據嗚枳舸斯題 飫裒磨陛儞麻鳴須【一本、 阿娯羅儞陀々伺 阿武柯枳都枳 於柯武 柁磨々枳

因讚蜻蛉、 名此地爲蜻蛉野。

是に於いて、蜻蛉、忽然に飛び來たりて、と欲して待ちたまふに、虻、疾く飛び來たりと 疾く飛び來たりて、天皇の 虻を囓ひて將て去ぬ。 臂tettet を噆ふ。

「朕が爲めに、蜻蛉の讚め歌、賦みせよ。」天皇、厥の心有るをことを嘉びたまひて、 臣に認りして日はく、

きつしまといふ」に易へたり。】 本、「はふむしも」を以て、「かくのこと なにおはむと そらみつ やまとのくにを あ つ その虻を 蜻蛉早咋ひ 這ふ蟲も 大君に順ふ 汝が形は 置かむ 蜻蛉嶋倭【一り。】 猪鹿待つと 我がいませば さ猪待つと 我が立たたせば 手腓に 虻かきつき胡床に立たし 倭文纏の 胡床に立たし【一本、「たたし」を以つて、「いまし」に易へたす」を以つて、「おほきみにまをす」に易へたり。】 大君は そこを聞かして 玉纏のす」を以つて、「おほきみにまをす」に易へたり。】 大君は そこを聞かして 玉纏のす 倭の 峰群の嶽に 猪鹿伏すと 誰か このこと 天皇、乃ち、口づから號はれて曰はく、群臣、能く敢へて賦む者莫し。 大前に奏す【一本、「おほまへにまを

しむ。 因りて、蜻蛉を讚めて、此の地を名づけて「蜻蛉野(あきつの/あきつしま)」と爲さ

括弧部を補ったことをお断りしておく。初出誌では同論文の最後に全体が一字下げで記され 年刊)に附帯する。 ることとした。調べたところ、これは熊楠が明治四四(一九一〇)年三月発行の『東京人類 キングを施した。] てあり、最終行には下方に『(完)』(上記論文の「完」である)とある。今までと同じマー が判ったので、それを元に電子化した。但し、この前の記載の書誌書式に合わせて最後の丸 學會雜誌』六二巻三百号に発表した名論文『西曆九世紀の支那書に載たる「シンダレラ」物 [やぶちゃん注:以下は、底本「南方隨筆」にはなく、平凡社「選集」(第三巻・一九八四 しかも幸いにして「j-stage」のこちら(PDF)で同初出論文原文全文が視認出来ること (異れる民族間に存する類似古話の比較研究)』の末尾に附されたものであることが判 資料としては、これを外すのは適切とは思われないため、特異的に加え

附記、 尺餘、譬ば [やぶちゃん注:「たとへば」。] 犬の足無き如く、又芋蟲に似たり、 るゝを見れば病むとて、木の下を通る者必ず低頭す、太さ二三尺、總身白く、長さ纔に三 云く、 一寸坊蛇と云ふ、下略、(明治四十四年三月人類第六二卷三百號) 肥後の五日町、求麻川端の大なる榎木の空洞に、年久しく大蛇住り、時々出で現は 本誌二九一號に、予が載たる野槌に似たる事、橘南谿の西遊記卷一に出づ、其略に 土俗之を

続けて出る「榎木の大虵」で、呼称から見ても「野槌」である。 篇も書いている。「東遊記」と合わせて、優れた奇事異聞集となっている)の、巻之一に わることが出来た。] に「野槌」の冒頭注で全電子化をして注も附してある。 (一八〇五) 年) [やぶちゃん注:江戸後期の医者で紀行家であった橘南谿(宝暦(一七五三)年~文化二 の紀行記「西遊記」(寛政七(一七九五)年初版刊行後、三年後には続 されば、最後はすっきり綺麗に終 私の知見のお節介で、既

本邦に於ける動物崇拜 南方熊楠 附 藪野直史注 完